奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平成７年度

１９９６年

奈良市教育委員会

奈良市埋蔵文化財調査報告書　平成７年度　正誤表

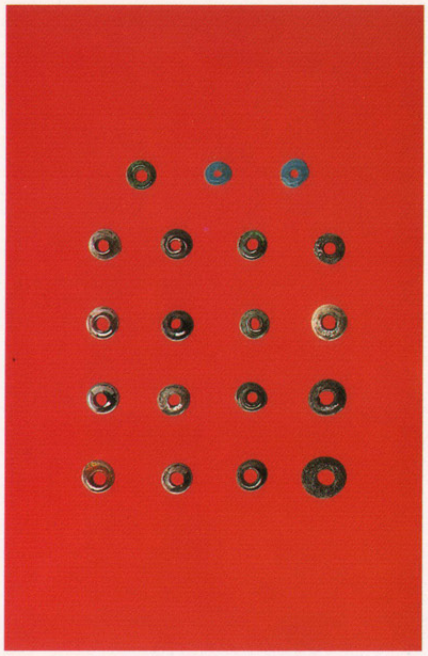
ページ	行・位置	誤	正
例言	５行	第327次、第343次	第327次、第331次、第335次、第339次、第343次
調査地一覧	３２５次の項	ＪＲ奈良駅	JR奈良駅周辺地区土地区画整理事業
〃	３２６次の項	西大寺駅南	近鉄西大寺駅南土地区画整理事業
〃	３２７次の項	西大寺駅南	近鉄西大寺駅南土地区画整理事業
〃	３３１次の項	ＪＲ奈良駅	JR奈良駅周辺地区土地区画整理事業
〃	３３４次の項	ＪＲ奈良駅	JR奈良駅周辺地区土地区画整理事業
〃	３３５次の項	ＪＲ奈良駅	JR奈良駅周辺地区土地区画整理事業
〃	３３９次の項	ＪＲ奈良駅	JR奈良駅周辺地区土地区画整理事業
〃	３４２次の項	Ｈ７’奈教社文財第3073号	Ｈ７’奈教社文財第3075号
〃	３４５次の項	ＪＲ奈良駅	JR奈良駅周辺地区土地区画整理事業
〃	４ＰＨＫ-３の項	奈良市長／市営住宅	奈良市長／地区住環境整備事業
５１	１２行	三条大路南側溝心から	三条大路北側溝心から
６６	１５行	6313K	6316K
７６	土層図	埋塁	埋甕
８７	平面図タイトル	（１／250）	（１／200）
９１	７行	壷（15・16）	壷（25・26）
９１	８行	甕（17）	甕（27）
１０１	２０行	瓦・中世	瓦、中世
１１４	２５行	南都七大寺Ｖ式Ａ種	南都七大寺Ⅳ式Ｂ種
１２４	１４行	６世紀後半の	６世紀の
１２６	２８行	ＳＫ17	ＳＸ17
工事立会一覧	１５０	Ｈ８・３２４９	Ｈ７・３２４９
〃	１５１	Ｈ８・３２３５	Ｈ７・３２３５
〃	１５６	Ｈ８・３２５８	Ｈ７・３２５８
〃	１５７	Ｈ８・３２６４	Ｈ７・３２６４
〃	１６０	Ｈ８・３２３７	Ｈ７・３２３７
〃	１６２	Ｈ８・３２６９	Ｈ７・３２６９
〃	１６３	Ｈ８・３２７２	Ｈ７・３２７２
〃	１６４	Ｈ８・３２９７	Ｈ７・３２９７
〃	１６５	Ｈ８・３２７９	Ｈ７・３２７９
〃	１６８	Ｈ８・３２９８	Ｈ７・３２９８
〃	１６９	Ｈ８・３２６２	Ｈ７・３２６２
〃	１７１	Ｈ８・３２４６	Ｈ７・３２４６

奈良市埋蔵文化財調査概要報告書

平 成 7 年 度

1 9 9 6年

奈良市教育委員会



第310次　井戸ＳＥ511・515出土ガラス玉

第310次　井戸ＳＥ513出土魚擬片

第310次　遺物包含層出土滑石製蓋

1　唐三彩陶枕

2　二彩釉棰先瓦

序

本書は、平成７年度に奈良市教育委員会が実施した発掘調査の概要報告書です。平成７年度の36件の調査のうち17件と、平成５・６年度の調査で未報告であった10件を併せて収録いたします。

本市教育委員会が平城京を中心に発掘調査を始めて、今年度で18年目をむかえております。この間の発掘調査件数は566次にのぼり、整理箱にして30,000箱を越える膨大な量の遺物が出土いたしました。遺物の中には、古代の人々の生活を垣間みることのできる貴重な資料や新発見資料もあり、様々な機会をとらえて市民の皆様にご覧願っているところであります。こうした中で、今、私どもに問われていることは、これらの遺跡や膨大な調査成果を如何に保全し、どのように活用していくかであると考えております。そのために、皆様に歴史を体感していただける場として活用を図るべく、史跡平城京朱雀大路跡や史跡大安寺旧境内の遺跡整備事業を進めており、また、最新の発掘調査成果を公開する「平城京展」や「文化財講演会」といった普及事業にも努めております。今後もさらに推進する所存です。

さて、今年度は、大規模な事業に対応するために発掘調査担当職員を４名増員し、昭和63年度から継続調査しているＪＲ奈良駅周辺地区土地区画整理事業および近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う調査を中心に、史跡平城京朱雀大路の整備事業に関わる調査や五ツ塚古墳群の墳丘規模確認調査などを実施いたしました。また、杏町、古市町、柏木町では弥生時代から古墳時代の建物や墳墓群等の新しい発見がありました。特に、古市町で見つかった古墳時代の遺跡は、調査地周辺にさらに広がっている可能性が考えられ、これまでに知られていなかった奈良時代以前の様子を知る手がかりとして今後の調査成果に期待がもたれるところです。

最後になりましたが、発掘調査から本書作成に至るまでご指導を賜りました奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会を始めとする関係諸機関の方々、調査にご理解とご協力を戴いた土地所有者の方々に対しまして心より御礼申しあげます。

平成８年３月

奈良市教育委員会
教育長　河合　利一

例　　言

1　本書は、平成７年度に奈良市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告を収録したものである。また、平成５年度に実施した調査のうち平城京第282次調査の１件と、平成６年度の調査のうち平城京第310次、第320次、第322次、第323次、薬師寺旧境内第６次調査の７件を併せて掲載する。

なお、本年度の発掘調査のうち平城京第325次（第2～7発掘区）、第327次、第343次、第345次調査については来年度に、平城京第336次と第343次は史跡平城京朱雀大路跡保存整備事業完了時に、五ツ塚古墳群の調査については継続調査終了時に報告する予定である。平城京東市跡推定地第18次調査については、別途概要報告書を刊行した。

2　発掘調査は下記の体制で実施し、各担当者は発掘調査一覧に示した。

社会教育部文化財課	課長	安田龍太郎　主幹　森川倫秀
埋蔵文化財調査センター	所長	髙谷明男　主任　杉村武史　西崎卓哉
	技術吏員	中井　公　篠原豊一　立石堅志　三好美穂
		森下浩行　鐘方正樹　秋山成人　松浦五輪美
		安井宣也　武田和哉　中島和彦　久保邦江
		宮崎正裕　久保清子　池田裕英　原田憲二郎
	技術員	山前智敬　大窪淳司　田林香織　細川富貴子

3　発掘調査と本書の作成にあたり奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会などの関係諸機関から御指導を賜った。記して感謝します。

4　発掘調査と出土遺物整理作業には、下記の方々の協力があった。

荒川　茂	今中　勇	植本武義	梅木繁一	奥田秀吉	金戸康子
北村　進	木村喜代之	木村嘉宏	小西綾子	小西貢造	塩野谷八十布
高橋敬輔	瀧田　勘	多久裕三	田口奈美江	辰田吉弘	辻　俊浩
仲村繁夫	二宮信隆	林　健太郎	原田章英	藤沢辰雄	松田十三日
増田義郎	松村茂治	松本　威	福田米光	吉村　章	(故)山原　明
青木政幸	市川剛司	岩崎大介	大川純二	太田正人	岡田千里
奥田維子	加藤美穂	金　秉三	佐藤智晶	清水美希	清水竜太
鈴木具美	田中淳之	徳野裕昭	仲川裕美子	中塚美津保	西本京子
花木志穂	久富正登	冨士孝之	藤井健太	藤川恵美子	松田知之
虫明富美	森本成絵	森本裕美	山口　均	吉田亮介	岩下和江
浦崎美代子	浦元由紀子	江波明子	大友明美	小川布子	小野直美
角谷和美	北井育代	北尾史真	久保友樹子	近藤富貴子	斉藤和子
佐伯全子	澁谷富子	新谷弘美	芹川順子	芹川直子	芹野恒代
高木輝実	竹内綾子	田島千津子	谷口　緑	手塚真理	中島満寿江
板東剛子	松嶋克樹	松山径子	村松京子	森岡葉子	八島宏美
矢吹晶子	山村光子	山本智加	吉川三子	喜多晶子	松山真弓

5　各発掘調査の次数は、奈良市教育委員会が実施した調査に付した、遺跡ごとの通算次数である。

6　本書の執筆は、奈良市埋蔵文化財調査センター職員が分担して行い、文末に文責を明らかにした。

7　平城京第310－3次調査・第321次調査・第328次調査・第329次調査の出土遺物については、下記の方々から科学分析の報告をいただいた。記して感謝いたします。

花粉分析・寄生虫卵分析　金原正明（天理大学付属天理参考館）
金原正子　岡山邦子（古環境研究所）
脂肪酸分析　中野益男（帯広畜産大学）
中野寛子　長田正宏（株式会社ズコーシャ総合科学研究所）

8　平城京第310次調査出土半舌鐙未製品、第328次出土直柄装着鍬については、奈良国立文化財研究所　上原真人氏　臼杵　勲氏　加藤真二氏　工楽善通氏　小林謙一氏に御教示をいただいた。同木製品の樹種については、同研究所埋蔵文化財センター　光谷拓実氏に鑑定いただいた。

平城京第329・333次調査出土の砥石の石材については、京都府立山城郷土資料館　橋本清一氏に鑑定いただいた。

平城京第310次調査、大安寺第70次調査出土の墨書土器及び第328次調査出土木簡の釈読にあたっては、奈良国立文化財研究所　舘野和己氏　古尾谷知浩氏、日本学術振興会　鈴木景二氏の御教示をいただいた。

平城京第322次調査の建物構造については、奈良国立文化財研究所　綾村　宏氏　村田健一氏の御教示をいただいた。

平城京第332次調査のダルマ窯の構造については、吹田市立博物館　藤原　学氏、（財）京都市埋蔵文化財研究所　吉村正親氏、堺市立埋蔵文化財センター　近藤康司氏、奈良女子大学　坪之内　徹氏の御教示をいただいた。

平城京左京四条五坊一坪の調査にあたっては、奈良国立文化財研究所　舘野和己氏　小澤毅氏、奈良県立橿原考古学研究所　平松良雄氏　清水康二氏　小栗明彦氏の御教示をいただいた。

以上、記して感謝いたします。

9　本書で使用した遺構の分類記号や遺物の名称・型式は奈良国立文化財研究所および奈良市教育委員会の刊行物に準拠している。ただし、遺物番号は各調査ごとに付した仮番号である。

10　本書の遺構図、土層図に示した座標値は国土調査法に定める国土方眼第Ⅵ座標系によっている。標高は海抜である。

11　本書の編集は、安田龍太郎の指導のもとに埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て三好美穂が担当した。

本　文　目　次

Ⅰ　平城京跡・菅原東遺跡・杏遺跡の調査

1　近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う調査 …… 1

（1）平城京右京二条三坊三坪の調査　第310次（第1発掘区） …… 3

（2）平城京右京二条三坊六坪・菅原東遺跡の調査　第310次（第2•3発掘区）
第326次（第2発掘区） ……14

平城京右京二条三坊六坪から出土した土器に残存する脂肪の分析 ……30

（3）平城京右京二条三坊七坪の調査　第326次（第1発掘区） ……38

2　ＪＲ奈良駅周辺地区土地区画整理事業に伴う調査 ……45

平城京左京四条五坊一坪の調査　第186次•第188次•第199次•第218次•第227次•
第282次•第299次•第318次（第1発掘区）・第325次（第1発掘区） ……46

3　平城京左京三条四坊五坪の調査　第320次 ……54

4　平城京右京一条北辺四坊六坪の調査　第322次 ……58

5　平城京左京三条一坊三坪の調査　第323次 ……62

6　平城京朱雀大路の調査　第328次 ……64

第321次・第328次調査における花粉分析 ……68

7　平城京左京二条四坊・二条条間路の調査　第329次 ……70

第329次調査における花粉分析 ……74

8　平城京左京四条五坊十六坪の調査　第330次 ……75

9　平城京左京二条七坊八坪の調査　第332次 ……76

10　平城京左京五条六坊二坪・東五坊大路の調査　第333次 ……86

11　平城京左京八条二坊二坪・杏遺跡の調査　第337次・第340次 ……92

12　平城京右京二条三坊七坪の調査　第341次 ……98

13　平城京左京五条三坊八坪の調査　第342次 ……100

14　平城京東市跡推定地の調査　第17次 ……102

Ⅱ　寺院跡の調査

1　史跡大安寺旧境内の調査 ……107

（1）第68次調査 ……108

（2）第70次調査 ……113

2　菅原寺旧境内の調査 ……115
第３次調査 ……116
3　薬師寺旧境内の調査
第６次調査 ……117

Ⅲ　その他の調査

1　東紀寺遺跡の調査　第３次 ……121
2　古市遺跡の調査　第２次 ……122
3　神功陵古墳陪塚隣接地の調査 ……128

Ⅳ　小規模確認調査・試掘調査・工事立会

1　小規模確認調査・試掘調査 ……129
2　工事立会 ……130

付図

平城京左京四条五坊一坪検出遺構平面図（1／250）

図　版　目　次

巻首図版１　平城京右京二条三坊三坪　第310次調査　井戸ＳＥ513出土　魚撫
井戸ＳＥ511・ＳＥ515出土　ガラス玉
第310次調査　遺物包含層出土　石製品蓋

巻首図版２　史跡大安寺旧境内　第68次調査出土　二彩棰先瓦・唐三彩陶枕

図版１　平城京右京二条三坊三坪
第310次（第1発掘区）　（１）

図版２　平城京右京二条三坊三坪
第310次（第1発掘区）　（２）

図版３　平城京右京二条三坊三坪
第310次（第1発掘区）　（３）

図版４　平城京右京二条三坊三坪
第310次（第1発掘区）　（４）

図版５　平城京右京二条三坊三坪
第310次（第1発掘区）　（５）

図版６　平城京右京二条三坊三坪
第310次（第1発掘区）　（６）

図版７　平城京右京二条三坊六坪
第310次（第2・3発掘区）
第326次（第2発掘区）　（１）

図版８　平城京右京二条三坊六坪
第310次（第2・3発掘区）
第326次（第2発掘区）　（２）

図版９　平城京右京二条三坊六坪・菅原東遺跡
第310次（第2・3発掘区）
第326次（第2発掘区）　（３）

図版10　平城京右京二条三坊六坪
第310次（第2・3発掘区）
第326次（第2発掘区）　（４）

図版11　平城京右京二条三坊六坪
第310次（第2・3発掘区）
第326次（第2発掘区）　（５）

図版12　平城京右京二条三坊六坪
第310次（第2・3発掘区）
第326次（第2発掘区）　（６）

図版13　平城京右京二条三坊六坪
第310次（第2・3発掘区）
第326次（第2発掘区）　（７）

図版14　平城京右京二条三坊六坪
第310次（第2・3発掘区）
第326次（第2発掘区）　（８）

図版15　平城京右京二条三坊六坪
第310次（第2・3発掘区）
第326次（第2発掘区）　（９）

図版16　平城京右京二条三坊六坪
第310次（第2・3発掘区）
第326次（第2発掘区）　(10)

図版17　平城京右京二条三坊七坪
第326次（第1発掘区）　（１）

図版18　平城京右京二条三坊七坪
第326次（第1発掘区）　（２）

図版19　平城京右京二条三坊七坪
第326次（第1発掘区）　（３）

図版20　平城京右京二条三坊七坪
第326次（第1発掘区）　（４）

図版21　平城京左京四条五坊一坪
第299次、第318次
（第2発掘区）　（1）

図版22　平城京左京四条五坊一坪
第282次、第318次
（第2発掘区）　（2）

図版23　平城京左京四条五坊一坪
第282次　（3）

図版24　平城京左京四条五坊一坪
第199次、第218次　（4）

図版25　平城京左京四条五坊一坪
第186次、第188次、第277次　（5）

図版26　平城京左京四条五坊一坪
第299次　（6）

図版27　平城京左京四条五坊一坪
第318次（第2発掘区）　（7）

図版28　平城京左京四条五坊一坪
第318次（第2発掘区）　（8）

図版29　平城京左京四条五坊一坪
第325次（第1発掘区）　（9）

図版30　平城京左京四条五坊一坪
第282次　(10)

図版31　平城京左京四条五坊一坪
第282次　(11)

図版32　平城京左京四条五坊一坪
第199次、第282次　(12)

図版33　平城京左京三条四坊五坪
第320次　（1）

図版34　平城京左京三条四坊五坪
第320次　（2）

図版35　平城京左京三条四坊五坪
第320次　（3）

図版36　平城京左京三条四坊五坪
第320次　（4）

図版37　平城京右京一条北辺三坊七坪
第322次　（1）

図版38　平城京右京一条北辺三坊七坪
第322次　（2）

図版39　平城京右京一条北辺三坊七坪
第322次　（3）

図版40　平城京左京三条一坊三坪
第323次

図版41　平城京朱雀大路
第328次　（1）

図版42　平城京朱雀大路
第328次　（2）

図版43　平城京左京二条四坊・二条条間路
第329次　（1）

図版44　平城京左京二条四坊・二条条間路
第329次　（2）

図版45　平城京第321次、第328次、第329次　（1）

図版46　平城京第321次、第328次、第329次　（2）

図版47　平城京左京四条五坊十六坪　第330次

図版48　平城京左京二条七坊八坪　第332次　（1）

図版49　平城京左京二条七坊八坪　第332次　（2）

図版50　平城京左京二条七坊八坪　第332次　（3）

図版51　平城京左京二条七坊八坪　第332次　（4）

図版52　平城京左京五条六坊二坪・東五坊大路　第333次　（1）

図版53　平城京左京五条六坊二坪・東五坊大路　第333次　（2）

図版54　平城京左京八条二坊二坪　第337次、第340次　（1）

図版55　平城京左京八条二坊二坪　第337次、第340次　（2）

図版56　平城京左京八条二坊二坪　第337次、第340次　（3）

図版57　平城京右京二条三坊八・九坪　第341次

図版58　平城京左京五条三坊八坪　第342次

図版59　平城京東市跡推定地　第17次　（1）

図版60　平城京東市跡推定地　第17次　（2）

図版61　平城京東市跡推定地　第17次　（3）

図版62　史跡大安寺旧境内　第68次

図版63　史跡大安寺旧境内　第70次

図版64　菅原寺旧境内　第3次

図版65　薬師寺旧境内　第6次　（1）

図版66　薬師寺旧境内　第6次　（2）

図版67　東紀寺遺跡　第3次

図版68　古市遺跡　第2次　（1）

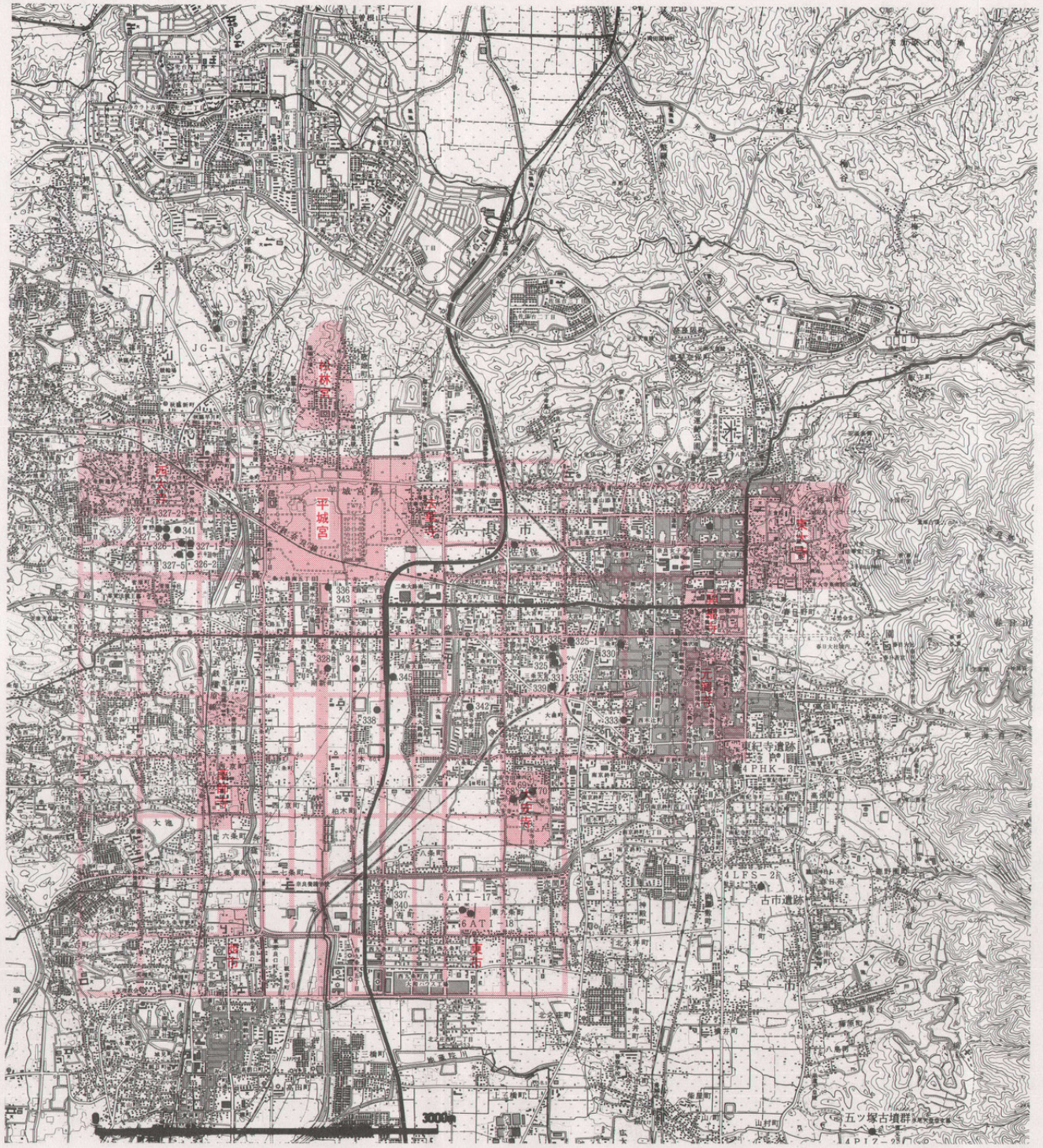
図版69　古市遺跡　第2次　（2）

図版70　古市遺跡　第2次　（3）

図版71　神功陵古墳陪塚隣接地

次数	遺跡名	調査地	調査期間	面積	届出者／工事内容	届出番号
325	平城京左京四条五坊一坪 平城京左京四条四坊十五坪	三条本町25-2他 三条宮前町238-1他	H7•4／25～H8•2／13	3658㎡	奈良市長／ＪＲ奈良駅	S63’奈教社文財第3055号
326	平城京右京二条三坊七坪 平城京右京二条三坊六坪	青野町17-1他	H7•5／8～9／29	3700㎡	奈良市長／西大寺駅南	S63’奈教社文財第3056号
327	平城京右京二条三坊二・六・九・十・十一坪		H7•7／7～H8•3／22	7300㎡	奈良市長／西大寺駅南	S63’奈教社文財第3056号
328	平城京朱雀大路	四条大路3-112他	H7•4／17～6／2	768㎡	三和住宅㈱／宅地造成	H6’奈教社文財第3214号
329	平城京左京二条四坊・二条条間路	法蓮町167-1他	H7•4／20～6／12	406㎡	竹川雅晟／共同住宅	H6’奈教社文財第3081号
330	平城京左京四条五坊十六坪	三条町544	H7•4／26～5／17	70㎡	福村佳子／個人住宅	H6’奈教社文財第3310号
331	平城京左京四条四坊十二・十三坪	三条本町236-1他	H7•6／2～9／12	1350㎡	奈良市長／ＪＲ奈良駅	S63’奈教社文財第3055号
332	平城京左京二条七坊八坪	西笹鉾町４	H7・6／1～8／4	490㎡	丸紅㈱／共同住宅	H6’奈教社文財第3293号
333	平城京左京五条六坊二坪・東五坊大路	西木辻町5-2	H7•8／3～9／19	385㎡	奈良市長／済美小学校屋内運動場増改築	H7’奈教社文財第3024号
334	平城京左京四条四坊十六坪	三条宮前町41-1他	H7•8／8～10／18	1072㎡	奈良市長／ＪＲ奈良駅	S63’奈教社文財第3055号
335	平城京左京四条四坊十二・十三坪	三条本町233-1他	H7•9／1～12／13	1400㎡	奈良市長／ＪＲ奈良駅	S63’奈教社文財第3055号
336	平城京朱雀大路	二条大路南3-200他	H7•8／24～12／24	409㎡	教育長／遺跡整備	
337	平城京左京八条二坊二坪	杏町404,405-1他	H7•9／4～11／15	609㎡	奈良市長／市営住宅	H7’奈教社文財第3099号
338	平城京左京五条一坊十六坪	柏木町552-1他	H7•9／11～継続中	6240㎡	ヒラサワ／事務所ビル	H7’奈教社文財第3017号
339	平城京左京四条四坊十三坪	三条大宮町236-1	H7•12／14～H8•3／29	2450㎡	奈良市長／ＪＲ奈良駅	S63’奈教社文財第3055号
340	平城京左京八条二坊二坪	杏町404,405-1他	H7•10／27～11／15	452㎡	奈良市長／市営住宅	H7’奈教社文財第3099号
341	平城京右京二条三坊十坪	西大寺芝町1-19-8	H7•11／1～11／14	187㎡	上田　明／個人住宅	H7’奈教社文財第3112号
342	平城京左京五条三坊八坪	恋の窪一丁目603-1	H7•11／13～11／28	144㎡	今井楢敏／共同住宅	H7’奈教社文財第3073号
343	平城京朱雀大路	二条大路南3-200他	H8•1／23～3／4	224㎡	教育長／遺跡整備	
344	平城京左京三条一坊十一坪	四条大路二丁目37他	H8•2／5～H8•3／6	300㎡	㈱シェルホーム／分譲宅地	H7’奈教社文財第3178号
345	平城京左京四条四坊十六坪	三条宮前町37-3	H8•2／19～3／29	396㎡	奈良市長／ＪＲ奈良駅	S63’奈教社文財第3055号
346	平城京左京四条二坊三坪	四条大路一丁目12-1	H8•2／26～3／29	400㎡	良家㈱／店舗	H7’奈教社文財第3093号
6ATI-17	平城京左京八条三坊六坪	杏町字東ノ口583-1	H7•10／2～11／15	530㎡	カゴメ化学工業㈱／事務所倉庫	H7’奈教社文財第3111号
6ATI-18	平城京左京八条三坊六坪	杏町586	H7•11／20～12／26	644㎡	重要遺跡範囲確認調査	
6BDA-68	史跡大安寺旧境内	大安寺二丁目地内	H7•6／1～6／19	218㎡	奈良市長／公共下水道	H6’奈教社文財第1071号
6BDA-69	史跡大安寺旧境内	大安寺一丁目地内	H8•2／1～3／8	188㎡	奈良市長／公共下水道	H7’奈教社文財第1018号
6BDA-70	史跡大安寺旧境内	大安寺一丁目10-27	H8•2／13～2／26	31.5㎡	大西健勝／個人住宅	H6’奈教社文財第1053号
6BDA-71	史跡大安寺旧境内	大安寺四丁目1037-3,4,5,6,7,8,9	H8•3／15～3／20	18.4㎡	森田真和／住宅新築	H7’奈教社文財第1064•1065•1066•1067号
6BKK-3	菅原寺旧境内	菅原西町520-1	H7•10／11～10／13	18㎡	吉松正男／個人住宅	H7’奈教社文財第3114号
4PHK-3	東紀寺遺跡	紀寺町562-2他	H7•7／3～7／18	90㎡	奈良市長／市営住宅	H3’奈教社文財第3192号
4LFS-2	古市遺跡	古市町1191他	H7•7／7～8／11	210㎡	奈良市長／市営住宅	H7’奈教社文財第3031号
4PIZ-2	五つ塚古墳群	山町989	H8•1／22～3／15	93㎡	遺跡範囲確認調査	
4PJG-1	神功陵古墳	山陵町地内	H8•3／21～3／25	2.5㎡	奈良市長／市道改良	H6’奈教社文財第3255号

平成７年度　調査地一覧



平成７年度　発掘調査位置図（１／50,000）

Ⅰ　平城京跡・菅原東遺跡・杏遺跡の調査

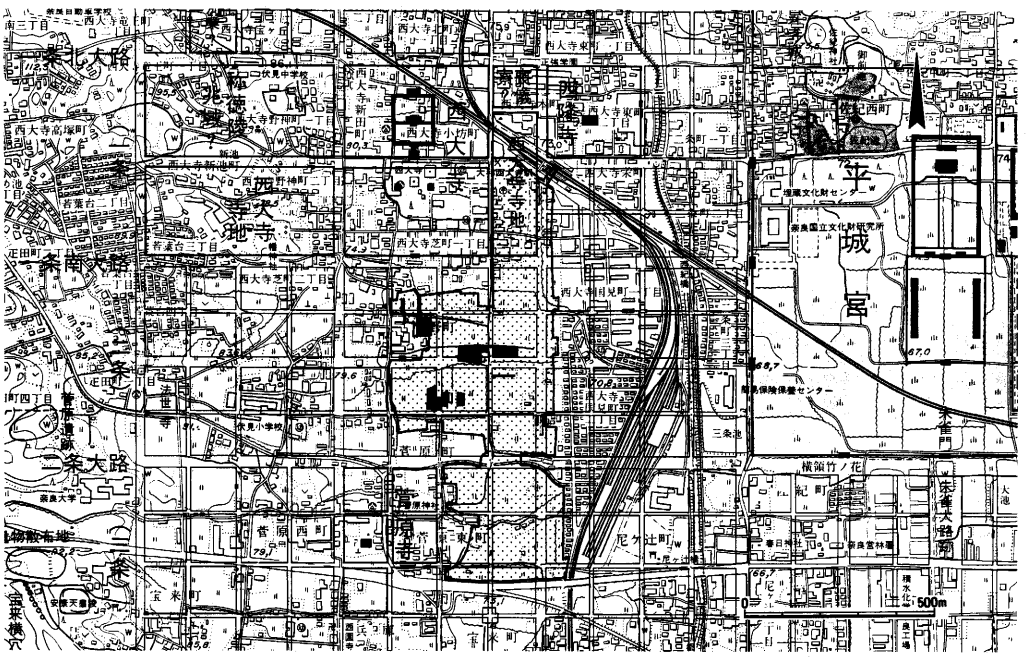
1　近鉄西大寺駅南土地区画整理事業に伴う調査

奈良市教育委員会では、奈良市が進める近鉄西大寺駅南土地区画整理事業（総面積約32万㎡）に伴って、昭和63年度から事業地内の発掘調査を継続している。本年度は一覧に示した７件（計11,000㎡）の調査を行い、初年度からの合計調査面積は71,798㎡に達した。

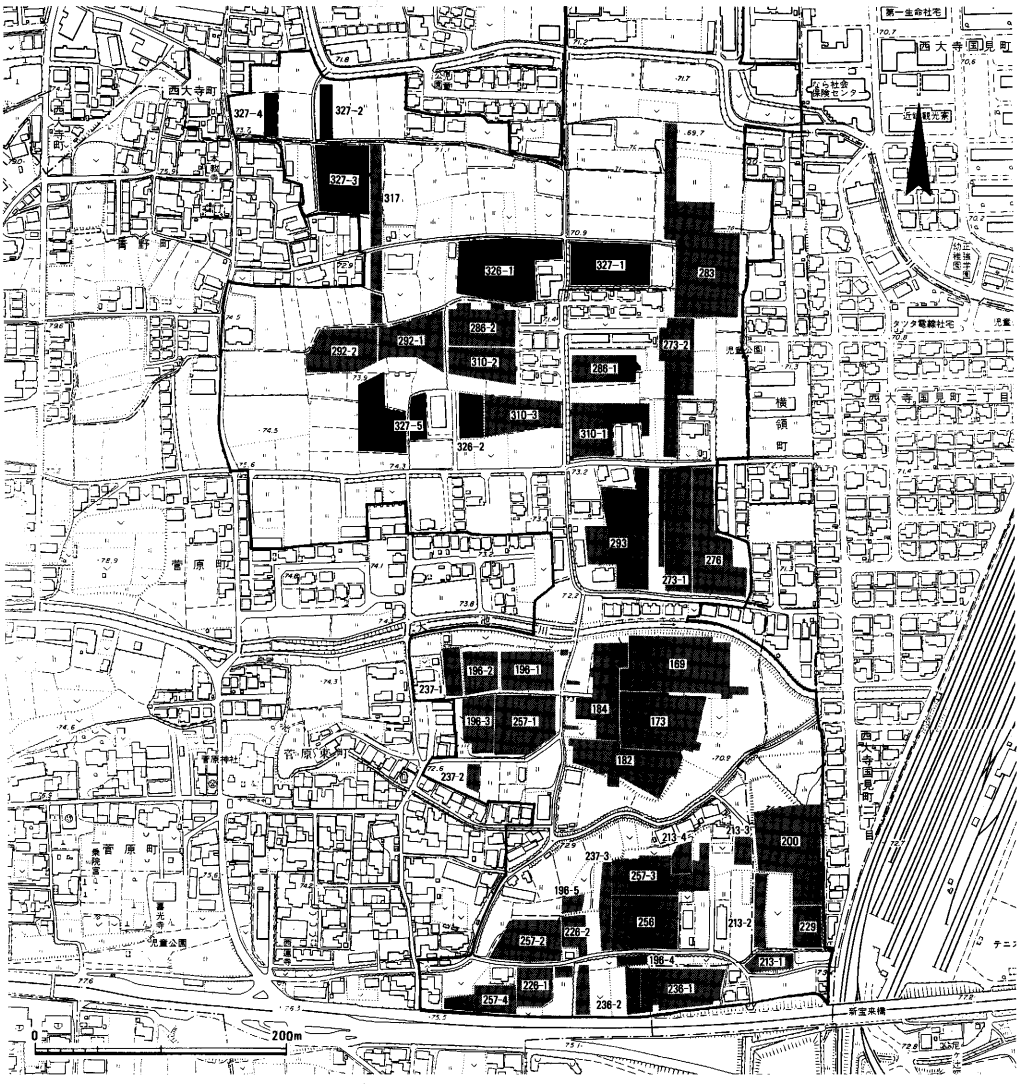
本年度の調査地は、平城京右京二条三坊二・六・七・九・十・十一坪の六つの坪にわたる。このうち本書に概要を掲載したのは六坪（326－２次）と七坪（326－１次）の調査分である。これに、昨年度未報告であった三坪（310－１次）と六坪（310－２・３次）の分も、併せて収録した。なお、本年度327次調査については来年度に報告する予定である。

さて、三坪では、坪南西部を発掘し、これまでの調査成果と合わせ、坪内の様相がおおかた判明した。1／8～1／16規模での宅地割りが想定できるようである。六坪では、奈良時代の井戸で、建物の扉を枠材に転用した例や、槽を転用した例など、多様なものがみられた。槽はかなりの大型品で、ほぼ全体が知られた。奈良時代の遺品は極めて珍しい。また、平城京関係の遺構のほかに、京の造営で破壊された古墳が発見された。径約16ｍの小円墳で６世紀後半の築造とみられる。平城京造営前の菅原の地のようすを知る手懸かりもまたひとつ増えた。七坪での調査は本年度がはじめてである。坪南辺の中央で、二条条間路に門が開くことなどを確認している。

（中井　公）



平成７年度の調査地と周辺の条坊（１／20,000　網目の範囲が土地区画整理事業予定地）



発掘調査地位置図（1／6,000　数字は調査次数）

調査年度	調査次数	遺　跡　名	調　査　地　地　番	調　査　期　間	調査面積	備　考
平成6年度	310-1	平城京右京二条三坊三坪	奈良市菅原町184•186•194	平成6年9月12日～平成7年1月17日	1,850㎡	本概要報告書掲載
	310-2	平城京右京二条三坊六坪	奈良市菅原町203•204	平成6年9月19日～平成7年1月17日	1,450㎡	本概要報告書掲載
	310-3	平城京右京二条三坊六坪	奈良市菅原町206-1•207•208	平成6年11月30日～平成7年3月17日	1,800㎡	本概要報告書掲載
平成7年度	326-1	平城京右京二条三坊七坪	奈良市青野町17-1•22-1•24-1•25-1•31•32-1	平成7年5月8日～平成7年9月29日	3,000㎡	本概要報告書掲載
	326-2	平城京右京二条三坊六坪	奈良市菅原町209-1	平成7年5月10日～平成7年7月21日	700㎡	本概要報告書掲載
	327-1	平城京右京二条三坊二坪	奈良市青野町10-1•11	平成7年7月7日～平成8年2月26日	2,200㎡	平成8年度報告予定
	327-2	平城京右京二条三坊九坪	奈良市西大寺芝町2102	平成7年8月18日～平成7年10月12日	450㎡	平成8年度報告予定
	327-3	平城京右京二条三坊十坪	奈良市青野町43-1•46-1•47•49	平成7年10月2日～平成7年12月22日	1,850㎡	平成8年度報告予定
	327-4	平城京右京二条三坊九坪	奈良市西大寺芝町2100	平成7年10月30日～平成7年11月27日	300㎡	平成8年度報告予定
	327-5	平城京右京二条三坊六・十一坪	奈良市菅原町210•273•274•275•276•277	平成7年12月7日～平成8年3月22日	2,500㎡	平成8年度報告予定

平成7年度発掘調査および本概要報告書掲載調査一覧

(1) 平城京右京二条三坊三坪の調査　第310次

Ⅰ　はじめに

第310次調査の第１発掘区は右京二条三坊三坪内における第４次の調査であり、そのほぼ１/４南西部分の宅地利用状況の解明と坪西辺の確認を主目的として実施した。

Ⅱ　検出遺構

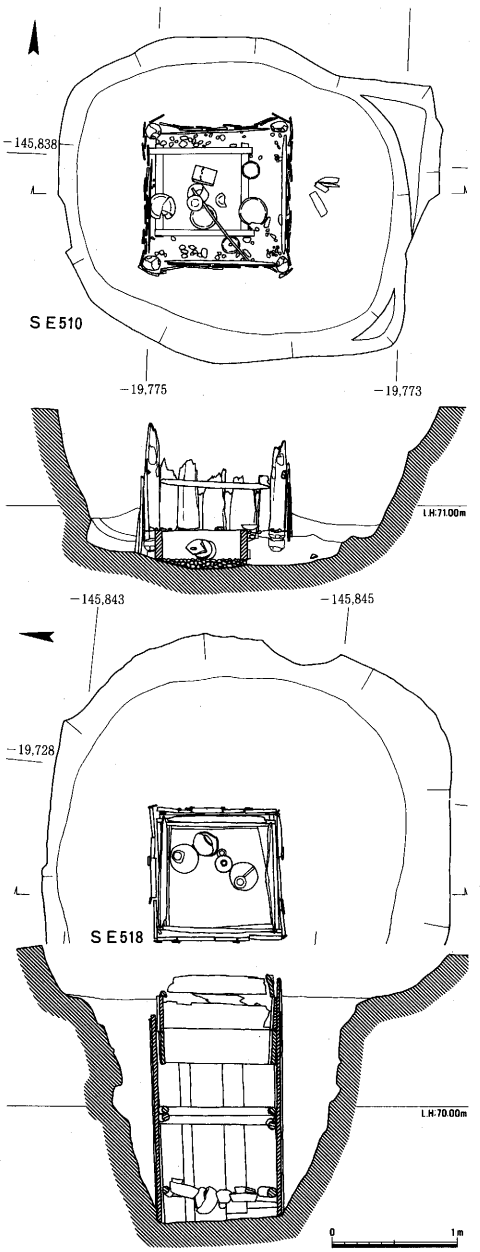
調査地周辺は南、西から北、東に向かって緩く傾斜し、低い段をつけて水田化されている。このため、発掘区の南西では奈良時代の遺構面が概ね標高71.90ｍであるのに対して、北東では71.40ｍと低くなる。

主な検出遺構には三・六坪々境小路東側溝、坪内道路とその側溝、奈良～平安時代にかけての掘立柱建物73棟、掘立柱塀８条、井戸９基、土坑５、素掘りの溝２条、不明遺構２がある。掘立柱建物、塀及び井戸、不明遺構の概要については一覧表にまとめた。

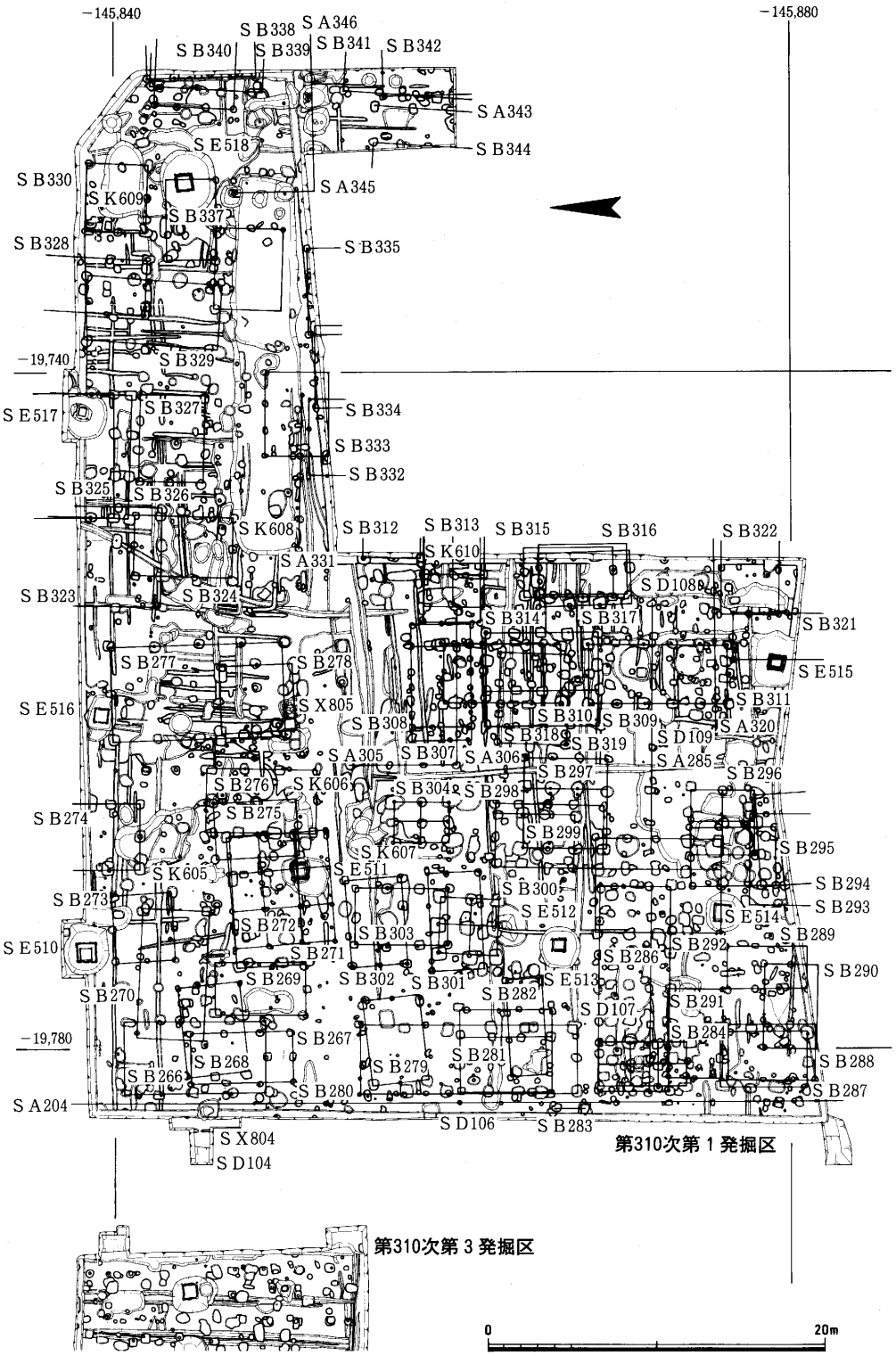
次に、これまでに行った三坪内での調査成果を基にして本発掘区の遺構変遷を考えてみた。以下にその概要を記すが、今回は遺構の重複関係からＢ期を２時期に区分した。

Ａ期　条坊の道路心から割付けして遺構が配置される。坪の四周には塀がめぐり、塀ＳＡ204はその西辺である。南から南北1／6の位置に東西方向の坪内道路ＳＦ901がある。その北側溝ＳＤ106は西から東西1／6の付近で長さ5.2ｍほど途切れるが、ここから北へ向かって空閑地がのびることから通路の存在を想定できる。廃絶時には、そこにゴミ処理用の土坑ＳＫ605・606・607が掘削される。

Ｂ－Ⅰ期　Ａ期とは異なる新しい宅地割として坪の端からの割付けが始まり、四周をめぐる塀がなくなる。恭仁京からの平城還都前



井戸ＳＥ510・518　平面・立面図（１／60）



第310次調査第１発掘区　遺構平面図（１／400）

遺構番号	棟方向	規模（桁行×梁間）	桁行全長 m（尺）	梁間全長 m（尺）	桁行柱間寸法（m）	梁間柱間寸法（m）	廂の出（m）	備考
ＳＡ204	南北				2.1～3.2			
ＳＢ266	南北	4×2	8.4（28）	4.3	2.1等間	2.15等間		
ＳＢ267	南北	3×2	6.2	3.2	2.1-2.1-2.0	1.6-1.5		
ＳＢ268	東西	3×2	5.4（18）	3.6（12）	2.0-1.5-1.9	1.8等間		
ＳＢ269	南北	3×2	5.4（18）	3.2	1.8等間	1.6等間		
ＳＢ270	東西	3×2	8.1（27）	3.8	2.7等間			
ＳＢ271	東西	3×2	7.8（26）	3.8	2.6等間	1.9等間		
ＳＢ272	東西	3×3	6.6（22）	6.0（20）	2.2等間	2.0等間		総柱建物
ＳＢ273	東西	2×2	4.0	3.6（12）	2.0等間	1.8等間		柱穴から土師器壷Ｂ出土
ＳＢ274	南北	1以上×2	1.8以上	4.0	1.8	2.0等間		
ＳＢ275	南北	2×2	5.0	3.4	2.5等間	1.7等間		
ＳＢ276	南北	2×3	6.3（21）	3.8	2.1等間	1.9等間		
ＳＢ277	南北	4×2	10.4	5.4（18）	2.6等間	2.7等間		柱穴から須恵器壷Ｈ出土
ＳＢ278	南北	2×2	4.2（14）	4.0	2.1等間	2.0等間		
ＳＢ279	東西	3×2	5.1（17）	3.4	1.7等間	1.7等間		
ＳＢ280	南北	5×2	13.0	4.1	2.6等間	2.05等間		
ＳＢ281	南北	3×2	5.4（18）	3.2	1.8等間	1.6等間	東1.6	東廂付
ＳＢ282	東西	3×2	5.7	2.2	1.9等間	1.1等間		
ＳＢ283	南北	1	1.8		1.8			門
ＳＢ284	南北	3×2	5.2	2.6	1.8-1.7-1.7	1.3等間		総柱建物
ＳＡ285	東西	7	14.7		1.5-2.4			
ＳＢ286	東西	6×2	12.3（41）	3.0（10）	2.05等間	1.5等間	南1.2	南廂付、建物内に土坑列
ＳＢ287	南北	3×2	5.1（17）	3.4	1.7等間	1.7等間		
ＳＢ288	南北	3×2	5.3	3.2	2.2-1.7-1.4	1.6等間		
ＳＢ289	南北	3×2	4.8（16）	2.6	1.6等間	1.5-1.1		
ＳＢ290	東西	3×1以上	5.1（17）	1.6以上	1.7等間	1.6		
ＳＢ291	東西	3×2	5.3	3.2	1.8-1.8-1.7	1.6等間		
ＳＢ292	南北	4×2	7.4	3.7	1.85等間	1.85等間	東1.85	東廂付
ＳＢ293	東西	3×1以上	5.4（18）	1.8以上	1.8等間	1.8		
ＳＢ294	東西	3×1以上	5.4（18）	1.45以上	1.8等間	1.45		
ＳＢ295	南北	3×2	5.1（17）	3.4	1.7等間	1.7等間		
ＳＢ296	東西	2×2	4.0	3.8	2.0等間	1.8-2.0		総柱建物
ＳＢ297	南北	3×2	4.8	3.6（12）	1.6等間	1.8等間	東1.8	東廂付、床束あり
ＳＢ298	南北	4×2	6.4	3.8	1.6等間	1.9等間		
ＳＢ299	南北	2×3	4.8	3.2	1.6等間	1.6等間		
ＳＢ300	南北	2×2	3.6（12）	3.4	1.8等間	1.7等間		総柱建物
ＳＢ301	東西	3×2	5.8	3.0（10）	2.2-1.6-2.0	1.5等間		
ＳＢ302	東西	3×2	5.25	3.2	1.75等間	1.6等間		
ＳＢ303	南北	3×2	5.4（18）	3.2	1.8等間	1.6等間		
ＳＢ304	南北	2×2	3.2	2.4（8）	1.6等間	1.2等間		総柱建物
ＳＡ305	南北	3	6.3（21）		2.1等間			
ＳＡ306	東西	5	9.0（30）		1.8等間			ＳＡ305と直交
ＳＢ307	東西	4×2	7.0	3.4	1.45-1.75-1.75-2.05	1.7等間		
ＳＢ308	東西	3×2	4.8（16）	3.6（12）	1.6等間	1.8等間		
ＳＢ309	南北	4×2	6.6（22）	3.4	1.65等間	1.7等間	西2.1	西廂付
ＳＢ310	南北	4×2	6.8	3.6（12）	1.7等間	1.8等間		
ＳＢ311	南北	5×2	8.25	3.6（12）	1.65等間	1.8等間		
ＳＢ312	東西	1以上×2		3.4		1.7等間		
ＳＢ313	南北	3×1以上	5.55	2.0以上	1.85等間	2.0		総柱建物か？
ＳＢ314	南北	3×1以上	5.4（18）	2.4以上	1.8等間	2.4		
ＳＢ315	南北	3×1以上	5.4（18）	1.5以上	1.8等間	1.5		
ＳＢ316	南北	3×1以上	5.4（18）	1.5以上	1.8等間	1.5		
ＳＢ317	南北	3×1以上	5.4（18）	1.5以上	1.8等間	1.5		
ＳＢ318	東西	3×2	4.8（16）	3.6（12）	1.6等間	1.8等間		
ＳＢ319	東西	3×2	5.4（18）	4.1	1.8等間	2.05等間		
ＳＡ320	東西	6	10.1以上		1.5-1.9			
ＳＢ321	南北	2以上×2	3.6以上	2.8	1.8	1.4等間		
ＳＢ322	東西	1以上×2	2.7以上	3.4	2.7	1.7等間		
ＳＢ323	東西	3×1以上	5.7（19）	2.7以上	1.9等間	2.7		
ＳＢ324	南北	3×2	5.8	3.6（12）	1.6-2.1-2.1	1.8等間		
ＳＢ325	東西	3×1以上	7.2（24）	2.4以上	2.4等間	2.4		
ＳＢ326	東西	3×1以上	7.2（24）	2.4以上	2.4等間	2.4		
ＳＢ327	東西	3×2	5.25	3.9	1.75等間	1.95等間		
ＳＢ328	南北	2以上×2	4.2以上	3.3	2.1	1.65等間		

掘立柱建物・塀一覧表

遺構番号	棟方向	規模（桁行×梁間）	桁行全長 m（尺）	梁間全長 m（尺）	桁行柱間寸法（m）	梁間柱間寸法（m）	廂の出（m）	備考
ＳＢ329	南北	３以上×２	7.8以上	3.8	2.6等間	1.9等間		
ＳＢ330	東西	２×２	4.0	3.4	2.0等間	1.7等間		
ＳＡ331	東西	6	11.4		1.7-2.2			
ＳＢ332	東西	３×１以上	4.5（15）	1.1以上	1.6-1.2-1.7	1.1		
ＳＢ333	東西	３×２	4.95	3.6（12）	1.65等間	1.8等間		
ＳＢ334	東西	３×１以上	4.5（15）		1.5等間			
ＳＢ335	東西	３×１以上	4.95		1.65等間			
ＳＢ336	東西	３×２	4.95	4.0	1.65等間	2.0等間		
ＳＢ337	東西	３×２	4.8	3.0（10）	1.6等間	1.5等間		
ＳＢ338	南北	４×１以上	6.4		1.6等間			
ＳＢ339	南北	３×１以上	6.6		2.2等間			
ＳＢ340	東西	３×１以上	4.9	2.1以上	1.7-1.7-1.5	2.1		
ＳＢ341	南北	３以上×１以上	6.3以上		2.1等間			
ＳＢ342	南北	３以上×１以上	3.9以上	1.5以上	1.3等間	1.5		
ＳＡ343	南北	２以上	4.5以上		2.25			
ＳＢ344	東西	１以上×２		3.2		1.6		
ＳＡ345	南北	２以上	3.0以上		1.5			
ＳＡ346	東西	３以上	4.5以上		1.5			ＳＡ345と直交か？

掘立柱建物・塀一覧表

遺構番号	掘形			枠			主要出土遺物	備考
	平面形	平面規模（m）	深さ（m）	平面形・構造	内法（m）	水溜・濾過装置等		
ＳＥ510	楕円形	東西2.8 南北2.6	1.3	方形縦板組 隅柱横桟留	0.96	枡形（内法0.62）深さ0.23、内部礫敷	柄杓、木皿、櫛、箸、紡織具、曲物	隅柱は丸柱材の転用 桃核100、梅核26、くるみ４他
ＳＥ511	楕円形	東西2.2 南北2.8	1.45	方形縦板組 隅柱横桟留	0.8	枡形（内法0.63）深さ0.22	ガラス玉16、櫛、斎串、四耳壷１	縦板は屋根板材の転用
ＳＥ512	楕円形	東西2.5 南北2.4	1.05					枠材抜取痕跡
ＳＥ513	楕円形	東西2.4 南北2.1	1.05	方形縦板組 横桟留	0.52 ～ 0.6		魚佩片１、和同銭１	幅広、大型の縦板材を転用
ＳＥ514	楕円形	東西2.2 南北2.15	1.4	方形縦板組 横桟留	0.81	枠内底に木炭敷	斎串、櫛、銅釘	枠材表面に刻印 桃核23、梅核５、栗１
ＳＥ515	隅丸方形	東西3.4	1.75	方形縦板組 （上段）隅柱横桟留 （下段）横桟留	（上）0.74～0.84 （下）0.47～0.57	枠内底に礫敷	ガラス玉３、和同銭１、斎串、櫛、箸、紡織具	枠材表面に刻印 桃核73、梅核24、どんぐり12他
ＳＥ516	隅丸方形	東西2.0 南北1.6	1.4	方形縦板組 隅柱横桟留	0.73	枠内底に礫敷		縦板は屋根板材の転用
ＳＥ517	楕円形	東西2.6	1.9	方形縦板組		枡形（内法0.47×0.4）内部に礫充填	刀子	枠材抜取痕跡
ＳＥ518	隅丸方形	東西3.6 南北3.3	2.2	（上段）方形横板組 （下段）方形縦板組 横桟留	（上）0.84 （下）0.77		櫛、箸、平瓶、壷他	桃核80、梅核５、ひょうたん
ＳＸ804	隅丸方形	東西1.2 南北1.25	1.08	縦板組			鐙未製品、黒色土器Ｂ（11世紀前半）	枠材抜取痕跡 湧水層に達しない
ＳＸ805	隅丸方形	東西1.15 南北1.3	0.9	四隅に杭を打ち、縦板１枚が遺存	0.7 前後		青磁、黒色土器（11世紀中頃）	多量の凝灰岩切石が廃棄されている

井戸・不明土坑一覧表

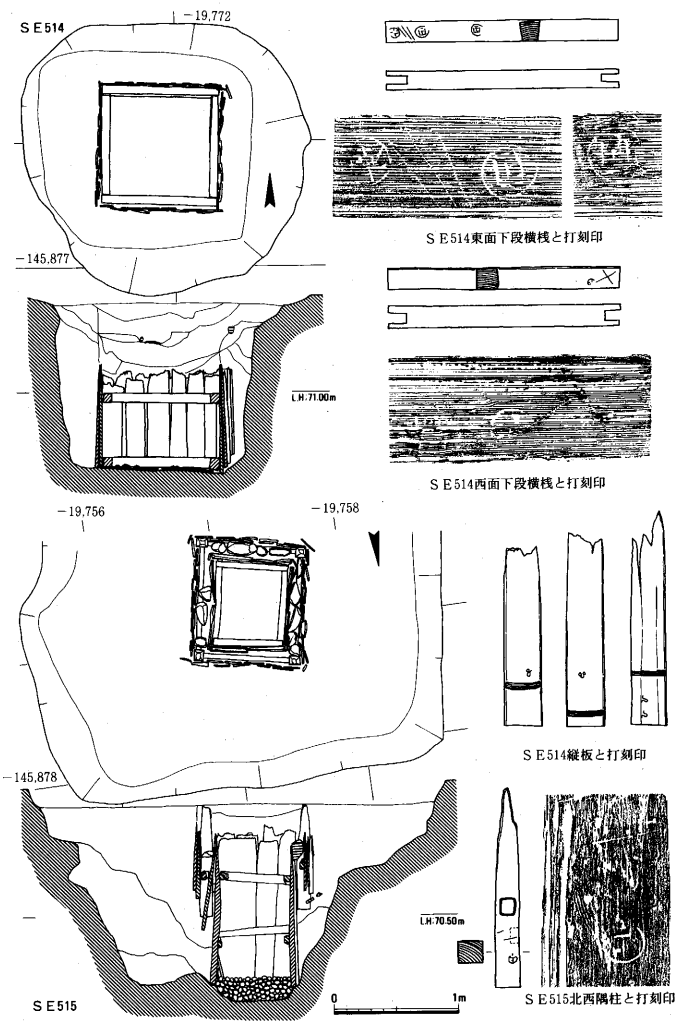
後の変化ではないかと思われる。遺構の配置が南北1／4、東西1／4の割付けを越えない点や、それぞれの配置の中に井戸が１基ずつ存在する点からみて、坪内を1／16に区分して宅地利用した可能性が高いと判断できよう。

B－Ⅱ期　Ⅰ期の建物配置を基本的に踏襲しながら、その建替を主としている。その中でも大きい変化としては、建物ＳＢ286の出現とこれに伴い井戸ＳＥ512がＳＥ514へと造り替えられたことであろう。建物ＳＢ286の内部には埋甕の掘形と思われる２条の土坑列があり、西南隅の宅地内で大きな機能変化があったとも考えられる。

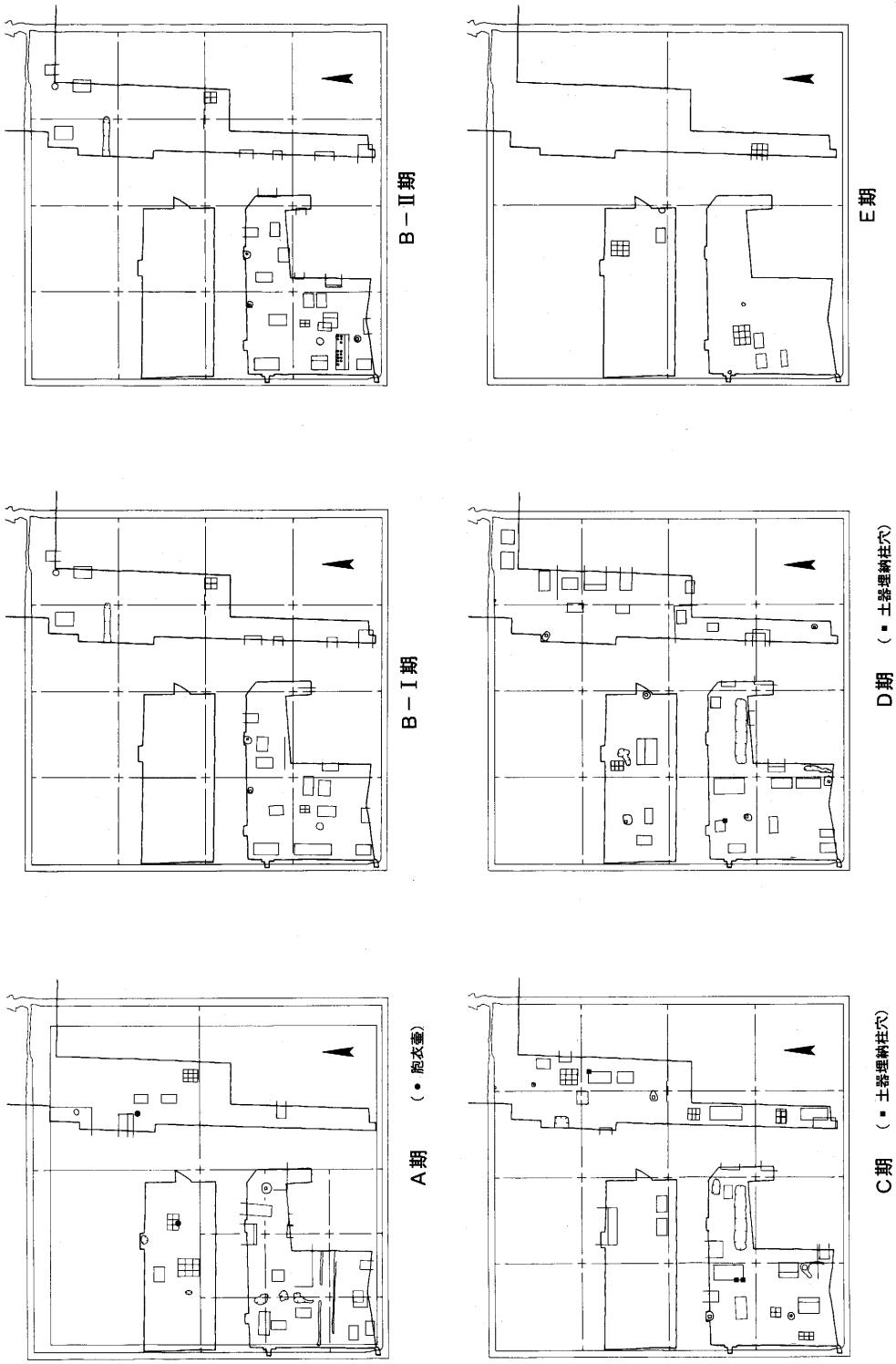
C期　坪内1／16の区画を宅地利用する点はＢ期と変わらないが、建物配置は大きく変化しており、利用主体者の交替が考えられる。建物ＳＢ277の西側柱列南側の二つの柱穴からは須恵器壷Ｈが出土しており、建物構築段階において祭祀が行われた可能性があろう。

D期　坪内1／16の区画を宅地利用する点はＣ期と変わらないが、建物配置が大きく変化しており、利用主体者の交替が考えられる。建物ＳＢ273の南東隅柱穴から土師器壷Ｂが出土しており、建物構築段階において祭祀が行われた可能性があろう。井戸ＳＥ511・515からは共にガラス玉が出土し、井戸祭祀の内容に共通性を見い出せる。

E期　平安時代（11世紀代）の遺構群をまとめたものである。ＳＸ804・805からは何らかに使用されていたと思われる枠材が出土したものの、深さが涌水層にまで達しておらず井戸とは



井戸ＳＥ514・515　平面・立面図（1／60）と枠材の打刻印（略測図1／30　拓本1／6）



三坪内遺構変遷図

考え難い。ここでは遺構の性格を断定することを避けておきたい。

さて、この発掘区では非常に数多くの遺構を確認したが、奈良時代の井戸９基の調査過程で特に再認識した木材表面の記号について、その特徴を少しここで検討しておきたい。

取り上げた井戸枠材には様々な記号、打刻印がみられた。ＳＥ514の枠材にはひっかき傷のような痕跡で「＼＼＼」、「×」などが記されている。落書きとも見えるが、土器などによく記されるヘラ記号と共通するのでこれも一種の記号と考えてよかろう。このようなひっかき傷はよく見られるので注意が必要である。打刻印はＳＥ514・515で認められ、Ω型と○の中に漢字を刻む文字型の２種がある。Ω型は右京二条三坊二坪のＳＥ508（第283次調査）でも確認しており、割り裂きによる縦板材に打刻されている点で共通する。ＳＥ514例では１枚につき１～２箇所の打刻数だが、ＳＥ508例は１枚につき３～４箇所も打刻されている。これに対して文字型は、表面を丁寧に仕上げた角材にのみ認められた。判読できるのは「㊤」、「㊥」だけで、他はよくわからない。類例は少なく、左京二条二坊五坪ＳＢ5250柱穴礎板（761～762年伐採）と草戸千軒遺跡の２基の井戸枠材（いずれも14世紀中頃から後半）を知るのみである。前者は角材で㊦の打刻印が４箇所にある。後者のうち、ＳＥ1969の縦板３枚の下端付近に㊤の打刻印、ＳＥ2163の横板１枚に㊥の打刻印がある。草戸千軒遺跡例は本例と年代的に大きな開きがあるものの、その類似性を指摘することができ、今後の確認例によっては時間的な間隙を埋めていけるものと思われる。

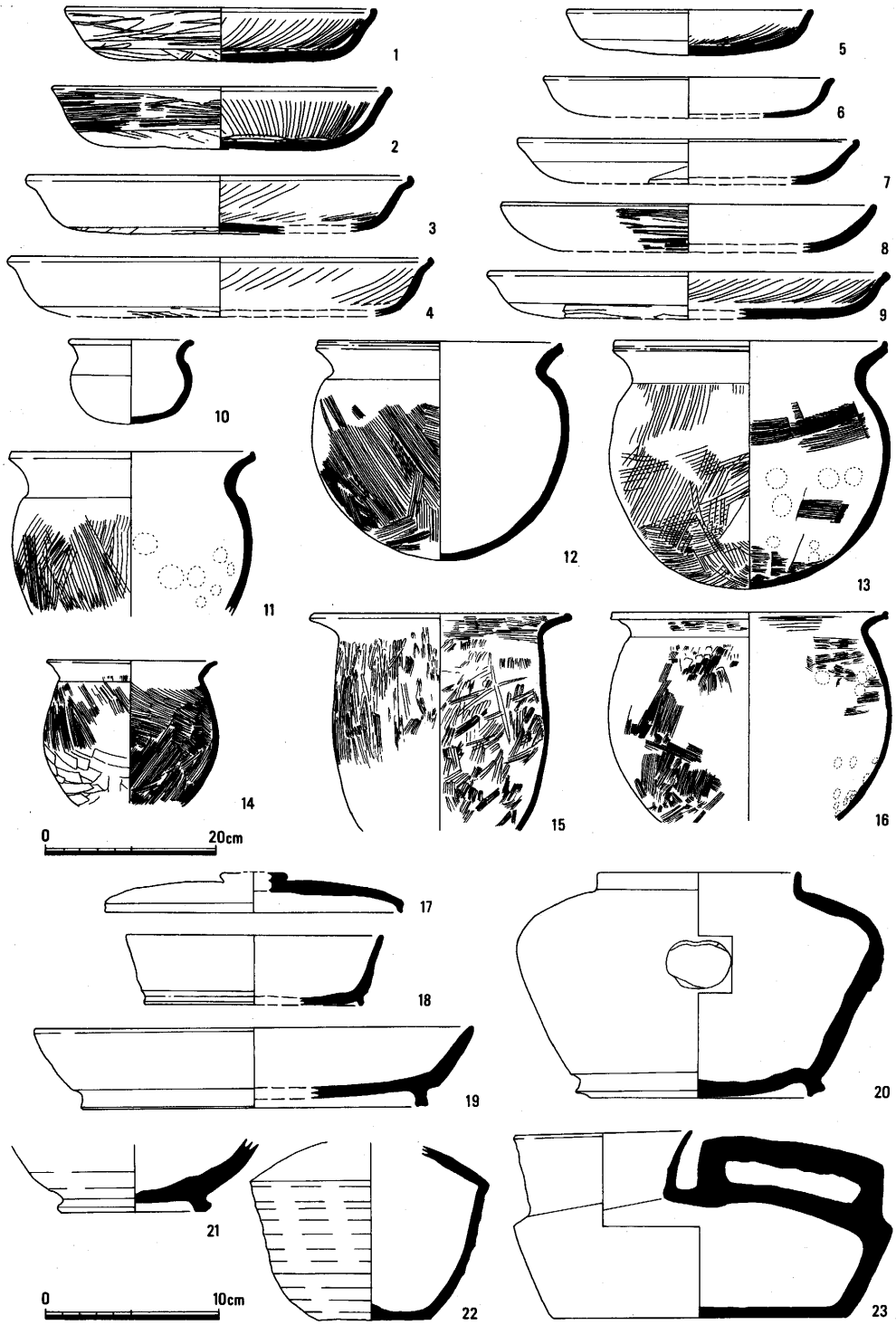
これらの記号、打刻印は部材の端部付近に記される場合が多いという特徴があり、その役割を推定する上で重要となる。そして井戸枠材のほとんどが他からの転用材であることから、それらが井戸構築時に機能したとは考えられない。またΩ型、文字型の２種が加工の違いによって打ち分けられていることも判明した。これらの点から従来の認識とは異なる木材加工体制の存在を奈良時代後半には想定し得る可能性もあり、さらに確認例の増加に努める必要性をここに提起しておきたい。（鐘方正樹）

Ⅲ　出土遺物

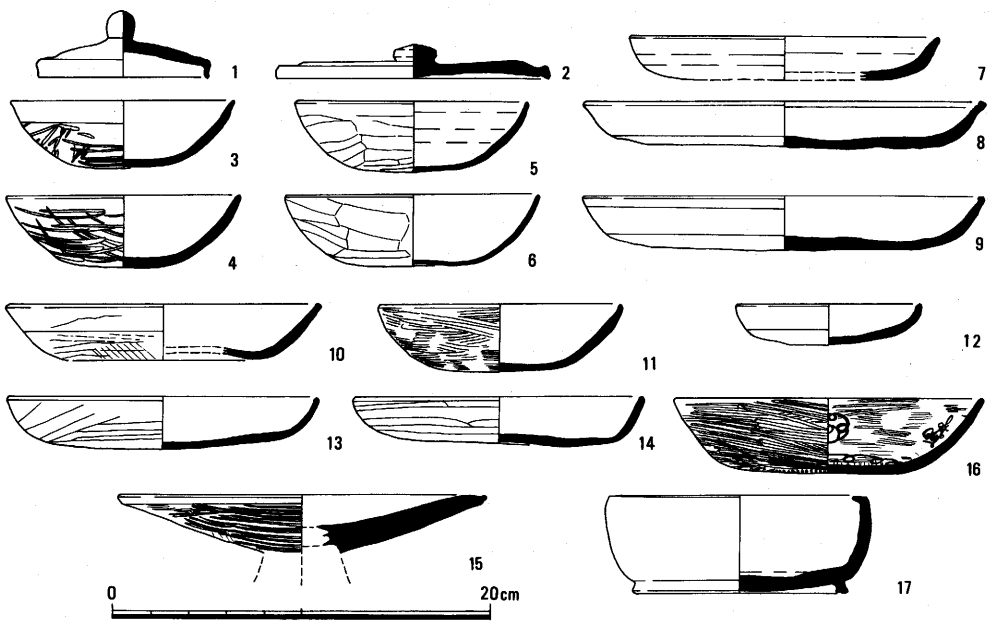
以下に主な出土遺物の概要を土器類、瓦類、木、金属、ガラス製品に分けて記す。

瓦　類　瓦類は整理箱30箱分が出土した。軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、塼がある。ここでは軒瓦について記す。軒丸瓦は９点出土した。軒丸瓦の内訳は6131型式Ｂ種１点、6133型式Ｓ種１点、6225型式Ｃ種１点、6225型式種別不明１点、6308型式Ｂ種１点、6311型式Ｂ種１点、6316型式Ｂ種１点、型式不明２点である。軒平瓦は８点出土した。軒平瓦の内訳は6663型式Ｂ種１点、6663型式Ｃ種１点、6664型式Ｃ種１点、6685型式Ａ種１点、6710型式Ｃ種２点、6721型式Ｃ種１点、型式不明１点である。（原田憲二郎）

土器類　遺物整理箱で約190箱分の土器が出土した。時期的には、古墳時代から鎌倉時代までのものがあるが、ここでは奈良時代の井戸・土坑と平安時代の井戸から出土した土



井戸ＳＥ518出土土器（１～13、17～23は１／４、14～16は１／８）



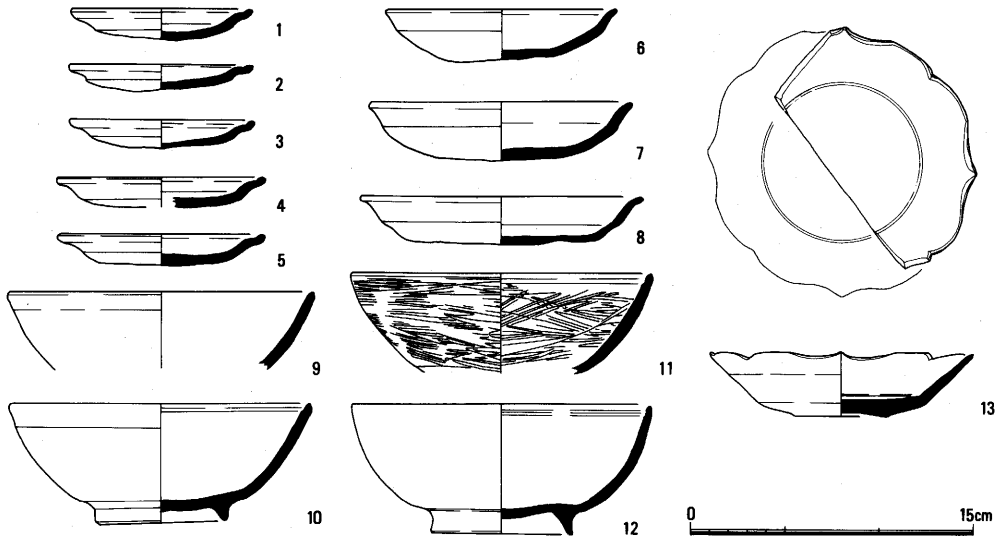
井戸ＳＥ510・515、土坑ＳＫ610出土土器（１／４）

器について記す。

奈良時代の土器　ＳＥ518出土土器は、１～16は土師器で、１～４が杯Ａ、５～９が皿Ａ、10が壷Ｂ、11～16が甕である。杯Ａは外面の調整がｂ手法のもの（１・２）とｂ$_2$手法のもの（３・４）があり、皿Ａの外面の調整はａ手法のもの（５）、ｂ手法のもの（７・９）、ｃ$_3$手法のもの（８）がある。これらの中には内面に１段の放射暗文と螺旋暗文が見られるものがある。甕はいずれも外面をハケ目調整するが、底部を削るもの（14）もある。17～23は須恵器で、17が杯蓋、18が杯Ｂ、19が皿Ｂ、20が壷Ａ、21が壷Ｌ、22が壷Ｋ、23が平瓶である。壷Ａは肩部に把手がつく。ＳＥ510出土土器は、１・２が須恵器、３～９は土師器である。須恵器は１が壺蓋、２が杯蓋で、土師器は３～６が椀Ａ、７～９が皿Ａである。椀Ａはａ$_3$手法のもの（３・４）とｃ手法のもの（５・６）がある。ＳＥ515出土土器は、10～15が土師器、16が黒色土器である。土師器は、10が杯Ａ、11が椀Ａ、12が皿Ｃ、13・14が皿Ａ、15が高杯で、16が黒色土器Ａ類杯である。杯Ａはｂ手法、椀Ａはａ$_3$手法、皿Ａはｃ手法である。ＳＫ610出土土器には、17の須恵器がある。壺Ｄに似た器形であるが、体部外面は回転ヘラミガキし、金属器を模倣したものと思われる。

これらの土器群の時期は、器形や調整手法の特徴からＳＥ518が奈良時代中頃、ＳＥ510とＳＥ515が奈良時代の末頃に位置づけられる。ＳＫ610出土の須恵器壺は、共伴遺物がなく、詳細な時期については不明である。　（池田裕英）

平安時代の土器　ＳＸ805出土土器について記す。土師器皿（１～８）・羽釜、黒色土器Ｂ類椀（９～12）、越州窯系青磁杯（13）が出土した。土師器小皿はすべて「て」字状口

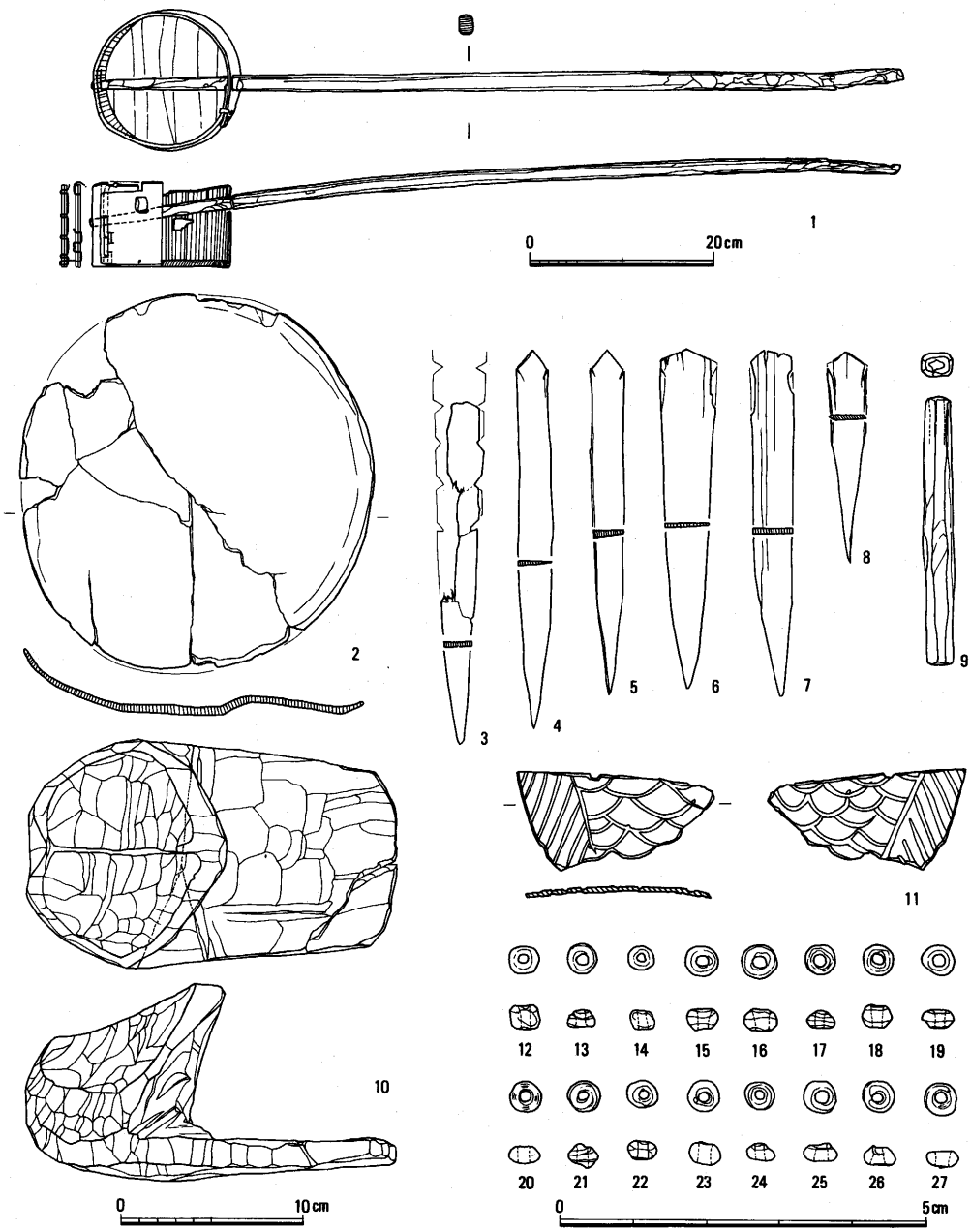


ＳＸ805出土土器（１／４）

縁である。黒色土器Ｂ類はいずれも内外面に密なヘラミガキを行う。12の内面には、板の小口の角で器壁を横方向に引掻いたような痕跡が不規則に残る。青磁杯は全面施釉後、畳付の釉を掻き取る。その部分には重ね焼きの目跡が残る。口縁部は輪花で、四花に復元できる。土師器、黒色土器は11世紀前半頃のものであるが、青磁は９世紀頃のもので伝世品と考えられる。（中島和彦）

木製品　主なものについて概要を記す。１は曲物柄杓である。身に柄が装着された状態で出土した。身の側板の綴じ合わせは１箇所で２列前上外下内５段後上外下内３段綴じである。底板との結合は木釘で、等間隔に４箇所留められた痕跡がある。柄は身にはめる部分と他端をともに細めるように削られ、断面は隅欠きの長方形である。身の直径15.0cm、高さ9.2cm。柄の長さ88.1cm、幅1.9cm、厚さ1.3cm。２は挽物Ⅲである。直径19.5cm、高さ約1.0cm。横木取りである。３～８は斎串である。３はＣⅥまたはＣⅦ型式、４～７はＣⅢ型式、８はＢⅢ型式である。３は残存長18.6cm、残存幅1.9cm、厚さ0.25cm。４は長さ20.5cm、幅1.8cm、厚さ0.25cm。５は長さ18.7cm、幅1.75cm、厚さ0.4cm。６は長さ18.4cm、幅2.9cm、厚さ0.2cm。７は長さ18.8cm、幅2.3cm、厚さ0.3cm。８は長さ11.5cm、幅2.1cm、厚さ0.3cm。９は刀子の柄である。断面は隅欠きの長方形で、中央部から柄頭にかけて削ぎ落とされ、柄頭がやや細められている。長さ14.7cm、幅1.6cm、厚さ1.3cm。10は半舌鐙の未製品である。表面はかなり加工がすすみ壷の甲の中央に稜が造り出されているが、壷の中は刳られていない。長さ20.1cm、幅12.5cm、高さ10.7cm、芯持ちのヒイラギ材を使用。１・２はＳＥ510、３～６はＳＥ511、７はＳＥ514、８はＳＥは512、９はＳＥ515、10はＳＸ801から出土した。10は平安時代のもので、それ以外は奈良時代のものである。

金属製品　11は金銅製の魚佩である。破片のため単魚佩か双魚佩かは不明である。蹴彫



出土木製品・金属製品・ガラス製品（1は1／8、2～10は1／4、11～27は1／1）

りによって両面に背鰭と鱗が表現されている。残存長1.45cm、残存幅2.7cm、厚さ0.05cm。奈良時代の井戸ＳＥ513から出土した。

ガラス製品　12～27は奈良時代の井戸ＳＥ511から出土したガラス小玉である。直径3.4～6.0mm、孔径1.0～2.0mm、高さ2.5～4.0mmである。色調は緑～青、銀化しているもの、銀化がすすみ乳白色になったものもある。他にＳＥ515から3点出土した。　（久保邦江）

(2) 平城京右京二条三坊六坪・菅原東遺跡の調査　第310・326次

Ⅰ　はじめに

右京二条三坊六坪では、今年度までに第286次（第2発掘区）・第292次（第1発掘区）・第310次（第2・3発掘区）調査を実施しており、今年度は第326次（第2発掘区）・第327次（第5発掘区）調査を行なった。今回は第310・第326次調査の概要を報告する。第327次調査は次年度に報告の予定である。

Ⅱ　検出遺構

層　序　調査地は、西から東になだらかに下がる低丘陵に位置する。調査区内の基本的な層序は、黒灰色土（耕土）以下、灰色砂質土、黄褐灰色土と続き、地表下0.3～0.6ｍで黄灰色粘土あるいは黄灰色シルト、褐灰色砂の地山に達する。地山の標高は72.3～72.6ｍで遺構はすべてこの地山上面で検出した。

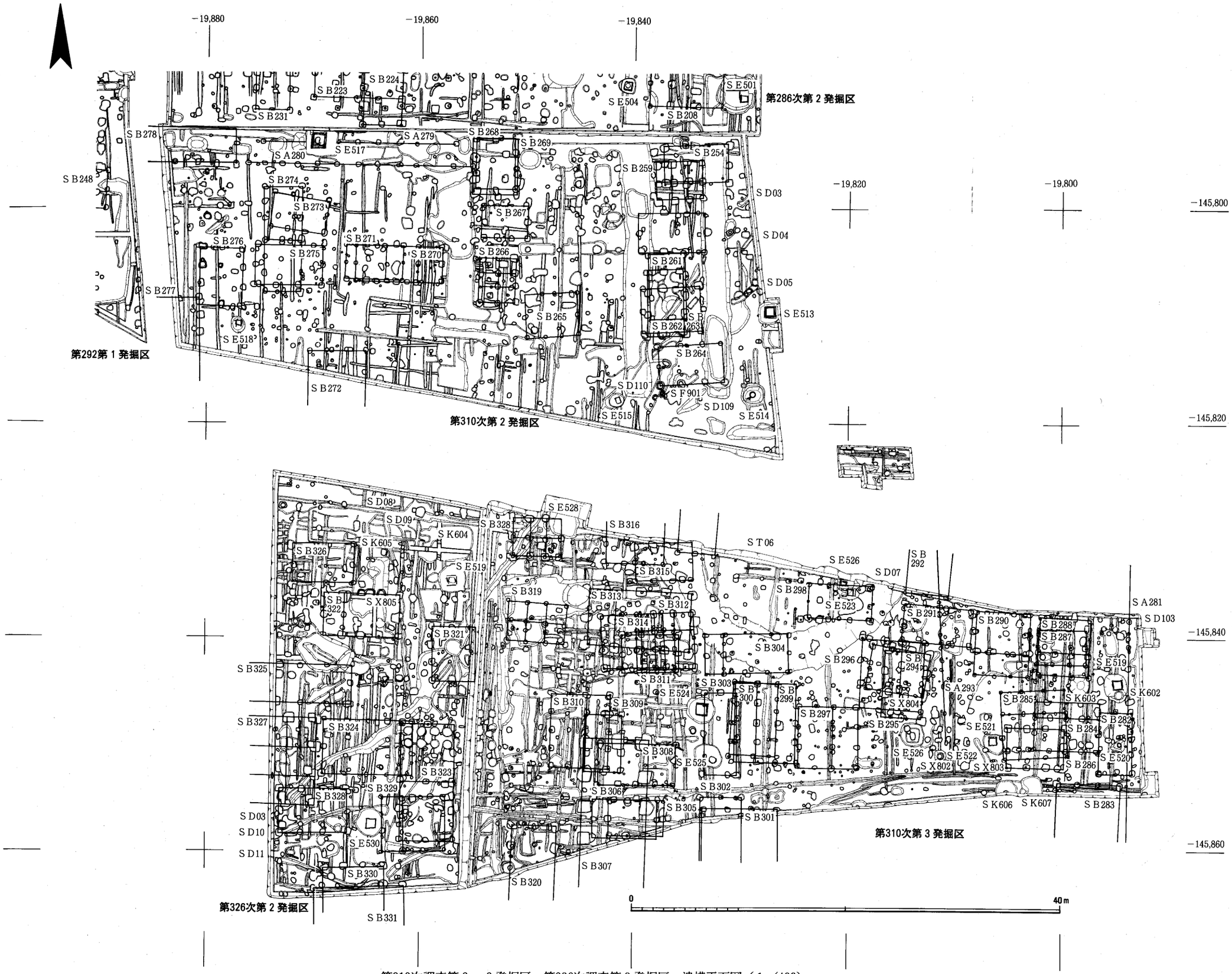
検出した遺構は、古墳時代の素掘りの溝、古墳、奈良時代の道路側溝、坪内道路とその側溝、素掘りの溝、掘立柱建物、掘立柱塀、井戸、土坑、土器埋納土坑、埋甕土坑、平安時代の掘立柱建物、井戸、土坑がある。以下、各時代ごとに主なものについてのみ記す。

古墳時代の遺構　素掘りの溝７条、古墳１基がある。

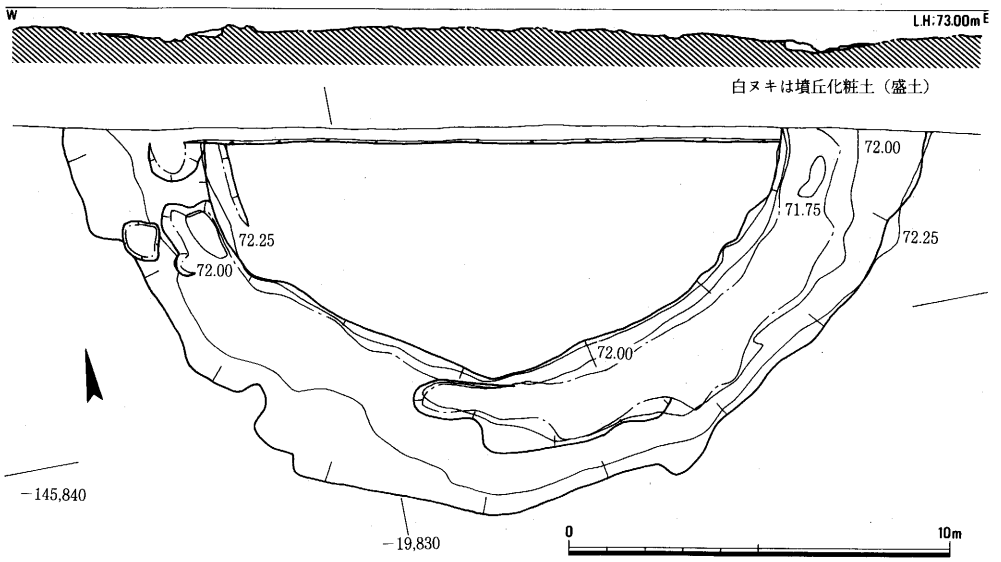
ＳＤ03～05・08～11　いずれも国土方眼方位に対して振れる斜行溝である。ＳＤ03は南西から北東方向の長さ73ｍ以上の斜行溝である。幅0.4～3.5ｍ、深さ0.1～0.6ｍで断面形はＵ字形である。埋土からは布留式土器が出土した。ＳＤ08・09と合流する部分はあふれたためか溝幅が広くなっている。ＳＤ04はＳＤ03の東側に並行する溝で、幅0.4～0.7ｍ、深さ0.1～0.2ｍである。埋土から円筒埴輪の破片が出土した。ＳＤ05は幅0.4～0.9ｍ、深さ0.1～0.4ｍで、ＳＤ03からの分流であると考えられる。ＳＤ08は北西から南東方向の斜行溝で、幅0.4～0.8ｍ、深さ0.2ｍで長さ21.2ｍ分を検出した。ＳＤ09はＳＤ08の東に並行する溝で、幅0.3～0.5ｍ、深さ0.1ｍで長さ14.4ｍ分を検出した。ＳＤ10は西から東に向かう溝で幅0.5～0.7ｍ、深さ0.2～0.15ｍで長さ10ｍ分を検出した。ＳＤ11は幅0.3～0.7ｍ、深さ0.1～0.2ｍの溝で西から東に向かって蛇行する溝である。

ＳＤ08・09・10・11 からは遺物が出土しなかったため、今回検出した溝がすべて同時期に存在していたかどうか断定できない。しかし、調査区周辺では、第286次（第2発掘区）調査でも古墳時代のものと考えられる斜行溝を検出してることから、この調査地一帯に古墳時代の遺構が広がっている可能性が高い。

ＳＴ06　直径約16ｍの円墳である。墳丘は削平されており、周溝の底から高さ約0.5ｍまでが遺存しているだけである。墳丘は地山を削りだして整形し、その規模を明示した上で周囲を盛土で化粧して整えている。ほぼ垂直に掘り残された地山の上に盛土が施された



第310次調査第２・３発掘区、第326次調査第２発掘区　遺構平面図（１／400）

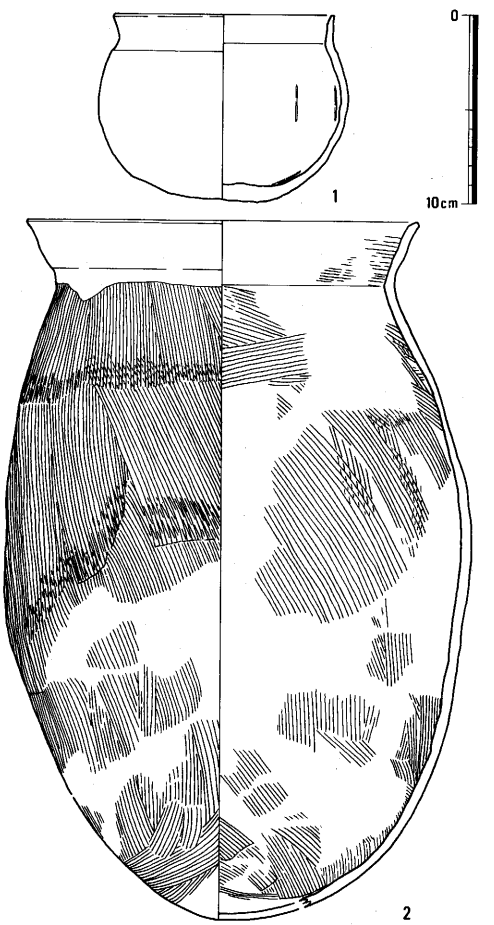


古墳ＳＴ06・周溝ＳＤ07　平面・断面図（1／200）

地山の上に盛土が施されたであろうが、墳丘に必要な勾配を付けるに際して、墳丘裾にまで盛土を行い、これを整えたと推察できる。

ＳＤ07　円墳ＳＴ06の周溝である。幅は2.5〜4.0m前後で一定ではない。深さは、南東側が約0.6mで最も深く、北へ向かうにつれて浅くなる。周溝の墳丘側の肩部分についても所々で盛土による化粧が確認できた。周溝は、ある程度灰色粘土が自然堆積した後に、墳丘削平土によって埋め立てられる。堆積土にはほとんど遺物が含まれず、底から土師器鉢（1）１点、甕（2）２点が出土したのみである。　（鐘方正樹）

奈良・平安時代の遺構　奈良時代の坪境小路側溝１条、坪内道路１条と側溝２条、素掘り溝１条、掘立柱建物68棟、掘立柱塀４条、井戸15基、土坑４、土器埋納土坑３埋甕土坑１と平安時代の建物２棟、井戸３基、土坑２がある。これらの遺構には重複



周溝ＳＤ07　出土土器（1／4）

遺構番号	棟方向	規模（桁行×梁間）	桁行全長 m（尺）	梁間全長 m（尺）	桁行柱間寸法（m）	梁間柱間寸法（m）	廂の出（m）	備考
ＳＢ258	東西	３×２	6.3（21）	3.6（12）	2.1等間	1.8等間		ＳＢ259より新しい
ＳＢ259	東西	３×２	4.5（15）	3.6（12）	1.5等間	1.8等間		ＳＢ258より古い、総柱建物
ＳＢ260	東西	３×２	6.3（21）	3.6（12）	2.1等間	1.8等間		ＳＢ261より古い
ＳＢ261	南北	３×２	6.3（21）	3.6（12）	2.1等間	1.8等間		ＳＢ260より新しい
ＳＢ262	南北	３×２	6.3（21）	3.6（12）	2.1等間	1.8等間		ＳＢ261・ＳＢ263より古い
ＳＢ263	東西	３×２	5.4（18）	4.2（14）	1.8等間	2.1等間		ＳＢ262より新しい
ＳＢ264	東西	３×２	6.3（21）	3.6（12）	2.1等間	1.8等間		
ＳＢ265	東西	３×２	4.8（16）	4.2（14）	東から1.5-1.5-1.8	2.1等間		
ＳＢ266	南北	３×２	4.2（14）	3.0（10）	北から1.5-1.5-1.2	1.5等間		総柱建物
ＳＢ267	東西	３×２	4.5（15）	3.0（10）	1.5等間	1.5等間		
ＳＢ268	南北	３×２	4.5（15）	3.6（12）	1.5等間	1.8等間		ＳＢ269より新しい
ＳＢ269	南北	３×２	5.4（18）	4.2（14）	1.8等間	2.1等間		ＳＢ268より古い
ＳＢ270	東西	４×２	8.1（27）	3.0（10）	東から2.1-2.1-2.1-1.8	1.5等間		東１間目間仕切り
ＳＢ271	東西	３×２	5.4（18）	3.0（10）	1.8等間	1.5等間		東１間目間仕切り
ＳＢ272	東西	３×１以上	5.4（18）	2.1（7）以上	1.8等間	2.1		
ＳＢ273	東西	３×（2）	5.4（18）	3.0（10）	1.8等間	（1.5等間）		妻柱未検出
ＳＢ274	南北	６×２	9.6（32）	3.6（12）	北から1.8-1.5-1.5-1.8-1.5-1.5	1.8等間		南３間目間仕切り　ＳＢ275より新しい
ＳＢ275	東西	３×２	6.3（21）	3.6（12）	2.1等間	1.8等間		ＳＢ274より古い
ＳＢ276	南北	３×２	5.4（18）	4.2（14）	1.8等間	2.1等間		ＳＢ277より古い
ＳＢ277	南北	２以上×１以上	3.6（12）以上	2.1（7）以上	1.8等間	2.1		ＳＢ276より新しい
ＳＢ278	東西	３以上×２	5.7（19）以上	3.0（10）	北から1.8-1.8-2.1	1.5等間		
ＳＡ279	東西	10	18（60）		1.8等間			ＳＥ517より古い
ＳＡ280	東西	12	20.7（69）		※			※東から1.8×8-1.5×3
ＳＡ281	南北	６以上	13.2（44）以上		※			※北から2.4-2.1-3.0-2.1-3.6
ＳＢ282	南北	３×２	5.85（19.5）	3.0（10）	1.95等間	1.5等間		ＳＢ284より古い
ＳＢ283	東西	３×１以上	5.85（19.5）		1.95等間			
ＳＢ284	東西	４×３	6.0（20）	4.5（15）	1.5等間	1.5等間	（北）1.5	ＳＢ282・286より新しい
ＳＢ285		３×３	5.85（19.5）	6.45（21.5）	1.95等間	2.25等間	（北）1.95	
ＳＢ286	東西	３×２	5.4（18）	3.6（12）	1.8等間	1.8等間		ＳＢ284より古い
ＳＢ287	東西	３×２	4.5（15）	3.3（11）	1.5等間	1.65等間		東から１間目間仕切り
ＳＢ288	東西	３×２	4.5（15）	3.6（12）	1.5等間	1.8等間	（南）2.1	ＳＥ326より古い
ＳＢ289	東西	３×２	5.4（18）	3.6（12）	1.8等間	1.8等間	（南）2.1	ＳＢ290より新しい
ＳＢ290	東西	３×２	4.95（16.5）	3.6（12）	1.65等間	1.8等間		ＳＢ289より古くＳＢ291より新しい
ＳＢ291	東西	３×２	3.6（12）	6.3（21）	1.8等間	2.1等間		ＳＢ290より古くＳＢ296より新しい
ＳＢ292	南北	１以上×２		3.9（13）		1.95等間		
ＳＡ293	南北	５以上	12.9（43）以上		※			※北から2.7-2.4-2.4-2.7-2.7
ＳＢ294	東西	３×２	5.4（18）	4.2（14）	1.8等間	2.1等間		ＳＢ295より新しい
ＳＢ295	南北	３×２	6.3（21）	3.9（13）	2.1等間	1.95等間		ＳＢ294より古くＳＢ296より新しい
ＳＢ296	南北	３×３	6.3（21）	5.7（19）	2.1等間	1.8等間	（東）2.1	ＳＢ291・294より古い
ＳＢ297	南北	３×３	5.85（19.5）	5.7（19）	1.95等間	1.65等間	（東）2.4	ＳＢ299より新しい
ＳＢ298	東西	３×２	3.9（13）	3.3（11）	1.95等間	1.65等間		
ＳＢ299	南北	４×３	7.2（24）	5.4（18）	1.8等間	1.8等間	（西）1.8	ＳＢ297・300より古い
ＳＢ300	南北	４×２	6.9（23）	4.2（14）	北から1.5-2.1-1.8-1.5	2.1等間		ＳＢ299より新しい
ＳＢ301		３×１以上	7.2（24）		2.4等間			
ＳＢ302	南北	１以上×２	1.8（6）以上	3.9（13）	1.8	1.95等間		
ＳＢ303	南北	４×２	7.5（25）	3.0（10）	北から2.1-1.8×3	1.5等間		ＳＥ525より新しい
ＳＢ304	東西	４×２	7.65（25.5）	3.9（13）	1.95等間	1.95等間	（西）1.8	
ＳＢ305	東西	３×２	5.4（18）	3.3（11）	1.8等間	1.65等間		ＳＢ306・307より古い
ＳＢ306	東西	３×２	5.85（19.5）	3.6（12）	1.95等間	1.8等間		ＳＢ307より古く、ＳＢ305より新しい
ＳＢ307	南北	３以上×２	9.0（30）以上	6.0（20）	3.0等間	3.0等間		

掘立柱建物・塀一覧表

遺構番号	棟方向	規模（桁行×梁間）	桁行全長 m（尺）	梁間全長 m（尺）	桁行柱間寸法(m)	梁間柱間寸法(m)	廂の出（m）	備考
ＳＢ308	東西	４×２	7.2（24）	3.9（13）	1.8等間	※		※北から1.8-2.1
ＳＢ309	南北	３×２	5.4（18）	3.3（11）	1.8等間	1.65等間		
ＳＢ310	南北	４×３	6.6（22）	5.4（18）	1.65等間	1.65等間	(東) 2.1	ＳＢ307より古くＳＢ309より新しい
ＳＢ311	東西	３×２	5.4（18）	5.4（18）	1.8等間	1.8等間		
ＳＢ312	東西	３×３	5.4（18）	3.6（12）	1.8等間	1.8等間		総柱建物、ＳＢ313より古い
ＳＢ313	東西	４×２	9.6（32）	4.8（16）	2.4等間	2.4等間	(西) 2.4	ＳＢ312より新しい
ＳＢ314	南北	３×２	4.95 (16.5)	3.6（12）	1.65等間	1.8等間		
ＳＢ315	東西	３×２	5.4（18）	3.6（12）	1.8等間	1.8等間		ＳＢ316より新しい
ＳＢ316	東西	３×２以上	5.4（18）	2.1 (7) 以上	1.8等間	2.1等間		ＳＢ315より古い
ＳＢ317	東西	３×１以上	3.6（12）		1.8等間			
ＳＢ318	東西	３×２	4.5（15）	3.6（12）	1.5等間	1.8等間		総柱建物 ＳＥ528より古く、ＳＤ111より新しい
ＳＢ319	東西	３×２	5.4（18）	3.6（12）	1.8等間	1.8等間		総柱建物 ＳＤ111より古い
ＳＢ320	南北	３以上×２	4.2 (14) 以上	4.2（14）	2.1等間	2.1等間		
ＳＢ321	南北	３×２	4.95 (16.5)	4.2（14）	1.65等間	2.1等間		
ＳＢ322	東西	４×２	7.2（24）	3.6（12）	1.8等間	1.8等間	(西) 1.8	建物内に埋甕ＳＸ805あり ＳＫ605より新しい
ＳＢ323	南北	４×２	10.8 (36)	5.1（17）	2.7等間	2.55等間		北から２間目間仕切りあり 甕据付痕８個
ＳＢ324	東西	４×２	8.25 (27.5)	5.1（17）	2.55等間	※		※西から1.95-1.95-1.95-2.4
ＳＢ325	東西	４以上×２	6.75 (22.5)	3.6（12）	2.25等間	1.8等間		
ＳＢ326	東西	３×２	5.4（18）	3.6（12）	1.8等間	1.8等間		
ＳＢ327		３×２以上	8.1（27）	2.7 (9) 以上	2.7等間	2.7等間		総柱建物の可能性あり ＳＢ324より古い
ＳＢ328	東西	３以上×２	6.3 (21) 以上	4.2（14）	2.1等間	2.1等間		
ＳＢ329	南北	３×３	4.95 (16.5)	5.85 (19.5)	1.65等間	1.95等間	(西) 1.95	ＳＥ530より古い
ＳＢ330	東西	３×２以上	5.85 (19.5)	1.8 (6) 以上	1.95等間	1.8		ＳＢ331より古い
ＳＢ331	東西	５×１以上	8.4（28）		2.1等間			ＳＢ330より新しい

掘立柱建物・塀一覧表

関係、配置などから少なくとも４時期以上の変遷がある。時期区分は、次年度に第310次（第5発掘区）調査成果と合わせて行なう予定である。

ＳＤ103　三・六坪坪境小路西側溝である。調査区北端では両岸を検出したが、南端では西岸のみ確認した。幅は1.0～1.2ｍ以上、深さ0.6ｍの素掘りの溝である。溝心の国土座標は、Ｘ＝－145,840.00、Ｙ＝－19,791.780である。第310次調査（第１発掘区）で東側溝ＳＤ104の東岸を検出しており、坪境小路の幅員は側溝心々間で4.8ｍ前後と狭い。

ＳＦ901・ＳＤ109・110　ＳＦ901は坪の道路心からみて東から1／3坪ラインを南北に通る坪内道路である。第286次（第２発掘区）で検出した分と合わせて長さ55ｍ分を検出した。道路は坪の南北1／2ラインよりやや北寄りの位置で途切れる。路面幅は4.5～5ｍ、路面心の国土座標はＸ＝－145,810.00、Ｙ＝－19,836.70である。ＳＦ901の東側溝ＳＤ109は幅2.1～3.0ｍ、深さ0.2～0.3ｍで、溝心の国土座標はＸ＝－145,810.00、Ｙ＝－19,832.23である。西側溝ＳＤ110は幅2.1～3.2ｍ、深さ0.1～0.3ｍで、溝心の国土座標はＸ＝－145,810.00、Ｙ＝－19,839.91である。いずれも奈良時代後半には廃絶する。

ＳＤ111　坪境小路西側溝ＳＤ103の溝心から西に66ｍ（220尺）の位置にある南北方向の素掘りの溝で、幅は0.8～1.3ｍ、深さ0.1ｍ。溝の南端から長さ17ｍ分検出した。

掘立柱建物・塀　奈良時代の建物68棟、塀４条、平安時代の建物２棟（ＳＢ285・294）

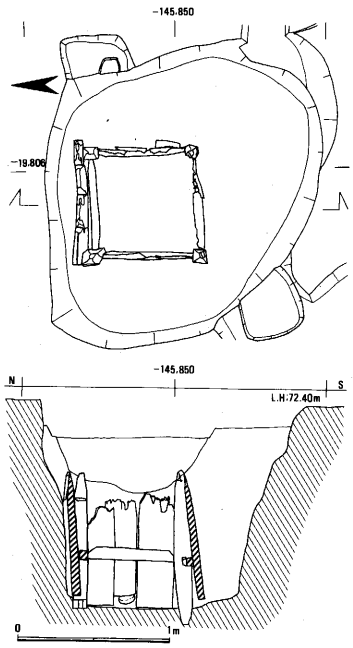
を検出した。概要は一覧表にまとめた。これらには少なくとも4時期以上の変遷がある。時期区分は、次年度、第327次調査の成果と合わせて報告する予定である。

ＳＥ513～530　奈良時代の井戸15基、平安時代後期の井戸３基（ＳＥ520・522・528）がある。これらの概要は、一覧表にまとめた。井戸枠が残存していた井戸15基の内２基（ＳＥ521・529）は枠に転用材が使われている。ＳＥ521は方形縦板組隅柱横桟留の井戸で北側縦板に扉材を用いていた。扉材は、４枚の板の底部に溝を掘り、細長い板をはめ、鉄釘で留めて１枚に仕立てたものである。類似した扉材を枠材に転用している井戸が西隆寺跡旧境内の発掘調査[1)]でも確認されている。枠内から奈良時代後半の遺物が出土した。ＳＥ529は上段が方形横板組、下段が円形縦板組の井戸で、縦板部分に槽状の木製品を転用している。枠内からは奈良時代の遺物が出土している。ＳＥ523は方形縦板組の井戸で、検出

遺構番号	掘形			枠			主要出土遺物	備考
	平面形	平面規模（m）	深さ（m）	平面形・構造	内法（m）	水溜・濾過装置等		
ＳＥ513	隅丸方形	東西1.9以上 南北2.1	1.5	上段　方形横板組 下段　方形縦板組横桟留	1.6×1.0 0.7		軒平瓦6663Ｃ・刀子・和銅開珎・桃種・墨書土器	
ＳＥ514	円形	径2.1	1.7	円形曲物積み上げ型	上段径0.5 下段径0.45		ウラジロ・桃種	２段分残存
ＳＥ515	楕円形	東西1.4 南北1.3	1.6	方形縦板組横桟留	0.45 ×0.6		ミニチュア竈・漆椀・和銅開珎・人形・斎串・ウラジロ・桃種	縦板は四方とも一枚板使用
ＳＥ516	楕円形	東西1.0 南北1.1	1.0			楕円形曲物（長径62cm、短径50cm）	銅製蛇尾	曲物のみ残存
ＳＥ517	隅丸方形	東西2.9 南北2.5	1.5	外側　方形横板組 内側　方形縦板組隅柱横桟留	1.2×1.3 0.95×0.95	楕円形曲物（長径60cm、短径38cm）曲物内木炭敷	軒丸瓦6285Ａ・桃種・黒色土器・製塩土器	当初から二重構造であったのではなく、のちに横板組の内側に、縦板組の枠を構築したと考えられる。平安
ＳＥ518	楕円形	東西1.3 南北1.5	1.0	円形縦板組ということのみ判明	径0.6		箸・桃種	枠上部は腐朽
ＳＥ519	隅丸方形	東西2.1 南北2.05	1.35	方形縦板組 隅柱横桟留	0.72	礫敷	軒丸瓦6140Ａ・斎串・軒平瓦6710Ｃ・刀子柄・曲物・砥石・和銅開珎・鍬・梅・クルミ種・墨書土器・土馬・炭	ＳＫ602より新しい
ＳＥ520	不整円形	長径1.3 短径1.1	1.0	円形曲物積み上げ型	上から径0.4・0.35・0.3		軒平瓦6710Ｃ、曲物側板・黒色土器	３段分残存 平安後期
ＳＥ521	隅丸方形	東西1.8 南北1.95	1.4	方形縦板組 隅柱横桟留	0.63		斎串・曲物・桃種・梅種・墨書土器	北側板は扉の転用材
ＳＥ522	隅丸方形	東西1.13 南北1.1	1.45	円形縦板組	径0.48 ～0.55	曲物（径0.44）	櫛・12Ｃ瓦器	３分割したくりぬき木材を使用 平安後期
ＳＥ523	隅丸方形	東西2.1 南北2.1以上	1.0	方形縦板組横桟留 （一枚板使用）	0.5		墨書土器	南と南西方向から枠に向かう丸瓦と木樋の導水施設あり。ＳＥ526より新しい
ＳＥ524	隅丸方形	東西2.6 南北2.5	2.47	方形横板組 （８段分残存）	1.0	北面底に土留め用の当て板あり	軒丸瓦6133Ａ・奈良三彩・櫛・箸・斎串・絵馬・曲物・釘・桃種・神宮饌費・模彩石器	枠材に線刻あり 北面６・７段目の接点部分に銭を入れていた。
ＳＥ525	隅丸方形	東西2.5 南北2.17	1.77	上段　円形縦板組 下段　曲物積み上げ型	径0.64 径0.6	礫敷	斎串・箸・曲物・人形・桃種・砥石・鉄釘	ＳＢ303より古い
ＳＥ526	隅丸方形	不明	2.35	方形縦板組横桟留	不明	礫敷	六角棒・転用硯	枠は大部分抜き取られている ＳＥ523より古い
ＳＥ527	隅丸方形	東西2.5 南北2.2	1.3				鉄釘	枠は抜き取られている ＳＢ295より古い
ＳＥ528	隅丸方形	東西2.9 南北2.1以上	1.36				軒平瓦6732Ｑ瓦器	枠は抜き取られている 平安後期
ＳＥ529	隅丸方形	東西2.65 南北2.45	2.75	上段　方形横板組 下段　不整円形縦板組	0.86 0.4～0.7		人形・斎串・箸・桃種・梅種	上段は２段分残存 下段は転用材を使用
ＳＥ530	楕円形	東西3.05 南北2.7	1.2	方形縦板組 隅柱横桟留	0.78× 0.84		曲物底板・砥石・桃種	ＳＢ329より古い

井戸一覧表

面からの深さが1.0mある。掘形は深さ約0.5m、約0.2mの厚さで堆積する湧水層を掘り抜いてはいるが、井戸底では次の湧水層に達していないため、湧水層の灰色砂層から井戸に水を引き込むための導水施設を設けている。構造は、掘形内に板を湧水層から枠底に向けて傾斜させて敷き、その上に丸瓦を1～3枚連結させて並べ、その中を水が流れるようにしている。枠内からは奈良時代の遺物が出土した。

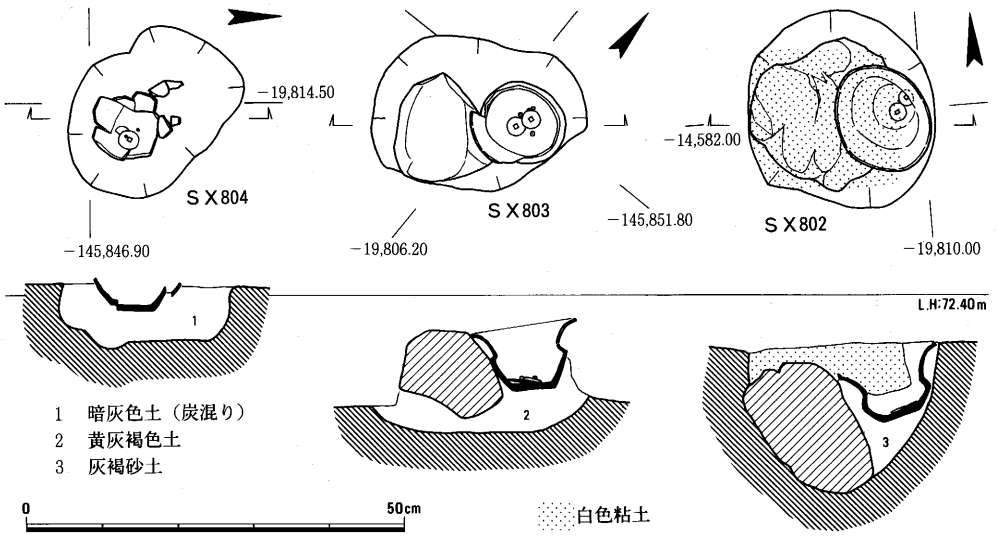


井戸ＳＥ521　平面・立面図（1／50）

ＳＫ602～607　奈良時代の土坑4基と平安時代後期の土坑2基を検出した。ＳＫ602は平面が東西1.67m、南北1.0m以上、深さ1.34mの2段掘りの土坑で、重複関係からＳＥ519より古い。ＳＫ603は径2.0m、深さ0.9mの平面が円形の土坑である。重複関係からＳＢ288より古い。ＳＫ604は東西5.5m、南北3.4m、深さ0.4mの平面が隅丸長方形掘形の土坑である。埋土から多量の炭と土器が出土した。ＳＫ605は平面が東西1.3～3.3m、南北6.9m、深さ0.1～0.35mの溝状土坑で、ＳＢ322・ＳＸ805より古い。ＳＫ606は東西2.1m、南北1.4m以上、深さ0.8mの平面が円形掘形の土坑、ＳＫ607 は東西2.0～2.2m、南1.7m以上、深さ0.3mの土坑で、いずれも埋土から平安時代後期の瓦器が出土した。

ＳＸ802～805　ＳＸ802はＳＢ286の西で検出した径0.25m、深さが0.2mの平面円形掘形の土器埋納土坑である。15cm大の礫を置いてからその横に須恵器壷Ｈを納め、さらに方形に切りだした白色粘土で壷と礫に蓋をするように被せて埋められていた。壷内の底には銭貨2枚の痕跡が残っていた。ＳＸ803はＳＸ802から西に39m（130尺）の地点で検出した。長径0.28m、短径0.2m、深さ0.15mの平面不整円形掘形の土器埋納土坑である。ＳＸ802同様に礫と須恵器壷Ｈを納めていた。壷内には土が堆積していたため、レントゲン撮影及び残存脂肪酸分析（後述）を行なった。レントゲン撮影では、神宮開宝2点、ガラス玉5点が納められていることが判明した。ＳＸ804はＳＥ527の北側で検出した径0.19m深さ0.1mの平面円形掘形の土器埋納土坑である。土坑内には、銭貨2枚とガラス玉2点を納めた須恵器壷Ｈが埋納されていた。また、ＳＸ804の遺構面直上からは三彩小壷の破片が出土したが、ＳＸ804に伴うかどうかは不明である。これらの土器埋納土坑はどの建物に結びつくのかは明らかではないが、おそらく地鎮にかかわるものと考えられる。

ＳＸ805は 建物ＳＢ322内で検出した径0.9m、検出面からの深さ0.5mの平面掘形内の埋甕遺構である。掘形は、断面半円形で、甕底部の大きさに合わせて掘られている。甕の上



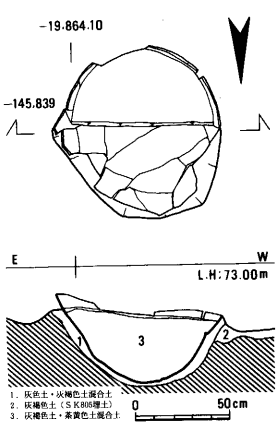
土器埋納土坑ＳＸ802・803・804　平面・断面図（1／10）

部は削平されて残存しない。甕の内容物については不明であるが、建物ＳＢ322に伴う埋甕であると考えられる。この他に建物ＳＢ323内でも８個体分の甕を据え付けた痕跡を検出した。これまでに甕を据え付けた穴の痕跡を検出した例は幾つかあるが、ＳＸ805のように甕本体が残存している例は少なく、埋甕遺構の構造や性格を知る上で貴重な成果を得ることができた。　（久保清子）

Ⅲ　出土遺物

出土した遺物には、古墳時代の土器、奈良時代の瓦類、土器、木製品、金属製品、ガラス製品、平安時代の土器がある。以下、主なものについてのみ記す。

瓦　類　出土瓦類には軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、塼があり、合計整理箱48箱分が出土した。ここでは軒瓦について記す。

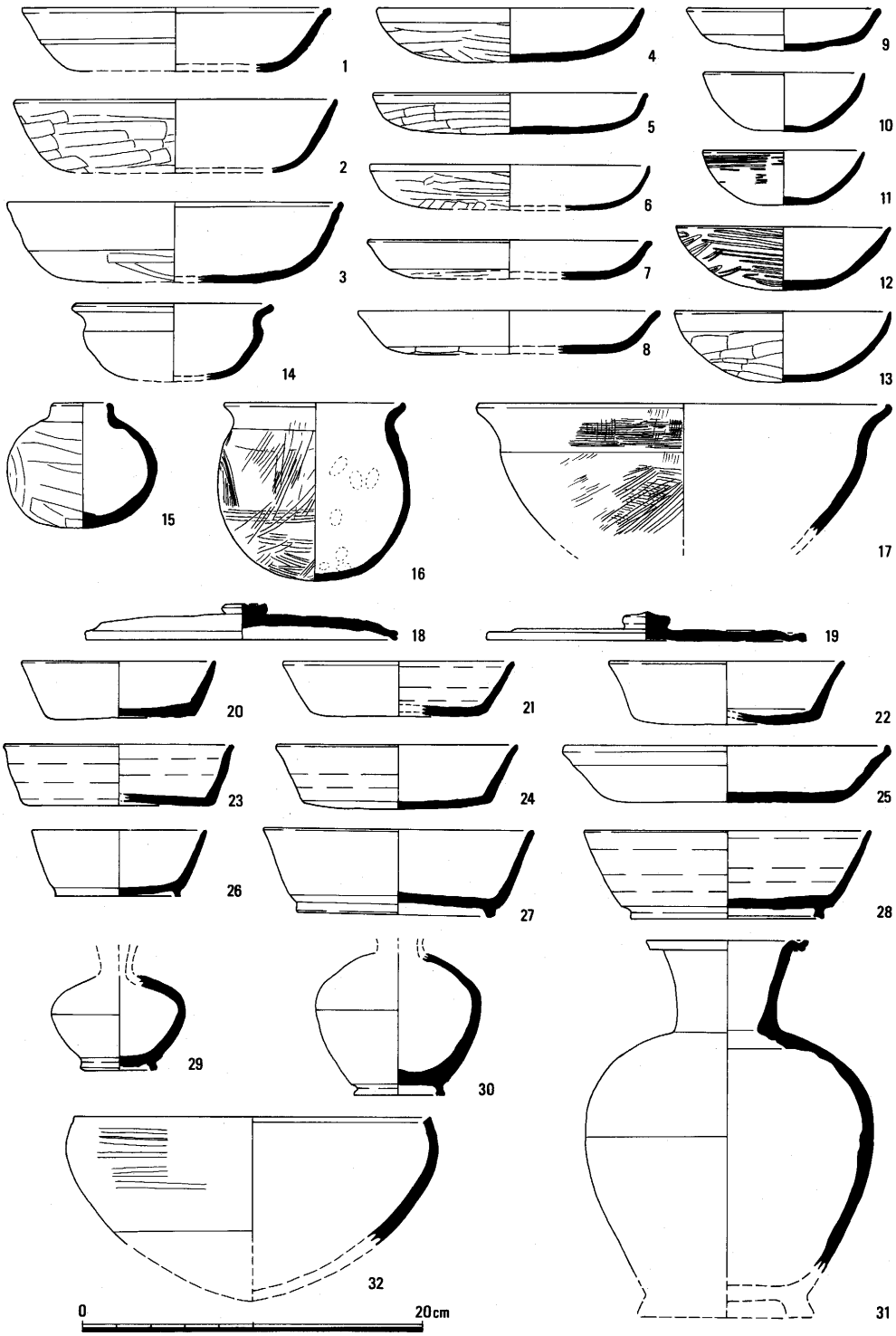


埋甕土坑SX805 平面・立面図（1/40）

軒丸瓦は19点出土した。軒丸瓦の内訳は6133型式Ａ種１点、6140型式Ａ種１点、6225型式Ｃ種１点、6275型式Ｂ種１点、6279型式Ｂ種２点、6281型式Ｂ種２点、6282型式Ba種１点、6285型式Ａ種２点、型式不明６点、平安時代以降２点である。軒平瓦は14点出土した。軒平瓦の内訳は6647型式Ｅ種１点、6663型式Ｃ種３点、6664型式Ｃ種１点、6664型式Ｆ種１点、6710型式Ｃ種４点、6732型式Ｑ種１点、型式不明２点、平安時代以降１点である。

（原田憲二郎）

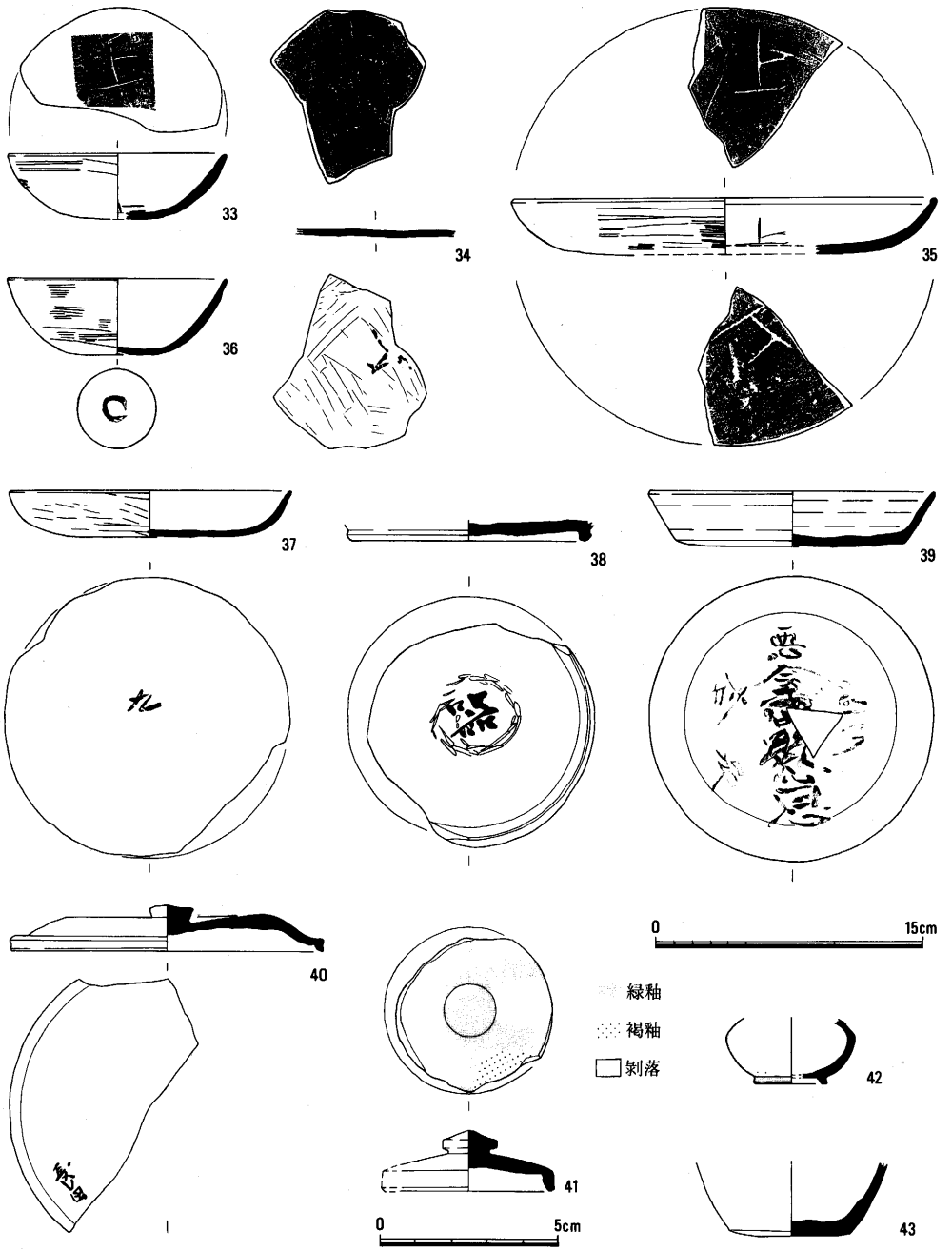
土器類　今回の六坪での３次の調査で出土した土器は遺物整理箱で約270箱分ある。ここではそれらの土器のうち、奈良時代と



ＳＥ519　出土土器（１／４）

平安時代の土器について概述する。

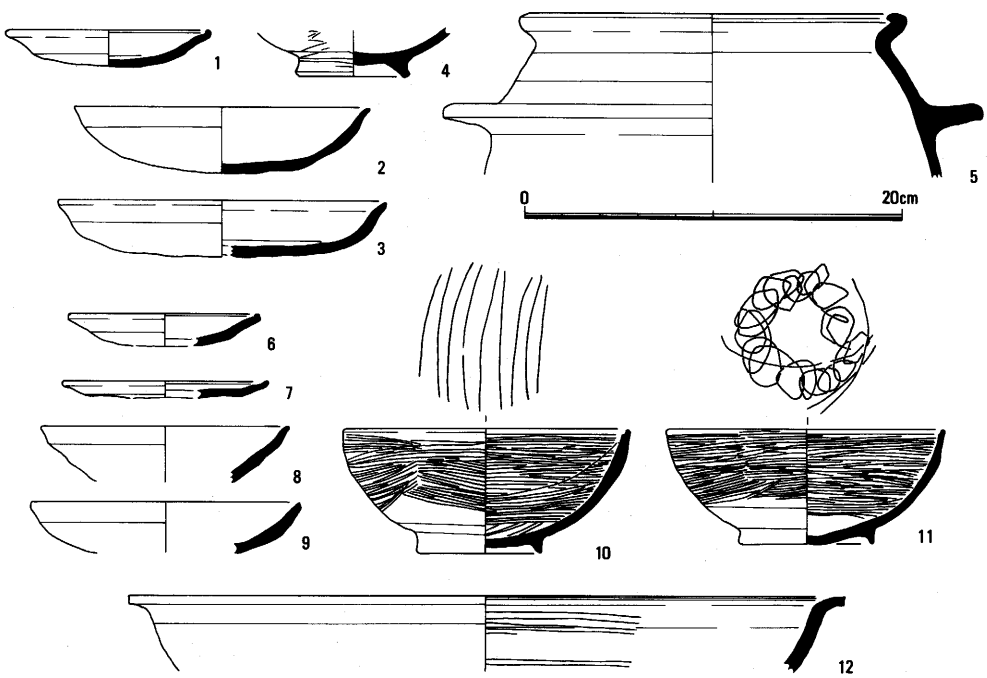
奈良時代の土器　1～40はＳＥ519から出土したものである。土師器（1～17・33～37）、須恵器（18～32・38～40）の他、図示できなかったが製塩土器も出土している。器種としては、土師器には杯Ａ（1～3）・杯Ｂ・皿Ａ（4～8・35・37）・皿Ｃ（9）・椀Ａ（10



ＳＥ519・524、ＳＸ804　出土土器（1／4・41のみ1／2）

～13・33・36）・高杯・壷B（14）・壷X（15）・甕A（16）・ 甕B・鉢（17）・盤・竈・甑がある。須恵器には杯蓋（18・19・40）・杯A（20～24・39）・杯B（26～28・38）・杯C（25）・皿A・皿C・高杯・壷A・壷A蓋・壷L（31）・壷M（29・30）・鉢A（32）・鉢F・盤・甕がある。これらの土器には墨書や線刻のあるものがあり、33～35の底部外面には「上」の墨書と線刻がある。36は記号と考えられる。37は「九」・38は「器」・39は底部外面中央に「悪含西殿思」と書かれ、左上が「□」左下が「殿」である。右側にも墨痕があるが文字かどうかは不明である。40は「長田」である。このＳＥ519出土土器の時期は奈良時代末と考えられる。41はＳＥ524から出土した奈良三彩のミニチュア壷Ａ蓋である。緑釉と褐釉がみられる。42・43は土器埋納土坑ＳＸ804から出土したもので、42が奈良三彩のミニチュア壷Ａ、43が須恵器壷Ｈである。42は釉が剥落した部分が多いが、緑釉と褐釉が施釉される。41は奈良時代末の土器と伴出したが、42・43は詳細な時期が特定できない。（池田裕英）

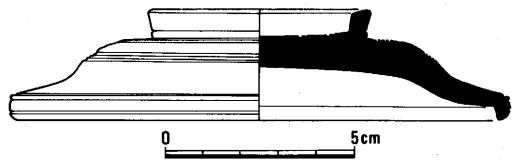
平安時代の土器　ＳＥ520とＳＥ522出土土器について記す。ＳＥ520からは、土師器皿（１～３）・羽釜（５）、黒色土器Ｂ類椀（４）が出土した。11世紀中頃のものと考えられる。ＳＥ522からは、土師器皿（６～９）、瓦器椀（10・11）、須恵器鉢（12）が出土した。瓦器椀の見込み部には、平行線状と粗雑な連結輪状の暗文がある。須恵器鉢は外面をロク



ＳＥ520・522　出土土器（１／４）

ロナデ、内面をハケメで調整する。焼成はやや軟質で、胎土は非常に精良である。11世紀後半のものと考えられる。（中島和彦）

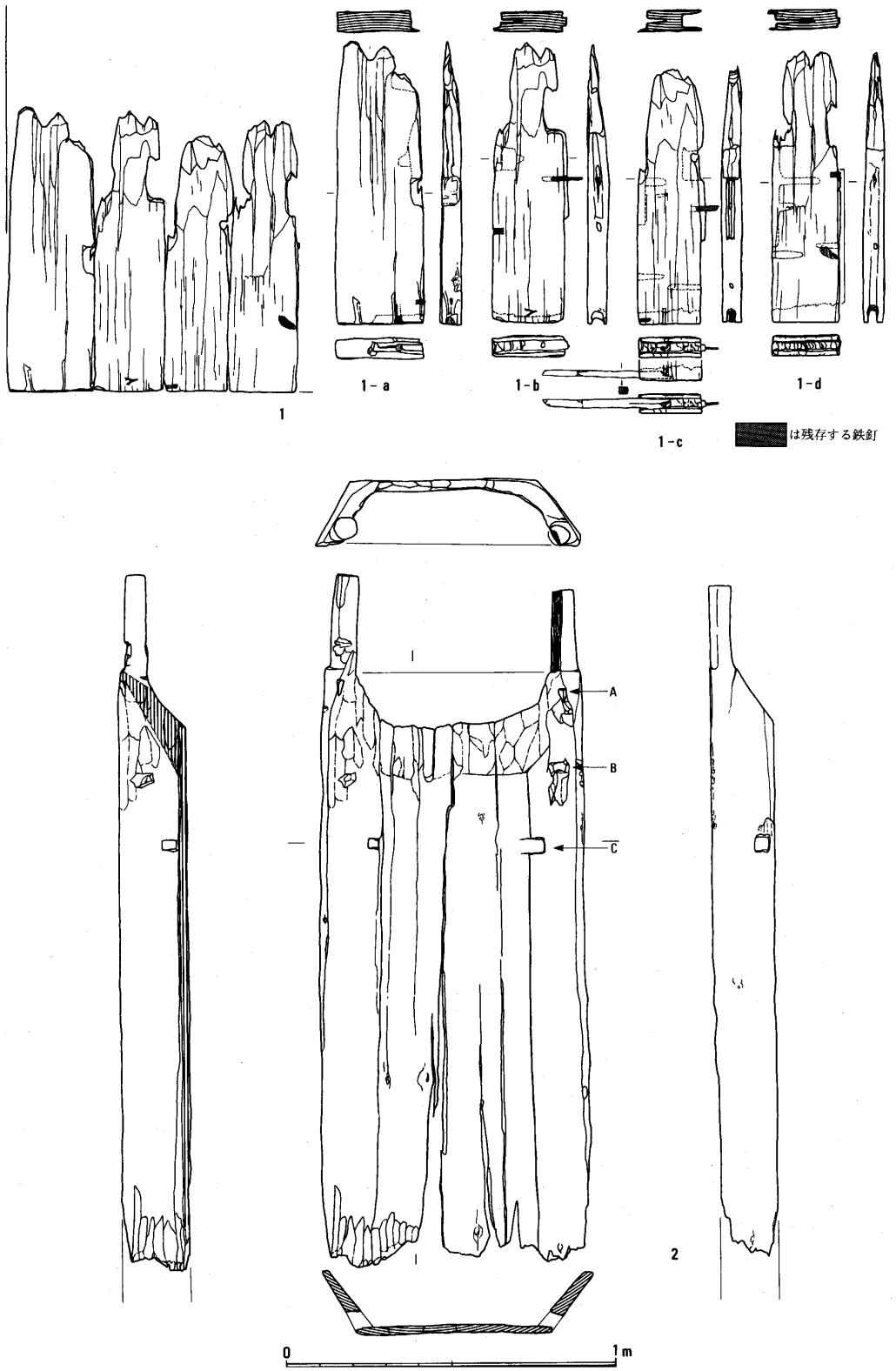
石製品　滑石製環状鈕付蓋がある。内外面ともに轆轤削りの痕跡が明瞭に残っている。頂部外面に2条単位で2重に沈線が巡り、頂部から縁部にかけての外面には4条単位で2重に、口縁部外面には3条の沈線が巡っている。沈線の断面はいずれもV字形である。口径12.6cm、鈕径5.9cm、器高2.95cm、鈕高0.8cm。遺物包含層から出土したため詳細な時期は不明である。



滑石製環状鈕付蓋（1／2）

木製品　奈良時代と平安時代の井戸・溝から出土し、そのほとんどが奈良時代の井戸からのものである。以下主なものについて概要を記す。

A井戸枠転用材　1は井戸枠に転用されていた扉材である。図のように4枚の板材が並んだ状態で奈良時代の井戸SE524の北面の縦板として使用されていた。各板材は上部が腐朽し、扉の全長・上下は不明である。これらの板材は本実矧ぎで接合し、さら合釘で繋いでいる。1－aと1－bは隣あって井戸枠になっていたが、両材の間では本実矧ぎがなく、合釘の穴のみが相対する位置に残っていた。本実矧ぎと合釘の他、隣同志であわない合釘穴・枘穴が存在することから井戸枠になる時点での扉以前に別の組合せで太枘結合する扉材であった可能性がある。また、これらの板の下端木口は端喰を埋め込み鉄釘で止め補強する構造になっており、1－a・1－cには端喰が填まったまま残存していた。1－aでは端喰を填める溝が貫通しておらず、扉の軸を切った痕跡もないので扉の召し合わせ側であったと思われる。木口に軸の痕跡をもつ材がないことから、本来はさらに1枚以上の材を接合していて、扉の幅は90cm以上に復元することができる。1－aは残存長85.1cm、幅25.8cm、厚さ5.8cm。1－bは残存長84.4cm、幅22.0cm、厚さ5.8cm。1－cは残存長77.0cm、幅20.1cm、厚さ5.9cm。1－dは残存長84.4cm、幅22.2cm、厚さ6.0cm。2は把手付槽である。把手のある側を下にして奈良時代の井戸SE529の南面の縦板に転用されていた。一木を半截し、内側を刳り貫き、短辺の両端に棒状の把手を造り出している。図の下部は腐朽し残存していないが、滋賀県の服部遺跡で田船として報告されている例[2)]からみて、反対側の短辺にも同様な把手がついていたと考えられる。把手に近い端部に釿で斫った痕跡があり、本来はこの位置に器壁があり、井戸枠として転用される際除去されたと考えられる。また、左右相対する位置に刳り込み・貫通孔がある。図のAは器壁の頂上部分に平面直角三角形に刳り込んでいる。Bは器壁内面の中央よりやや高い位置で、加工痕の状態が器壁を斫った釿の痕跡と同時期のものと思われ、井戸枠にする際に横桟を留めていたもの



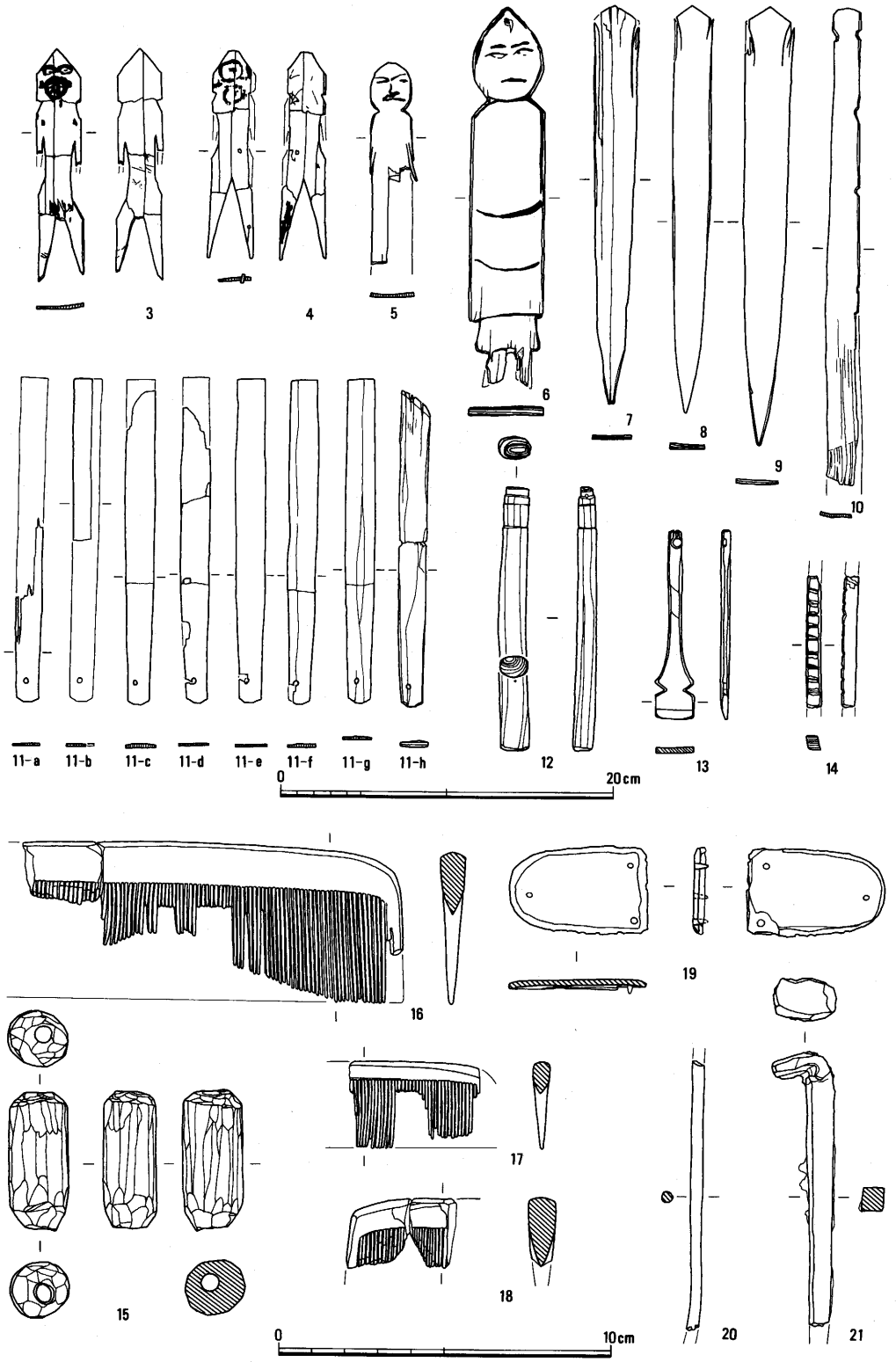
井戸枠転用扉板・槽（1／20）

と考えられる。Cは底面近くにある方形の貫通孔である。丁寧に加工されており、当初の槽を製作する段階であけられていたものと思われる。服部遺跡の例と同様に田船として機能していたと仮定するならば船を補強するための横桟を塡めた穴の可能性がある。残存長209.4cm、幅76.4cm、側面の厚さ5.0cm、底面の厚さ2.2cm。

B井戸出土遺物　3～6は人形である。いずれも墨書があり、3・5・6は顔が表現されている。4は顔の位置に◉が縦に2個描かれ、右脇腹の部分には木釘が打ち込まれている。3は長さ14.0cm、幅2.7cm、厚さ0.1cm。4は長さ12.4cm、幅2.2cm、厚さ0.2cm。5は残存長12.0cm、幅2.5cm、厚さ0.2cm。6は長さ22.5cm、幅4.4cm、厚さ0.5cm。3・4は須恵器壷Mに押し込められて出土した。7～10は斎串である。7～9はCⅢ型式、10はD型式である。7は長さ23.8cm、幅2.4cm、厚さ0.2cm。8は長さ24.4cm、幅2.2cm、厚さ0.3cm。9は長さ26.2cm、幅2.8cm、厚さ0.3cm。10は長さ28.5cm、幅2.0cm、厚さ0.2cm。11は檜扇である。骨が8枚出土した。綴目はなく、完形で残る骨の末に切込みがないため、要だけで綴じ合わせたのであろう。11－a～dは一部欠損しているが、11－e～gは完形で、長さは概ね19.4cm、幅1.8cm、厚さ0.2cmである。11－hは親骨で長さ19.0cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm。親骨だけ上方の片隅を斜めに切り、他のものより厚みがある。12は刀子の柄である。刀身は欠損し、茎が柄中に残る。柄元の木口周囲に銅製の「はばき」を装着している。柄の断面は楕円形で全面を丁寧に仕上げている。長さ15.7cm、幅1.6cm、厚さ1.2cm。13・14・15は用途不明品である。13は幅広の先端が斜めに切りおとされ片刃状になり、細くなる部分との境の両側にV字状の切欠きをいれている。形態は刷毛に似るが毛を埋める構造ではない。長さ11.3cm・幅1.6cm・厚さ1.2cm。14は両端が欠損しており全体は不明である。棒状の材に7～9mm間隔で刻み目をいれている。残存長7.8cm、幅0.9cm、厚さ0.8cm。15は形態は栓に似るが、円形の孔が貫通し栓の用途をなさないと思われる。16～18は横櫛である。いずれもAⅡ型式である。16は幅11.5cm、高さ4.6cm、厚さ0.8cm。17は幅3.9cm、高さ2.6cm、厚さ0.5cm。18は幅3.3cm、高さ2.1cm、厚さ0.8cm。3・4・7・8・9はSE529、5・15はSE515、6はSE525、10・11・16・17はSE524、12・13・14はSE519、18はSE522から出土した。18は平安時代でそれ以外は奈良時代のものである。

金属製品　19は帯金具の蛇尾の表金具である。裏面の3箇所に鋲足を鋳出している。長さ2.1cm、幅4.1cm、高さ0.4cm。20は均一の太さの棒状の銅製品である。上下が欠損しており全様は不明であるが、佐波理の箸の可能性がある。残存長8.0cm、直径0.35cm。21は鉄製の折頭釘である。頭部を直角よりやや鋭角に折り曲げている。断面はほぼ正方形である。残存長8.2cm、頭部幅1.2cm、同長さ1.8cm。19は奈良時代の井戸SE516、20は遺物包含層、21は奈良時代の井戸SE525から出土した。　（久保邦江）

注1）奈良国立文化財研究所「西隆寺発掘調査報告書」1993
2）滋賀県教育委員会・守山市教育委員会「服部遺跡発掘調査報告書V」1984



出土木製品・金属製品（1～14は1／4、15～21は1／2）

平城京右京二条三坊六坪から出土した土器に残存する脂肪の分析

帯広畜産大学生物資源化学科　　中野益男

㈱ズコーシャ総合科学研究所　　中野寛子、長田正宏

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力・水分などの物理的作用を受け崩壊してゆくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと[1)]、古代遺跡から出土した約２千年前のトウモロコシ種子[2)]、約５千年前のハーゼルナッツ種子[3)]に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した[4)]。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。その脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って、出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。

このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて平城京右京二条三坊六坪から出土した土器の性格を解明しようとした。

１．土壌試料

奈良県平城京右京二条三坊六坪から出土したＳＸ803の土器内の土壌試料を分析した。土器内での試料採取地点を図１に示す。試料№１は土器内の中央土、№２は外周土、№３は底土である。また、試料№３を採取した底土がある部分からは銭（神功開宝）２枚とガラス玉５個も出土している。

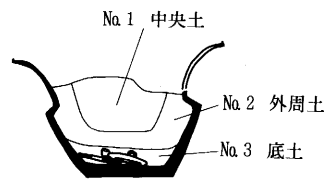


図１　土壌資料採取地点

２．残存脂肪の抽出

土壌試料31～189ｇに３倍量のクロロホルム－メタノール（２：１）混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム－メタノール

試料No.	試料名	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
1	土器内　中央土	188.8	8.2	0.0043
2	〃　外周土	177.5	10.5	0.0059
3	〃　底　土	31.0	18.3	0.0590

表1　試料の残存脂肪抽出量

混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1％塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表1に示す。抽出率は0.0043％～0.0590％、平均0.0231％であった。この値は全国各地の遺跡から出土した土壌、石器、土器等の試料の平均抽出率0.0010～0.0100％よりは高いものであったが、土器内の底土試料No.3のみが抽出率0.0590％と高いもので、他の試料No.1、No.2はこの平均抽出率の範囲内のものであった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール(トリグリセリド)、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

3．残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪の遊離脂肪酸とトリアシルグリセロールに5％メタノール性塩酸を加え、125℃封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルを含む画分をクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチル化してから、ヘキサン－エチルエーテル－酢酸（80：30：1）またはヘキサン－エーテル（85：15）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した[5]。

残存脂肪の脂肪酸組成を図2に示す。残存脂肪から10種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸（C16：0）、ステアリン酸（C18：0）、オレイン酸（C18：1）、リノール酸（C18：2）、アラキジン酸（C20：0）、エイコサモノエン酸（C20：1）、ベヘン酸（C22：0）、リグノセリン酸（C24：0）の8種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー－質量分析により同定した。

試料中での脂肪酸組成パターンを見てみると、すべての試料が谷状パターンを示していた。谷状の組成パターンは試料中に動物性脂肪が含まれている場合に見られる典型的なものである。

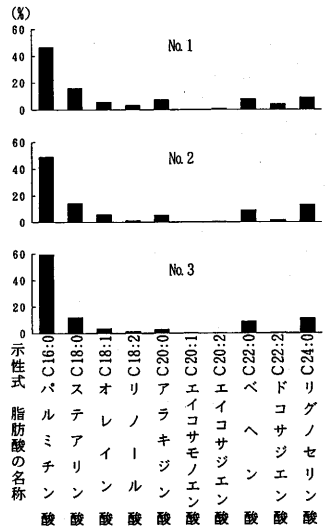


図2　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

このうち炭素数18までの中級脂肪酸の分布割合を見てみると、すべての試料中で主要な脂肪酸はパルミチン酸で、次いでステアリン酸、オレイン酸の順に多く分布していた。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸が生成するためで、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来ていると推定される。ステアリン酸は動物体脂肪や植物の根に比較的多く分布している。また、オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪では特に根、茎、種子に多く分布するが、動物脂肪の方が分布割合は高い。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

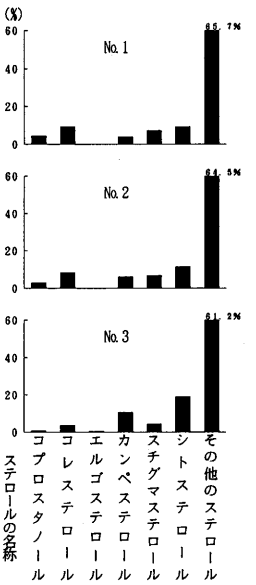


図3 試料中に残存する脂肪のステロール組成

一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸はそれら3つの合計含有率がすべての試料中で約23～27%であった。通常の遺跡出土土壌中でのアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸の高級脂肪酸3つの含有率は約4～10%であるから、試料中での高級脂肪酸含有量は多い。高級脂肪酸含有量が多い場合としては、試料中に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分が含まれている場合と、植物の種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスの構成分として含まれている場合とがある。

以上、平城京右京二条三坊六坪のすべての試料は動物性脂肪が含まれている場合に典型的な谷状のパターンを示し、主要な脂肪酸はパルミチン酸で高級脂肪酸も多く含まれているこがわかった。

4．残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサン－エチルエーテル－酢酸（80：30：1）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン－無水酢酸（1：1）を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてから、もう一度同じ展開溶媒で精製し、ガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図3に示す。残存脂肪から16～19種類のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど8種類のステロールをガスクロマトグラフィー－質量分析により同定した。

試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは試料No.1とNo.2に約8～9%、No.3に約4%分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは2～6%分布している。従って、試料No.1・No.2でのコレステロール含有量は若干多く、No.3でのそれは通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール／シトステロール
1	9.43	9.25	1.02
2	8.39	11.37	0.74
3	3.77	18.99	0.20

表2　試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合

植物由来のシトステロールはすべての試料中に約9～19%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはシトステロールは30～40%、もしくはそれ以上に分布している。従って、試料中でのシトステロール含有量は少なめであった。

クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンペステロール、スチグマステロールは、カンペステロールが約4～11%、スチグマステロールが約4～7%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはカンペステロール、スチグマステロールは1～10%分布している。従って、試料中に含まれているカンペステロール、スチグマステロールは通常の遺跡出土土壌並みであった。

微生物由来のエルゴステロールは試料No.1とNo.2では検出されず、No.3に若干分布していた。これは土壌微生物の存在による結果と思われる。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは、試料No.1、No.2に約3～4%、No.3に約1%分布していた。通常コプロスタノールが10%以上含まれていると、試料中に残存している脂肪の動物種や性別、また遺体の配置状況などが特定できる場合がある[6]。今回は含まれていても5%以下の量であるため、それらの判定はできなかった。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壙で0.6以上[7]、土器・石器・石製品で0.8～23.5をとる[8・9]。試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を表2に示す。表からわかるように、分布比試料No.1が1.02、No.2が0.74で0.6以上、No.3が0.20で0.6以下であった。このことは試料No.1、No.2に動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存しており、No.2には残存していないことを示唆している。

以上、平城京右京二条三坊六坪の試料中に含まれている各種ステロール類はすべて少なめであったが、その中でも土器内中央土試料No.1と外周土試料No.2は底土試料No.3に比べほぼ同一の傾向を示し、コプロスタノール、コレステロール、スチグマステロールはNo.1とNo.2が多めで、カンペステロールとシトステロールはNo.3の方が多めであることがわかった。コレステロールとシトステロールの分布比も試料No.1とNo.2は0.6以上を示し、No.3は0.6以下で、No.1・No.2には動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存し、No.3には残存していないことを示唆していた。

5．脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料間の類似度を調べた。同時に出土土器に残存する脂肪が胞衣壺に残存する脂肪と類似していると判定した奈良県平城京左京（外京）五条五坊十坪[10]、

平城京右京三条二坊十五坪[11]、平城京右京三条二坊十六坪[12]、平城京右京三条三坊三坪[13]、平城京左京五条一坊十三坪[14]、平城京左京三条一坊十四坪[15]、平城京右京二条二坊[16]、西隆寺跡[17]、京都府長岡京右京五条二坊十五町[18]、岡山県津寺遺跡[19]、ヒトの胎盤、出土土壙を土壙墓と判定した兵庫県寺田遺跡[20]、出土土器を幼児埋葬用甕棺と判定した静岡県原川遺跡[21]、ヒトの体脂肪、出土土壙を再葬墓と判定した宮城県摺萩遺跡[22]、ヒトの骨油、ニワトリ、ブタの油の付着状況を調べた解体用石器、イノシシ、ニホンジカのような動物、モズ、ツグミのような野鳥、野生クリ、野生クルミのような植物試料など、これまでに集積された遺跡試料および現生試料の脂肪酸の類似度とも比較した。予めデータベースの脂肪酸組成と試料中のそれとでクラスター分析を行い、その中から類似度の高い試料を選び出し、再びクラスター分析によりパターン間距離にして表したのが図４である。

図からわかるように、平城京右京二条三坊六坪の試料はすべて平城京右京三条二坊十五坪、平城京右京三条三坊三坪、平城京左京五条一坊十三坪、平城京左京三条二坊十六坪、長岡京右京五条二坊十五町、津寺遺跡、原川遺跡、寺田遺跡の試料やイノシシ、ニホンジカ試料と共に相関行列距離0.1以内でＡ群を形成した。他の対照試料はＢ～Ｈ群を形成した。これらの群のうち胞衣壺と推測された土器が出土した遺跡の試料、ヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料、モズ、ツグミのような野鳥試料が形成するＢ～Ｆ群はＡ群とは相関行列距離約0.2以内の所にあり、類似していた。他のヒトの骨のみを埋葬したことに関わる遺跡の試料やニワトリ、ブタ、野生クリ、クルミ試料が形成するＧ、Ｈ群はＡ～Ｆ群とは相関行列距離で0.4以上離れており、類似していなかった。

以上、平城京右京二条三坊六坪のすべての試料中に残存する脂肪はヒトの胎盤を埋納した胞衣壺と推測されている試料、ヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料、イノシシ、ニホンジカ、

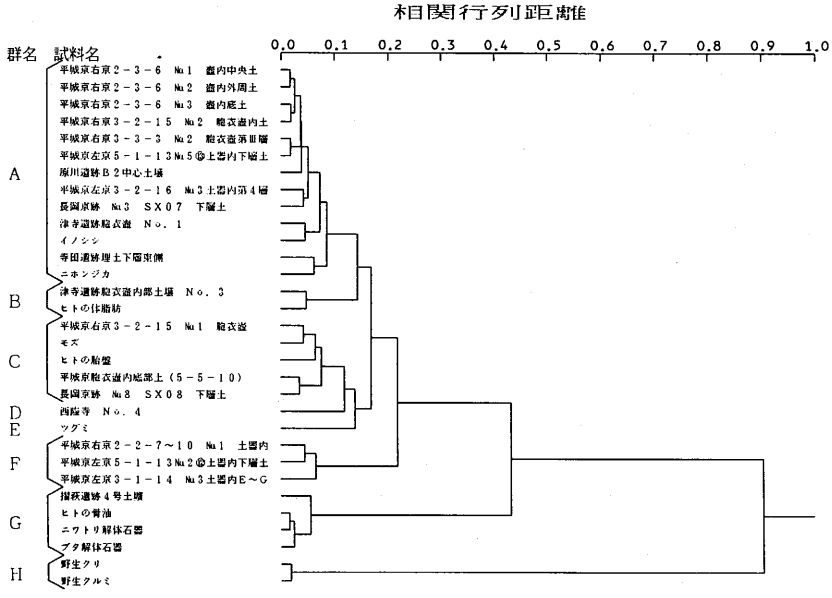


図４　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

モズ、ツグミのような動物試料に残存する脂肪と類似していることがわかった。

6．脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をＸ軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をＹ軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第１象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第１象限から第２象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第２象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第２象限から第３象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第３象限から第４象限に移る原点から離れた位置に海産動物に由来する脂肪が分布する。

土壌試料の残存脂肪から求めた相関図を図５に示す。図からわかるように、すべての試料が第１象限から第２象限にかけてのＹ軸に沿った位置に分布した。この分布位置は試料中に残存している脂肪がヒト胎盤に由来することを示唆している。先の数理解析でも試料中に残存する脂肪が胞衣壺試料に残存する脂肪と類似していたが、ステロール分析では外部からの流入土と推測されている試料№１・№２よりも底土試料№３の方がコレステロール含有量が少ないことを考えると、ヒト胎盤由来のものとは考えにくい。

7．総括

平城京右京二条三坊六坪から出土したＳＸ803の土器の性格を判定するために、土器内の土壌試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪酸分析の結果、試料は動物性脂肪が含まれている場合に見られる典型的な谷状の組成パターンを示し、主要な脂肪酸はパルミチン酸で高級脂肪酸も多く含まれていることがわかった。

脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果、クラスター分析からは、土器内試料中に残存している脂肪はヒト胎盤を埋納したことに関わる試料やヒト遺体を直接埋葬したことに関わる試料、イノシシ、ニホンジカ、モズ、ツグミのような動物試料中に残存する脂肪と類似していることがわかった。種特異性相関

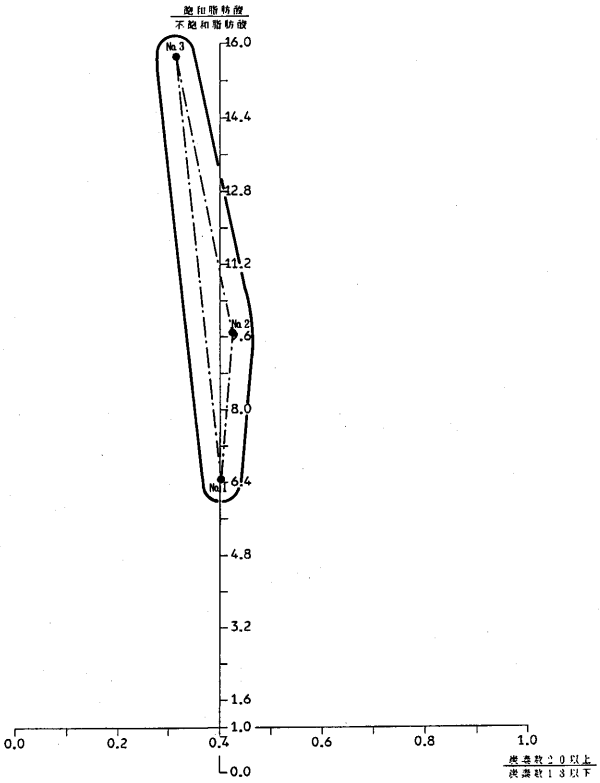


図５　試料中に残存する脂肪酸組成による種特異性相関

からは、試料中に残存している脂肪がヒト胎盤に由来することがわかった。

残存するステロール分析の結果、試料中に含まれている各種ステロール類はすべて少なめで、コレステロールが後から流入したと考えられる土器内中央土試料№1、外周土試料№2に若干多いのみで、通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土中に含まれているよりも特徴的に多く含まれているステロール類はなかった。特に、動物由来のステロールとして特徴的なコプロスタノール、コレステロールは土器の性格を示すはずの底土試料№3に最も少なく、試料中に動物由来の脂肪が少ないことを示していた。また、コレステロールとシトステロールの分布比も試料№1と№2は0.6以上を示したが、№3は0.6以下で、同様に動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存していないことを示していた。この結果は脂肪酸分析やその分析に基づく数理解析の結果と一致しない。

以上の成績から、平城京右京二条三坊六坪から出土したＳＸ803の土器に残存している脂肪は、脂肪酸の分析と解析ではヒト胎盤を埋納したことに関わる試料やヒト遺体を直接埋葬したことに関わる試料、またイノシシ、ニホンジカ、モズ、ツグミのような動物試料に残存している脂肪と類似していたが、ステロール分析では動物性脂肪由来のコレステロールが土器の性格を示しているはずの土器内底土試料に量も少なく、後から流入したと考えられる土器内中央土、外周土試料にやや多いのみで、土器に動物性脂肪が残存していたとは考えにくい。従って、今回はこの土器に残存している脂肪を特定することができなかった。より正確な判定には、土器そのものを分析したり、動物種特有の抗原抗体反応を用いた免疫試験を行ってみる必要がある。

参考文献

(1) R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle「Food identification of samples from archaeological sites」『Archaeo Physika』10巻 1979

(2) D.A.Priestley, W.C.Galinat and A.C.Leopold「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」『Nature』292巻 1981

(3) R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle「Analyse frühgeschichtlicher Gefäβinhalte」『Naturwissenschaften』70巻 1983

(4) 中野益男「残存脂肪分析の現状」『歴史公論』第10巻（6）1984

(5) M.Nakano and W.Fischer「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021」『Hoppe-Seyler's Z.Physiol.Chem』358巻 1977

(6) 中野益男「残留脂肪酸による古代復元」『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』田中　琢、佐原　眞編、クバプロ、1995

(7) 中野益男、伊賀　啓、根岸　孝、安本教傳、畑　宏明、矢吹俊男、佐原　眞、田中　琢「古代遺跡に残存する脂質の分析」『脂質生化学研究』第26巻 1984

(8) 中野益男「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」『真脇遺跡－農村基盤総合設備事業能都東地区真脇

工区に係わる発掘調査報告書』能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団 1986

(9) 中野益男、根岸　孝、長田正宏、福島道広、中野寛子「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」『ヘロカルウス遺跡』北海道文化財研究所調査報告書 第3集 1987

(10) 中野益男、中岡利泰、福島道広、中野寛子、長田正宏「平城京左京（外京）五条五坊十坪から出土した胞衣壺の残存脂質について」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書昭和63年度』1989

(11) 中野益男、中野寛子、明瀬雅子「平城京右京三条二坊十五坪から出土した土器に残存する脂肪の分析」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成3年度』1992

(12) 中野益男、中野寛子、明瀬雅子、長田正宏「平城京左京三条二坊十六坪から出土した土器に残存する脂肪の分析」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成4年度』1993

(13) 中野益男、中野寛子、明瀬雅子、長田正宏「平城京右京三条三坊三坪から出土した土器に残存する脂肪の分析」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成4年度』1994

(14) 中野益男、中野寛子、明瀬雅子、長田正宏「平城京左京五条一坊十三坪から出土した土器に残存する脂肪の分析」（未発表）奈良市教育委員会

(15) 中野益男、中野寛子、菅原利佳、長田正宏「平城京左京三条一坊十四坪から出土した土器に残存する脂肪の分析」『平城京左京三条一坊十四坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所 1995

(16) 中野益男、中野寛子、長田正宏「平城京右京二条二坊から出土した土器に残存する脂肪の分析」（未発表）奈良県立橿原考古学研究所

(17) 中野益男、福島道広、中野寛子、明瀬雅子、長田正宏「西隆寺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」『西隆寺発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所 1993

(18) 中野益男、中野寛子、明瀬雅子、長田正宏「長岡京右京五条二坊十五町から出土した土師器甕に残存する脂肪の分析」『未発表』（財）長岡京市埋蔵文化財センター

(19) 中野寛子、明瀬雅子、長田正宏、中野益男、福島道広「津寺遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」（未発表）岡山県古代吉備文化財センター

(20) 中野益男、中野寛子、福島道広、長田正宏「寺田遺跡土壙墓状遺構に残存する脂肪の分析」（未発表）兵庫県芦屋市教育委員会

(21) 中野益男、幅口　剛、福島道広、中野寛子、長田正宏「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」『原川遺跡Ⅰ　昭和62年度袋井バイパス（掛川地区）埋蔵文化財発掘調査報告書』第17集　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988

(22) 中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏「摺萩遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」『未発表』宮城県教育委員会

(3) 平城京右京二条三坊七坪の調査　第326次

Ⅰ　はじめに

右京二条三坊七坪での調査は今回が初めてである。発掘区は七坪の南辺にあたる。調査は、二条条間路とその北側溝の検出、坪内の遺構の様相の把握を目的として実施した。

Ⅱ　検出遺構

発掘区は西から東に向かってなだらかに下降する低丘陵上にある。発掘区内の基本層序は厚さ0.3mの盛土（発掘区東部のみに堆積）以下、灰黒色土（耕土）、灰白色砂質土（床土）、灰褐色砂質土と続き、地表面から0.3～0.6mで灰褐色砂、あるいは黄灰褐色砂質土の地山に至る。この地山上面（標高70.5～71.5m）で、奈良・平安時代の遺構を検出した。

検出した遺構は二条条間路と同北側溝、坪南辺の築地とその雨落溝、掘立柱建物32棟、掘立柱塀４条、井戸９基、土坑７基である。以下、主なものについて記す。なお、掘立柱建物、掘立柱塀、井戸の概要は一覧表にまとめた。

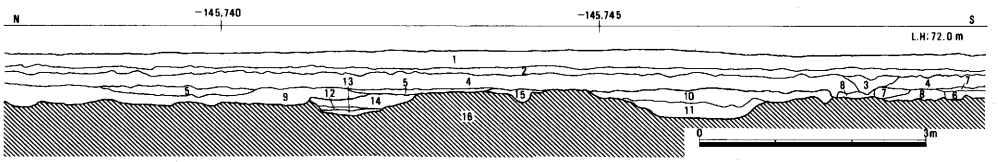
ＳＦ0607　二条条間路である。後述する北側溝南肩から路面幅11m分を検出した。発掘区の南側の調査地で二条条間路南側溝を確認しており（平城京第286次第１発掘区）、二条条間路の幅員は、側溝心々間で14.0mある。

ＳＤ101　二条条間路北側溝である。幅1.4～2.8m、検出面からの深さ0.2～0.6m、長さ約60m分を検出した。溝底は西から東に向かって下り勾配である。溝内埋土は下から順に東端で青灰褐色砂質土、青灰褐色土、西端で暗灰紫色土、暗茶灰色土である。溝内から奈良時代後半の土器が出土した。溝心の国土座標はX＝－145,746.000、Y＝－19,870.000である。

ＳＡ201　北側溝北肩と後述するＳＤ105南肩との間が幅約3.0mあり、築地の添柱痕跡などは残っていないが、ここに築地塀があったものと考えられる。

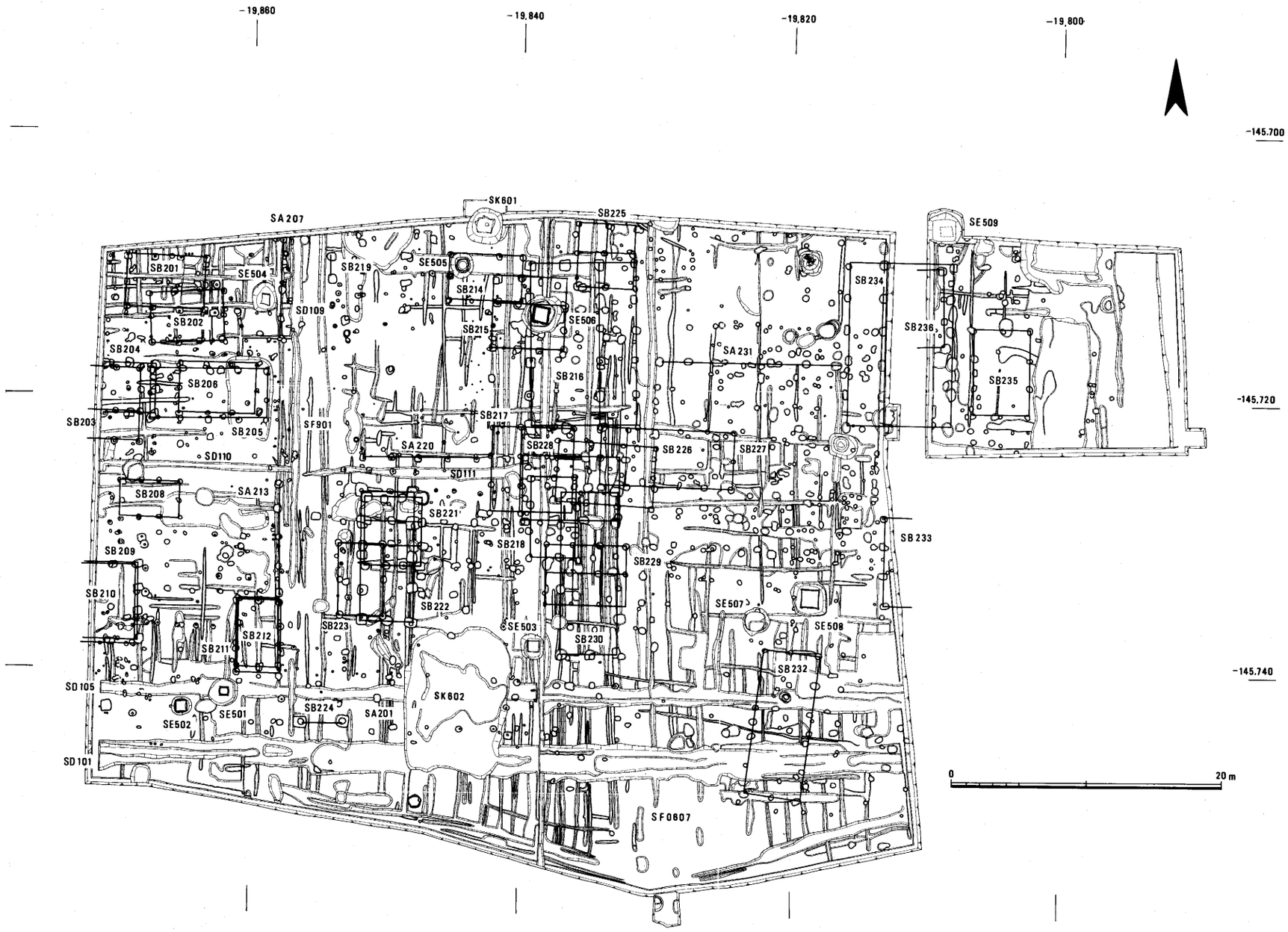
ＳＢ224　築地塀に開く門である。東西１間の掘立柱の門で、柱間は3.0mである。坪南辺のほぼ中央に位置する。

ＳＤ105　築地塀ＳＡ201の雨落溝である。幅1.0～2.0m、検出面からの深さ0.1～0.3m、



1　灰黒色土（耕土）
2　灰白色砂質土
3　褐灰色砂質土
4　灰褐色砂質土
5　紫灰褐色砂質土
6　明灰色砂質土
7　暗灰褐色砂質土
8　紫灰褐色シルト
9　紫灰色砂質土
10　青灰褐色砂質土
11　青灰色砂質土
含青灰褐色砂質土
（10～11・ＳＤ101埋土）
12　灰色砂
13　灰色砂、含灰色砂シルト塊
14　紫灰色土、含灰色砂
（12～14・ＳＤ105埋土）
15　紫褐色土
含灰色砂
16　黄灰褐色砂質土

二条条間路北側溝ＳＤ101・雨落溝ＳＤ105土層図（１／100）



第326次調査第１発掘区　遺構平面図（１／400）

長さ約60m分を検出した。溝底は西から東に向かって下り勾配である。溝内埋土は上層が紫灰色土、下層が灰色砂、最下層は灰色砂に黄色シルト塊が混じる。溝内から奈良時代後半の土器が出土した。溝心の国土座標は、X＝－145,741.800、Y＝－19,870.000である。

ＳＦ901　門ＳＢ224から発掘区北端まで続く坪内道路と考えられる。路面幅は、約2.0mで、路面上では建物などの遺構は検出できなかった。

ＳＤ109　坪を東西に２等分する区画溝である。幅0.6～1.0m、検出面からの深さ0.1～0.3m、長さ26.0m分を検出した。坪内道路ＳＦ901の西側溝を兼ねていると思われる。

ＳＤ110・111　ＳＤ109に取り付く東西方向の素掘りの溝で幅0.5～1.0m、検出面からの深さ0.1～0.2m。雨落溝ＳＤ105溝心から16.4mの位置にある。発掘区中央で途切れるが、東側では削平されている可能性がある。坪内を南北に分ける宅地割の溝と考えられる。

ＳＫ601　東西2.6m、南北2.7mの平面不整円形土坑で、検出面からの深さ約1.2mである。掘形は２段掘りされ、検出面からの深さ約0.6mで、東西1.2m、南北1.0mの平面方形の掘形となる。下段には下から順に明灰色粗砂、灰黒色粘土が堆積する。下段の底から約

遺構番号	棟方向	規模（桁行×梁間）	桁行全長 m（尺）	梁間全長 m（尺）	桁行柱間寸法（m）	梁間柱間寸法（m）	廂の出（m）	備考
ＳＢ201	東西	３×２	6.0（20）	3.9（13）	2.1-1.8-2.1	2.1-1.8		
ＳＢ202	東西	３×２	5.4（18）	3.9（13）	1.8等間	1.8-2.1		
ＳＢ203	東西	１以上×３	1.8(６)以上	5.4（18）	1.8	1.5-1.8	2.1	南廂付
ＳＢ204	東西	２×２	3.9（13）	3.6（12）	1.8-2.1	1.8等間		
ＳＢ205	東西	４×２	8.7（29）	3.6（12）	2.4-1.8-2.1-2.4	1.8等間		
ＳＢ206	東西	３×２	5.7（19）	3.6（12）	1.8-1.8-2.1	1.8等間		
ＳＡ207	南北	４以上	7.5(25)以上		1.8-1.8-2.4-1.5			
ＳＢ209	南北	３×１以上	5.7（19）	2.1(７)以上	2.1-1.5-2.1	2.1		
ＳＢ210	南北	３×１以上	5.7（19）	1.8(６)以上	1.8-1.8-2.1	1.8		ＳＢ209より古い
ＳＢ211	南北	３×２	5.1（17）	3.0（10）	1.8-1.5-1.8	1.5等間		
ＳＢ212	南北	３×２	5.4（18）	3.3（11）	1.8等間	1.5-1.8		
ＳＡ213	南北	４	8.1（27）		1.8-2.1-2.1-2.1			
ＳＢ214	南北	３×２	5.4（18）	3.6（12）	1.5-2.1-1.8	1.8等間		
ＳＢ215	東西	３×３	5.4（18）	5.4（18）	1.8-1.8-2.1	1.8-1.5	2.4	北廂付　ＳＢ214より古い
ＳＢ216	南北	５×３	12（40）	7.8（26）	2.4等間	2.7-2.4	2.7	東廂付
ＳＢ217	南北	３×３	6.3（21）	6.0（20）	2.1等間	2.1-1.8	2.1	西廂付
ＳＢ218	南北	３×２	6.0（20）	3.3（11）	2.1-1.8-2.1	1.8-1.5		
ＳＢ219	南北	１	1.8（６）					門？
ＳＡ220	南北	４	8.4（28）		2.1等間			
ＳＢ221	南北	３×３	5.1（17）	4.2（14）	1.8-1.8-1.5	1.5-2.1-1.5		間仕切りあり
ＳＢ222	南北	４×２	9.6（32）	3.9（13）	2.4等間	2.1-1.8		ＳＢ221より古い
ＳＢ223	南北	２×１以上	5.4（18）	3.3（11）	2.7等間	3.3		
ＳＢ224	東西	１	3.0（10）					門　礎板あり
ＳＢ225	南北	２×２	4.8（16）	4.2（14）	2.1-2.7	2.1等間		総柱建物
ＳＢ226	東西	３×２	7.2（24）	4.5（15）	2.4等間	2.1-2.4		
ＳＢ227	東西	５×２	9.9（33）	4.2（14）	2.1-2.1-1.8-1.8	2.1等間	2.1	西廂付　ＳＢ228・230より古い
ＳＢ228	東西	３×２	7.2（24）	4.8（16）	2.4等間	2.4等間		ＳＢ230より古い
ＳＢ229	東西	３×２	6.0（20）	4.5（15）	2.1-1.8-2.1	2.1-2.4		総柱建物
ＳＢ230	南北	５×２	12（40）	4.2（14）	2.4等間	2.1等間		
ＳＡ231	東西	６	13.2（44）		2.1-2.1-1.8-2.7-2.1-2.4			
ＳＢ232	南北	５×２	10.8（36）	4.2（14）	2.1-2.4-2.1-4.2	2.1等間		
ＳＢ233	南北	３×？	6.6（22）		2.1-2.1-2.4			
ＳＢ234	南北	５×３	12（40）	7.8（26）	2.4等間		2.7	西廂付　ＳＢ216と柱筋がそろう
ＳＢ235	南北	３×２	6.3（21）	4.2（14）	2.1等間	2.1等間		
ＳＢ236	南北	３×？	5.7（19）		2.1-1.5-2.1			

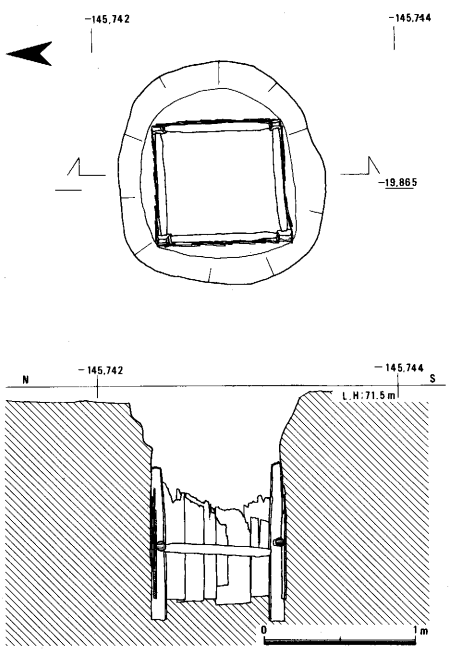
掘立柱建物一覧表

0.3mの位置で土師器甕Cが、倒立状態で出土した。上段の埋土は茶褐色砂質土で、下段の埋土との境から奈良時代前半の土器がまとまって出土した。掘形は湧水層まで達しているが井戸枠が残存せず、抜取りの痕跡も見られないので、井戸になるかどうかは不明である。

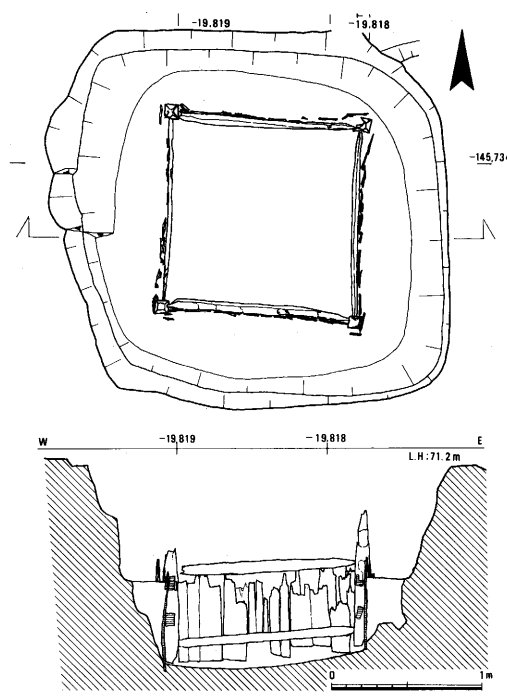
ＳＫ602　東西7.5m、南北10.0mの平面隅丸方形で、検出面からの深さ0.4mの土坑であ

遺構番号	掘形			枠			主要出土遺物	備考
	平面形	平面規模(m)	深さ(m)	平面形・構造	内法(m)	水溜・濾過装置等		
ＳＥ501	不整円形	東西2.1 南北2.0	1.1	方形縦板組？		方形板組水留めの下に楕円形曲物(長径0.66m短径0.5m)	和銅開珎	側板はすべて崩れている
ＳＥ502	楕円形	東西1.46 南北1.35	1.3	方形縦板組 隅柱横桟留め	0.8 × 0.8		和銅開珎	
ＳＥ503	不整円形	東西1.6 南北1.9	0.9	抜きとられていて不明		方形板組水留		方形板組だけ残存
ＳＥ504	楕円形	東西1.8 南北2.2	1.3	方形縦板組	0.6 × 0.75			
ＳＥ505	楕円形	東西1.65 南北2.2	2.1	抜きとられていて不明		曲物 （直径0.59m）	管玉	曲物のみ残存
ＳＥ506	不整円形	東西2.9 南北2.6	3.2	方形縦板組 隅柱横桟留め	1.05 × 1.05	方形横板組 （３段）	瓦器小皿、井戸枠部材	
ＳＥ507	円形	東西2.0 南北2.0	0.96	抜きとられていて不明				
ＳＥ508	隅丸方形	東西2.55 南北2.5	1.35	方形縦板組 隅柱横桟留め	1.2 × 1.2			
ＳＥ509	不整円形	東西2.4 南北2.3	1.0	抜きとられていて不明		礫敷		

井戸一覧表



井戸ＳＥ502平面・立面図（１／50）



井戸ＳＥ508平面・立面図（１／50）

る。二条条間路北側溝（ＳＤ101）と雨落溝（ＳＤ105）が埋没した後に掘られている。土坑内の埋土から11世紀後半の土師器、瓦器が出土した。（細川富貴子）

Ⅲ　出土遺物

瓦　類　軒丸瓦（７型式８種11点）、軒平瓦（７型式11種15点）、鬼瓦（２型式２種３点）がある。型式・種類・（点数）の内訳は下記の通りである。

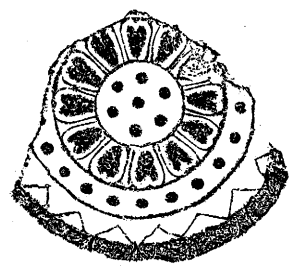
軒丸瓦　6131種別不明（1）、6279Ａ（1）、6304Ｃ（1）、6308Ａａ（1）・Ｂ（1）
6311Ａ（1）、新型式（1）、法隆寺37Ｅ（1）、型式不明（3）

軒平瓦　6641Ｅ（1）・Ｆ（1）、6664Ｃ（1）・Ｄ（1）・Ｈ（2）、6671Ｋ（1）、6691Ａ（1）、6710Ｃ（2）、6732Ｆ（1）・Ｑ（1）、6801Ａ（1）、型式不明（2）

鬼　瓦　平城宮Ⅲ式（1）、南都七大寺Ⅳ式Ｂ（2）

軒丸瓦新型式は単弁12弁蓮華文で、外区内縁に珠文、外縁に線鋸歯文がめぐる。弁端に切込みがはいるのが特徴的である。法隆寺37Ｅは、いわゆる「法隆寺式」の複弁８弁蓮華文瓦で、法輪寺所用品と同笵である。東隣の右京二条三坊二坪（平城京第283次）でも同笵瓦１点が出土しており、京内では今回二例目である。なぜこの地域から出土するのか興味深い。鬼瓦は、平城宮式のものが菅原遺跡出土例と同笵、南都七大寺Ⅳ式Ｂは大安寺所用品と同笵である。

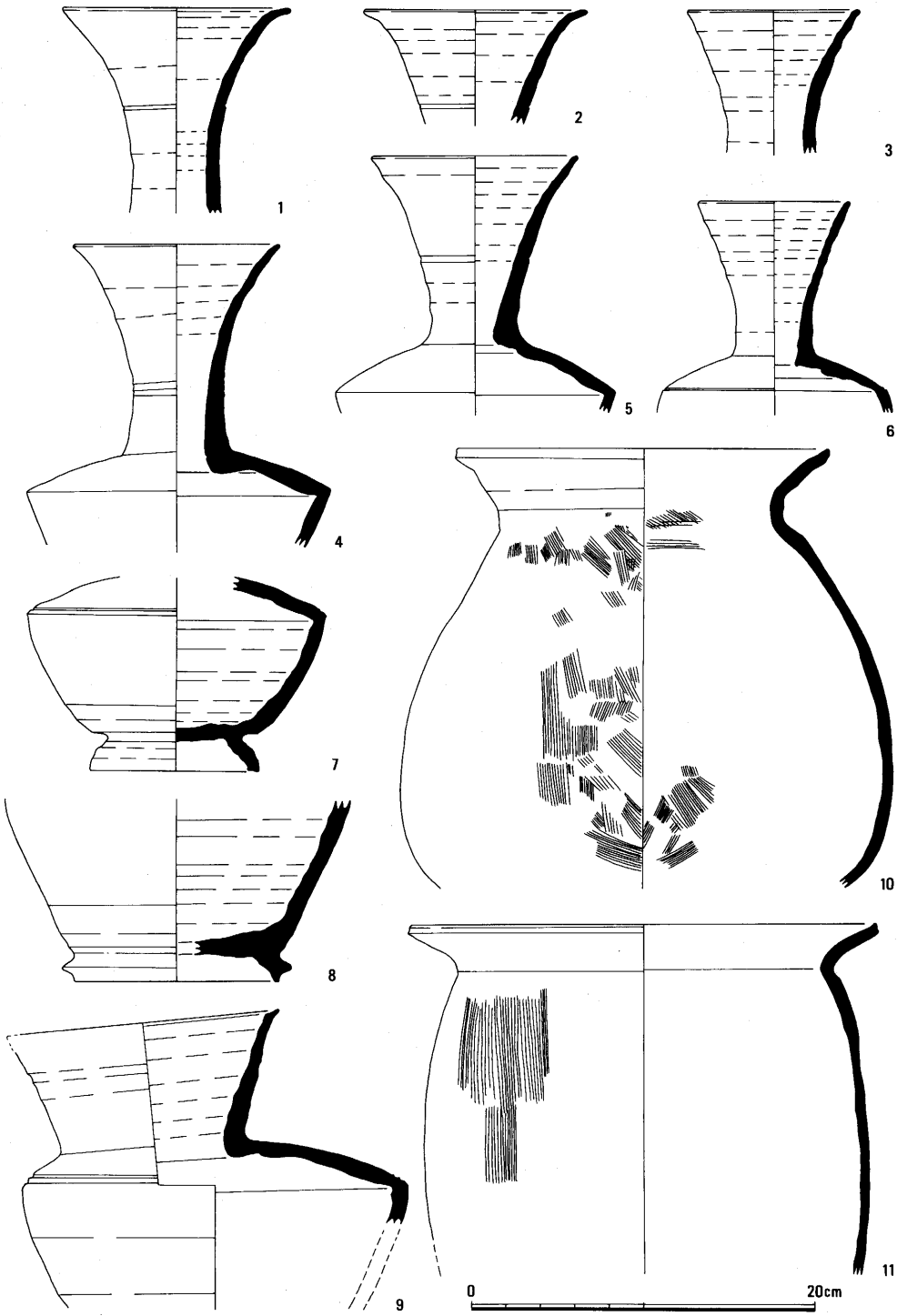
なお、遺構から出土したものは次の通りである。6641Ｅ・6664Ｈ（ＳＤ101）、6664Ｄ（ＳＤ105）、6664Ｈ（ＳＥ501）6308Ｂ（ＳＥ505）、6279Ａ・6304Ｃ・6641Ｆ・鬼瓦平城宮Ⅲ式・鬼瓦南都七大寺Ⅳ式Ｂ）（ＳＫ602）（中井　公）


新型式軒丸瓦（１／４）

土器類　図示した土器はＳＫ601から出土したものである。須恵器壷類（１～８）のうち、２・３・５・７の内面や破断面には漆が付着しており、漆容器の可能性がある。奈良時代前半のものと考えられる。（池田裕英）

その他の遺物　木製品・金属製品・銭貨・石器・石製品・ガラス製品がある。以下、主な遺物について記述する。木製品は奈良～平安時代の井戸ＳＥ501・508から曲物底板が各１点、平安時代の井戸ＳＥ506からは曲物底板４点・蓋板１点が出土した。金属製品は佐波理椀の口縁部の破片がＳＢ236柱掘形から１点、刀子が刀身のみで遺物包含層から１点出土し、鉄釘は平安時代の井戸ＳＥ509・ＳＢ227・遺物包含層などから合計22点出土した。銭貨は奈良時代の井戸ＳＥ501・502から和同開珎が各１点出土したのをはじめ、遺物包含層から渡来銭の太平通寶・紹聖元寶・開元通寶各１点、腐食して種類不明のもの３点、合計８点出土した。石器は石槍・石核各１点・剥片・砕片各７点の合計16点がＳＥ509・ＳＢ215柱掘形・ＳＤ109・遺物包含層などから出土した。いずれも石材はサヌカイトである。石製品は緑色凝灰岩製の管玉が奈良時代のＳＥ505から１点出土し、砥石はＳＥ506・508・

遺物包含層などから合計６点出土した。ガラス製品にはガラス小玉があり、建物としてまとまらない柱穴と、耕作に伴う素掘りの溝から各１点出土した。　（久保邦江）



ＳＫ601　出土土器（１／４）

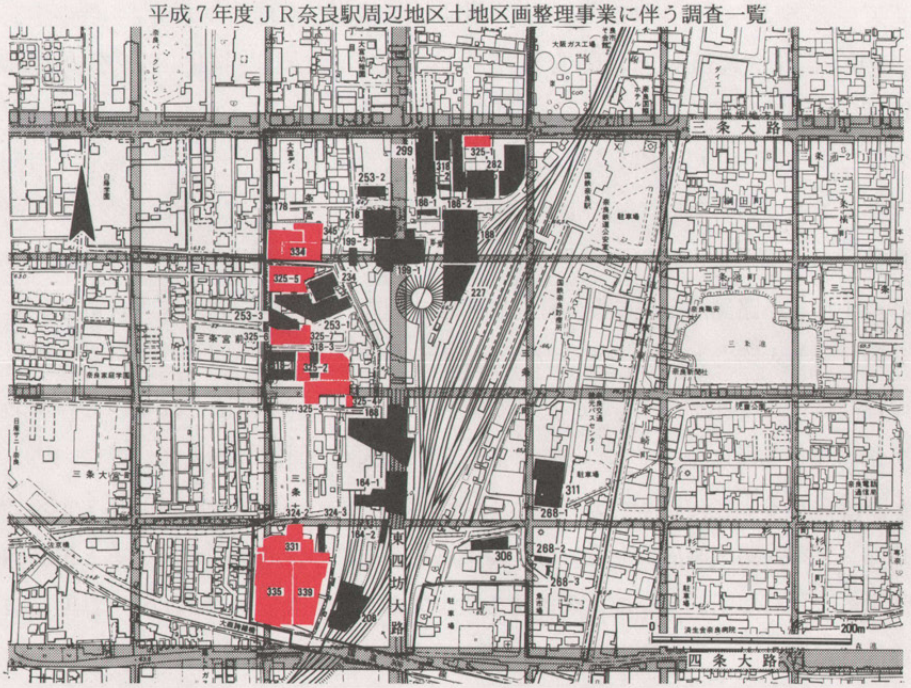
2　ＪＲ奈良駅周辺地区土地区画整理事業に伴う調査

昭和63年度以来継続しているＪＲ奈良駅周辺地区土地区画整理事業に伴う発掘調査は、平成７年度には下表の調査(発掘面積計10,326㎡)を実施し、初年度からの調査面積は合計28,676㎡となった。今回はこのうち平成5～7年度に行った左京四条五坊一坪内の調査(第282次、第299次、第318次第２発掘区＝以下「第318次２区」と略称)の概要を報告する。なお、当坪内での区画整理事業に関わる調査は、前記の一連の調査を以って終了するため、本報告においては、以前に当坪内で実施し既に概要報告済みの調査(第186次、第188次、第199次、第218次、第227次)の成果の概要も含めた。併せて坪全体の遺構の検討を行い、当坪内の遺構の状況および周囲の条坊関連遺構の様相についても総合的に報告するものである。

また左京四条五坊一坪以外の各調査については、現段階では隣接地の調査が進捗中であり、これらの成果をとりまとめたうえで次年度以降に報告する予定である。

遺　跡　名	調査次数・発掘区	調　査　地	面積(㎡)	調　査　期　間
平城京左京四条五坊一坪	第325次　第１発掘区	三条本町25-2番地ほか	268	H7・4／25～H7・6／6
平城京左京四条四坊十五坪	同　第２発掘区	三条宮前町314-1番地ほか	1,284	H7・4／25～H7・8／11
平城京左京四条四坊十五坪	同　第３発掘区	三条宮前町311-1番地ほか	533	H7・4／25～H7・8／11
平城京左京四条四坊十五坪	同　第４発掘区	三条宮前町315-8番地ほか	25	H7・4／25～H7・8／11
平城京左京四条四坊十五坪	同　第５発掘区	三条宮前町238-1番地ほか	707	H7・7／18～H7・9／27
平城京左京四条四坊十五坪	同　第６発掘区	三条宮前町238-3番地	532	H7・10／20～H7・12／6
平城京左京四条四坊十五坪	同　第７発掘区	三条宮前町238-3番地	309	H7・12／7～H8・2／13
平城京左京四条四坊十二坪・十三坪	第331次	三条本町236-1番地ほか	1,350	H7・6／2～H7・9／12
平城京左京四条四坊十六坪	第334次	三条宮前町41-1番地ほか	1,072	H7・8／8～H7・10／18
平城京左京四条四坊十二坪・十三坪	第335次	三条本町233-1番地ほか	1,400	H7・9／1～H7・12／13
平城京左京四条四坊十三坪	第339次	三条大宮町236-1番地ほか	2,450	H7・12／14～H8・3／29
平城京左京四条四坊十六坪	第345次	三条宮前町37-3番地ほか	396	H8・2／19～H8・3／29

平成７年度ＪＲ奈良駅周辺地区土地区画整理事業に伴う調査一覧



発掘区位置図と周辺の条坊（枠内が土地区画整理事業範囲、赤色平成７年度調査）

平城京左京（外京）四条五坊一坪の調査

Ⅰ　はじめに

左京四条五坊一坪及びその周辺においては、今年度までに下記９件計9,417㎡の調査を実施した。下記の調査では奈良時代から近世に至るまでの遺構を検出したが、中でも奈良時代の平城京の条坊関連遺構では、左京四条五坊一坪の北・西・南辺に接する三条大路、東四坊大路、一・二坪坪境小路を検出したことにより、当坪の三辺が確定した。

調査次数・発掘区	調査地	面積(㎡)	調査期間	既存の概要報告
第186次	三条本町19番地ほか	427	H1・10／19～H1・11／24	『平城京左京四条五坊一坪調査概要報告平成元年度』
第188次	三条本町13番地１ほか	1,326	H1・11／29～H2・ 3／15	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成２年度
第199次	三条本町31番地ほか	1,450	H2・ 7／ 2～H2・ 8／22	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成２年度
第218次	三条本町31番地ほか	870	H2・12／17～H3・ 2／28	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成２年度
第227次	三条本町513番地ほか	1,260	H3・ 7／ 8～H3・ 9／20	『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成３年度
第282次	三条本町24番地１ほか	1,700	H5・ 9／ 6～H5・12／21	
第299次	三条本町28番地１・２	1,155	H6・ 5／23～H6・ 7／29	
第318次第２発掘区	三条本町26番地ほか	961	H6・12／22～H7・ 3／ 7	
第325次第１発掘区	三条本町25番地２ほか	268	H7・ 4／25～H7・ 6／ 6	

平城京左京四条五坊一坪内の調査一覧

Ⅱ　検出遺構

基本層序　左京四条五坊一坪の南半部分は、以前に旧国鉄操車場用地として使用されていたことがあり、そのため2.0～3.0ｍ程度の盛土がなされている。また以前宅地であった北半部分でも約0.2～1.1ｍの盛土がある。これらを除去すると旧水田耕作土が現われる。耕作土の堆積状態は坪内の各所では多少異なるが、約0.2～0.5ｍの厚さで堆積しており、この下層が概ね黄灰色シルトもしくは黄灰色砂礫の地山となっている。奈良時代から中・近世までの遺構はすべてこの地山上面で検出した。検出した地山の標高は、坪の中央付近で約64.7ｍ(第282次調査)、同北東部(第282次)で約64.8ｍ、同北西部(第299次)で約64.2ｍ、同南西隅(第199次)で約62.6ｍ、南辺中央付近(第227次)で約64.3ｍである。

なおここでは既報告の遺構も含めて列挙した。また遺構番号については便宜上今回改めて坪全体を通して付した。従って前回報告時とは異なっていることをことわっておく。

奈良時代の遺構　奈良時代の主要な遺構には、三条大路、東四坊大路、左京四条五坊一・二坪坪境小路、道路側溝５条、掘立柱建物４棟、掘立柱列７条、井戸１基がある。

ＳＦ01　三条大路である。一連の調査では大路の南端部分を延べ約19ｍ分を検出した。路面の標高は64.2ｍ前後であるが、大半は後世の粘土採掘坑で破壊されている。なお三条大路の側溝心々幅員については、近隣の調査で三条大路の北端部分を検出[1]しており、その成果から計算すると、約15.7ｍ(約45大尺)と推定される。　(第299次・第318次２区で検出)

ＳＤ04　三条大路南側溝である。付近の条坊関連遺構の位置から計算すると位置的にほぼ合致する。ただし南側で築地の雨落溝を検出できなかった。幅員は1.3～1.7ｍ、検出面からの深さは約0.4ｍで、一連の調査では延べ合計約19ｍ分を検出した。埋土からは奈良

時代の須恵器、土師器、和同開珎２枚が出土した。　（第299次・第318次２区で検出）

ＳＦ02　東四坊大路である。一連の調査で延べ約31ｍ分を検出した。路面の標高は62.9～63.5ｍ。同坪内では東側溝を検出できなかったが、同坪南側で過去に実施した調査[2)]で、路面幅は約15.7ｍ（約45大尺）と確認されている。　（第199次・第218次で検出）

ＳＤ06　東四坊大路西側溝である。幅員1.8～2.3ｍ、検出面からの深さは約0.4ｍである。埋土からは奈良時代の須恵器、土師器が出土した。　（第199次・第218次で検出）

ＳＡ19　東四坊大路西側の築地と思われる。東四坊大路西側溝と雨落溝に挟まれている部分の幅員は約3.8ｍ。南側で左京四条四坊十六坪南辺築地に取り付く。（第199次で検出）

ＳＤ07　東四坊大路西側築地の雨落溝。幅員約0.7～1.5ｍ、深さ約0.2ｍ。左京四条五坊一・二坪坪境小路手前で左京四条四坊十六坪南辺築地の雨落溝につながる。（第199次で検出）

ＳＦ03　左京四条五坊一・二坪坪境小路である。約20ｍ分を検出した。路面の標高は64.4～64.2ｍ。同坪西隣の左京四条四坊十六坪南東隅付近で行った第199次２区で、小路幅員は両側溝心々間で約7.0ｍ（約20大尺）と確認されている[3)]。　（第227次調査で検出）

ＳＤ08　同一・二坪坪境小路北側溝である。幅員は約0.5～1.5ｍで、深さは約0.3ｍである。埋土からは奈良時代の土器片が出土した。　（第199次で検出）

ＳＤ09　同一・二坪坪境小路南側溝である。一連の調査で延べ約20ｍ分を検出した。幅員は約0.6～1.5ｍ、深さは約0.1～0.3ｍである。　（第199次・第227次で検出）

ＳＥ11　坪の中央南側で検出した井戸。掘形は平面円形で南北3.5ｍ、東西３ｍ以上で２段に掘られていた。枠材は一木を半截し刳り貫いて組み合わせており、内径約1.0ｍ、残存高は約3.1ｍ。枠内から奈良時代後半の土器が若干出土した。　（第188次で検出）

ＳＡ12　坪中央北寄りで検出した東西方向の掘立柱列。一部の柱穴は削平され検出できなかったが、発掘区内では約18間分（37.8ｍ）の規模になるとみられる。坪北辺から約三分の一の位置にあることから坪内を区切る施設と思われる。（第282次・第318次２区で検出）

ＳＡ13　ＳＡ12の南側にある東西方向の掘立柱列。後述のＳＡ14とは約３ｍの距離を置いて並行する。柱間約3.6ｍで発掘区内では５間（18.0ｍ）分を確認した。（第282次で検出）

ＳＡ14　ＳＡ13の南側で検出した東西方向の柱列。ＳＡ13と並行する位置にある。柱間約1.8ｍで発掘区内では10間（18.0ｍ）分を検出したが、東端は南側へ折れてさらに発掘区外へ続く可能性もある。坪内におけるＳＡ13・14の位置はＳＡ12のような規格性の認められる所ではないが、状況からみて両方とも坪内を区切る施設であろう。　（第282次で検出）

ＳＡ15　坪の中央北側で検出した南北方向の掘立柱列。ＳＡ12と直交する。柱間約2.3ｍで、発掘区内では４間分を検出。さらに南側へ続くと思われる。　（第318次２区で検出）

ＳＡ16　ＳＡ12の北側にある東西方向の掘立柱列。ＳＡ12とは約2.5ｍの間隔をおいて並行し、発掘区内では４間分を検出。さらに西へ続くと思われる。　（第318次２区で検出）

ＳＡ17　坪の中央やや北西寄りで検出した南北方向の掘立柱列。柱間は約1.8～2.1ｍで、発掘区内では３間(5.7ｍ)分を検出した。　(第318次２区で検出)

ＳＡ18　ＳＡ17の東側で検出した東西方向の掘立柱列。柱間約1.8ｍで３間(5.4ｍ)分を検出したが、全体を確認できておらず、建物となる可能性もある。　(第318次２区で検出)

ＳＢ20　坪の中央やや南側で検出した桁行５間(15.0ｍ)、梁間２間(4.8ｍ)の南北の掘立柱建物である。　(第188次で検出)

ＳＢ21　ＳＡ12の北側で検出した桁行４間以上(7.2ｍ以上)、梁間２間(5.7ｍ)の東西の掘立柱建物。梁間の柱間寸法は北側から2.4ｍ、3.3ｍである。　(第318次２区で検出)

ＳＢ22　ＳＡ13南側で検出した柱列。柱間約1.5ｍで２間(3.0ｍ)分のみである。南側が撹乱され全体を確認できていないが、建物となる可能性がある。　(第282次で検出)

中世の遺構　旧左京四条五坊一坪の中央、南東部、北辺中央付近で土坑を多数検出した。平面不整形で、幅0.8～2.3ｍ、深さ0.2～0.9ｍの規模で不規則に群集する。灰色粘土の埋土中には奈良時代の須恵器片、土師器片、瓦片のほか13世紀頃の瓦器片が含まれている。

ＳＤ05　ＳＤ04が埋まった後に掘り込まれている素掘りの溝。幅員は約1.3～1.7ｍ、検出面からの深さは約0.2ｍ。ＳＤ04溝底より約0.2ｍ浅い。埋土からは12世紀初頭から13世紀前半頃の土器が出土した。　(第299次で検出)

近世の遺構　旧左京四条五坊一坪の北辺東側で土坑16基を検出した。掘形平面隅丸方形を呈し、一辺約0.8～ 3.9ｍ、深さ約0.2～0.4ｍの規模である。茶褐色粘質土の埋土からは奈良時代の土器片、 瓦片などに混じって近世の陶磁器片が出土した。

ＳＤ10　旧左京四条五坊一坪の南辺付近で検出した東西の素掘りの溝。幅員約0.5～1.5ｍ、深さ約0.1～0.3ｍで、長さ約31ｍ分を検出した。埋土からは近世の陶磁器片が出土した。(第188次で検出)　(武田和哉・三好美穂・松浦五輪美)

Ⅲ　出土遺物

瓦　類　奈良時代の柱穴、井戸、土坑、中・近世の土坑、素掘りの溝や現代の撹乱、遺物包含層から軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、桟瓦が出土した。出土量は遺物整理箱でわずか12箱程度で、完形品はなくすべて小片である。道具瓦のうち熨斗瓦や面戸瓦などの小片の分類は困難であるため、丸瓦や平瓦と混在している可能性もある。奈良時代の軒瓦の型式種別と点数は、軒丸瓦6285Ａ、軒平瓦6664Ｃ・6685Ａが各１点ずつである。いずれも中世期の粘土採掘坑から出土した。平安時代以降の軒瓦は３点あり、それぞれ異笵の巴文軒丸瓦である。近世期の土坑から２点、遺物包含層から１点出土した。　(宮崎正裕)

土器類　三条大路南側溝、奈良時代の柱穴・井戸、中・近世の土坑・素掘りの溝、近・現代の撹乱、遺物包含層から土師器、須恵器、瓦器、陶磁器が遺物整理箱で32箱分が出土した。奈良時代の土器は、全体量の２割程度しかなく、大半が中・近世の土坑から13世紀

代の瓦器や17・18世紀代の陶磁器と共に出土した。井戸ＳＥ11および三条大路南側溝ＳＤ04からは、奈良時代後半の土師器、須恵器が若干出土したが、小片が多く器種構成など詳細については不明である。この他、遺構に伴うものには、ＳＤ05出土土器がある。12世紀初頭の土師器皿および13世紀前半の瓦器片がそれぞれ１点出土しただけであるが、溝の存続時期を知る手がかりになる。（三好美穂）

その他の遺物　瓦類、土器類以外の遺物についても調査面積の割合からみると、非常に出土量が少ない。しかし木製品は、他の材質のものと比較して出土量は多いものの、ほとんどが用途不明の板材の破片である。用途が判る製品は、斎串８点、曲物５点、柄２点、皿１点、漆器１点、網代１点、柱根２点だけである。金属製品も少量しかなく、製品は鉄匙・扉金具が各１点、鉄釘５点だけである。それ以外は用途不明品と鉄滓である。銭貨は三条大路南側溝ＳＤ04から和同開珎が２点出土したのをはじめ、寛永通寶１点、銭種不明のものが２点ある。石器・石製品は石鏃１点、石核１点、剥片２点、石包丁未製品１点、砥石３点が出土した。（久保邦江）

Ⅳ　三条大路の検討

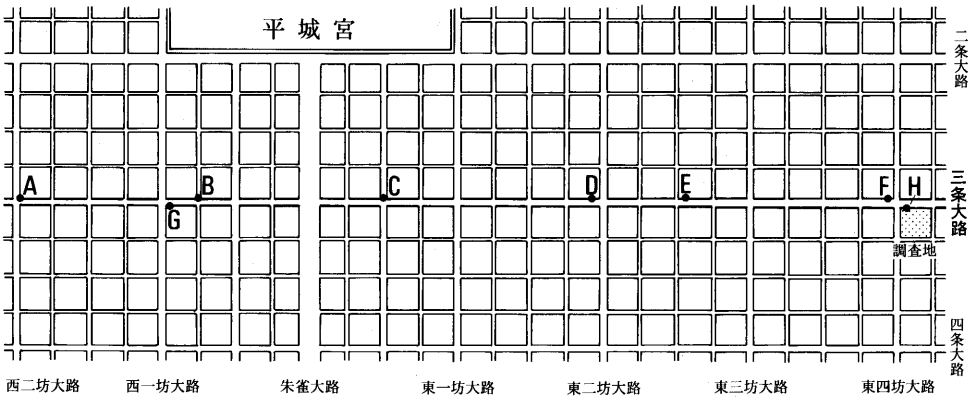
各条坊遺構の位置　一連の調査で確認した左京四条五坊一坪の周囲の条坊遺構の位置は下記の表の通りである。

条坊遺構名	調査次数	Ｘ座標値	Ｙ座標値
三条大路南側溝心（奈良時代・四条五坊一坪付近）	第299次	−146,554.7	−16,428.0
三条大路南側溝心（中世期）	第299次	−146,553.3	−16,428.0
東四坊大路西側溝心（四条四坊十六坪付近）	第199次	−146,670.0	−16,466.3
四条四坊十五・十六坪境小路北側溝心	第199次	−146,675.2	−16,475.0
四条四坊十五・十六坪境小路南側溝心	第199次	−146,682.2	−16,473.0
四条五坊一・二坪境小路南側溝心	第227次	−146,682.0	−16,385.8

左京四条五坊一坪周辺の条坊関連遺構の国土座標

三条大路の幅員　三条大路については、平城京廃絶後も南都の主要交通路として機能し、現在は三条通りとなっている。奈良時代の三条大路は現在の三条通りと位置的にほぼ重なっていることから、これまでの発掘調査では三条大路の路面と両側溝を完全に検出したことはなく、幅員は明らかでなかった。しかし、これまでの調査で検出された三条大路の北側溝もしくは南側溝とされる遺構[4)]のデータをもとに、三条大路の幅員を計算上推定することは可能である。既に検出された三条大路北・南側溝の位置とその国土座標値については前掲の表の通りであるが、このうち北・南側溝の検出位置が比較的近接していて、三条大路の幅員が計算可能な事例が２例ある。一例は右京四条一坊十六坪付近である。この調査例ＢとＧの成果から三条大路の振れ等も考慮して推定される北・南側溝心々間の幅員は、約22.7ｍ（約65大尺）である。もう一例は今回報告する左京四条五坊一坪付近であるが、調査例ＦとＨの成果から三条大路の振れ等も考慮して推定される北・南側溝心々間の幅員は約15.7ｍ（約45大尺）となり、先の例とはかなり異なった数値を示す。

よって上記の各調査で検出した遺構がすべて奈良時代の三条大路北・南側溝であるとい



三条大路検出位置図

遺構	地点	調査地	X座標	Y座標	典拠
三条大路北側溝心	A	右京三条二坊十三坪	-146,549.012	-19,640.000	「右京三条二坊十三坪の調査（第123-5次）」『昭和55年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』奈良国立文化財研究所　1981
	B	右京三条一坊十二・十三坪	-146,545.30	-18,987.344	「右京三条一坊三条大路の調査（第123-2次）」『昭和55年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』奈良国立文化財研究所　1981
	C	左京三条一坊十二坪	-146,543.00	-18,260.00	清水康二氏の御教示による。（『奈良県遺跡調査概報　1994年度』奈良県立橿原考古学研究所に収録予定）
	D	左京三条二坊十三坪	-146,537.165	-17,576.850	「平城京左京三条二坊十三坪」奈良県立橿原考古学研究所　1975
	E	左京三条三坊十二坪	-146,537.0	-17,215.0	平松良雄氏の御教示による。『平城京左京三条三坊十二坪発掘調査概報』「奈良県遺跡調査概報　1990年度」奈良県立橿原考古学研究所　1991
	F	左京三条四坊十三坪	-146,539.0	-16,500.0	「平城京左京三条四坊十二坪発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報　1980年度』奈良県立橿原考古学研究所　1980
三条大路南側溝心	G	右京四条一坊十六坪	-146,567.928	-19,086.588	小澤明彦氏の御教示による。（『奈良県遺跡調査概報　1994年度』奈良県立橿原考古学研究所に収録予定）
	H	左京四条五坊一坪	-146,554.7	-16,428.0	奈良市教育委員会による調査　（平城京第299次調査）
	I	〃　（中世）	-146,553.3	-16,428.0	奈良市教育委員会による調査　（平城京第299次調査）

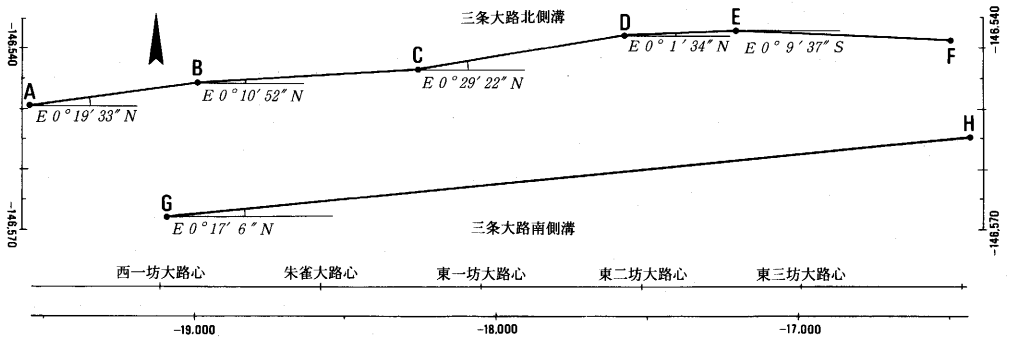
三条大路調査地点

う調査成果に基づいて以下の数値を分析するならば、三条大路の幅員は右京四条一坊十六坪付近と左京三条大路、東四坊大路交差点付近では異なっているという結論に達する。

同じ道路でありながら場所によって幅員が異なる例としては、今までに平城京内では二条大路と東二坊坊間路の例が確認されている[5)]。現段階で得られている数値による限りでは三条大路もその一例となる可能性が高い。では三条大路は一体どこで、どのような状況で幅員が変化しているかについて、前掲の各調査事例をもとにさらに検討したい。

まず、各調査例より北・南側溝の国土方眼方位に対する振れの値を計算してみると、下図のようになる。北側溝の場合は現在までに5地点で検出されており、各地点間の距離は約360～730mあって、各点間の国土方眼方位に対する振れの変化について、ある程度知ることが可能である。しかしながら南側溝の場合は2地点での検出例しかなく、しかも2点間の距離は約2,660mも離れている。この間の国土方眼方位に対する振れの算出は可能であるが、北側溝のように一定の距離ごとに振れの変化を追求することはできない。

さて、北側溝の国土方眼方位に対する振れの変化に注目してみると、A点(右京二坊付近)からD点(左京二坊付近)まではE0°10′52″NからE0°29′22″Nと、振れの度合に多少の差があるものの、一貫して東西の国土方眼方位の軸線よりは北側へ振れる傾向が続く。これは平城京内の東西道路に一般的にみられる傾向である。しかしD点とE点(左京三坊付近)間では振れがほとんどなくなり、さらにE点からF点（左京四坊付近）にかけてはE0°9′37″Sとなって、逆に国土方眼方位に対して南側へと変化している。従って、特に



三条大路側溝の振れの模式図

大きく振れが変化するＥ点～Ｆ点間において、三条大路の北側溝が南へずれて、三条大路の幅員が変化している部分があることが推定される。

ただし、この区間の南側溝については検出した例がない。従って三条大路の幅員がどのような形で減少しているのかという問題については、今までに確認されている東二坊坊間路のように片側の側溝だけが道路計画心に寄る形で幅員が減少しているのか、あるいは両側溝とも同様な形で狭まっているのかなどは、現段階では特定できなかった。

中世期の三条大路　溝ＳＤ05は奈良時代の三条大路南側溝ＳＤ04廃絶後に掘られ、13世紀代には埋まって機能を停止する。ＳＤ05溝心の位置はＳＤ04溝心の北側約1.4ｍにある。遺構の規模や形状などから、ＳＤ05は中世期の三条大路南側溝である可能性が高い。

一方、三条通りの北側で実施した調査[1)]では、三条大路北側溝と推定される溝と、その南で北側溝が埋没した後に掘られた中世期の溝が検出されている。この中世期の溝の中心位置は三条大路南側溝心から南へ約1.0ｍであり、今回の調査で検出したＳＤ04・05の位置関係と対をなす状況にある。この溝は僅かに検出されただけであり詳細は不明であるが、位置的にみて中世期の三条大路北側溝である可能性がある。このように仮定した場合、幅員は両側溝心々間で約13.3ｍとなり、奈良時代の幅員よりも狭かったことになる。

左京四条五坊一坪の位置　同坪内で実施した発掘調査の結果、同坪の北・西・南辺を限る条坊遺構を検出した。このうち東四坊大路と一・二坪坪境小路の成果から計算上推測される東四坊大路と一・二坪坪境小路計画線の交点の国土座標値は(Ｘ＝－146,678.70　Ｙ＝－16,458.45)となる。なお三条大路と東四坊大路の計画線の交点の国土座標値については、前述のように三条大路の幅員の変化が推測されるため、三条大路の計画線の位置がより明確にならない限り、詳細な国土座標値を算出することはできない。　(武田和哉)

Ｖ　左京四条五坊一坪内の様相

一連の発掘調査では、同坪内において検出した奈良時代の主要な遺構は、条坊関連遺構の他は井戸１基、掘立柱列７条、掘立柱建物４棟であるが、多くは主に同坪の北半部分で検出している。とはいえ、これは同坪の南半部分には奈良時代の遺構がまったく存在しな

かったということではなく、発掘区の約65%が同坪の北半部分に設定されたこと、また発掘区の南辺および中央付近は後世の粘土採掘坑跡(後述)と思われる遺構で奈良時代の遺構面が破壊されていたこと、さらには坪の南東側を中心に旧国鉄機関庫建物の基礎工事により大きく撹乱されていることなどの事情もあり、結果的には奈良時代の遺構の多くを坪の北半部分で検出する事態に至ったものと推定される。よって本節における考察も、必然的にこれら諸事情に制約されたものとならざるを得ない点を予め指摘しておく。

さてこれらの発掘調査の結果、同坪内で検出できた奈良時代の遺構の特徴としては、第一には他の平城京内の宅地における調査例と比較すると遺構の数が少ないこと、第二には掘立柱建物の数に比べて柱列など閉塞施設が多いことが判明した。

第一の特徴については、いくつかの要因が考えられる。まず、同坪付近は平城京廃絶以後は永らく耕作地であったため、この間に遺構面の削平が進み奈良時代の遺構がある程度消滅してしまった可能性がある。実際に調査で検出した柱穴の中には、検出面からの深さが極端に浅い例がいくつか見受けられたり、建物や柱列の遺構のうち一部の柱穴しか検出できなかった例もあることから考えると、調査地の周辺の遺構面が後世の耕作で相当の削平を受けていたことは事実であろう。加えて、中・近世期に同坪の周辺で盛んに行われた粘土採掘によっても、奈良時代の遺構が深く破壊されたことは事実である。

しかし一方では、辛うじて検出した奈良時代の掘立柱建物が小規模である点、また調査で出土した奈良時代の遺物が極端に少ない点などから、当初から同坪内では奈良時代の遺構密度が低かった可能性も否定できない。このほか同坪内で、奈良時代の井戸が僅か1基しか検出できなかったことにも留意しなければならない。過去に同坪周辺で検出した奈良時代の井戸の深さは地山面から約1.5〜2.5mはあり[6]、これが同坪付近の帯水層の深度を示すものと推定できる。従って奈良時代の井戸が存在していれば、耕作や粘土採掘等による削平をある程度受けていても、少なくとも遺構の一部を検出できた可能性が高い。

以上の点を踏まえて、一般的な平城京内の宅地の調査例と同坪の様相とを比較すると、やはり同坪内の奈良時代の井戸の数は希少であったと推測される。そして井戸のように人間が生活をする上で絶対不可欠な遺構の密度が低いということ、またそのなかでも掘立柱列など閉塞施設の遺構の割合が高いことなどからみて、同坪内は他の一般の宅地とは異なった状況下にあったものと考えられよう。

平城京内における左京四条五坊一坪の位置は東四坊大路のすぐ東側に該当し、いわゆる「外京」に属する場所である。外京については、従来からその計画寸法などをめぐって諸問題が存在するが、外京の造営時期は平城京の他の部分に比べ遅い段階であったとみられている[7]。ただこうした経緯が同坪の遺構密度の低さと如何なる因果関係があるのかという問題については、今後外京内での調査の進展を待って検討しなければならない。

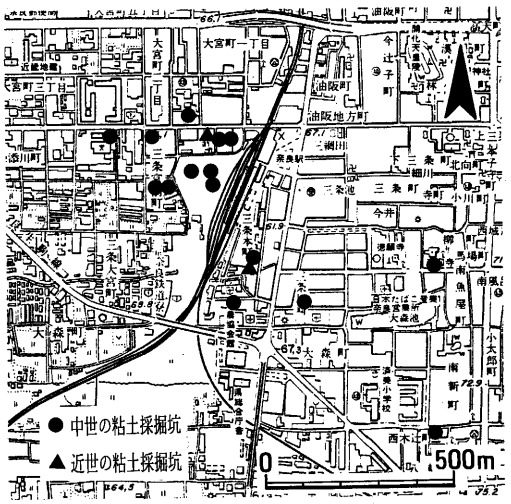
Ⅵ　中・近世粘土採掘坑の分布状況

平城京廃絶後の左京四条五坊一坪の状況については詳細な史料はないが、『東南院文書』所収の「東大寺封戸庄園并寺用雑物目録」(天暦四年 950)には当時の寺領を伝え、

平城左京田畠九町一段三百卌歩(中略)

四条五坊垣穴田一町二段百廿歩

とあることから[8]、10世紀頃には同坪を含む四条五坊の地には東大寺領の田畠が存在していたことが判り、この頃には同坪付近が耕作地化されていたことがうかがわれる。



ＪＲ奈良駅周辺の粘土採掘坑分布図（１／20,000）

ところで同坪内での発掘調査では平安時代以降に掘削された土坑を多数検出した。前節の検出遺構でも述べた通り、これらの土坑はその形状や出土遺物などからみて、平面不整形で埋土に13世紀頃の瓦器が含まれているものと、平面隅丸方形で埋土に近世の陶磁器片が含まれているものとのおよそ２つの形態に分類することができる。

これら２種類の土坑は、これまでに同坪の周辺でも数多く検出されている(上図)。いずれも掘形の規模が1.2～1.7m程度の穴が基本単位である。また堅い砂礫層の地山部分を避け粘土の部分を選ぶように掘られており、しかも掘形の最深部は地山粘土層内に留まっていることが多いのが特徴的である[9]。こうした点から、これらの土坑は掘削された時代は異なるものの、地山の粘土の採掘を目的としたもので、基本となる掘形の規模は掘削時の人間の作業単位を示しているものと思われる。　　(武田和哉・三好美穂・松浦五輪美)

1）奈良県立橿原考古学研究所「平城京左京三条四坊十三坪発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報１９８９年度』１９９０所収。
2）奈良市教育委員会「平城京東四坊大路・左京四条四坊十四坪の調査　第１６４・１６８次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　昭和６３年度』１９８９。
3）この坪境小路は東二坊坊間路との交差点付近でも検出されており（奈良市教委・平城京第１３３次調査　『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書　昭和６２年度』所収)、これらの成果より求められる国土方眼方位に対する同坪境小路の振れは０°８′３２″である。
4）三条大路については以前から考察が行われている。代表的なものとしては、奈良県立橿原考古学研究所『平城京左京三条四坊十二坪発掘調査報告』１９８７、奈良国立文化財研究所「左京三条二坊の調査」『平城宮跡発掘調査部発掘調査概報１９９０年度』１９９１所収がある。
5）二条大路については、奈良国立文化財研究所「南面東門の調査」『昭和５５年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』１９８１所収、井上和人「古代都城制地割再考」『奈良国立文化財研究所研究論集Ⅶ』１９８４所収参照。また東二坊坊間路については、奈良市教育委員会『平城京左京二条二坊十二坪　奈良市水道局庁舎建設地発掘調査報告』１９８４、奈良国立文化財研究所「宮東面大垣の調査」『昭和６３年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』１９８９所収、奈良国立文化財研究所編『平城京長屋王邸宅と木簡』吉川弘文館１９９１参照。
6）篠原豊一「平城京の井戸とその祭祀」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要１９９０』付載「平城京井戸一覧表」参照。
7）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅱ』第Ⅶ章「平城宮の諸問題」参照。
8）『大日本古文書』家わけ１８東大寺文書之二　五四五。このほか『東大寺要録』巻６封戸水田章第八「諸國庄田地長徳四年注文定（９９８)」にも
　同京四條五坊塡穴田一町二段百廿四歩
とみえる。なおこの「塡穴田」および本稿中に掲示の『東南院文書』中の「垣穴田」の意味については判らない。
9）粘土採掘坑については　五十川伸矢「土取りの歴史的変遷」『京都大学埋蔵文化財報告Ⅳ』京都大学埋蔵文化財研究センター１９９１に詳論されている。

3　平城京左京三条四坊五坪の調査　第320次調査

Ⅰ　はじめに

この調査は、奈良市大宮町３丁目175-1他で実施した株式会社熊谷組奈良営業所届出の共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元で左京三条四坊五坪の北半中央に相当する。これまでに五坪内では２箇所の調査（市第142次、県1990年度調査）が行われており、大規模な掘立柱建物跡や溝が検出されている。調査面積は450㎡で、調査期間は平成７年１月５日から２月３日までである。

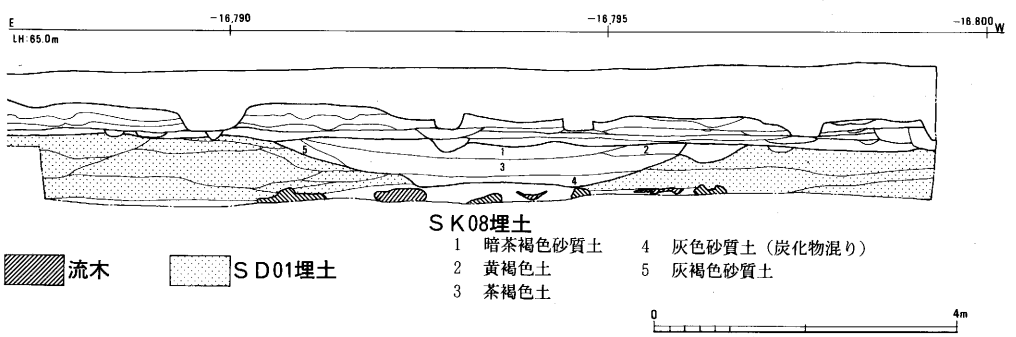
Ⅱ　検出遺構

今回の調査では、発掘区全域を流れる縄文時代及び古墳時代の土器を含む流路と奈良時代の掘立柱建物３棟、土坑２、井戸１基を検出した。発掘区内の基本的層序は、約0.7ｍ厚の造成土、その下に耕作土、茶灰色土、灰褐色土、茶褐色土（奈良時代整地層）と堆積し、現地表下1.1ｍで灰色か黄灰色の粘土、砂、礫層が互層となる流路ＳＤ01に至る。奈良時代の遺構は茶褐色土と流路の上面で検出した。遺構面の標高は63.4ｍである。

ＳＤ01　発掘区全域にわたって検出した南北方向の流路で、深さ0.6ｍある。埋土は灰色か黄灰色の粘土、砂、礫層が複雑に互層となって堆積している。最下層の灰色砂から縄文土器片が、上層の灰色粗砂から古墳時代後期の須恵器杯身片が出土しており、何時期かの流路の存在が考えられるが埋土が複雑に堆積していることや、出土遺物が少ないためわからない。ＳＤ01は発掘区の北180ｍで実施された奈良郵便局の発掘調査（国第116次調査）で検出されている。なお、ＳＤ01の下には、多くの流木を含む灰色粗砂層がある。

ＳＢ02　発掘区北西隅で検出した東西２間、南北５間以上の南北棟の掘立柱建物。柱間は2.4ｍ等間である。桁行南から３～５番目の梁間中央には床束と考えられる小柱穴がある。

ＳＢ03　発掘区南西隅で検出した南北４間の掘立柱建物。柱間寸法は北から2.85ｍ、3.0



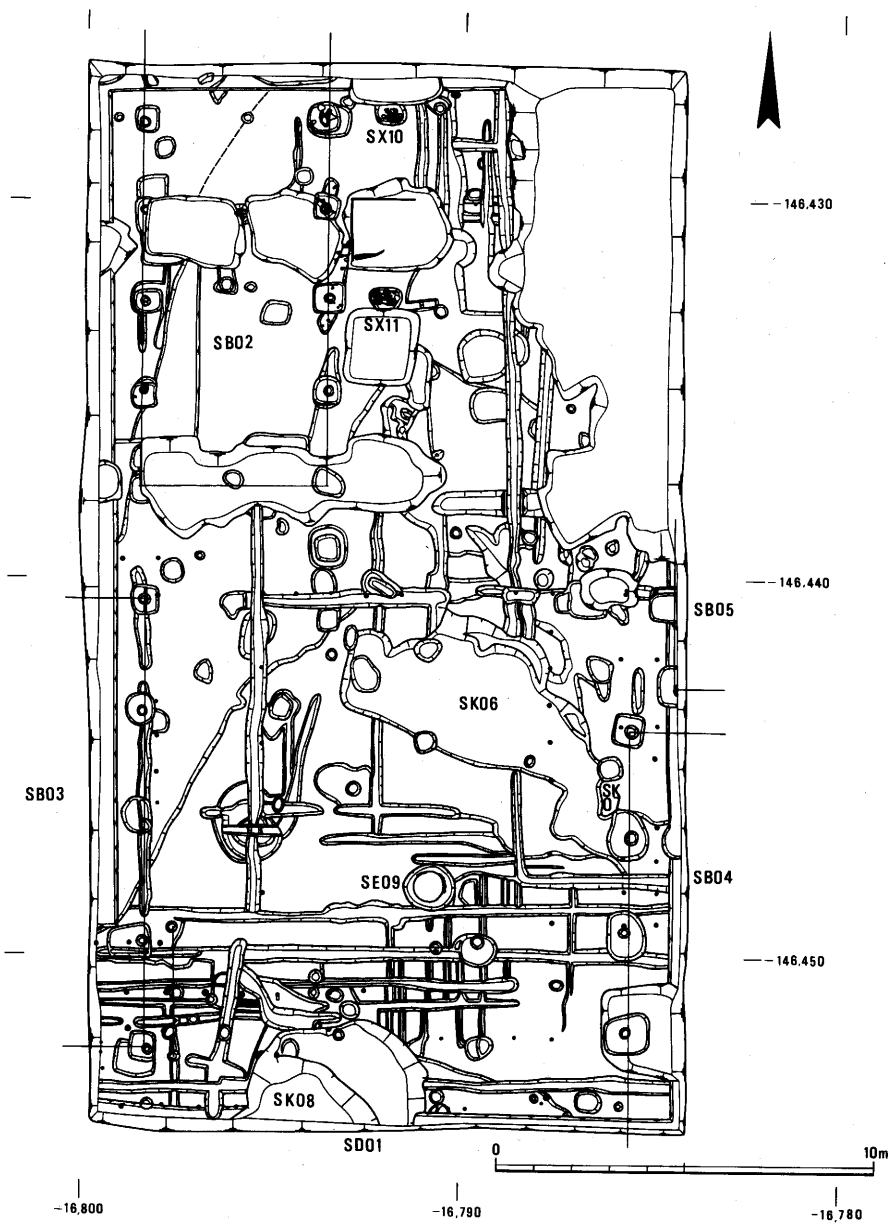
第320次調査　発掘区南壁土層図（１／100）

m、3.0m、2.85m。中央2間の柱間が両端2間より広いことから北と南に廂が付く南北棟建物の可能性もある。

ＳＢ04　発掘区南東で検出した南北4間以上の掘立柱建物。柱間は2.7m等間。

ＳＢ05　発掘区東辺で検出した南北2間以上の掘立柱建物。柱間は2.1m。

ＳＫ06　発掘区中央で検出した平面が不整形な浅い土坑。東西7.5m、南北4.06m以上、



第320次調査　遺構平面図（1／200）

深さ0.3m。埋土から奈良時代末の土器が出土した。

ＳＫ07　発掘区東辺で検出した隅丸方形の土坑。一辺0.6m、深さ0.55m。埋土から奈良時代の土器・瓦が出土した。

ＳＫ08　発掘区南辺で検出した土坑。南半が発掘区外に広がるため全体は不明である。東西4.6m、南北2.6m以上、深さ0.8m。埋土から奈良時代末の土器、瓦が出土した。

ＳＥ09　発掘区南辺で検出した井戸。平面円形の掘形で径1.2メートル、深さ1.25mある。井戸枠は上下２段あり、下段は径0.85m、高さ0.35mの円形曲物、上段は縦板組で東辺の縦板が５枚残るのみである。井戸枠内から奈良時代末の土器と瓦・木簡・齋串が出土した。

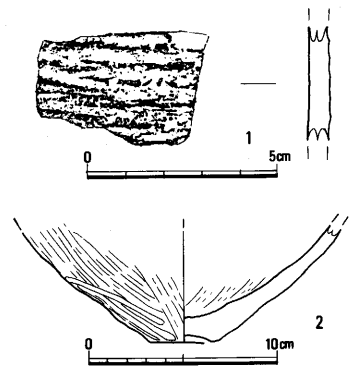
ＳＸ10・11　ＳＢ02の東側で検出した平面形の大きさが同じ長円形の浅い土坑で、長径0.9m、短径0.6m、深さ0.2mある。坑内は瓦片と少量の小礫で充満されていた。共にＳＢ02の東西の柱筋と揃うことや東側柱心から土坑心までの距離が1.5mであることから見て、ＳＢ02の廂や縁の柱穴の根固めとも考えられるが工場の建物基礎によって削平されているため不明である。

他にＳＫ08の周辺で小柱穴を検出したが、建物としてまとまらない。　（篠原豊一）

Ⅲ　出土遺物

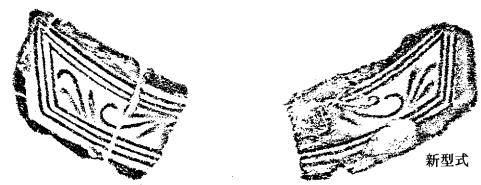
今回の調査では遺物整理箱77箱分の遺物が出土した。その内訳は、縄文土器、サヌカイト片、古墳時代土師器小型杯、古墳時代後期須恵器杯身、奈良時代瓦類・土器・木簡・木製品で、その内の70箱分が瓦類である。縄文土器、瓦類、ＳＥ09出土木簡・木製品について述べる。

縄文土器　縄文土器は６点あり、すべてＳＤ01から出土したものである。うち５点は細片で、器種は不明である。１は、外面に条痕が見られる。２は深鉢の底部で、外面にヘラミガキが、内面に板状工具の擦痕がみられる。胎土には、石英や長石の粗粒砂が多く含まれる。縄文時代後～晩期のものと思われる。　（安井宣也）



縄文土器（１は1/2、２は1/4）

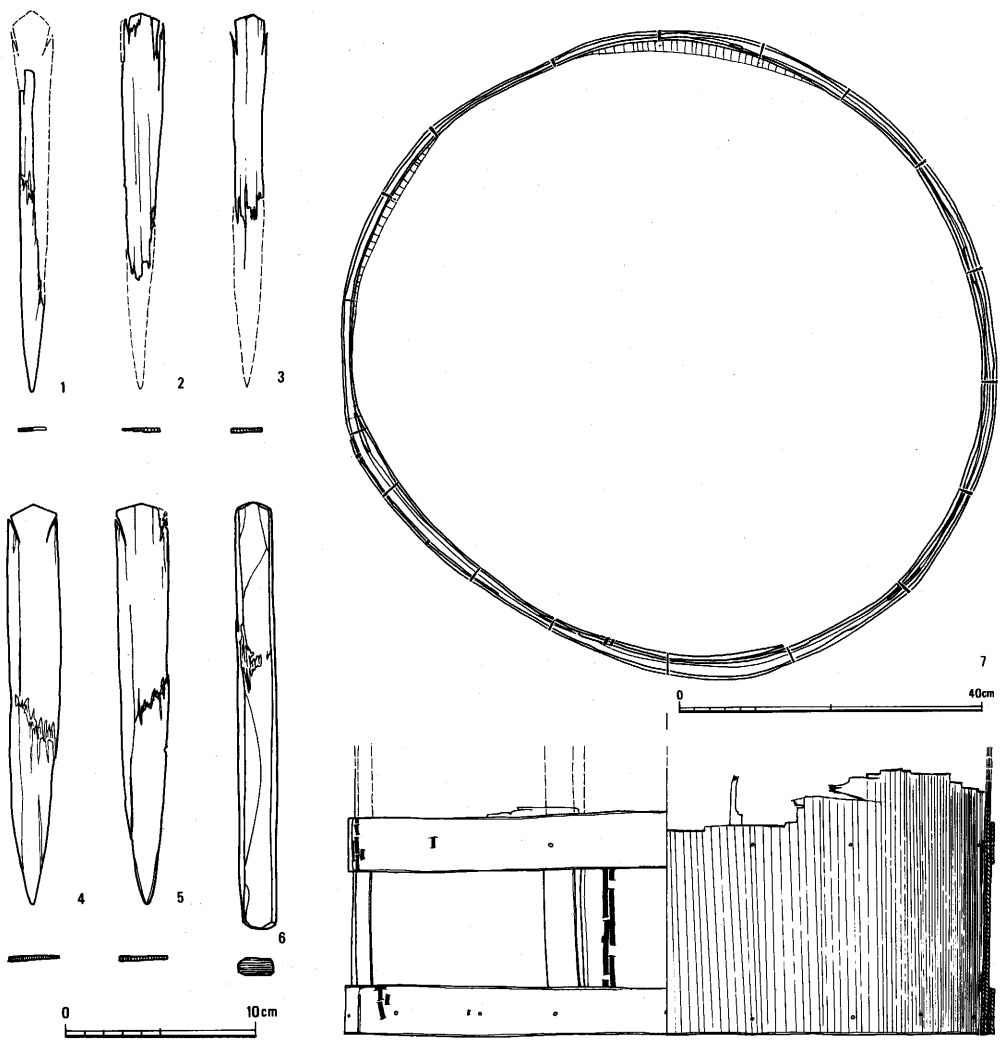
瓦　類　軒丸瓦８点、軒平瓦６点、鬼瓦(平城宮Ｖ式Ａ)１点、塼14点がある。軒瓦の型式には軒丸瓦には平城宮6285型式Ａ種１点、同6316型式Kb種７点、軒平瓦には平城宮6729型式Ｂ種２点、新型式４点がある。軒平瓦の新型式はいずれも同型式である。軒平瓦はすべて破片で、顎の形態は直線顎である。瓦当文様は３回反転する均整唐草文様の周囲に



出土軒平瓦（１／５）

圏線が３重廻る。唐草は巻き込みが小さく、界線にはつかない特徴がある。　（宮崎正裕）

ＳＥ09出土木簡・木製品　木簡１点、齋串５点（１～５）、棒状木製品２点（６）、円形曲物（７）がある。木簡は、幅５㎝、厚さ0.3㎝の薄板で、両端を欠く。片面に５文字分の墨書が薄く残るが判読できない。齋串は小型のもの（１～３）とやや大きいもの（４・５）がある。いずれも表裏には割り裂き痕跡が残る。側縁は削り調整である。曲物（７）は井戸枠として使用されていた大型の曲物で底板を取り付けた痕跡はない。側板と２段の箍の間には幅５㎝前後の縦板（５箇所残る）が等間隔にあてがわれ補強されている。箍、縦板、側板は外面からほぼ15～18㎝間隔で木釘で結合されている。内面には細かい縦平行線のケビキがある。内径85㎝、残存高35㎝、板材の厚さは１㎝である。　（篠原豊一）



井戸ＳＥ09　出土木製品（１～６は１／４、７は１／10）

4　平城京右京一条北辺三坊七坪の調査　第322次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市西大寺北町二丁目452-5他において実施した兼松都市開発株式会社届出の共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では右京一条北辺三坊七坪に相当し、調査地の北端には七・八坪の坪境小路が想定されている。

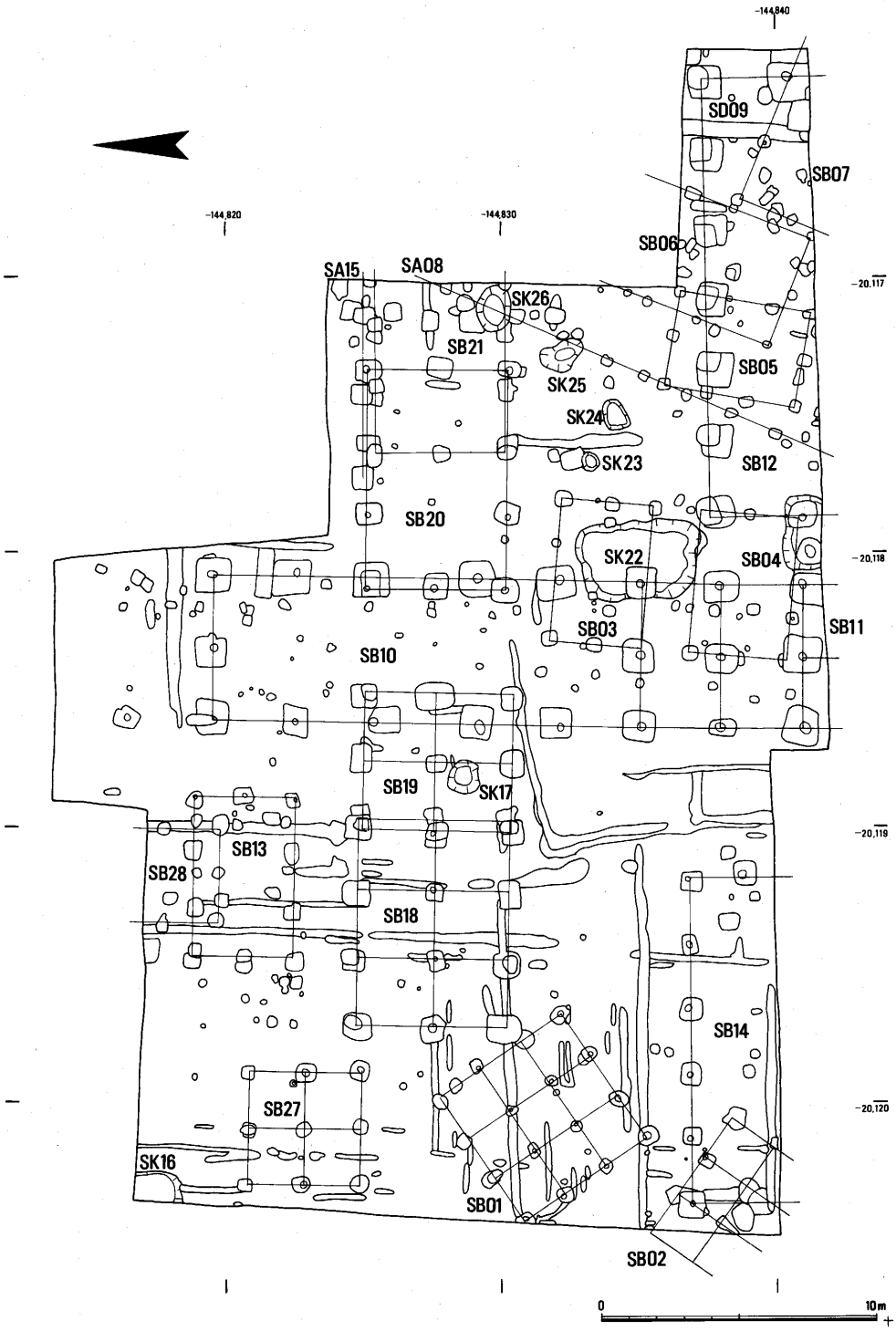
調査地周辺では、昭和58年度に奈良国立文化財研究所が北辺四坊六坪の調査を、平成5年度には奈良市教育委員会が北辺四坊四坪の調査（平城京第289次調査）を行なっており、古墳時代後期の掘立柱建物や奈良時代には整然と建ち並ぶ大型の建物群や園池、平安時代の建物や火葬墓を検出するなどの成果を得ている。調査は、遺構の残存状態を確認するために平成6年12月21日に試掘調査を行なった後、その成果に基づき本調査を実施した。調査面積は815㎡、調査期間は平成7年2月20日から3月31日までである。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の基本的な層序は、耕作土（黒色土）の下に、灰色細砂、黄灰色砂質土、淡黄灰色砂質土、淡灰色砂質土、黄灰色粘質土、暗褐色砂質土があり、表土から約0.8mで黄灰色粘土の地山になる。地山は発掘区北西から南東へ向かって緩やかに下降しており、標高は北西隅で約80.5m、南東隅では約79.3mである。遺構は、すべて地山上面で検出した。

検出した遺構には、古墳時代の掘立柱建物・塀・溝、奈良時代の掘立柱建物・土坑、平安時代の掘立柱建物・土坑、江戸時代の土坑がある。今回の調査では、七・八坪の坪境小路は検出することはできなかった。以下、主要な遺構について概要を記す。

古墳時代の遺構　掘立柱建物ＳＢ01～07、掘立柱列ＳＡ08、溝ＳＤ09を検出した。建物や柱列は、振れの度合から、①他の建物と比べ、著しく振れているもの（ＳＢ01）、②振れの度合が少ないもの（ＳＢ03～05）、③ＳＢ03～05の建物よりも振れが大きいもの（ＳＢ02・06・07、ＳＡ08）に分けることができる。ＳＢ01・02は、いずれも総柱建物である。ＳＢ03・04は、奈良時代の建物に壊されているため全様は不明だが、いずれも桁行3間、梁間2間の東西棟建物になると考えられる。ＳＢ05は、桁行3間、梁間2間の南北棟建物である。ＳＢ06・07は、発掘区外へ続くため規模は不明だが、ＳＢ06は桁行3間以上、梁間2間の南北棟建物になる。ＳＢ06とＳＢ07では、重複関係からＳＢ07が新しい。ＳＢ01の柱掘形から4世紀後半の土師器、ＳＢ03の柱掘形からは6世紀後半の須恵器、ＳＢ04の柱掘形からは6世紀末の須恵器が出土した。ＳＡ08は、7間分を検出したが発掘区外へ続くため全長は不明。ＳＤ09は、南北方向の素掘りの溝である。幅約0.7m、深さ0.1mで、長さ4.5m分を検出した。溝内から4世紀後半の土師器が出土した。



第322次調査　遺構平面図（1／250）

奈良・平安時代の遺構　掘立柱建物11棟、掘立柱列１条、土坑６を検出した。これらの遺構は、出土遺物が少なく詳細な時期が判るものが少ないが、重複関係や建物配置から見て、大きく２時期に分けることができる。

Ⅰ期（奈良時代）　掘立柱建物ＳＢ10～14、掘立柱塀ＳＡ15、土坑ＳＫ16・17がある。

ＳＢ10は、桁行５間、梁間２間の南北棟建物である。柱間寸法は、桁行の北から３間めのみが3.9mで、他はすべて３ｍ等間である。ＳＢ11は、ＳＢ10と棟通柱筋を揃えて南北に並んで建っている。桁行２間以上、梁間２間の南北棟建物になると考えられが、南側は発掘区外へ続くため規模は不明。ＳＢ11の北妻柱列とＳＢ10の南妻柱列の間には２間分の柱穴を検出しており、これを馬道としてＳＢ10とＳＢ11を結び一連の建物として考えることもできる。ＳＢ10の柱掘形からは奈良時代の瓦が出土した。ＳＢ12は、桁行６間、梁間２間以上の東西棟建物である。北側柱列のすべての柱穴に柱抜取り痕跡がある。東から３番目の抜取り痕跡からは、８世紀末の土師器・須恵器が出土した。この時期には、重複した建物はないが、建物配置からみて少なくとも２回以上の建て替えがあったものと考えられる。柱列ＳＡ15は、発掘区北東隅で検出した３間以上の東西方向の柱列で、東端は発掘区外へ続くため全長は不明。発掘区の北側に続き建物になる可能性もあるが、明かではない。土坑ＳＫ16からは古墳時代の須恵器、奈良時代の土師器・須恵器が、ＳＫ17からは古墳時代の土師器・須恵器の他に、奈良時代の土師器・須恵器と奈良三彩の破片が出土した。

Ⅱ期（平安時代）　掘立柱建物ＳＢ18～21、土坑ＳＫ22～26がある。

ＳＢ18・19は、ＳＢ13の南側で検出した総柱建物である。重複関係から、ＳＢ19は、ＳＢ18よりも新しい。ＳＢ20は桁行３間、梁間２間の東西棟建物で、ＳＢ21は桁行３間以上、梁間２間の東西棟建物である。これらの建物も重複しており、ＳＢ21はＳＢ20よりも新しい。さらにＳＢ21は、重複関係からＳＡ15よりも新しいことも判る。ＳＢ18～21は、いずれも側柱筋をほぼ揃えて建てられているが、建物位置と重複関係からみて、ＳＢ18・20とＳＢ19・21が建っていた時期に分けることが可能である。ＳＢ18・20・21の柱掘形からは８世紀末から９世紀初頭の土器が出土した。ＳＫ22～26は、発掘区北東部分で検出した土坑群である。ＳＫ22は、ＳＢ11と重複して検出した平面が不整形な土坑である。土坑内から８世紀末から９世紀初頭の土師器が出土した。重複関係からＳＢ11よりもＳＫ21の方が新しいことが判る。ＳＫ23～26は、いずれも土坑内に炭混じりの黒褐色土が堆積し、鉱滓・ふいごの羽口・スサ混じりの炉体片や瓦類、８世紀末～９世紀初頭の土師器・須恵器が出土。ＳＫ26は、重複関係からＳＢ19よりも新しい。

この他に掘立柱建物ＳＢ27・28を検出したが出土遺物がなく詳細な時期は不明である。しかし、建物軸が国土方眼方位と一致することなどから見て、少なくとも奈良時代以降の建物と考えられる。

Ⅲ　出土遺物

遺物は、遺物包含層、素掘りの溝、柱穴、土坑から遺物整理箱で20箱分が出土した。

瓦　類　遺物整理箱で13箱分が出土した。大半が丸瓦・平瓦で、軒瓦は、軒平瓦6681型式C種１点と瓦当文様不明の軒丸瓦１点だけである。軒丸瓦は、外区部分のみの破片であるが、外縁の特徴から巴文軒丸瓦である可能性が高い。２点とも遺物包含層から出土した。

土器類　遺物整理箱で５箱分が出土した。出土土器には、弥生土器、古墳時代前期～後期の土師器・須恵器、奈良時代の土師器・須恵器・奈良三彩、平安時代の土師器・須恵器、近世の陶磁器がある。古墳時代と平安時代のものは、柱穴や土坑などから出土したものが多いが、奈良時代のものは遺構に伴うものが殆どなく、出土量も少ない。平城京内の一般宅地で見られる土器の出土状況とは様相を異にしている。

その他の遺物　鉱滓片、炉体片、ふいごの羽口が遺物整理箱で２箱分ある。これらは、灰と炭化物が充満した土坑（ＳＫ23～26）から出土した。炉体の内面、羽口の先端部外面はガラス化し赤紫色を呈している。炉体片からみて、近くに半地下式の円形炉があった可能性が考えられる。この他に、遺物包含層から天聖元寳（初鋳1023年）が１枚出土した。

Ⅳ　まとめ

今回の調査では、当初想定していた七・八坪の坪境小路は検出できなかった。他の遺構の残存状態から見て小路だけが大きく削平されたとは考えにくく、当初から条坊道路が施工されていなかった公算が高いと思われる。また、七坪内には一般宅地では見られない大型の建物が坪のほぼ中央部に規則的に配されていることや、平安時代になっても宅地利用されていることが明らかになり、鋳造工房の存在が予測されるなどの成果を得た。さらに、古墳時代前～後期の遺構を検出したことにより、この時期の遺跡が周辺一帯に存在することも確認した。

（秋山成人、宮﨑正裕、篠原豊一）

遺構番号	方向	規模（桁行×梁間）	桁行全長 m（尺）	梁間全長 m（尺）	桁行柱間寸法(m)	梁間柱間寸法(m)	備考
ＳＢ01	北35°西	３×３	5.4	5.4	1.8等間	1.8等間	総柱建物
ＳＢ02	北50°西	３以上×２以上	3.6～	1.8～	1.8等間	1.8等間	総柱建物
ＳＢ03	北６°東	３×２	4.95	3.3	1.65等間	1.65等間	
ＳＢ04	北６°東	３×２	4.95	3.3	1.65等間	1.65等間	
ＳＢ05	北11°東	３×２	4.95	3.3	1.65等間	1.65等間	
ＳＢ06	北20°東	２以上×２	5.4～	4.2	2.7等間	2.1等間	ＳＢ07より古い
ＳＢ07	北20°東	３以上×２以上	2.25～	2.25	2.25等間	2.25等間	ＳＤ09より新しい
ＳＡ08	北24°東	９以上	25.2～		3.6等間		
ＳＢ10	南北棟	５×２	15.9(53)	5.4（18）	3-3-3.9-3-3	2.7等間	ＳＢ20・ＳＫ22より古い
ＳＢ11	南北棟	２以上×２		5.4（18）		2.7等間	北妻柱列とＳＢ10の南妻柱列の間２間分は馬道の可能性がある
ＳＢ12	東西棟	６×２以上	16.2(54)	3.3（11）～	2.7等間	3.3等間	
ＳＢ13	東西棟	３×２	6.3（21）	3.6（12）	2.1等間	1.8等間	
ＳＢ14	東西棟	５×２以上	12（40）	2.1（７）	2.4等間	2.1等間	
ＳＡ15	東　西	３以上	6.0（20）～		3.0等間		ＳＢ21より古い
ＳＢ18	東西棟	３×２	8.1（27）	5.1（17）	2.7等間	2.55等間	総柱建物
ＳＢ19	南北棟	２×２	5.7（19）	5.1（17）	2.85	2.55等間	総柱建物
ＳＢ20	東西棟	３×２	7.65(25.5)	5.1（17）	2.55	2.55	ＳＢ21より古い
ＳＢ21	東西棟	３以上×２	4.5（15）～	4.8（16）	2.25等間	2.4等間	ＳＫ26より古い
ＳＢ27	東西棟	２×２	4.2（14）～	4.2（14）	2.1等間	2.1等間	総柱建物
ＳＢ28	南北棟	２以上×２	1.95（6.5）～	3.3（11）	1.95等間	1.65等間	

建物一覧表

5　平城京左京三条一坊三坪の調査　第323次

本調査は奈良市三条大路三丁目470、471－1・4で実施した日本石油(株)大阪支店届出の給油所建設に伴う事前発掘調査である。調査地は平城京の条坊復元では、左京三条一坊三坪の北東隅にあたる。調査面積は225㎡で、調査期間は平成７年２月27日から３月24日までである。なお、当坪の南半西端部で奈良市教育委員会が実施した第312次調査では、朱雀大路東側溝とそれに沿った築地塀、坪内の掘立柱建物、掘立柱塀などを検出している。

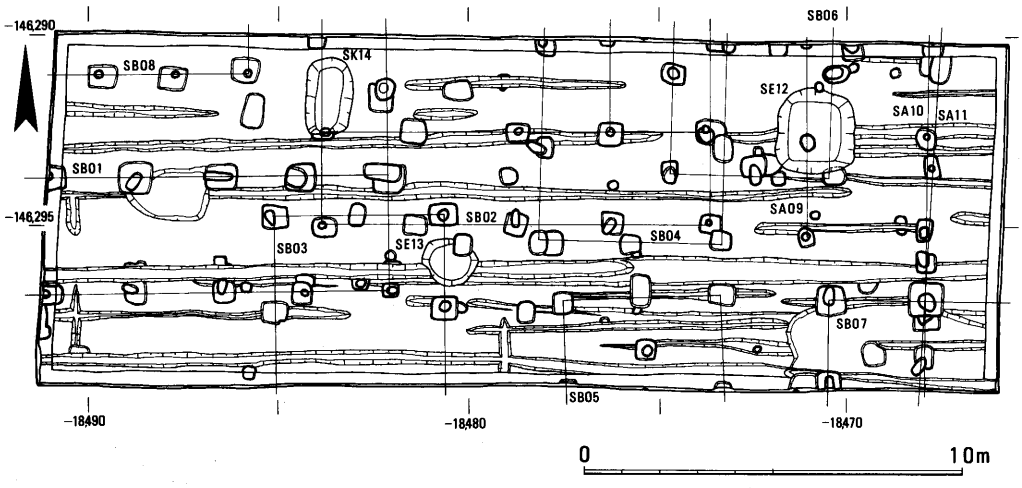
発掘区の基本層序は黒灰色砂質土、灰色砂質土、橙色粘質土、黄灰色土と続き、現地表下約0.3～0.4ｍで黄色粘土あるいは灰色砂の地山にいたる。遺構は地山上面（標高約62.9ｍ）で検出した。検出遺構には、掘立柱建物７棟、掘立柱列４条、井戸２基、土坑１のほか、後世の耕作に伴うと思われる素掘りの溝がある。以下、主なものについて記す。

ＳＢ01　桁行５間以上、梁間３間以上の東西棟の掘立柱建物で、南廂が付く。柱間寸法は桁行が東から2.3－2.1－2.1－2.3ｍ、梁間が1.8ｍ、廂の出は3.0ｍである。身舎、廂とも柱の抜き取り痕跡から、８世紀末の土師器・須恵器の小片が少量出土した。

ＳＢ02　桁行４間（10.2ｍ）、梁間３間以上の東西棟の掘立柱建物で、南廂が付く。柱間寸法は桁行が2.5ｍ等間、梁間、廂の出はともに2.4ｍである。身舎の東から１間目で間仕切る。重複関係から、後述のＳＢ04、ＳＫ14より古い。

ＳＢ03　桁行２間以上、梁間２間（4.4ｍ）の南北棟の掘立柱建物で、柱間寸法は桁行が2.3ｍ、梁間が2.2ｍ等間である。

ＳＢ04　桁行３間以上、梁間２間（4.8ｍ）の南北棟の掘立柱建物で、柱間寸法は桁行が



第323次調査　遺構平面図（１／200）

南から2.4－2.7m、梁間が2.4m等間である。重複関係から、ＳＢ02より新しい。

ＳＢ05・06　いずれも桁行２間以上、梁間２間（4.2m）の南北棟の掘立柱建物で、柱間寸法は桁行が2.4m、梁間が2.1m等間。ＳＢ06は重複関係から、後述のＳＥ12より古い。

ＳＢ07　南北、東西方向とも２間（柱間寸法は2.4m）以上の掘立柱建物である。柱穴埋土から奈良時代後半の土師器、須恵器が出土。重複関係から、後述のＳＡ10より新しい。

ＳＢ08　東西２間（4.8m）、柱間寸法が2.4m等間の掘立柱列である。西に続くか、建物の南側柱列あるいは南妻柱列の可能性が考えられる。

ＳＡ09　南北２間（5.2m）、柱間寸法が2.6m等間の掘立柱列である。柱筋がＳＢ04の棟方向と揃うため、同時期と考えられる。重複関係から、後述のＳＥ12より新しい。

ＳＡ10　南北３間（6.9m）、柱間寸法が北から2.1－2.4－2.4mの掘立柱列で、建物の西側柱列の可能性もある。重複関係から、ＳＢ07、後述のＳＡ11より古い。

ＳＡ11　南北３間（7.8m）、柱間寸法が北から2.7－2.4－2.7mの掘立柱列で、建物の西側柱列の可能性もある。重複関係から、ＳＡ10より新しい。

ＳＥ12　南北約2.3m、東西約2.1mの平面隅丸方形掘形、深さ約1.3mの井戸で、井戸枠は完全に抜き取られている。井戸掘形の底には礫が敷き詰められ、井戸枠の抜き取り痕跡から木製の楔１点と土師器、須恵器の小片が少量出土した。８世紀末に廃絶したことがわかる。重複関係から、ＳＢ06より新しく、ＳＡ09より古い。

ＳＥ13　南北約1.3m、東西約1.5mの平面隅丸方形掘形、深さ約0.9mの井戸で、井戸枠は完全に抜き取られている。井戸枠の抜き取り痕跡から土師器が少量出土したが、摩滅が著しいため、時期は特定できない。

ＳＫ14　南北約2.0m、東西約1.2mの平面隅丸長方形、深さ約0.3mの土坑である。底は船底状で、埋土は灰褐色砂質土一層である。奈良時代の土師器・須恵器の小片が少量出土したが、明確な時期は特定できない。重複関係から、ＳＢ02より新しい。

出土遺物には瓦類と土器類がある。ほとんどが素掘りの溝、遺物包含層からの出土である。瓦類は大半が奈良時代の丸瓦・平瓦であるが、中に型式不明の軒丸瓦（１点）と塼（５点）がある。塼には厚手の方塼以外に、片面は平坦であるが、反対面の端部に顎状の段をもつ特殊塼が１点ある。土器類はわずかで、奈良時代の土師器・須恵器・製塩土器などがあるが、いずれも残存状態は悪い。

遺構の重複関係や建物配置から、少なくとも４時期以上の変遷が考えられる。出土遺物からみて、３時期目以降は奈良時代後半のものであることが推察できるが、１・２時期目については、今回の調査では明らかにすることができなかった。この他に、建物としてはまとまらなかったが、平安時代前半の遺物が出土した柱穴も幾つか検出した。遷都前後のこの地域の様相を考えるうえで、貴重な成果を得たといえる。　（宮崎正裕）

6　平城京朱雀大路の調査　第328次

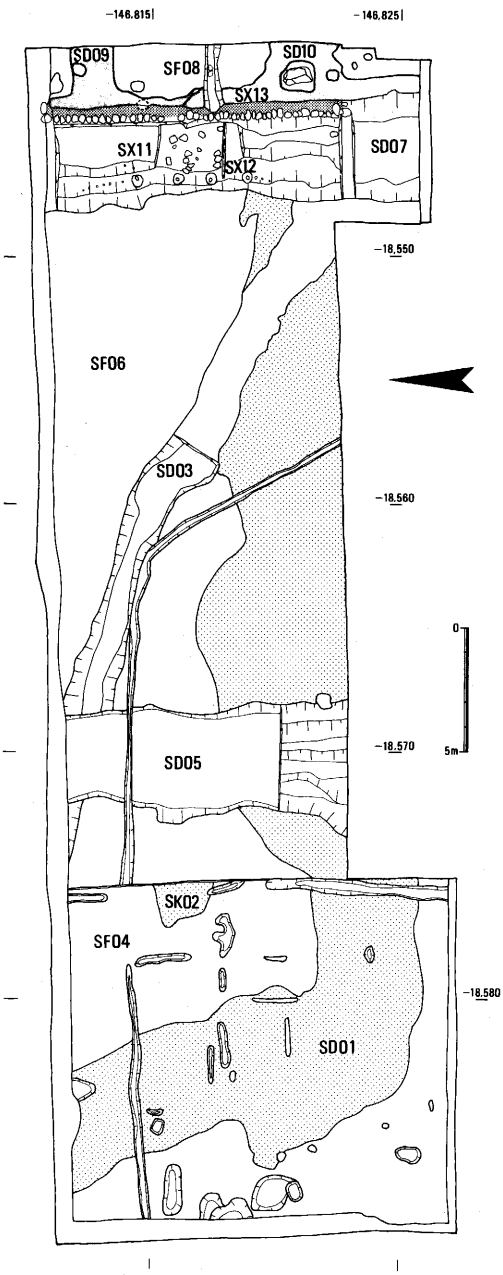
Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市四条大路三丁目112他において実施した三和住宅株式会社届出の分譲住宅建設に伴う事前発掘調査である。調査地は、平城京条坊復元では朱雀大路と四条大路の交差点に相当する。このため、同交差部分の検出を目的に東西48m、南北16m（面積768㎡）の発掘区を設定した。調査期間は、平成７年４月17日から６月２日にかけてである。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の基本的な層序は、上層から黒灰色土、茶褐色土、褐色土、暗灰色粗砂、赤褐色砂質土と続き、地表下約0.6mで、暗灰色粘砂の地山に至る。地山上面での標高は61.5mである。遺構検出面は２面あり、地山上面で、弥生時代前期の遺構を、暗灰色粗砂上面で弥生時代後期から奈良時代の遺構を検出した。以下、時代別に概略を記す。

弥生時代の遺構　地山上面で溝ＳＤ01、土坑ＳＫ02、暗灰色粗砂上面で溝ＳＤ03を検出した。ＳＤ01は、発掘区西半を北から東へＬ字状に曲がる溝。幅約5.5m、検出面からの深さ1.65m。長さ15m分を検出した。埋土の堆積状態から３時期に分けることができる。ＳＤ01Ａは、幅2.5m以上、検出面からの深さ1.6m、断面逆台形を呈する溝である。ＳＤ01Ｂは、ＳＤ01Ａの埋没後に掘り直された溝で、幅5.5m以上、深さ1.7m。断面Ｖ字形を呈する。埋土から前期末の壺が出土。ＳＤ01Ｃは、幅4.0m以上、深さ1.1m。断面Ｕ字形を呈す。

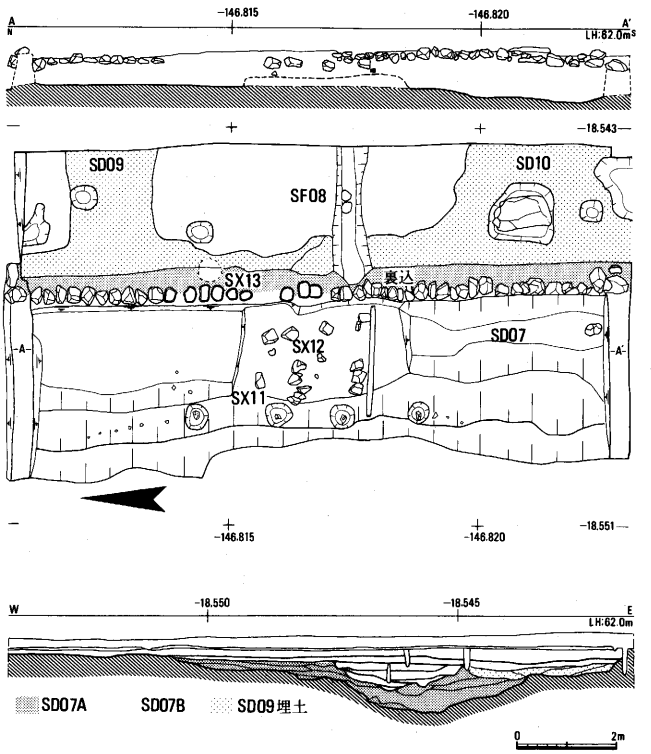


第328次調査　遺構平面図（１／300）

ＳＤ01埋没後の窪みを流れた自然流路である。ＳＤ03は、発掘区中央を北西から南東へ斜行する溝。長さ26m分を検出。幅2.3m、検出面からの深さ0.4m。断面Ｕ字形を呈する。埋土は上下２層に分けられ、下層から後期末の土器片が出土。

飛鳥・奈良時代の遺構　下ツ道・同東側溝、朱雀大路・同東側溝、四条条間路・同南北両側溝、および朱雀大路東側溝に架かる橋を検出した。

下ツ道ＳＦ04　路面幅約16m分を確認した。東側溝ＳＤ05は、長さ11.3m分を検出した。堆積土の状況から溝は改修されたことが窺える。当初の溝ＳＤ05Ａは、幅2.85m以上。検出面からの深さ1.0mである。これが、ある程度埋まった後に掘り直され、幅3.15m以上、検出面からの深さ1.2m以上のＳＤ05Ｂとなる。埋土中から遺物は出土しなかった。



朱雀大路東側溝ＳＤ07平面図・立面・堆積土層図（１／150）

朱雀大路ＳＦ06　路面幅約41.5m分を検出した。路面舗装等は認められなかった。東側溝ＳＤ07は、堆積状況から大きく２時期に分けることができる。ＳＤ07Ａは幅7.15m以上、検出面からの深さ0.95m。断面Ｕ字形を呈す。護岸施設はない。埋土から奈良・平安時代の土器、奈良時代の瓦、人形・平鍬などの木製品が出土した。ＳＤ07Ｂは、ＳＤ07Ａがある程度埋まった後に改修された溝である。幅2.2m以上、検出面からの深さ約0.5mである。埋土から奈良・平安時代の土器と瓦が出土した。

四条条間路ＳＦ08　北側溝ＳＤ09は幅3.0m、検出面からの深さ0.6m。南側溝ＳＤ10は幅2.6m、検出面からの深さ0.8m。埋土から木簡１点が出土した。両側溝心々間距離は8.36m。

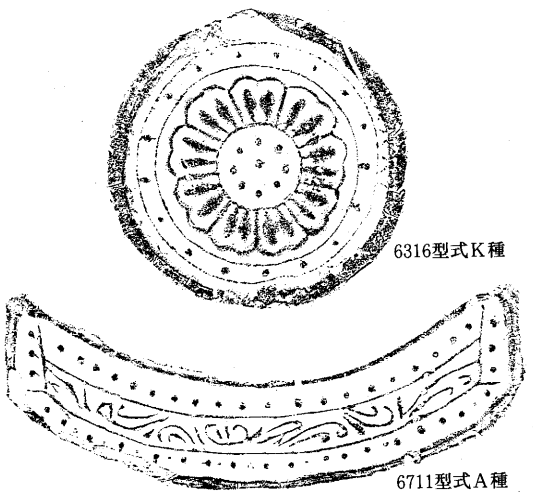
この朱雀大路と四条条間路との交差部分で、橋の遺構ＳＸ11・ＳＸ12を検出した。ＳＸ11は、朱雀大路東側溝ＳＤ07Ａの溝内東西両肩で検出した橋脚である。西肩では南北方向の柱列３間分を確認した。柱間は、北から1.6－1.3－1.5mである。またこの柱列の根元で杭列を併せて検出した。東肩部分では柱穴１を検出したのみである。ＳＸ12は、ＳＤ07の改修の際に自然石を集積して造られた陸橋である。この改修の際に、四条条間路の南北両

側溝は埋められ、路面上も併せて整地される。さらに、ＳＤ07Ｂの東肩部分には、石列による護岸ＳＸ13が造られ、これに取り付くように陸橋ＳＸ12が設けられている。

Ⅲ　出土遺物

今回の調査では、弥生時代から平安時代までの遺物が出土した。その多くは朱雀大路東側溝からの出土遺物である。以下に概略を記す。　（秋山成人）

瓦　類　遺物整理箱で100 箱分が出土した。出土瓦類の大半は丸瓦・平瓦である。その他に軒丸瓦・軒平瓦・塼がある。以下、軒瓦について述べる。



出土軒瓦（１／４）

軒丸瓦は奈良時代のもの６型式７種38点、平安時代のもの８点である。軒平瓦は奈良時代のもの４型式５種54点、型式不明のもの２点、三重弧文１点である。軒丸瓦の型式・種・数量の内訳は、6012Ｆ１点、6133Ｋ３点、6227Ａ１点、6236Ｅ１点、6301Ｂ１点、6316Ｂ１点、6313Ｋ30点である。軒平瓦の内訳は、6663Ｆ２点、6663Ｊ１点、6667Ａ２点、6711Ａ48点（うち16点は朱線がつく）、6721Ｈ１点である。数量的にまとまっているのは、軒丸瓦では6316Ｋ（65.2％）、軒平瓦では6711Ａ（84.2％）であることから、ここで用いられた軒瓦は、上記の組合せであったと判断できる。これまで朱雀大路沿いの調査では、6316型式は、6710型式または6711型式と組み合うとされてきたが、今回の調査では新しい知見を得ることができた。

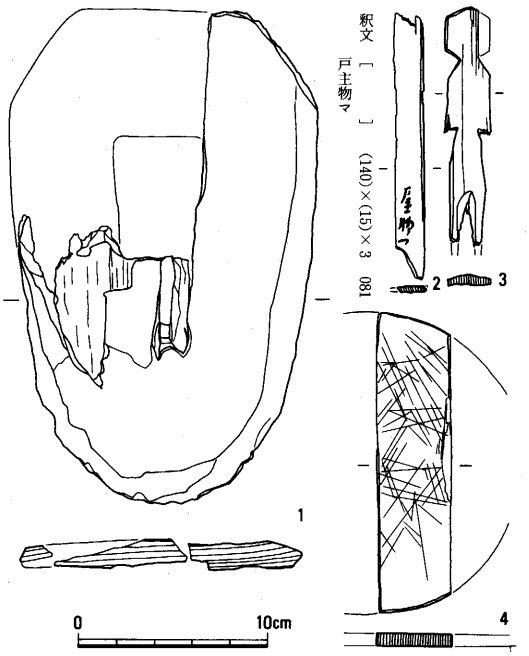
遺構から出土した軒瓦の内訳は、ＳＤ07Ａから15点、ＳＤ07Ｂから55点、素掘りの溝から３点、遺物包含層からは30点である。このうち、ＳＤ07Ｂから出土した55点のうち、下層埋土である茶灰色粗砂から50点がまとまって出土した。なお、上層から平安時代の軒丸瓦（５点）も出土しており、溝の存続時期を知る手がかりとなる。　（山前智敬）

土器類　遺物整理箱で22箱分が出土した。弥生時代から平安時代初頭までのものがある。

弥生時代のものには、ＳＤ01出土の弥生時代前期末の壷・甕、ＳＤ03出土の弥生時代後期末と考えられる高杯・甕・器台がある。奈良時代以降のものには、土師器杯・皿・椀・壷・甕、黒色土器Ａ類、須恵器杯・皿・壷・甕、ミニチュア土器、墨書土器、陶磁器がある。大半がＳＤ07Ａ・Ｂの両溝から出土している。ＳＤ07Ａ・Ｂ出土土器は、いずれも奈良時代後半～平安時代前半のもので、時期的には差異は認められない。　（秋山成人）

木製品　ＳＤ07Ａから直柄横鍬・人形・曲物板・板状・棒状木製品が、ＳＤ10からは木簡が出土している。以下主なものについて記す。１は直柄横鍬の鍬身である。長さ25.9㎝、残存幅15.5㎝、厚さ1.3㎝である。長さに対し幅が狭いが、木目が横方向に通っているので横鍬に分類する。刃部に鉄製のＵ字形刃先を装着する風呂鍬であると考えられる。中央に方形の柄孔があり、その上部は欠損している。柄孔の下部は柄を固定するために、方形にくぼませている。樹種はアカガシ亜属である。２は木簡である。墨書は片面のみで、右半分は削られ判読できなかった。３は人形である。長さ12.4㎝以上、幅2.4㎝厚さ0.5㎝。４は一部しか残存しておらず、曲物の底板か蓋板かは不明。俎に転用されている。復元径15.9㎝、厚さ6.5㎝。

（久保邦江）



出土木製品（１／４）

Ⅳ　まとめ

今回の調査においては、当初の目的の通り朱雀大路と四条条間路の交差部分を検出することができ、なおかつ四条条間路から朱雀大路へわたる橋の存在を確認することができた。これまで、朱雀大路との交差点部分での架橋の存在は確認されたことがなく、平城京条坊復元への新たな資料を得ることができた。以下に今回検出した条坊関連遺構の国土座標を示し、今後の調査研究に資する。さらに、弥生時代の遺構を検出したことにより、この時期の遺跡が周辺一帯に存在することも確認した。

（秋山成人）

検出遺構	Ｘ座標	Ｙ座標
朱雀大路東側溝心	－146,816.75	－18,545.20
四条条間路心	－146,816.76	－18,543.00
四条条間路北側溝心	－146,812.58	－18,543.00
四条条間路南側溝心	－146,820.94	－18,543.00
下ッ道東側溝心	－146,811.00	－18,570.20

国土座標値

平城京朱雀大路の調査における花粉分析

平城京朱雀大路については、史跡平城京朱雀大路跡の整備事業に関わる調査や開発事業に伴う事前の発掘調査により、これまで不明確だった点も序々に明らかになりつつある。

特に、朱雀大路東側溝は、断続的ではあるが数カ所で検出しており、その規模や様相の新たな成果を得ている。また、当時の植生を把握するために、側溝の埋土から試料を採取し、分析調査も併せて進め、これについても興味深い結果を得ている。

ここでは、今年度実施した第328次調査と昨年度行った第321次調査の花粉分析報告を併せて掲載し、今後の植生復元の手がかりにしたい。　（三好美穂）

平城京第321次、第328次調査における花粉分析

天理大学附属天理参考館　金原正明・古環境研究所　金原正子、岡山邦子

平城京第321次調査

試料　平城京第321次調査の朱雀大路東側溝ＳＤ01と築地雨落溝ＳＤ03から採取された13試料である。分析処理は水酸化カリウム処理－フッ化水素酸処理－アセトリシス処理の順に行った。作成したプレパラートを生物顕微鏡で観察し、花粉の同定計数を行った。

ＳＤ01　下位よりＡ層からＤ層は樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属の出現率が高く、スギ、マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属、クリーシイ属などが伴われ、草本花粉ではイネ科が極めて優占し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科などが伴われる。Ｅ層になるとコナラ属アカガシ亜属が減少しイネ科が増加する。伴って、ヨモギ属が増加し、アカザ科－ヒユ科が減少する。この層より上位に向かってコナラ属アカガシ亜属が増加し、イネ科とヨモギ属の草本花粉がやや減少傾向を示す。

ＳＤ03　樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属の出現率が高く、スギ、マツ属複維管束亜属、コナラ属コナラ亜属、クリーシイ属などが伴われ、草本花粉ではイネ科が極めて優占し、ヨモギ属、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科などが伴われる。

植生　ＳＤ01の下部とＳＤ03では周囲はやや草本の多い状態であった。イネ科、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科などが生育し、これらが人里植物であることから、改変された人為的な環境が広がっていたとみなされる。樹木ではカシ類（コナラ属アカガシ亜属）が優勢であり、基本的には照葉樹林が分布していたと推定される。ＳＤ01の上部ではカシ類が一時的に減少しイネ科、ヨモギ属が増加するため、この時期に周辺地域で人為的に樹木が伐採され何らかの開発が行われたと推定される。上位に向かってカシ類は増加し復元する。

平城京第328次調査

試料　平城京第328次調査のＳＤ01（弥生時代前期）、ＳＤ03、下ツ道東側溝ＳＤ05、朱雀大路東側溝ＳＤ07で採取された４試料である。分析処理は水酸化カリウム処理－フッ化水素酸処理－アセトリシス処理の順に行った。作成したプレパラートを生物顕微鏡で観察し、花粉の同定計数を行った。

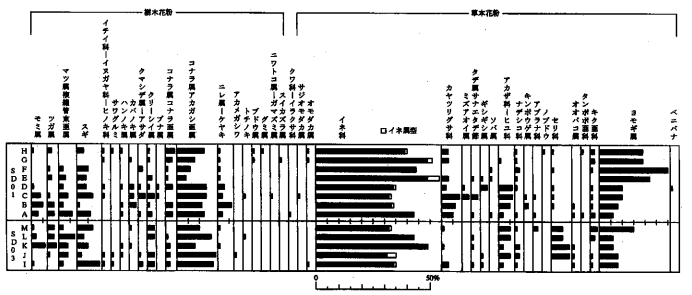
ＳＤ01（弥生時代前期）　樹木花粉の占める割合が高く、コナラ属アカガシ亜属を主にコナラ属コナラ亜属、クリーシイ属、スギなどが出現する。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が主に出現する。

ＳＤ03　草本花粉が多く、イネ科、ヨモギ属の出現率が高い。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が主に出現する。

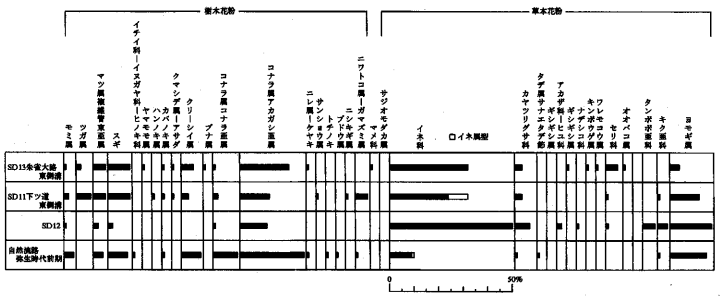
ＳＤ05　樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、スギ、マツ属複維管束亜属、ツガ属が主に出現する。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科、ヨモギ属の出現率が高い。

ＳＤ07　樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、スギ、マツ属複維管束亜属が主に出現する。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属の出現率が高く、イネ属型が出現しなくなる。

植生　ＳＤ01の属する弥生時代前期はカシ類（コナラ属アカガシ亜属）を主とする照葉樹林がやや多く分布していたと推定される。下ツ道東溝ＳＤ05の時期では樹木もやや分布するがカシ類はかなり減少する。イネ属型の花粉の出現から周辺に水田が分布していたと考えられる。朱雀大路東側溝ＳＤ07の時期では前時期とあまり変化しないが水田が衰退したようだ。京域になったことと呼応する。



第321次調査における花粉組成図（花粉総数が基数）



第328次調査における花粉組成図（花粉総数が基数）

7　平城京左京二条四坊・二条条間路の調査　第329次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市法蓮町167-1番地他において実施した、竹川雅晟氏届出の共同住宅建設に伴う事前発掘調査である。当該地は、平城京の条坊復元では左京二条四坊二・三・六・七坪に位置し、調査地内に二条条間路と南北の坪境小路の交差点が想定された。調査面積は、二条条間路の幅員確認のための南拡張区を含め406㎡で、調査期間は平成７年４月20日から同年６月12日までである。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の基本層序は黒灰色土（耕作土0.15ｍ）以下、灰色砂質土、灰色砂礫、灰色シルト、灰褐色粘質土、暗灰色砂質粘土と続き、地表下1.2ｍで黄灰色粘土の地山に至る。この地山上面（標高65.1ｍ）で奈良時代の遺構を検出した。灰色砂礫以下暗灰色砂質粘土までは佐保川の旧河道の堆積とみられ、発掘区全体に広がっており、一時期この地点が河道になっていたことがわかる。

検出した遺構には、二条条間路とその両側溝、掘立柱建物、井戸、素掘りの溝、土坑がある。以下、主なものについて記す。

ＳＦ01　二条条間路である。長さ約50ｍ分を検出した。路面に石敷きなどの舗装は無かった。路面幅は南側溝の全幅が未検出なので不明だが、北側溝の南肩から南側溝の北までは約11ｍある。

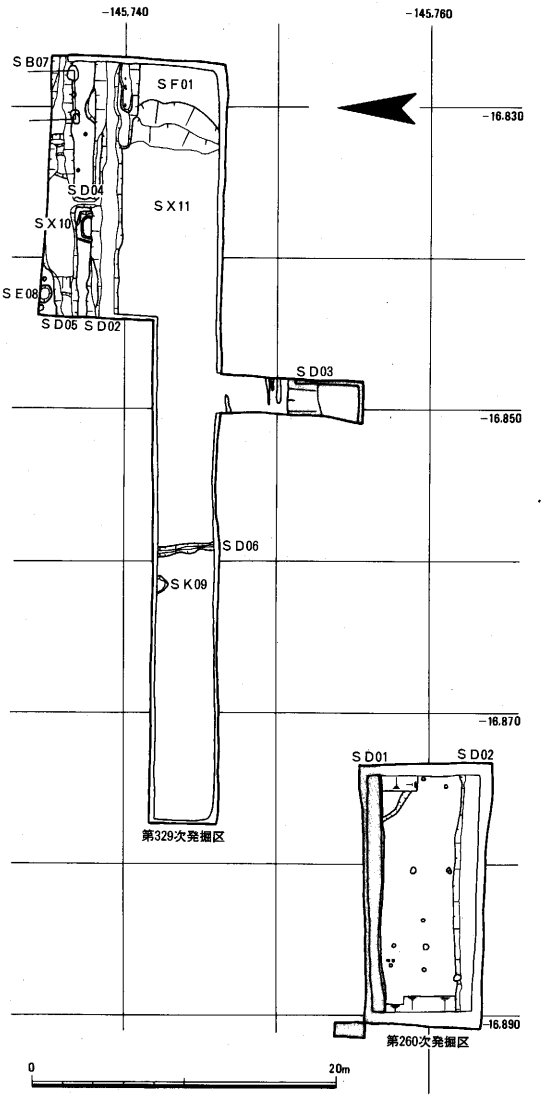
ＳＤ02　発掘区北辺で検出した東西方向の素掘りの溝。二条条間路ＳＦ01の北側溝である。溝の南半が東端部を除いて窪地状遺構ＳＸ11と重複していることから、南肩が削平されている。幅2.0～2.3ｍ、検出面からの深さ0.55～0.7ｍ、長さ17.6ｍ分を検出した。溝底は東から西に向かってゆるやかに下降し、埋土は上層が灰色砂質土、下層が灰色砂である。溝内埋土から奈良時代末頃の土器、軒丸瓦6282型式Ｂａ種、6284型式Ｅ種、塼、砥石、隆平永宝（初鋳796年）が出土した。また発掘区東端で、溝の南肩に沿って打たれた木杭列を検出した。３本分を検出し、さらに発掘区外東へ続く。杭はいずれも短辺約３㎝、長辺約９㎝の角杭で、残存長約12㎝～43㎝である。杭と南岸の間は約0.8ｍで、その間の埋土は黄灰色粘土の地山ブロックが混じる灰色砂質土で、人為的に埋められている。杭間に横板などをあて、裏込めに土を充填した護岸施設と思われる。溝心の国土座標はＸ＝－145,738.700、Ｙ＝－16,842.000である。

ＳＤ03　拡張区南端で検出した東西方向の素掘りの溝。二条条間路ＳＦ01の南側溝である。北半を検出したのみであるが、幅約５ｍ分、長さは2.7ｍ分を確認した。埋土は上層

が暗灰色砂質土、下層が暗灰色砂質粘土である。溝内埋土から奈良時代の土器が出土したが細片のため詳細な時期は不明である。なお、すぐ西に隣接する平城京第260次調査地で南肩を検出している。

ＳＤ04　二条条間路北側溝ＳＤ02とＳＤ05を繋ぐ溝である。幅約0.5m、深さ0.25～0.4m、長さ約1.9mで溝底は南へ下降している。埋土は上層が灰色砂質土、下層が灰色砂である。溝内埋土から奈良時代の土器が出土したが細片のため詳細な時期は不明である。埋土の状況からＳＤ02、ＳＤ04、ＳＤ05は同時期に埋まったことがわかる。ＳＤ05に比べＳＤ02の溝底が低く、ＳＤ04を介してＳＤ05からＳＤ02に排水していたものと考えられる。

ＳＤ05　発掘区北端で検出した東西方向の素掘りの溝である。南肩の一部を検出したのみで、幅1.1～2.0m分、長さは17.6m分を確認した。深さは0.2～0.7mである。溝底は中央付近が浅く、西端は一段深い。深い部分にのみ木の葉や木片の堆積が見られた。埋土は上層が灰色砂質土、中層が灰色粘質土、下層が黄灰色粘土の地山ブロックが混じる灰色粘質土である。溝内埋土から奈良時代中頃から後半にかけての土器、砥石が出土した。ＳＤ02とＳＤ05の間は0.5～1.6mしかなく、築地塀は想定し難い。したがって築地塀の雨落溝ではなく、七坪内の排水施設の可能性が高い。



第329次調査　遺構平面図（1／500）

ＳＤ06　二条条間路ＳＦ01の路面にある南北方向の素掘りの溝である。想定される南北小路西側溝の延長線上にあり、位置からみて二条条間路北側溝と南側溝をつなぐ溝と考えられる。幅0.4～0.6m、深さ0.1～0.15m、長さ3.6m分を検出した。溝底は凹凸が激しい。埋土は暗灰色粘砂である。埋土から奈良時代の土器が出土した。溝心の国土座標はＸ＝－145,745.000、Ｙ＝－16,859.080である。

ＳＢ07　発掘区北東部で検出した東西２間の掘立柱列である。北側は発掘区外に続く。

柱間寸法は1.7m等間である。南北棟建物の南妻柱列と考えられる。遺構の重複関係からＳＤ05が埋まった後、建てられたものであることがわかる。

ＳＥ08　発掘区中央部北端で検出した井戸である。掘形は東西約1.2ｍで、南北は北側が発掘区外へ続き、約0.8m分を確認した。検出面からの深さは約1.5ｍである。底に円形曲物が２段残存していた。掘形埋土は、黄灰色粘土の地山ブロックが混じる黄灰色砂礫、枠内埋土は暗灰色粘土である。枠内から奈良時代後半から末頃の土器が出土した。

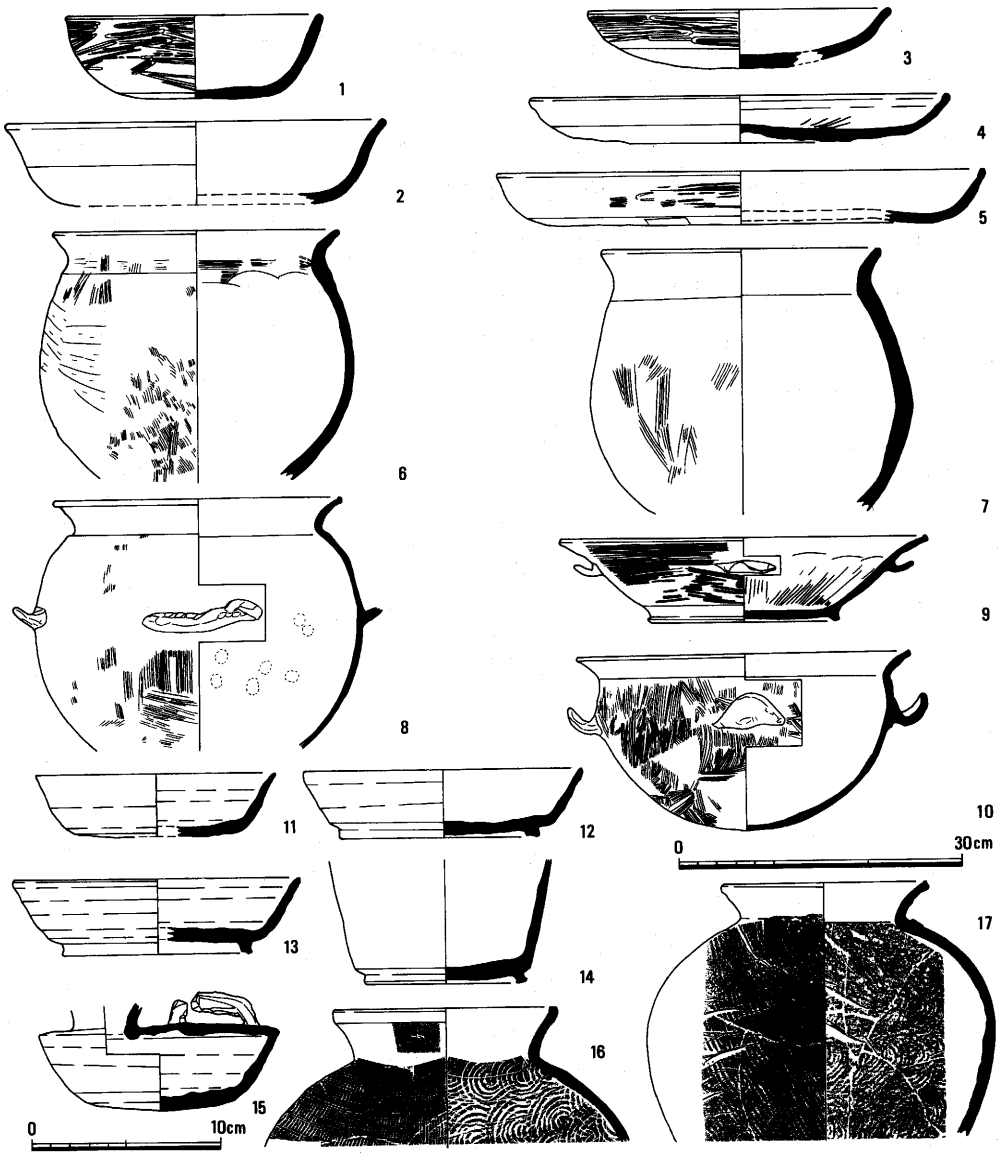
ＳＫ09　発掘区中央部で検出した土坑である。北側は発掘区外へ続く。掘形は東西約1.2ｍで、南北は北側が発掘区外へ続き、約0.8m分を確認した。検出面からの深さは約0.15ｍである。埋土は灰色粘土ブロックが混じる灰色砂である。埋土から奈良時代の土器が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

ＳＸ10　二条条間路北側溝ＳＤ02とＳＤ05の間で検出した弧状にめぐる素掘りの溝である。溝幅0.2～0.4ｍで検出面からの深さ0.04～0.1ｍである。溝端はＳＤ02に接続する。埋土は灰色砂質土である。埋土の状況からＳＤ02、ＳＤ05、ＳＸ10は同時期に埋まったことがわかり、溝の東端から二条条間路北側溝ＳＤ02の流水を取入れ、西端から排水したものと考えられる。ＳＸ10と同様に弧状にめぐり、道路側溝に開口する溝の例には藤原京右京九条四坊の調査で検出されたＳＸ01[1)]、藤原京左京二条二坊西北坪の調査で検出されたＳＤ5113[2)]などがある。両者共に道路側溝の流水を宅地内に引き込み、排便後、水を再び側溝に流し出すという水洗式トイレ遺構と解釈されている[3)]。今回のＳＸ10は藤原京の例に比べ規模が小さく、浅い点が異なるが、形態的に類似していることから今回検出した遺構ＳＸ10も水洗式トイレ遺構の可能性も考えられ、現在埋土の分析を進めている。なお藤原京右京九条四坊の調査、藤原京左京二条二坊西北坪の調査、今回の調査の三調査ともに道路と宅地とを分ける遮塀遺構は確認されていない。おそらく生け垣のような簡単な遮塀施設であったものと思われる。

ＳＸ11　発掘区東部中央から西側にかけて広がっている窪地状の遺構である。南北の肩はそれぞれＳＤ02、ＳＤ03と重複しており約14ｍ、西は発掘区外へ続き、約24ｍ分を確認した。深さ0.2～0.3ｍである。全体の形状は不明である。底は平坦である。埋土は灰色粘土である。埋土から古墳時代中期の埴輪片、奈良時代後半から末頃の土器、軒平瓦6691型式Ａ種・6702型式Ｇ種、鉄釘、砥石、獣骨が出土した。

Ⅲ　出土遺物

二条条間路両側溝、素掘りの溝、井戸、柱穴、土坑から遺物整理箱で32箱分の遺物が出土した。遺物の大半はＳＤ02、ＳＤ05から出土した。出土遺物には土師器、黒色土器、須恵器、瓦質土器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、塼、漆塗木椀、鉄釘、鉄滓、銭貨、砥石がある。ここでは残存状態の良い土器についてのみ報告する。　（原田憲二郎、田林香織）



ＳＤ02　出土土器（１／４、８～10•16•17は１／８）

土器類　図示したものは、ＳＤ05から出土したものである。１～10が土師器、11～17が須恵器で、調整手法などから見て奈良時代中頃のものであろう。この他にもＳＸ11から奈良時代後半から末頃の土器が出土している。　（池田裕英）

注

1）「藤原京右京九条四坊の調査」橿原市教育委員会『平成５年度奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会　1994

2）奈良国立文化財研究所『藤原京左京二条一坊・同二条二坊発掘調査報告』1987

3）奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報　1994』1994

平城京第329次調査における花粉分析

天理大学附属天理参考館　金原正明・古環境研究所　金原正子・岡山邦子

試料　平城京第329次調査の地山、二条条間路側溝ＳＤ02、Ｕ字形溝ＳＸ10で採取された５試料である。分析処理は水酸化カリウム処理－フッ化水素酸処理－アセトリシス処理の順に行った。作成したプレパラートを生物顕微鏡で観察し、花粉の同定計数を行った。なお、寄生虫卵も併せて分析を行った。

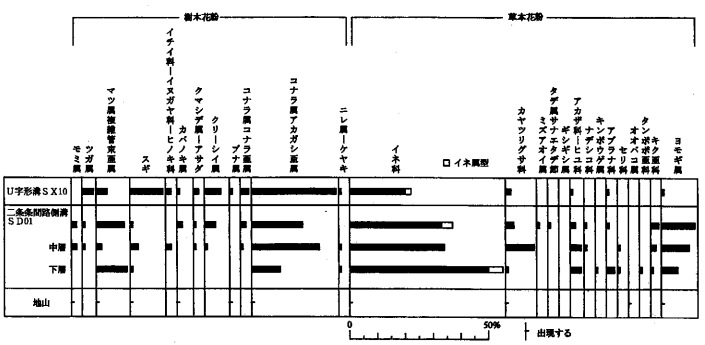
地山　地山の堆積物には花粉がほとんど含まれていない。

ＳＤ02　やや草本花粉のほうが多く、イネ科、ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科の順に出現率が高い。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属が主に出現する。上位に向かって、イネ科は減少傾向を示し、ヨモギ属は増加する。

ＳＸ10　樹木花粉の占める割合が高く、コナラ属アカガシ亜属を主に、スギ、クリ－シイ属などが伴われる。草本花粉ではイネ科の出現率が高い。

なお、寄生虫卵はＳＤ02二条条間路側溝中層から鞭虫卵１が検出されたのみである。

植生および考察　地山は花粉が堆積するような水湿地の堆積環境でなかったか、水流などによって分別を受けて堆積されたことが考えられる。ＳＤ02二条条間路側溝ではイネ科を主にヨモギ属などが周囲に生育し人為的な環境が広がっていたと推定される。地域的な森林としてはカシ類（コナラ属アカガシ亜属）を主にニヨウマツ類（マツ属複維管束亜属）が分布していた。ＳＸ10Ｕ字形溝では樹木がやや多く分布していたとみなされる。花粉組成はＵ字形溝ＳＸ10と二条条間路側溝ＳＤ02でかなり異なり、同時期の堆積かどうか疑問視され、また異なる堆積環境であったことも考える必要がある。なお、Ｕ字形溝ＳＸ10からは寄生虫卵が検出されず、便所遺構かどうかはわからなかった。



第329次調査における花粉組成図（花粉総数が基数）

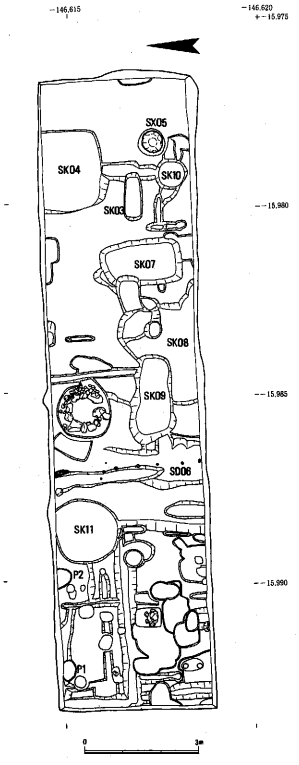
8　平城京左京四条五坊十六坪の調査　第330次

本調査は、奈良市三条町544番地において実施した、福村佳子氏届出の個人住宅新築工事に伴う事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では左京四条五坊十六坪に相当し、十六坪の西辺のほぼ中央に位置する。調査地の西側には、九坪と十六坪の坪境小路が想定されている。調査は、この小路の確認と十六坪内の様相を把握することを目的として、東西17.5m、南北4.0m（調査面積70㎡）の発掘区を設定して実施した。調査期間は、平成７年４月26日から５月17日までである。

発掘区内の層序は、厚さ約0.2mの盛土の下に、黒灰色土（0.2m）、暗褐色土（0.1m）、暗茶褐色土（0.1m）があり、地表面から0.6mで地山である黄褐色粘土に達する。地山は、西へ向かって緩やかに下降しており、標高は東端で68.8m、西端で68.6mである。暗褐色土上面と地山上面の二面で遺構を確認したが、条坊関係の遺構は検出できなかった。

暗褐色土上面では、現代の井戸、近世の土坑、素掘りの溝を検出した。井戸は、最近まで使用されていたもので、湧水が著しく枠内の構造を確認することはできなかった。土坑ＳＫ07～11は、いずれも黒灰色土が堆積し、17～19世紀の土師器や陶磁器、瓦類が出土した。素掘りの溝ＳＤ06内には、直径約５cmの杭が0.5m間隔で南北一列に打たれていた。暗渠の蓋受けの杭と考えられる。重複関係からＳＫ09・11よりも古いことが判る。

地山上面では、柱穴、土坑、埋甕、素掘りの溝を検出した。発掘区西半部で柱穴群を検出したが、調査面積が狭小のためか建物としてはまとまらない。発掘区の北西部で検出した２柱穴（Ｐ１・Ｐ２）からは奈良時代の土器片や平瓦が出土しており、調査地付近に奈良時代の建物が残存している可能性が考えられる。土坑ＳＫ03は、２～５cm大の礫のみで埋められていた。出土遺物がなく時期は不明である。土坑ＳＫ04は、北半部は発掘区外へ続くため全体の規模は不明。底部が湧水層まで達していないので、井戸とは考えにくい。近世の陶磁器片と奈良時代の瓦片が少量出土したのみである。ＳＸ05は、直径0.7mの平面円形の掘形に、19世紀代の瓦器大甕が据えられていた。甕は上部が欠損しており、体部下半から底部にかけてが残存するのみである。　（三好美穂）



第330次調査　遺構平面図（1／200）

9　平城京左京二条七坊八坪の調査　第332次

Ⅰ　はじめに

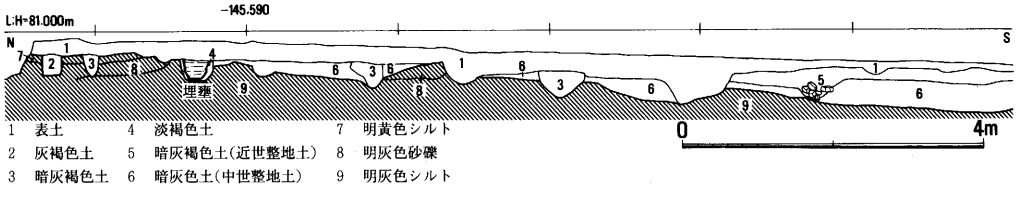
本調査は、奈良市西笹鉾町４において実施した、丸紅株式会社届出の共同住宅建設に伴う発掘調査である。調査地は左京二条七坊八坪の東南部で、また近世奈良町の北部にあたり、中世以来町として発達してきた所でもある。調査地の北東約50ｍの地点では平城京第96次調査を行っており、中世の井戸、土坑を検出している。発掘区は東西10ｍ、南北49ｍで、調査面積は490㎡である。調査期間は平成７年６月１日から８月４日までである。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の層序は北端では、厚さ約0.1ｍの表土下ですぐに暗橙色シルトの地山となる 。地山は南へ緩やかに下降し、発掘区南端では表土（0.1ｍ）以下、暗灰褐色土（0.2ｍ）、暗灰色土（0.3ｍ）で明灰白色シルトの地山となる。地山の標高は、概ね80.0～81.1ｍである。遺構検出は地山上面で行なった。調査の結果、奈良・平安・鎌倉・江戸・明治時代の遺構を検出した。以下各時代ごとに主要なものを記す。

奈良時代の遺構　掘立柱建物１棟、土坑１を検出した。ＳＢ01は桁行４間以上、梁間２間（6.0ｍ）と考えられる東西棟の掘立柱建物で、発掘区外東西に続く。柱間は桁行3.0ｍ等間である。ＳＫ02は、南北2.0ｍ、東西3.6ｍ以上の平面不整円形の土坑である。

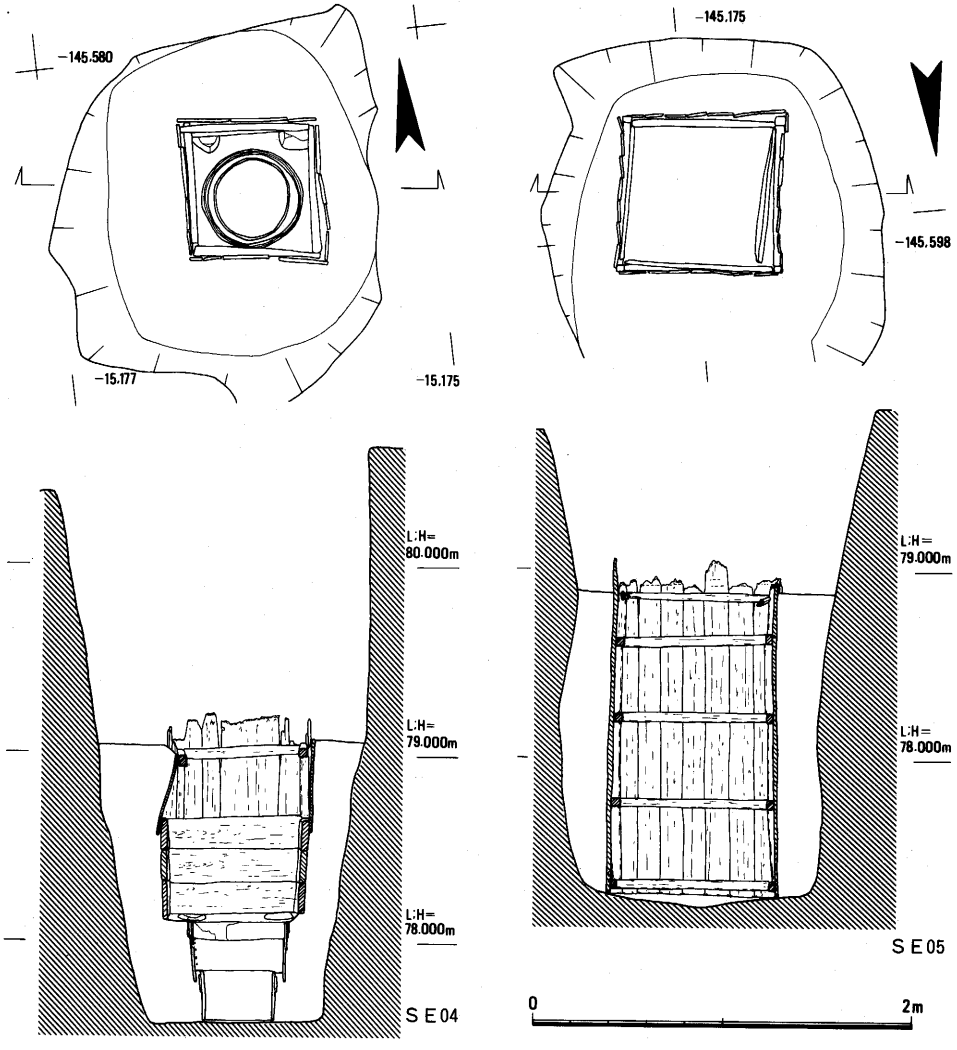
平安・鎌倉時代の遺構　井戸３基、土坑、柱穴を検出した。ＳＥ03は一辺約1.4ｍの平面隅丸方形の掘形で、深さは1.7ｍである。井戸枠は、掘形の底に据えた径0.4ｍの曲物が１段分（６㎝）残る。枠内から11世紀末の遺物が出土した。ＳＥ04は東西1.7ｍ、南北1.9ｍの平面隅丸方形の掘形で、深さは3.0ｍである。井戸枠は上下３段の構造で、底から1.6ｍ分が残る。掘形の底に径0.4～0.5ｍの曲物を３段分（0.5ｍ）重ね、その上は内法一辺0.8ｍの方形横板組で、横板を３段（0.5ｍ）に組む。さらにその上は内法一辺0.75ｍの方形縦板組隅柱横桟どめの枠である。隅柱は長さ45㎝、一辺４㎝の角材で、これを横板組の四隅に立てその上に横桟を置き、さらにその上に隅柱の角材を立てる。枠内から12世紀末の遺物が出土した。ＳＥ05は東西1.8ｍの平面隅丸方形の掘形で、深さは2.6ｍである。井戸枠



第322次調査　発掘区東壁土層図（１／100）

は方形縦板組隅柱横桟どめで、内法一辺0.85m四方で、底から1.7m分が残る。ＳＥ04の縦板組と同様に、隅柱は長さ45cm、一辺４cmの角材で、横桟と交互に積み上げる。縦板は東西南北いずれも７枚である。枠内から13世紀前半の遺物が出土した。

江戸時代の遺構　井戸２基、土坑、柱穴、素掘りの溝、瓦窯１基を検出した。遺構は、17世紀後半から19世紀前半までで、大きく４時期に分けられる。17世紀後半の遺構にはＳＥ06・07、ＳＫ08～12がある。ＳＥ06は円形石組井戸で、径約2.2mの平面円形の掘形で深さは1.8mである。石組は内法径0.8mの平面円形で、底から0.5m分残る。石組を抜き取った跡からは土器、陶磁器が大量に出土した。ＳＥ07も円形石組井戸で、径約1.8mの平面円形の掘形で深さは2.1mである。石組は内法径0.9mで、底から0.7m分残る。ＳＫ08～12



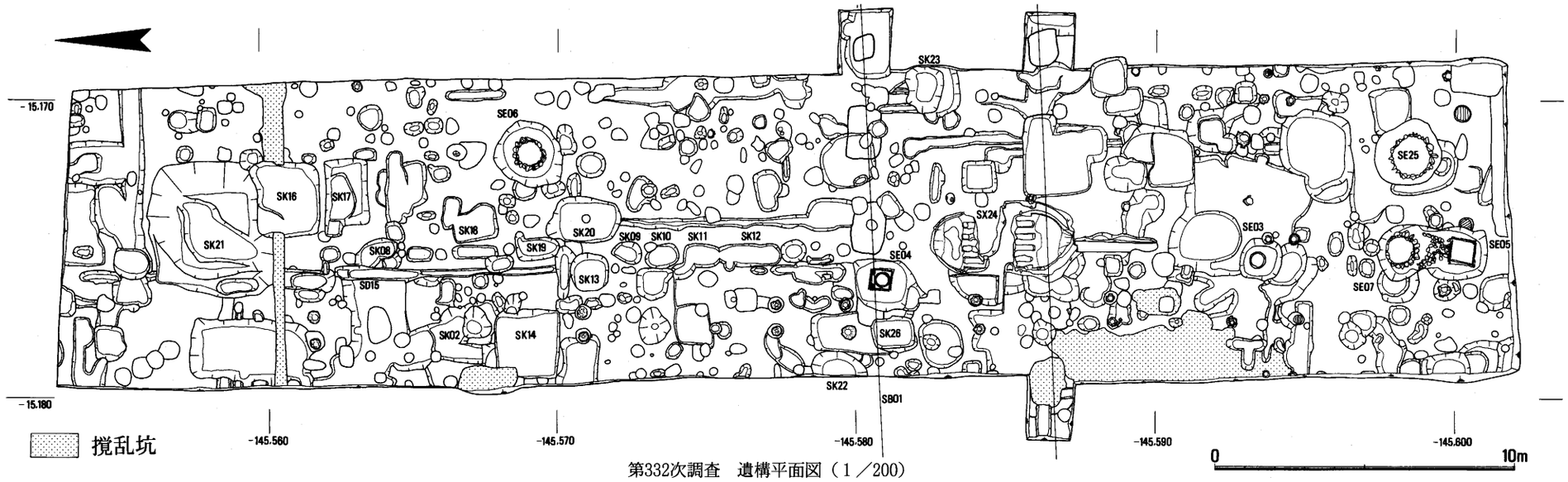
井戸ＳＤ04・05　平面・立面図（１／40）

は東西約0.8m、南北約0.5～1.0m、深さ約0.25mの南北に長い平面楕円形の土坑である。これらの土坑は南北一直線上に並び、宅地の境界線に沿って掘られた可能性が考えられる。17世紀末～18世紀初めの遺構にはＳＫ13・14、ＳＤ15がある。ＳＤ15は幅約0.2m、深さ約８～35cmの素掘りの溝で、所々で途切れる部分があるが、発掘区北端から南へ約25m分ある。宅地の境界線を示す溝と考えられる。18世紀中頃の遺構にはＳＫ16～20がある。ＳＫ16は平面長方形で東西2.4m、南北2.2m、深さ0.7m、ＳＫ17は平面長方形で東西2.2m、南北1.4m、深さ0.8m、ＳＫ20は平面隅丸長方形で東西1.6m、南北2.2m、深さ0.6mの土坑である。いずれも壁はほぼ垂直に近く立ち上がり、底は平坦である。ＳＫ18～20の土坑は南北に３つ並び、これらも宅地の境界線に沿って掘られたものと考えられる。19世紀前半の遺構にはＳＫ21～23、ＳＸ24がある。ＳＫ21は一辺9.0mの平面方形の土坑で、深さは1.1mある。土器、陶磁器、焼け歪んだ瓦、窯壁、木製品が大量に出土した。ＳＸ24は瓦窯で、単房有桟道式の地上平窯、所謂「ダルマ窯」である。天井・壁など地上部分はすでに失われている。平面形は東西2.5m 、南北4.8mの楕円形である。中央部の焼成室は完全に失われており、その南北にある燃焼室が残っている。燃焼室は南北とも平面半円形で、幅1.8m、長さは北側が0.95m、南側が1.2mである。横断面は船底形で、深さは最深部で0.4mある。床面は焚口と焼成室に向って緩やかに上へ傾斜してゆく。燃焼室から焼成室に向けて５本の焔道があり、その間に４本の桟道がある。桟道は幅0.2mで、廃瓦とスサ入り粘土を交互に重ねて作られており、高さ0.35m分残っている。焔道は幅0.2mで、約27°の傾斜で燃焼室へ上ってゆく。焼成室の平面規模を残存部から推定すると、東西1.9m以内、南北2.4m以内であることが判り、窯壁と隔壁の厚さを考慮すると、その規模は1.8m四方（六尺四方）に復元することができる。窯壁はスサ入り粘土で塗固められ、粘土は３層ある。少なくとも３回の補修が想定出来る。また粘土内には廃瓦がいくらか積まれているが、部分的に見られる程度で、壁は主に粘土で築かれていたものと考えられる。燃焼室の底には厚さ0.5cmほど炭層が堆積し、その上には天井と壁の窯壁が積る。瓦窯の断割り調査で、窯構築の際の深さ約0.45mの掘形を確認した。瓦窯の西側には瓦窯とほぼ同規模の楕円形の土坑が重複して認められることから、ＳＸ24より古い瓦窯が１基存在していたことが考えられる。

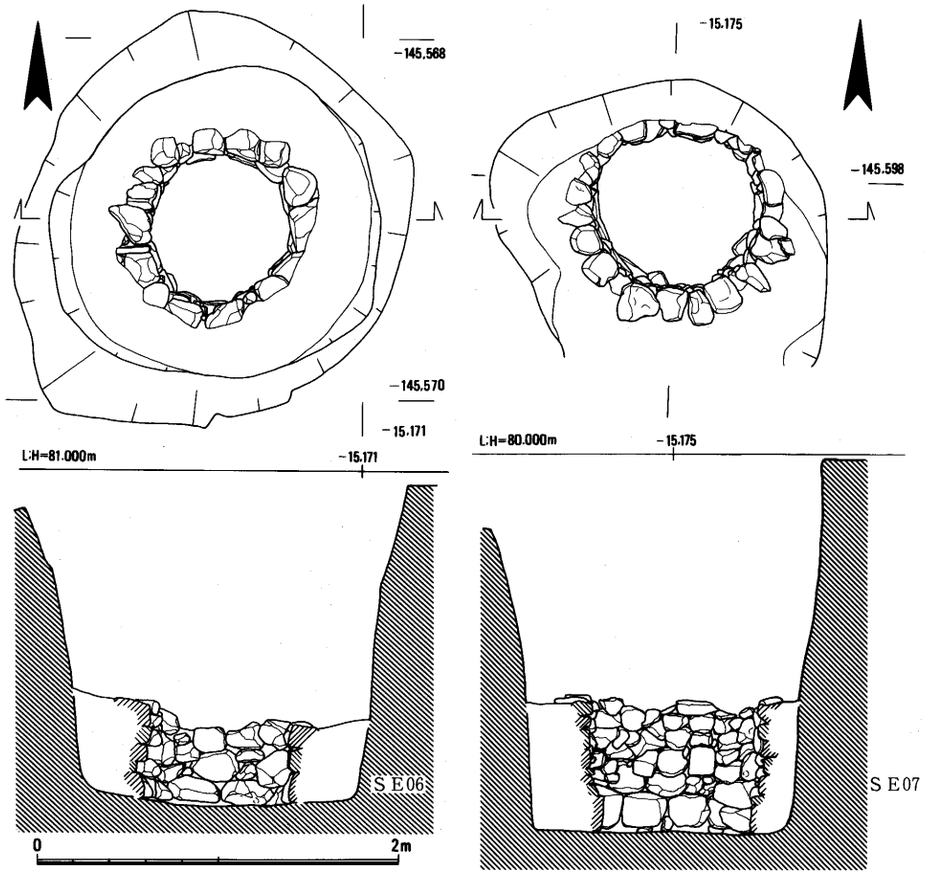
明治時代の遺構　ＳＥ25は円形石組井戸で、石組の内法径は1.2mである。その他、時期不明の埋甕遺構が７基ある。埋甕はいずれも瓦質土器または国産陶器であり、江戸時代以降のものである。

Ⅲ　出土遺物

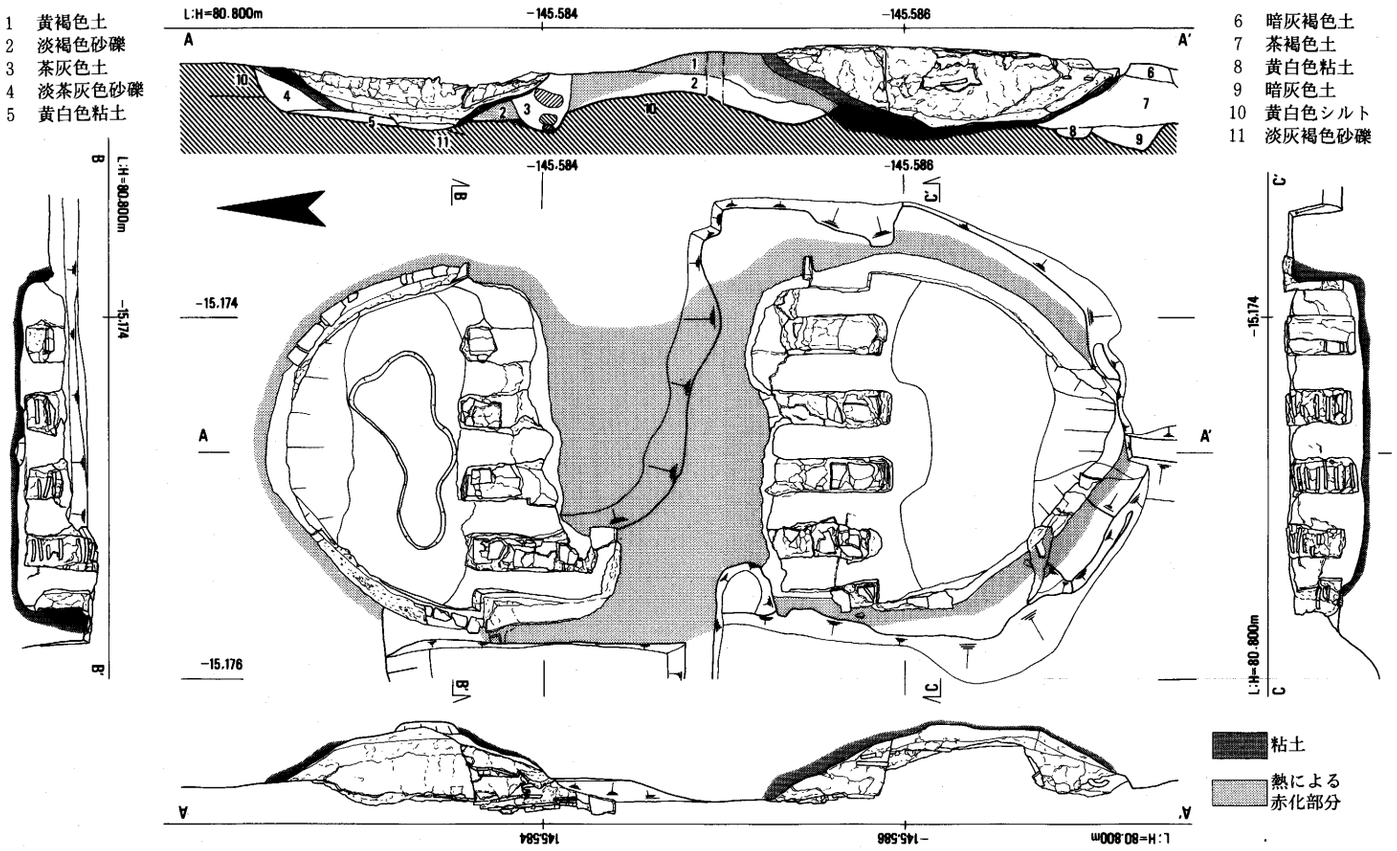
出土遺物には、奈良・平安・鎌倉・江戸・明治時代のものがある。大半が江戸時代のもので、瓦窯に関するものが多くを占める。以下主要なものについて記す。



第332次調査　遺構平面図（1／200）



井戸ＳＥ06・07　平面・立面図（1／40）



瓦窯ＳＸ24　平面・立面図（1／40）

土器類　遺物整理箱89箱分出土した。井戸ＳＥ06、土坑ＳＫ16出土のものについて記す。

ＳＥ06からは、土師器皿（１～20）・鉢（21）・焙烙（23～25）、瓦質土器壷（22）・三足盤（26）・甕、国産陶器椀（34～38）・皿・擂鉢（39・40）・甕、国産磁器碗（27～32）・皿（33）が、遺物整理箱９箱分出土した。国産陶器には、肥前（34～36）、瀬戸美濃（37・38）、丹波（39）、信楽（40）等がある。17世紀後半のものである。

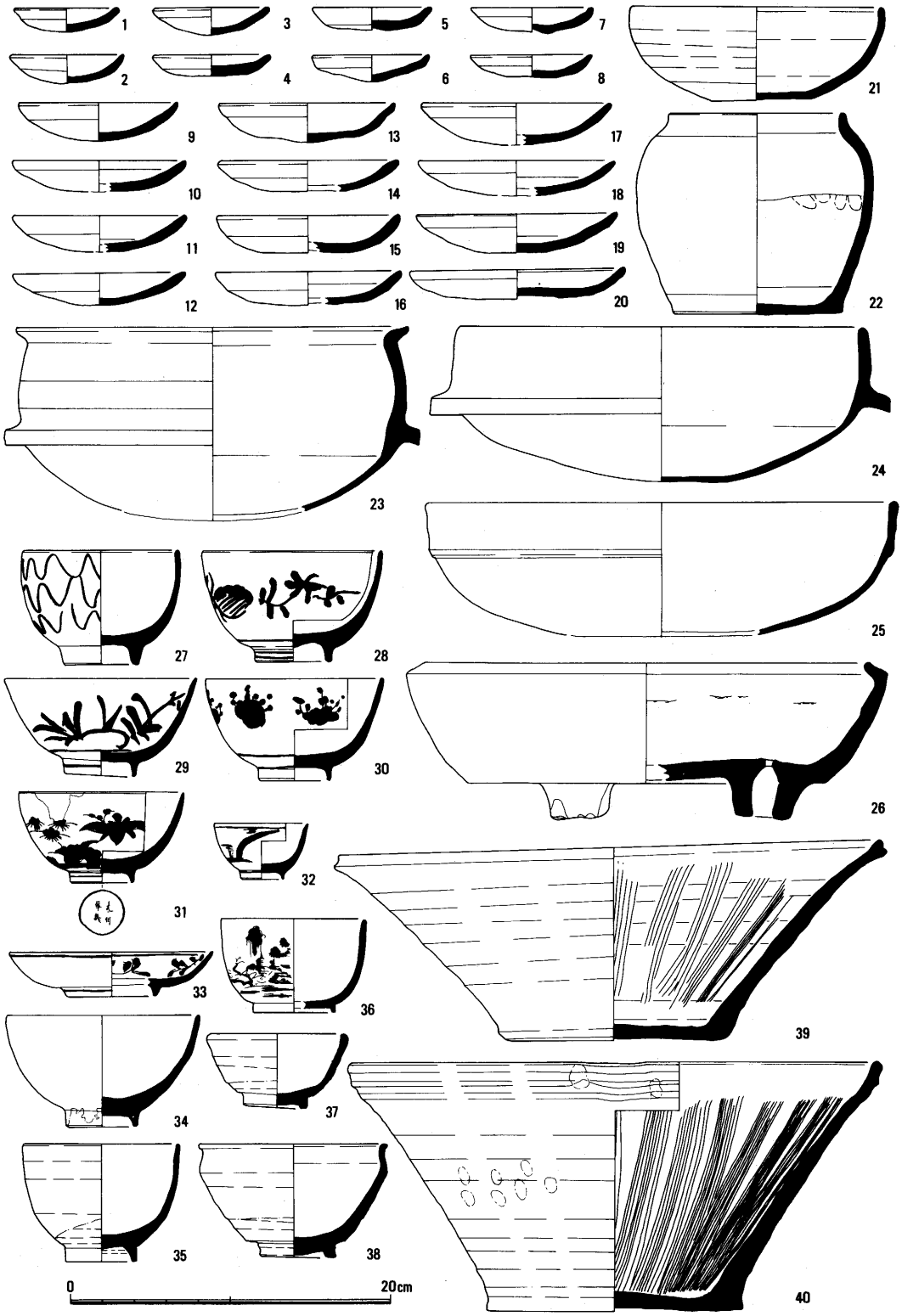
ＳＫ16からは、土師器皿（41～57）・焙烙（61～65）、瓦質土器鉢（59・60）、国産陶器皿（58）・椀（74・75）・皿（73）・鉢（76・77）・擂鉢（78）・甕（79）、国産磁器碗（66～70）・皿（71・72）が、遺物整理箱５箱分出土した。国産陶器には、肥前（73・75・76）、京焼（74）、瀬戸美濃（77）、信楽（78・79）等がある。58は土師質で、透明釉と緑釉を掛ける。型作りである。18世紀中頃のものである。（中島和彦）

瓦　類　遺物整理箱で90箱分が出土した。軒丸瓦・軒平瓦・軒桟瓦・丸瓦・平瓦・桟瓦のほか、道具瓦には面戸瓦・熨斗瓦・雁振瓦・鳥衾瓦・塼がある。軒丸瓦は24点、軒平瓦は12点、軒桟瓦は８点である。奈良時代のものは３点で、軒平瓦6661型式Ｂ種・6691型式Ａ種・6732型式Ｖ種が各１点である。中世のものもあるが、大半は近世のものである。以下、19世紀前半の瓦窯ＳＸ24と土坑ＳＫ21から出土した瓦類について述べる。

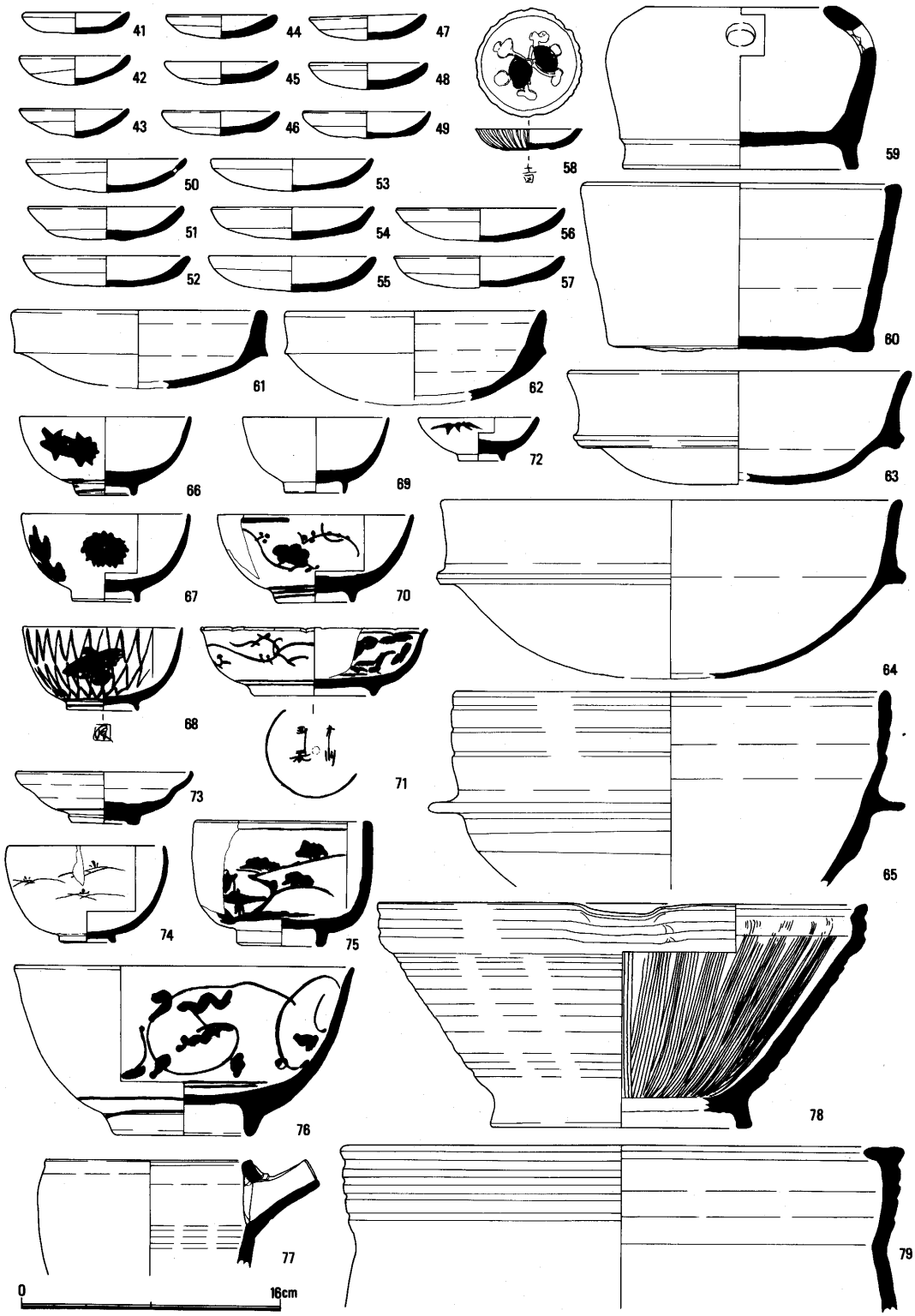
ＳＸ24からは、遺物整理箱で17箱分が出土した。大半が桟瓦で、他に少量の丸瓦・平瓦と軒瓦２点のみである。桟瓦は、相欠きのあるものがほとんどで、屋根に葺きあげた状態で棟から軒先を見てすべて右側に桟がある。また、後述するＳＫ21出土の相欠きのある桟瓦と法量が同じである。軒瓦には軒丸瓦（１）と軒平瓦（２）がある。いずれも出土状態から瓦窯の最終操業時の窯壁部材であったことがわかる。桟瓦には、焼けひずんだ一群とスサ入りの粘土（以下、粘土と略す）が付着した一群とがある。丸瓦・平瓦には焼けひずんだものはなく、粘土が付着したものが平瓦に少量みられるだけである。付着していた粘土はすべて焼けしまっていることから、窯壁を構築する際に塗りこめられたものであることがわかる。

ＳＫ21からは遺物整理箱で38箱分が出土した。大半は桟瓦である。近世の軒瓦は８点あり、内訳は軒丸瓦（３・４）２点、軒平瓦（６）１点、軒桟瓦（５・７～10）５点である。桟瓦には、全長28cm×幅26cmで相欠きのあるものと、31cm以上×24cmで相欠きのないものの２種類がある。前者が出土量の大半を占め、粘土が付着するものも前者に限られる。丸瓦は全長約20cm、玉縁長約３cm、径約12cm、平瓦には全長約20cmのものが多い。道具瓦には面戸瓦２点、雁振瓦４点、鳥衾瓦１点、塼７点がある。塼はいずれも全長14cm以上、幅約17cm、厚さ約４cmで、両端面以外の面にはかき目があり、焼けしまった粘土が付着する。

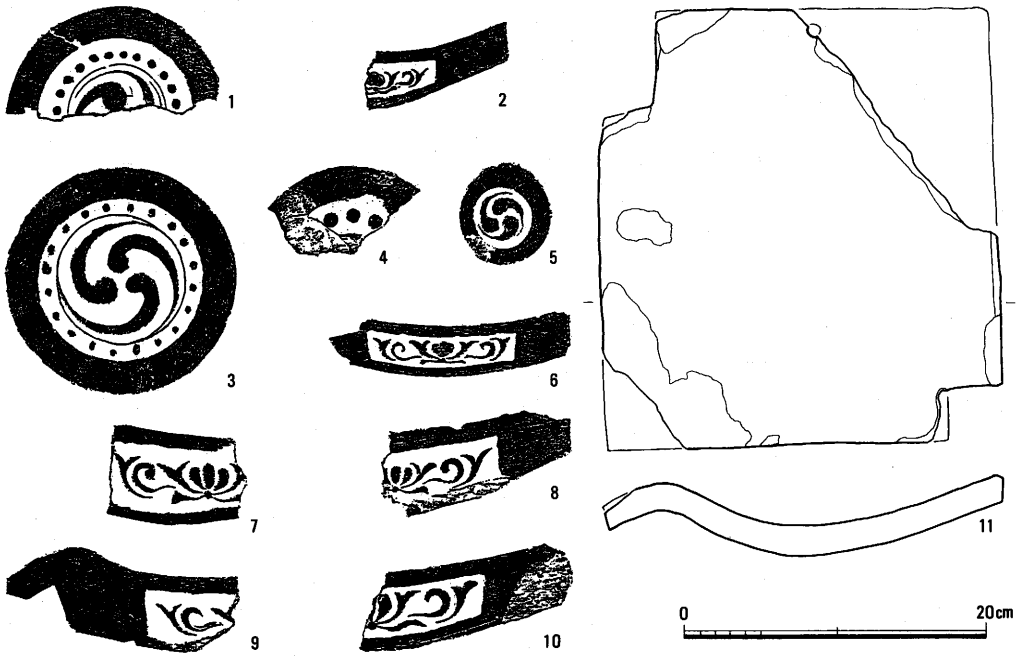
ＳＸ24、ＳＫ21から出土した相欠きのある桟瓦の中でも焼けひずんだ一群は、出土量も多く、製品の可能性が考えられる。焼けひずみのないものは、出土量が少なく製品である



井戸ＳＥ06　出土土器（1／4）



土坑ＳＫ16　出土土器（１／４）

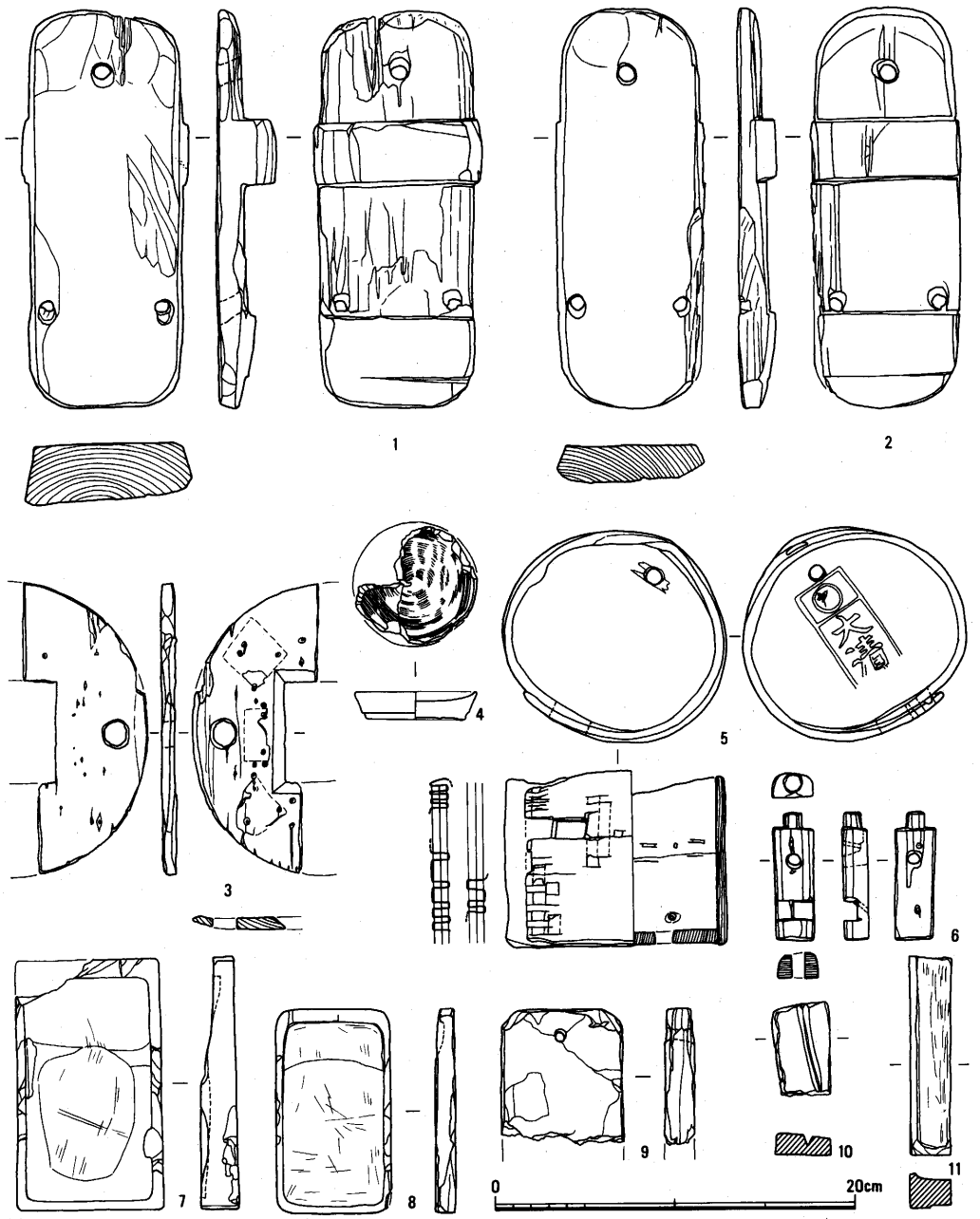


瓦窯ＳＸ24・土坑ＳＫ21　出土近世軒瓦、瓦窯ＳＸ24　出土桟瓦（１／５）

かどうかは不明である。焼けしまった粘土が付着する平瓦と塼は、窯壁部材であったと考えられ、塼はＳＸ24で使われた可能性は少なく、別の窯の部材と思われる。　（山前智敬）

木製品　江戸時代以降の土坑・井戸から下駄・曲物・托・柄杓・漆椀片等が出土した。ここでは、19世紀前半の土坑ＳＫ21と明治時代の井戸ＳＥ25から出土したものについて報告する。１・２はいずれも連歯下駄である。ともに平面形が隅丸長方形であるが、２はやや細身で角部が丸い。後の歯は、下面の踵部分まで磨耗している。１・２とも台上面の磨耗の仕方から右足用であったと考えられる。１は長さ21.9cm、幅8.4cm、高さ3.2cm、台の厚さ1.9cm。板目材を使用。２は長さ22.0cm、幅8.2cm、高さ2.1cm、台の厚さ1.5cmである。柾目材を使用。３は用途不明品である。半分以上欠損しており、反転復元をすると銭形になる。表面に方形の鉄金具を釘で留めていた痕跡が３箇所あり、行灯・提灯等の灯明器具の一部の可能性がある。長さ16.2cm、幅6.9cm、厚さ0.7cm。板目材を使用。４は挽物の托である。直径6.7cm、高さ1.5cm。底は僅かに窪み高台はつかない。板目材の縦木取りである。５は曲物柄杓の身である。側板は２箇所止めで、底板とは木釘で結合されている。底板には直径１cmほどの円孔が穿たれており、裏面には中央は長方形の焼印があり、「大□（濱カ）」と読める。直径12.6cm、高さ9.8cm。６は円形の太枘を造り出し、孔を穿ち、相欠き仕口状の加工を施す。組物の一部の可能性がある。長さ6.2cm、幅2.1cm、厚さ1.4cm。５・６はＳＥ25から、それ以外はＳＫ21から出土した。

石製品　井戸・土坑から硯・温石・砥石が出土した。７・８はともに粘板岩製の硯であ



出土木製品・石製品（1／4）

る。7の墨堂は使用によってかなり窪んでいる。9は滑石製の温石である。10は流紋岩製の砥石である。刃物を研いだと思われる断面V字形の溝がある。11は破損した粘板岩製の硯を転用した砥石である。割れ面も研磨によって平滑になっている。9は18世紀末の土坑K14、10は18世紀中頃の土坑SK13から、7は明治時代の土坑SK26、8・11は明治時代の井戸SE25から出土した。（久保邦江）

10　平城京左京五条六坊二坪・東五坊大路の調査　第333次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市西木辻町５－２において実施した、奈良市立済美小学校屋内運動場増改築に伴う事前の発掘調査である。調査地は平城京の条坊復元では左京五条六坊二坪の西端と東五坊大路に相当する。発掘調査は東西35ｍ、南北11ｍの発掘区（面積385㎡）を設定して行なった。調査期間は平成７年８月３日から同年９月19日までである。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の基本層序は、盛土（0.2～0.4ｍ）、黒灰色土（旧耕作土、0.15～0.3ｍ）と続き黄褐色土あるいは茶褐色砂礫の地山に至る。地山は東から西へ向かってなだらかに下る。この地山上面（標高70.3～69.9ｍ）で古墳・奈良・平安時代の遺構を検出した。また調査区西半部では、古墳・奈良時代の土器を含む整地層を確認しており、この層の直下で古墳時代の遺構を検出した。整地土は暗茶褐色土で厚さ0.1～0.2ｍである。

検出した遺構には古墳時代の溝・土坑、奈良時代の道路、平安時代の井戸、時期不明の掘立柱建物・土坑がある。以下、主なものについて記す。

古墳時代の遺構　素掘りの溝３条、土坑２がある。

ＳＤ01　発掘区東半部で検出した東で南に振れる素掘りの溝である。幅0.4～0.7ｍ、検出面からの深さ約0.1ｍ、長さ約8.6ｍである。埋土は茶灰色土である。溝内埋土から古墳時代の須恵器・土師器が出土したが、小片のため詳細な時期は不明である。

ＳＤ02　発掘区西半部で検出した東で南に振れる素掘りの溝である。北西、南東ともに発掘区外へ続く。幅約0.6～1.0ｍ、検出面からの深さ約0.1ｍである。撹乱の為、途切れている箇所もあるが、長さ約13ｍ分を検出した。埋土は暗茶灰色土である。溝内埋土から６世紀後半の土師器・須恵器が出土した。

ＳＤ03　ＳＤ02の南側で検出した東で南に振れる素掘りの溝である。北西は発掘区外へ続くが、南東は撹乱によって削平されており、発掘区外へ続くかどうかは不明である。幅約0.9～1.1ｍ、検出面からの深さ約0.1ｍで、長さ約８ｍ分を検出した。埋土は暗茶灰色土である。溝内埋土から５世紀後半の土師器・須恵器が出土した。

ＳＫ04　発掘区中央部南側で検出した土坑である。東西約1.6ｍ、南北約1.8ｍの平面不整円形で、検出面からの深さ約0.35ｍである。埋土は暗茶灰色砂礫である。埋土から６世紀後半の土師器・須恵器が出土した。

ＳＫ05　発掘区南西部で検出した土坑である。径約0.9ｍの平面円形で、検出面からの深さ約0.23ｍである。埋土は暗茶灰色土である。埋土から５世紀後半の土師器・須恵器が

出土した。

奈良時代の遺構　東五坊大路とその東西両側溝がある。

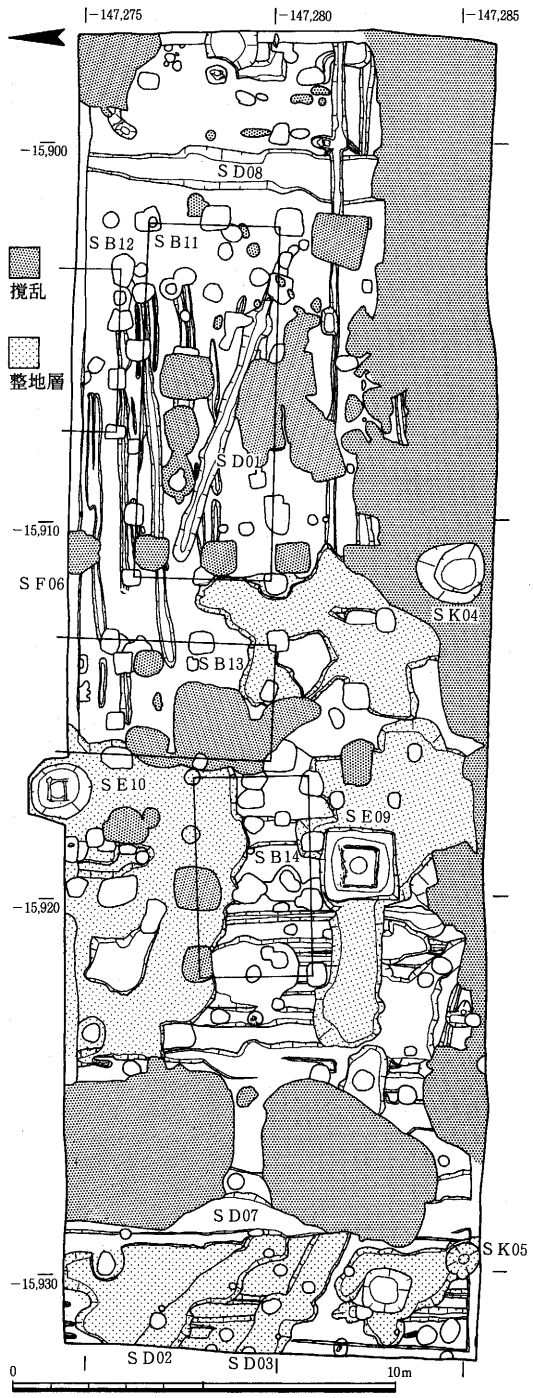
ＳＦ06　東五坊大路である。長さ約11ｍ分を検出した。幅員は側溝心々間で27.8ｍある。

ＳＤ07　発掘区西半部で検出した南北方向の素掘りの溝で、東五坊大路ＳＦ06の西側溝である。南北ともに発掘区外へと続く。撹乱の為、途切れている箇所もあるが、幅1.8ｍ、検出面からの深さ約0.14ｍ、長さ約11ｍ分を検出した。埋土は暗灰色砂質土である。溝内埋土から奈良時代の土器が出土した。溝心の国土座標はＸ＝－147,285.000、Ｙ＝－15,928.512である。

ＳＤ08　発掘区東端部で検出した南北方向の素掘りの溝で、東五坊大路ＳＦ06の東側溝である。北は発掘区外へ続くが、南は撹乱によって削平されている。幅0.5～1.3ｍ、検出面からの深さ0.05～0.12ｍで、南に向うにつれて幅広で、深くなっている。長さ7.5ｍ分を検出した。埋土は茶灰色土である。溝内埋土から奈良時代の土器が出土した。溝心の国土座標はＸ＝－147,283.300、Ｙ＝－15,900.688である。

平安時代の遺構　井戸２基がある。

ＳＥ09　発掘区中央部南側で検出した井戸である。掘形は南北２ｍ、東西1.9ｍの平面隅丸方形で、検出面からの深さ約1.3ｍである。掘形は二段掘りされ、検出面からの深さ約0.3ｍで南北1.5ｍ、東西1.4ｍの平面隅丸方形の掘形となる。これは地山が硬い茶灰色砂礫層に変わったため掘りにくくなり、平面規模を縮小



第333次調査　遺構平面図（１／250）

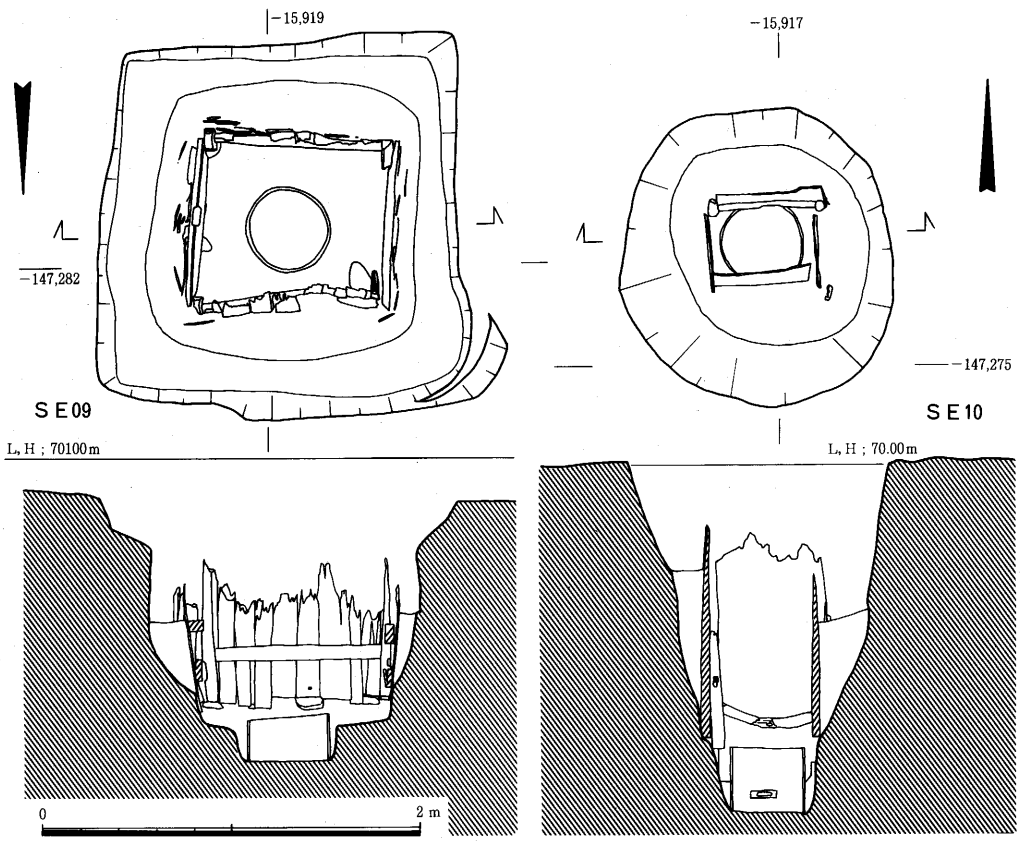
したのであろう。井戸枠内法は南北約0.85m、東西約0.95mで底部から0.7mほどが残存する。枠組構造は縦板組隅柱横桟留めである。底に水溜めの平面円形の曲物が据えられ、中に砂利が敷かれている。縦板は一辺に11～15枚が使われる。枠内埋土から8世紀末葉から9世紀初頭にかけての須恵器・土師器・黒色土器・墨書土器、斎串が出土した。

ＳＥ10　発掘区中央部北側で検出した井戸である。掘形は南北約1.6m、東西約1.4mの平面不整円形で検出面からの深さは約1.9mである。井戸枠内法は南北約0.4m、東西約0.56mで底部から1.1mほどが残存する。枠組構造は縦板組隅柱横桟留めで、底に水溜めの平面円形の曲物が据えられる。縦板は東西南北ともに1枚板を使用している。枠内埋土から8世紀末葉から9世紀初頭にかけての土師器・須恵器・墨書土器、横櫛が、掘形埋土からは8世紀末葉の土師器・須恵器・墨書土器、横槌、銭貨が出土した。

時期不明の遺構　掘立柱建物4棟がある。

ＳＢ11　発掘区中央部で検出した桁行5間（9.3m）、梁間2間（3.6m）の東西棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行が東から1.8-1.8-2.1-1.8-1.8mと、中央間の柱間が広い。梁間は1.8m等間である。

ＳＢ12　ＳＢ12の北側で検出した東西3間（4.5m）の掘立柱列である。発掘区外北へ続



井戸ＳＥ09・10　平面・立面図（1／40）

く東西棟建物の南側柱列と考えられる。柱間寸法は1.5m等間である。

ＳＢ13　ＳＢ11の西側で検出した桁行３間（6.3m）以上、梁間２間（3.0m）の南北棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行2.1m等間、梁間1.5m等間である。

ＳＢ14　ＳＢ13の西側で検出した桁行３間（5.4m）、梁間２間（3.0m）の東西棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行1.8m等間、梁間1.5m等間である。

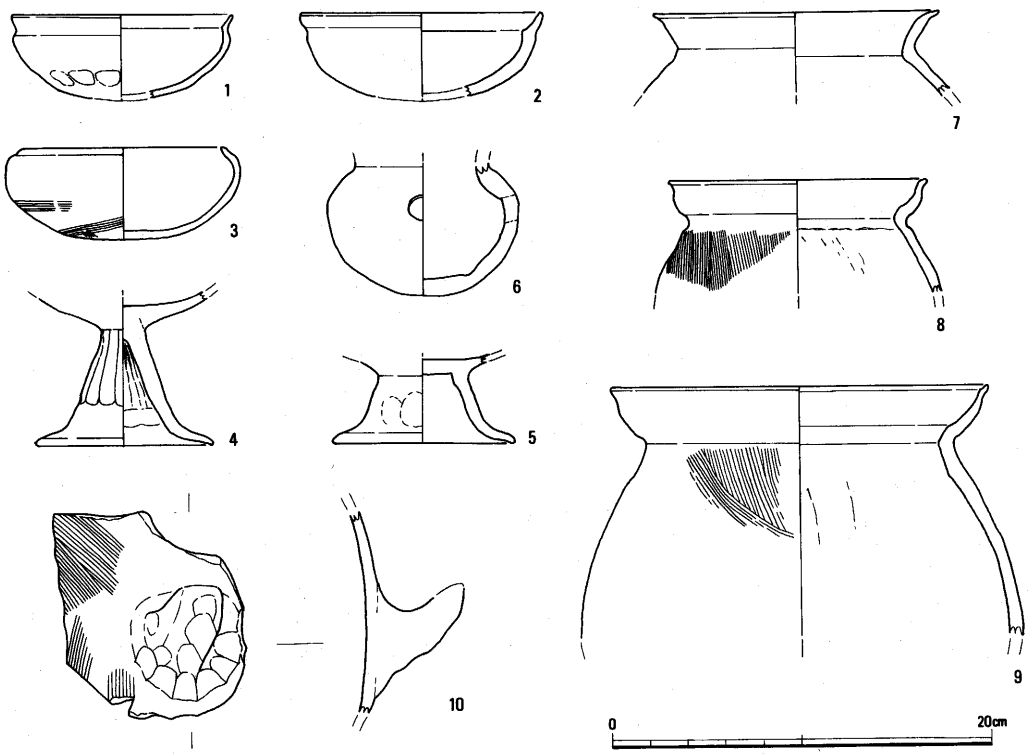
これらの掘立柱建物は、出土遺物が無く詳細な時期は不明だが、すべて東五坊大路の路面上に存在することから、おそらく長岡京への遷都後のものと考えられる。

Ⅲ　出土遺物

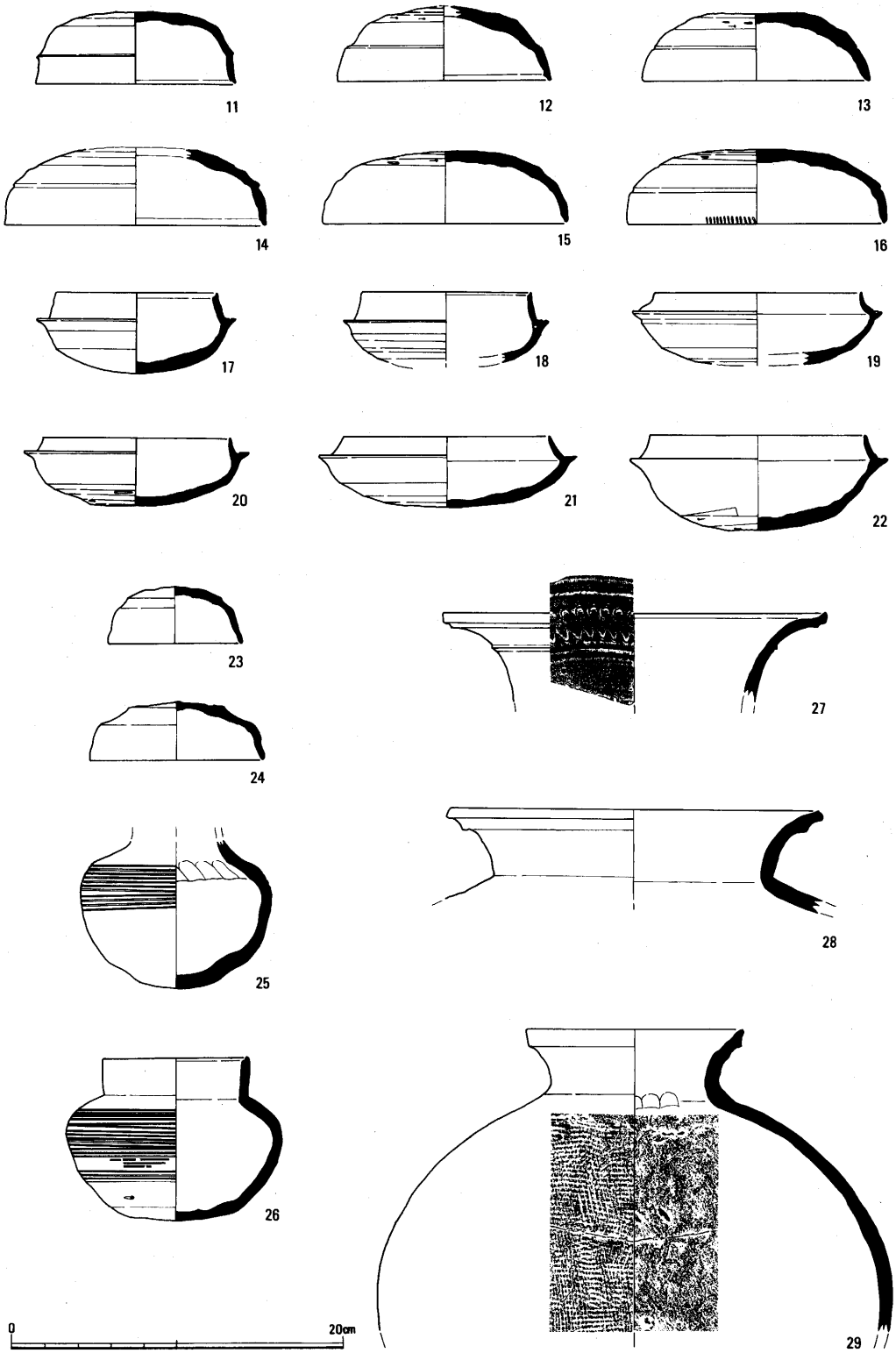
出土遺物は、柱穴、井戸、素掘りの溝、土坑、奈良時代の整地層から遺物整理箱で20箱分出土した。出土遺物には土師器、須恵器、黒色土器、墨書土器、土馬、丸瓦、平瓦、横櫛、横槌、斎串、銭貨があるが、遺物の大半は土師器、須恵器である。　（原田憲二郎）

土器類　古墳時代中期から平安時代前期にかけての土器が出土した。ここでは、古墳時代の土器について報告する。

出土した古墳時代の土器の内訳は、土師器杯（１～３）・高杯（４・５）・壷（６）・甕（７～９）・甑（10）、須恵器蓋杯（11～22）・高杯・壷蓋（23・24）・壷（25・26）・甕（27～29）である。６・７はＳＤ02、１・27はＳＤ03、２・20・25はＳＫ04、３～５・



溝ＳＤ02・03、土坑ＳＫ04　奈良時代整地層出土土器（１／４）



溝ＳＤ02・03、土坑ＳＫ04　奈良時代整地層出土土器（１／４）

8～19・21～24・26・28・29は奈良時代の整地層から出土した。

土師器は器種や形態に布留式より新しい特徴がみられる。高杯には長脚のもの（4）と短脚のもの（5）がある。壺（6）は体部中央が穿孔されており、須恵器甕と形態が似ている。甕（7～9）の口縁部は肥厚しない。

須恵器には、田辺編年ＴＫ47型式に属するもの（11・17・18・27）と、それよりも新しいＴＫ10～43型式に属するものがある。後者に属する蓋杯（12～16・19～22）は、口縁端部等細部の形態や法量にバリエーションがみられる。壺（15・16）の体部にはカキメ調整が、甕（17）の頸部には櫛描波状文が施されている。（安井宣也）

木製品・その他　井戸ＳＥ09から斎串（1）、泥質ホルンフェルス製の砥石、井戸ＳＥ10から横槌（2）、横櫛、神功開寶（初鋳765年）が出土した。

1は上端は圭頭状、下端は剣先状につくられる。両側面はそれぞれ左右対称位置に7ヶ所ずつ三角形に切り欠かれる。切り欠きの間隔は1.6～2.0cmで下になるほど広くなる。ＣⅥ型式[1]である。長さ27.1cm、幅1.8cm、厚さ0.1cm。

2は樹皮が残る芯持ち材が使用されている。柄は図上の中心から左寄りに削り細められ、先端はやや突状に削られる。身の先端は2方向に切り落とされた山形である。打痕は前面左側に残る。長さ40.9cm、身径6.5cm、柄径4.0cm。（田林香織）

出土木製品（1／4）

Ⅳ　まとめ

今回の調査で初めて東五坊大路ＳＦ06を確認した。このＳＦ06道路心と平城宮朱雀門心との距離は、朱雀大路の振れを考慮して2,671.720 mである。また朱雀門心から東五坊大路路心までの造営計画距離は、小尺で9,000尺（大尺で7500尺）である。従ってこの場合、造営の単位尺は2,671.720m÷9000小尺（7500大尺）＝0.296m（0.356 m）となる。この値は造営単位尺としては妥当なものであるから、検出した道路ＳＦ06は、東五坊大路と考えることができる。

また、今回の調査地では古墳時代の遺構を確認した。今回の調査地の西に隣接する平城京第298次調査地でも5世紀末から6世紀初め頃の土坑を検出していることから、調査地周辺に5世紀から6世紀にかけての遺跡が存在することがわかる。今後、遺跡の範囲の確認や性格を解明するため隣接地域での調査が期待される。（原田憲二郎）

注1）奈良国立文化財研究所『木器集成図録　近畿古代篇』の分類による。

11　平城京左京八条二坊二坪・杏遺跡の調査　第337次・第340次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市杏町404他において実施した奈良市長大川靖則届出の杏中第11号市営住宅建替に伴う事前発掘調査である。調査地は、平城京条坊復元では左京八条二坊二坪の南半中央に位置する。また当該地周辺のこれまでの調査で、周辺には弥生時代、古墳時代の遺跡があることが知られている。

このため、今回の調査では平城京の遺構とともに平城京以前の遺構も併せて検出できるものと考えられた。発掘区の総面積は、1,061㎡、調査期間は平成７年９月４日から11月15日までである。調査は当初410㎡で設定し、平成７年９月４日から10月27日まで調査を行った（第337次調査）。その結果、古墳時代の遺構を検出し発掘区外西に続くことが明らかになったため、発掘区を新たに西側に拡張することとした。新たな発掘区の面積は452㎡である。調査期間は10月27日から11月15日までである（第340次調査）。

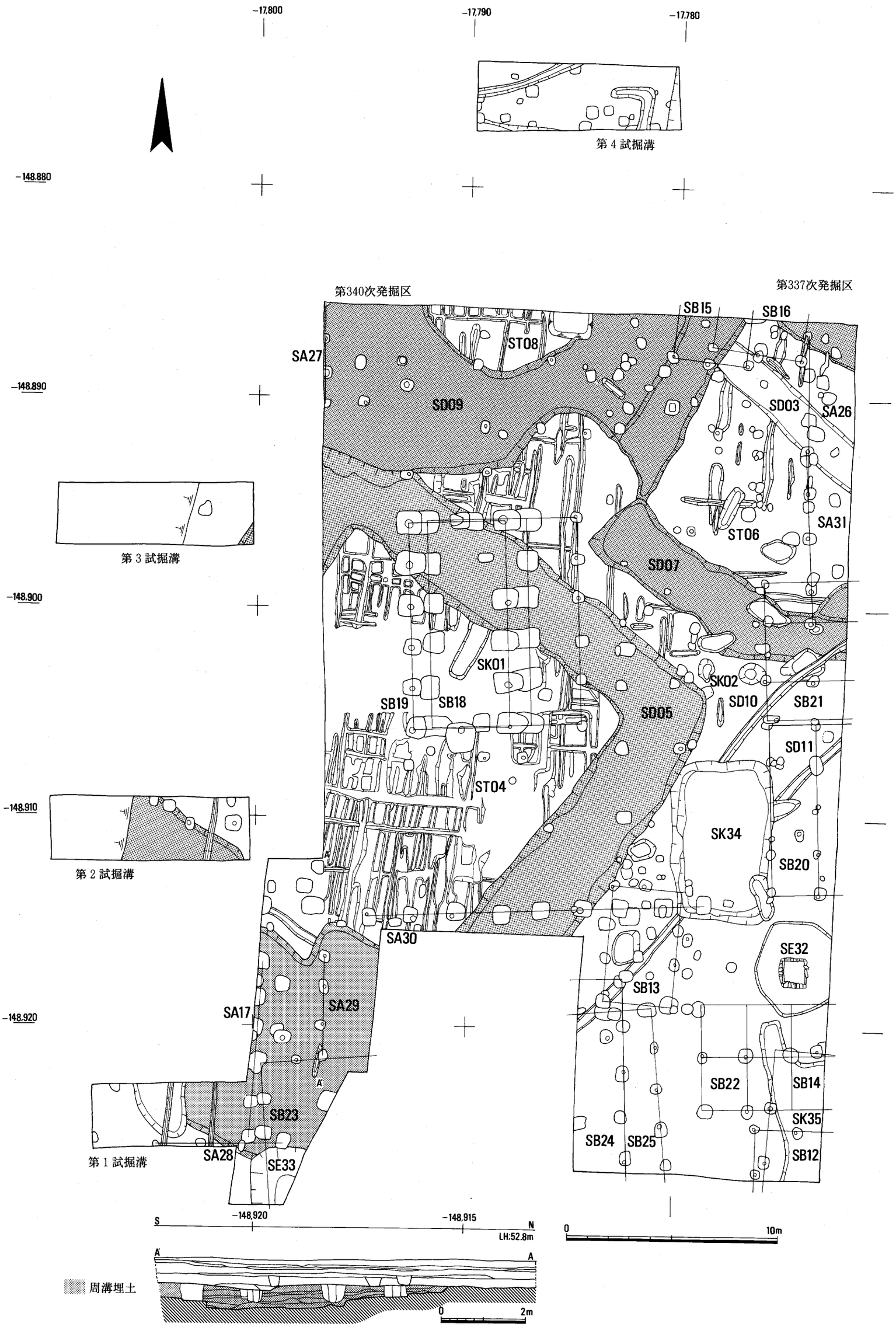
なお、調査の結果新たに平城京以外の遺構を検出したことから、それらについては杏遺跡として報告する。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の基本的な層序は、黒灰色土（耕作土）以下、黄灰色砂質土、淡黄灰色土、淡茶灰色砂質土、暗赤褐色土と続き、地表下約0.6ｍで黄灰色土の地山に至る。地山上面の標高は約52.4ｍである。基本的に各遺構は、この地山上面で検出した。

検出した遺構には、弥生時代から平安時代の各時期のものがある。以下に時代ごとに概述する。

弥生・古墳時代の遺構　弥生時代の遺構には土坑２（ＳＫ01・02）、溝１条（ＳＤ03）が、古墳時代の遺構には方墳３基（ＳＴ04・06・08）とそれぞれの周溝、溝２条（ＳＤ10・11）がある。ＳＫ01は長辺3.15ｍ以上、短辺0.85ｍ、検出面からの深さ0.11ｍの平面長方形の土坑で、北側がＳＴ04の周溝により削平されているため全長は不明。埋土から弥生土器が出土。ＳＫ02は長辺0.74ｍ、短辺0.14ｍ、検出面からの深さ0.13ｍの平面不整形な土坑。埋土から弥生土器が出土した。ＳＤ03は発掘区北東端で検出した幅1.8ｍ、検出面からの深さ0.3ｍの斜行する溝。発掘区外に続く。長さ12.8ｍ分を検出。断面Ｕ字形を呈する。埋土から弥生時代前期末から中期初頭の土器片が出土した。方墳ＳＴ04は、一辺約16ｍの墳丘の南側中央部に台形の突出部を設けたもの。突出部の出は約２ｍ、幅は基部で5.5ｍ、前端部で2.5ｍ分を確認した。墳丘の盛土は削平され、主体部は残存しない。墳丘の主軸方向は、北で東に45°振れる。墳丘の周囲には、周溝ＳＤ05が巡る。北・東側の周溝は幅



第337・340次調査　遺構平面図（1／200）、周溝ＳＤ05・柱列ＳＡ29堆積土層図（1／100）

約4.5m、断面U字形を呈する。突出部分での幅は広く約12mとなる。検出面からの深さは0.25m～0.5mで、南に向かって深くなっている。埋土から6世紀前半の須恵器が出土した。方墳ＳＴ06は、発掘区外北東へ続く墳丘の一部を確認した。南辺約11m分、西辺約10m分を検出した。墳丘盛土は削平され、主体部は残存しない。墳丘の主軸方向は、北で東に30°振れる。墳丘の周囲には、周溝ＳＤ07が巡る。幅約2.4m、検出面からの深さ0.3m。墳丘南西隅部で溝幅を狭め、陸橋を設けている。方墳ＳＴ08は、発掘区外に続く墳丘の一部を検出した。南辺及び東辺の約5m分を検出した。墳丘の周囲には、周溝ＳＤ09が巡る。他の2基の方墳と周溝の一部を共有している。周溝は浅く、検出面から約0.2mである。ＳＤ10・11はともに幅約0.5m、検出面からの深さ約0.2mの斜行する素掘りの溝である。ＳＤ10は長さ9m分、ＳＤ11は長さ19m分を確認した。重複関係から周溝ＳＤ07よりも新しいことがわかる。

奈良・平安時代の遺構　掘立柱建物10棟、掘立柱列9条、井戸2基、土坑2を検出した。掘立柱建物と柱列には、建物の棟方向が国土方眼方位と一致するものと、東または西に振れるものがある。国土方眼方位と一致するものにはＳＢ12、ＳＡ26～29が、東に振れるものにはＳＢ13～16・ＳＡ17が、西に振れるものにはＳＢ18～25、ＳＡ30・31がある。これらの建物のうち、西に振れる建物と東に振れる建物の柱穴からは、8世紀末から9世紀にかけての遺物が出土した。ＳＢ18は、桁行5間(10.5m)、梁間2間（4.8m）の南北棟の掘立柱建物で東に廂が付く。廂の出は2.4m。南に縁が付く可能性があり、縁の出は1.5mである。ＳＢ19は、ＳＢ18とほぼ同じ位置で建て替えられた桁行5間(10.5m)、梁間2間(4.8m）の南北方向の掘立柱建物。ＳＡ30は、ＳＢ19の南側柱列から約9m南の位置で検出した東西方向の柱列で、8間(16.8m）を検出した。ＳＢ19と同時期の掘立柱塀である。この建物ＳＢ18・19は、当該二坪の宅地のほぼ東西二分の一、南北三分の一の位置にあり、規模からみて当坪の中心建物のひとつであった可能性がある。両建物ともに柱掘形の埋土から8世紀末から9世紀にかけての遺物が出土した。ＳＥ32は、東西3.8m、南北4.5mの平面不整形な掘形の井戸。検出面からの深さ2.6m。井戸枠は方形横板組隅柱横桟留めで横板の上段外側に縦板を当てる。井戸枠の内法は、一辺0.9m。枠内埋土から9世紀中頃の土器が出土した。ＳＫ34は南北約8m、東西約4.5mの隅丸長方形の掘形の土坑。検出面からの深さ約0.2mである。埋土から、9世紀中頃の土器が出土した。

以上の調査結果から、当該地周辺には弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が残っていることが明らかになった。今後の調査によりさらに杏遺跡の様相が明らかになるものと考える。また、当坪では奈良時代から平安時代にかけて少なくとも3時期の遺構変遷を追うことができ、その中心が奈良時代末から平安時代にかけてであったことも併せて知ることができた。

（秋山成人）

Ⅲ　出土遺物

瓦　類　遺物整理箱に３箱分が出土した。大半が丸瓦・平瓦であるが、ＳＥ32枠内埋土からは軒丸瓦が４点出土した。軒丸瓦の型式・種別は、6226（種別不明）１点、6134Ｂ１点、6143Ａ１点、6236Ｄ１点である。

土器類　遺物整理箱に11箱分が出土した。弥生時代から平安時代までのものがある。以下、時代ごとに概要を記す。

弥生時代の遺物　遺物包含層、ＳＫ01・02、ＳＤ03・05・07から弥生土器が出土した。色調はいずれも黄白色及び黄灰色を呈し、焼成は甘い。胎土には長石、石英、チャートが多く含まれている。ＳＤ03から出土した広口壷（３）は、頸部から口縁部にかけて緩やかに外半し、器壁の厚さは均一である。口縁端部には刻み目、頸部には６条の箆書き沈線が施されている。ＳＤ07からは、広口長頸壷（２）と壷の胴部片（１）、壷または甕の底部片（４）が出土した。２の外面には、原体幅が広い７条の櫛描直線文が３帯施される。

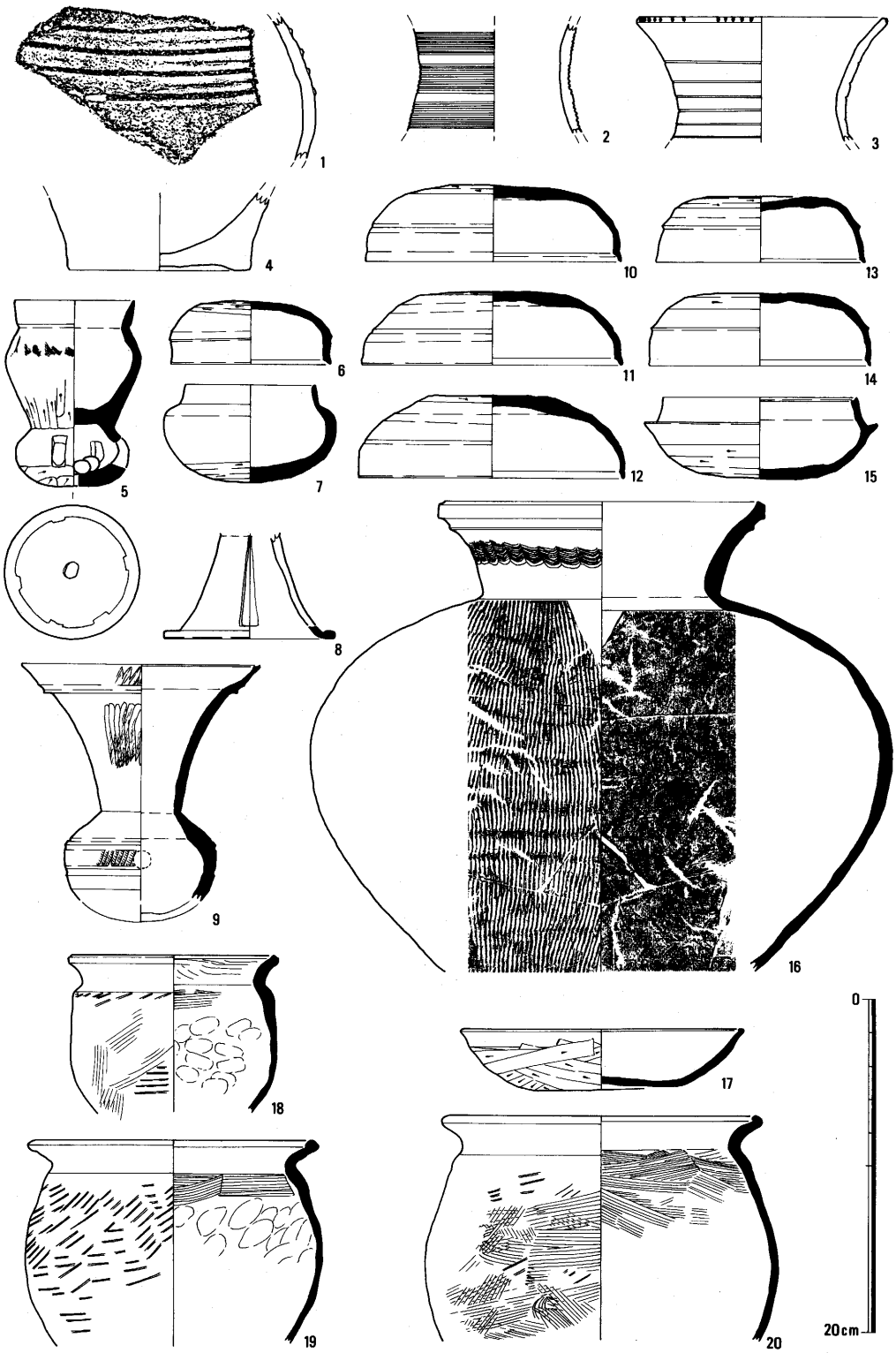
１は胴部上半に４条の突帯をめぐらしている。１・３は弥生時代前期末、４は弥生時代前期末から中期初頭、２は弥生時代中期初頭のものである。　（秋山成人）

古墳時代の遺物　古墳の周溝及び土坑等から６世紀前半の須恵器が出土した。

須恵器杯蓋は、口径が12.5～13.1cmにまとまるもの（13・14）と15.2～15.6cmにまとまるもの（10～12）の２種類に分類できる。５は、「鈴台付壷」と呼ばれる類例の少ない須恵器である。袋状台部の側面に５方向の方形透孔、底部中央に１つの円形孔をあけ、内部に直径１cm前後の小球２個を入れて鈴とする。口径7.1cm、器高11.1cmで、肩部を波状文で飾る。６・７は須恵器短頸壷とその蓋である。８は長脚で２段に透孔を配する須恵器高杯であろう。９は須恵器甑で復元口径14.2cm。16は須恵器甕で復元口径18.6cm、外面に平行タタキ目、内面に無文の当て具痕が残る。５・８・10～12・16はＳＤ05、13はＳＤ07、９はＳＤ09、６・７・14・15はそれぞれ組み合って発掘区南東隅の東壁で確認した土坑内から出土した。　（鐘方正樹）

奈良・平安時代の遺物　柱掘形、井戸、土坑等から８世紀後半～９世紀中頃までの土器が出土した。８世紀代のものは量的に少なく、大半が９世紀初頭～中頃にかけてのものである。ここでは、ＳＥ32から出土したものについて記す。

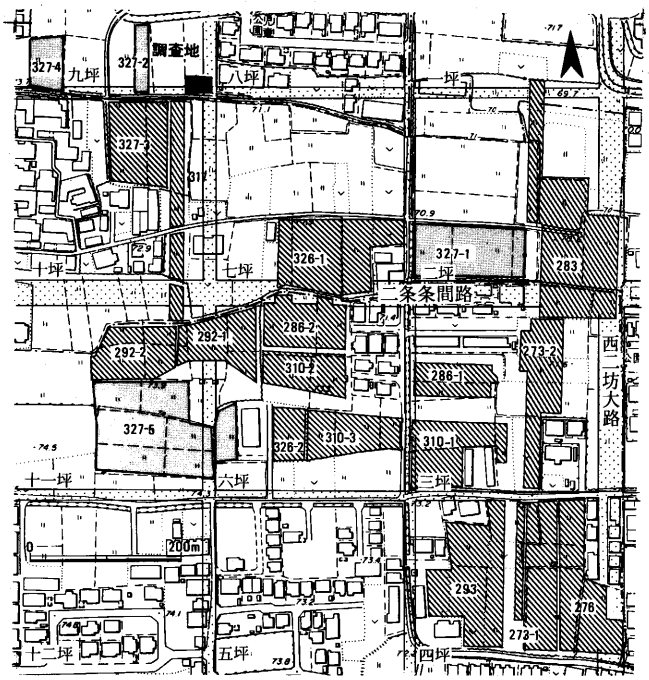
土師器には、杯Ａ・杯Ｂ・皿Ａ・椀Ｃ・高杯・甕、黒色土器、須恵器杯Ｂ・壷Ｍ・水瓶、甕がある。土師器の食器類は、大半がｃ手法だが、17のように口縁部まで削りが及ばないものが若干ある。土師器甕Ａは、ＳＥ32出土土器のうち、約８割を占める。外面を叩き成形した後ハケ目調整をするもの（18・20）と叩き成形の痕跡をそのまま残すもの（19）とがある。後者の方が量的には多い。これらは形態的な特徴や調整手法などから、平城宮土器Ⅶに位置づけられよう。　（三好美穂）



出土土器（1／4）

12　平城京右京二条三坊九坪・西三坊坊間路　第341次

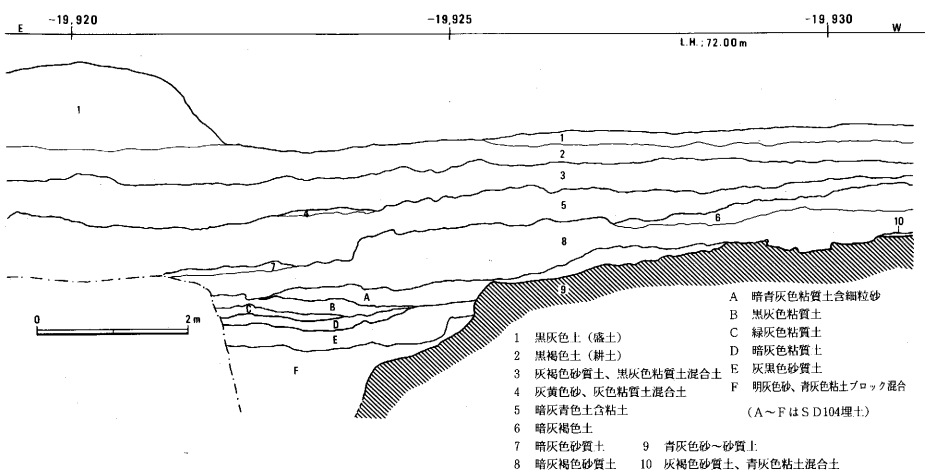
本調査は奈良市西大寺芝町1丁目19街区8において実施した上田明氏届出の住宅建築工事に伴う事前発掘調査である。調査地は平城京の条坊復元では右京二条三坊九坪・西三坊坊間路に相当する。同坊間路は、当調査地南方の六・十一坪間でも一部確認しており（平城京第292次調査第1発掘区）、そこでは西から東に下る丘陵斜面を南北に切り通して施工していたことがわかっている。



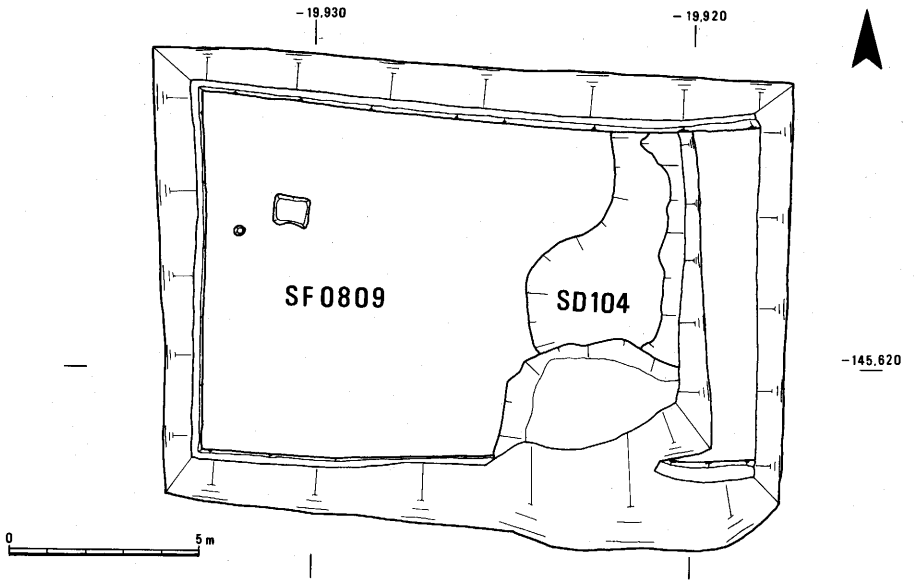
第341次調査　発掘区と周辺調査位置図（1／5,000）

本調査地は上記発掘区と同じ丘陵上にあるので、同様の施工法をとってるものと思われた。調査面積は187㎡で、調査期間は平成7年11月1日から11月14日までである。

発掘区内の基本層序は黒灰色土（耕土）以下、灰褐色砂質土、暗青灰色粘質土と続き、地表面から1.8mで青灰色砂質土の地山に至る。地山の標高は68.0m～69.5mである。この



第341次調査　西三坊坊間路東側側溝SD104土層図（1／100）



第341次調査　遺構平面図（1／200）

地山上面で、坊間路とその東側溝を検出した。

ＳＦ0809　西三坊坊間路である。西側溝が未検出なので路面幅は不明であるが、東側溝の西肩から10m分を検出した。路面の標高が周辺の坪内の遺構面の標高に比べ低いことから、西から東に下る丘陵を南北に切り通して道路を造ったと思われる。

ＳＤ104　坊間路東側溝である。全幅を検出していないので、幅員は不明であるが、発掘区内で幅５ｍ分を検出した。溝底は北から南へ向かって緩やかに下降し、発掘区中央で一段深くなる。この部分から溝底が東に向かって下降している。検出面からの深さは発掘区北端で 0.7m、発掘区南端では湧水が著しく溝底を確認できなかったが、1.5m以上ある。

発掘区のすぐ南は坪境小路の遺存地割であるが、その北側溝は検出できなかった。そのため、今回の検出部は、坊間路東側溝と坪境小路北側溝の接続部に近いと考えられる。

溝内の埋土は灰色系粘質土で、発掘区中央から南側の一段深い部分では、その下に青灰色粘土塊の混じる明灰色砂が厚く堆積している。この明灰色砂層と包含層から土器、瓦が、遺物整理箱で３箱分出土した。溝内の土器のほとんどは須恵器、土師器で、瓦器も少量ある。瓦には軒丸瓦6235型式Ｍ種のものが１点ある。

西三坊坊間路は、六・十一坪間でも検出しているがその幅員は側溝心々で6.7ｍあった。しかし今回の調査では路面を東側溝西肩から10ｍ分検出したが、西側溝は確認できなかった。また、六・十一坪間では側溝の溝底が南から北に下り勾配だが、本調査地では北から南に下っており、勾配が逆である。したがって八・九坪間と六・十一坪間では施工基準が異なり、本調査地か一坪南の条間路側溝に水流が集められると推測できる。（細川富貴子）

13　平城京左京五条三坊八坪の調査　第342次

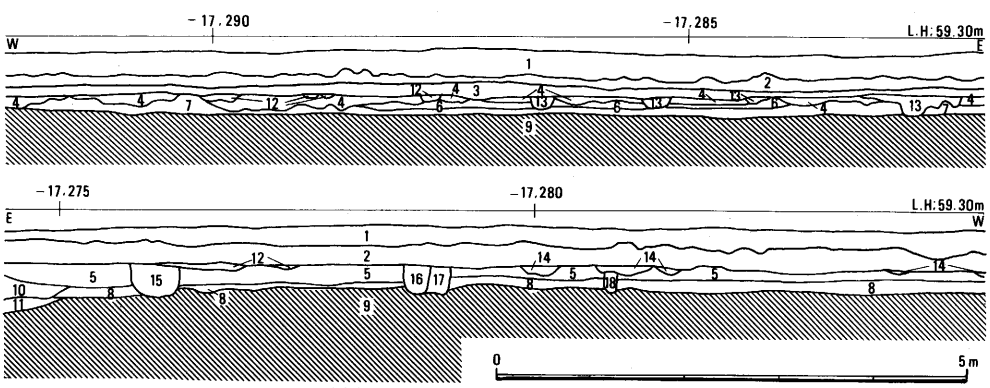
Ⅰ．はじめに

本調査は、奈良市恋の窪一丁目603-1 で実施した、今井楢敏氏届出の共同住宅建設に伴う事前発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では、左京五条三坊八坪に相当し、坪の中央やや南東寄りに位置する。調査は、東西18m、南北８ｍの発掘区（面積144㎡）を設定して行なった。調査期間は平成７年11月13日から11月28日までである。

Ⅱ．検出遺構

発掘区内の基本層序は、上から耕土、灰色粘土で、北半部では、つづいて灰色砂質土、黄灰色粘土あるいは灰色砂質土（地山）である。しかし、南半部では、灰色粘土の下に淡茶灰色砂質土（奈良時代の整地土、厚さ0.1～0.2m）があり、さらに黄灰色粘土上面を掘り込んだ自然流路の埋土と思われる灰色砂の堆積（厚さ0.05～0.2m）がある。遺構面は、黄灰色粘土、灰色砂質土あるいは、淡茶灰色砂質土（奈良時代の整地土）上面、そして灰色砂上面の２面があるが、一部では灰色砂下の暗茶褐色土上面で遺構検出を行なったため、層位から遺構の新旧は明らかにできなかった。遺構面の標高は、おおむね58.6ｍと58.5ｍである。なお、発掘区中央部は東西方向に溝状にやや窪んでいる。また、暗茶褐色土上面から掘り込んだ自然流路を確認した。こうした状況から、調査地周辺は、奈良時代以前から佐保川の氾濫を幾度も受けていたものと思われる。

検出した主な遺構は、多くが奈良時代のものであり、掘立柱列４条、不整形土坑４を検



1　黒色土（耕作土）　5　淡茶灰色砂質土（奈良時代の整地土）　9　暗茶褐色粘土（地山）　13　淡黄灰色砂質土　17　茶灰色砂質土（柱穴埋土）
2　灰色粘土　6　黄灰色粘土　10　茶灰色砂質土　14　灰色粘質土　18　淡茶灰色砂質土
3　灰色砂質土　7　黄灰色砂質土　11　灰色粗砂　15　淡灰色砂質土（柱穴埋土）
4　淡灰色砂質土　8　灰色砂　12　灰色砂質土　16　淡灰色砂質土（柱穴埋土）

第342次調査　発掘区北・南壁土層図（１／80）

出した。なお、耕作に伴うと思われる中世の素掘りの溝を数条検出した。

ＳＢ01　発掘区西半で検出した東西２間（4.8m）の掘立柱列である。柱間は2.4m等間。西端と中央の柱掘形は深く、検出面から0.6mである。東端の柱掘形は浅く、0.25mである。東西に柱穴が続かず、南北にもこれに伴う柱穴がみられないことから、門の可能性があると思われる。

ＳＡ02Ａ・Ｂ　発掘区南辺で検出した東西方向の掘立柱塀である。建て替えがある。Ａ・Ｂともに７間（16.5m）分検出した。ともに発掘区外東西へ続く。Ａの柱間は、東から４間目が2.1mで、それ以外は2.4mである。Ｂの柱間は西から２間目が2.1mで、それ以外は2.4mである。

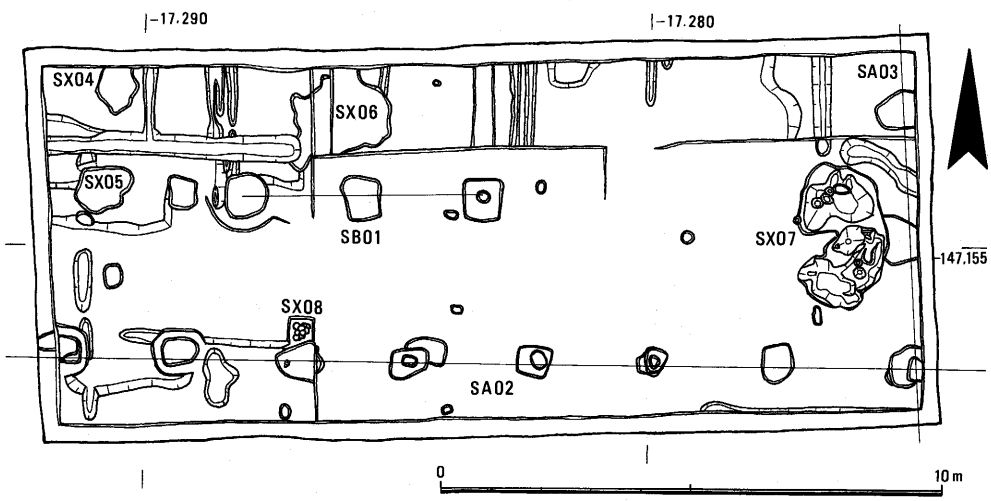
ＳＡ03　発掘区東辺で検出した南北方向の掘立柱列である。南北２間（5.4m）分を検出した。柱間は2.7m等間。南北方向の塀か、建物の西側柱列であろう。重複関係からみて、ＳＡ02Ａ・Ｂよりも新しい。

ＳＸ04～07　いずれも平面不整形の土坑である。規模は、最も小さいＳＸ04で、東西1.0m、南北0.8m、深さ0.2m、最も大きいＳＸ07で、東西1.7m、南北2.9m、深さ0.37mである。いずれも底には凹凸があり、埋土も一様でない。風倒木の痕跡であろうか。埋土から奈良時代の土器が出土した。

ＳＸ08　発掘区中央の溝状の窪みから、土師器皿Ｃが13点重なりあって出土した。いずれも完存している。うち、３点は、裏向きに置かれ、また２枚重ねのものも一組ある。性格はよくわからないが、なんらかの祭祀痕跡であろうか。

なお、出土遺物は、遺物整理箱１箱に満たない。奈良時代の土師器・須恵器・瓦・中世の陶器がある。

（森下浩行）



第342次調査　遺構平面図（１／150）

14　平城京東市跡推定地の調査　第17次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市杏町字東ノ口583-1においてカゴメ化学工業株式会社届出の事務所倉庫建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は、平城京の条坊復元では左京八条三坊六坪の北辺西部にあたり、平城京東市跡推定地内である。調査期間は平成７年10月２日から11月15日までで、調査面積は530㎡である。

Ⅱ　検出遺構

発掘区の基本層序は黒灰色土（旧耕作土）以下、明茶灰色砂質土、茶灰色砂質土と続き、黄褐色粘土あるいは黄灰色砂の地山に至る。地山上面（標高55.4～55.3ｍ）で遺構を検出した。また、発掘区中央部で奈良時代以降の東西方向の旧河道を１条検出した。検出した遺構には素掘溝、掘立柱建物、井戸、土坑がある。以下、主な検出遺構について記す。

ＳＤ255　発掘区北端で検出した、東で北に振れる素掘りの溝である。第１次調査区で確認された溝と一連のもので、長さは約12.5ｍである。幅は約0.5ｍ、検出面からの深さ約0.1～0.2ｍである。遺物が出土しなかったため、時期は不明であるが、周辺の調査例からみて古墳時代以前の遺構と考えられる。

ＳＢ256　発掘区北西部で検出した、南北３間（5.4ｍ）の掘立柱列で、南北棟建物の東側柱列になる可能性がある。柱間寸法は1.8ｍ等間である。重複関係からＳＢ257より古いことがわかる。建物方位は国土方眼方位北で東に振れる。

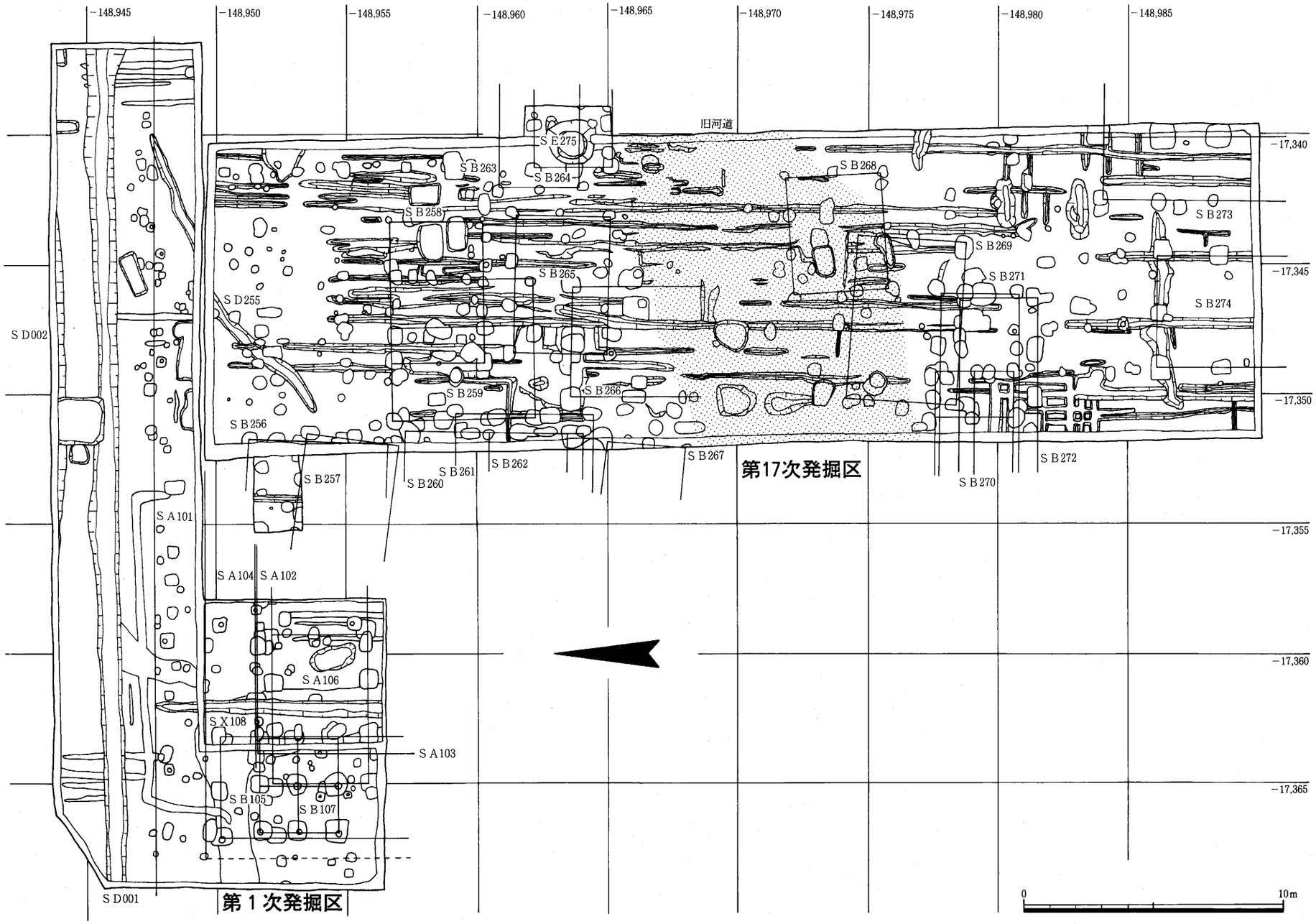
ＳＢ257　発掘区北西部で検出した、桁行２間（3.6ｍ）以上、梁間２間（3.6ｍ）の東西棟の掘立柱建物で、西側は発掘区外へ続く。柱間寸法は桁行、梁間ともに1.8ｍ等間である。建物方位は国土方眼方位東で南に振れる。

ＳＢ258　発掘区北辺中央部で検出した、桁行３間（5.4ｍ）、梁間２間（3.6ｍ）の東西棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行、梁間ともに1.8ｍ等間である。重複関係からＳＢ259より古いことがわかる。

ＳＢ259　発掘区中央北側で検出した、桁行３間（5.4ｍ）、梁間２間（3.6ｍ）の南北棟の掘立柱建物で、東側に廂がつく。柱間寸法は桁行、梁間ともに1.8ｍ等間で、廂の出は1.8ｍである。重複関係からＳＢ261より古いことがわかる。

ＳＢ260　ＳＢ257南側で検出した、南北３間（6.3ｍ）の掘立柱列で、南北棟建物の東側柱列になる可能性がある。柱間寸法は2.1ｍ等間である。重複関係からＳＢ259・261・262・267より古いことがわかる。

ＳＢ261　ＳＢ257南側で検出した、桁行３間（5.4ｍ）、梁間２間（3.0ｍ）以上の南北棟



東市跡推定地第17次調査　遺構平面図（１／200）

の掘立柱建物で、西側は発掘区外へ続く。柱間寸法は桁行1.8m等間、梁間1.5mである。

ＳＢ262　ＳＢ257南側で検出した、南北２間（3.6m）の掘立柱列で、東西棟建物の東妻柱列になる可能性がある。柱間寸法は1.8m等間である。

ＳＢ263　発掘区中央東側で検出した、桁行３間（4.5m）以上、梁間２間（3.0m）の東西棟の掘立柱建物で、東側は発掘区外へ続く。柱間寸法は桁行、梁間ともに1.5m等間である。重複関係からＳＥ275より古いことがわかる。

ＳＢ264　発掘区中央東側で検出した、桁行２間（3.0m）以上、梁間２間（3.0m）の東西棟の掘立柱建物で、東側は発掘区外へ続く。柱間寸法は桁行1.5m、梁間1.5m等間である。重複関係からＳＥ275より古いことがわかる。

ＳＢ265　ＳＢ263の西側で検出した、桁行３間（5.4m）、梁間２間（3.6m）の東西棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行、梁間ともに1.8m等間である。建物方位は国土方眼方位東で南に振れる。

ＳＢ266　ＳＢ259の南側で検出した、桁行２間（4.8m）以上、梁間２間（4.2m）の南北棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行2.4m、梁間2.1m等間である。南側柱は東西方向の旧河道によって削平をうけており、旧河道より古いことがわかる。

ＳＢ267　ＳＢ260南側で検出した、南北２間（3.0m）以上の掘立柱列で、東西棟建物の東妻柱列になる可能性がある。柱間寸法は1.5m等間である。重複関係からＳＢ261より古いことがわかる。建物方位は国土方眼方位北で東に振れる。

ＳＢ268　ＳＢ265南側で検出した、桁行３間（4.5m）、梁間２間（3.6m）の東西棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行1.5m等間、梁間1.8m等間である。重複関係から旧河道より新しいことがわかる。建物方位は国土方眼方位東で北に振れる。

ＳＢ269　ＳＢ268南西で検出した、桁行３間（6.3m）、梁間２間（4.2m）の東西棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行、梁間ともに2.1m等間である。北側柱は旧河道によって大半が削平をうけており、旧河道より古いことがわかる。建物方位は国土方眼方位東で南に振れる。

ＳＢ270　ＳＢ269南側で検出した、桁行２間（3.6m）以上、梁間２間（3.0m）の総柱建物で、西側は発掘区外へ続く。柱間寸法は桁行1.8m、梁間1.5m等間である。

ＳＢ271　ＳＢ269南側で検出した、桁行３間（6.3m）以上、梁間２間（3.0m）の東西棟の掘立柱建物で、西側は発掘区外へ続く。柱間寸法は桁行2.1m等間、梁間1.5m等間である。重複関係からＳＢ269・270より古いことがわかる。

ＳＢ272　ＳＢ269南側で検出した、桁行３間（6.3m）以上、梁間１間（3.0m）の東西棟の掘立柱建物で、西側は発掘区外へ続く。柱間寸法は桁行2.1m等間である。梁間妻柱はＳＢ271の妻柱によって、掘り抜かれている可能性が高く、1.5m等間であったと考えら

れる。重複関係からＳＢ269・270・271より古いことがわかる。

ＳＢ273　発掘区南東隅で検出した、東西２間（4.8m）、南北３間（4.2m）以上の南北棟の掘立柱建物であるが、西側の柱穴が東側の柱穴に比して小さく浅いことから、身舎部分は発掘区南、東側へ続き、西側に廂がつく南北棟建物の可能性が高い。柱間寸法は東西2.4m、南北2.1m等間である。

ＳＢ274　発掘区南端で検出した、桁行２間（4.2m）以上、梁間２間（4.8m）の南北棟の掘立柱建物で、南側は発掘区外へ続く。柱間寸法は桁行2.1m、梁間2.4m等間である。

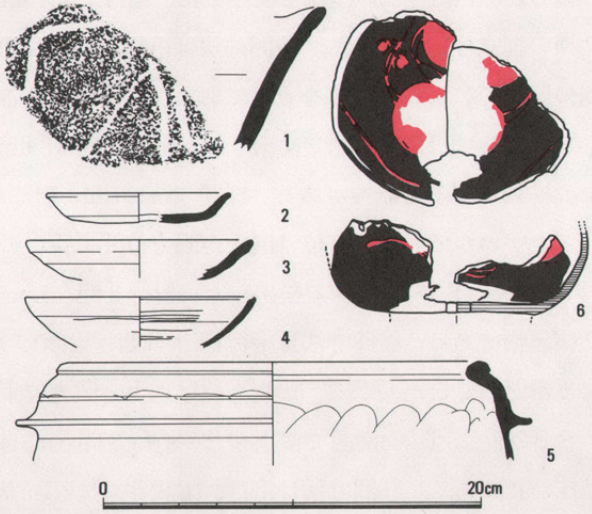
ＳＥ275　ＳＢ265東側で検出した井戸である。掘形は東西約1.7m、南北約1.9mの平面不整円形を呈する。検出面からの深さは約2.1mである。底に人頭大の河原石が掘形の壁に沿って４個残存しており、石組井戸であったと考えられる。埋土から13世紀中頃の瓦器、土釜、巴文軒丸瓦、漆椀が出土した。　（原田憲二郎）

Ⅲ　出土遺物

出土遺物は整理箱で6箱分ある。奈良時代の土器が大半で、柱穴、遺物包含層から出土した。旧河道からは縄文時代の深鉢の口縁部（１）が１片出土した。ＳＥ275からは13世紀中頃の遺物が出土した。土師器皿（２・３）、羽釜（５）、瓦器椀（４）、漆椀（６）がある。

漆椀は高台付の挽物椀で、底部外面以外は黒漆をかけ、内外面に朱漆で文様を施す。

（安井宣也、久保邦江、中島和彦）



出土遺物（１／４）

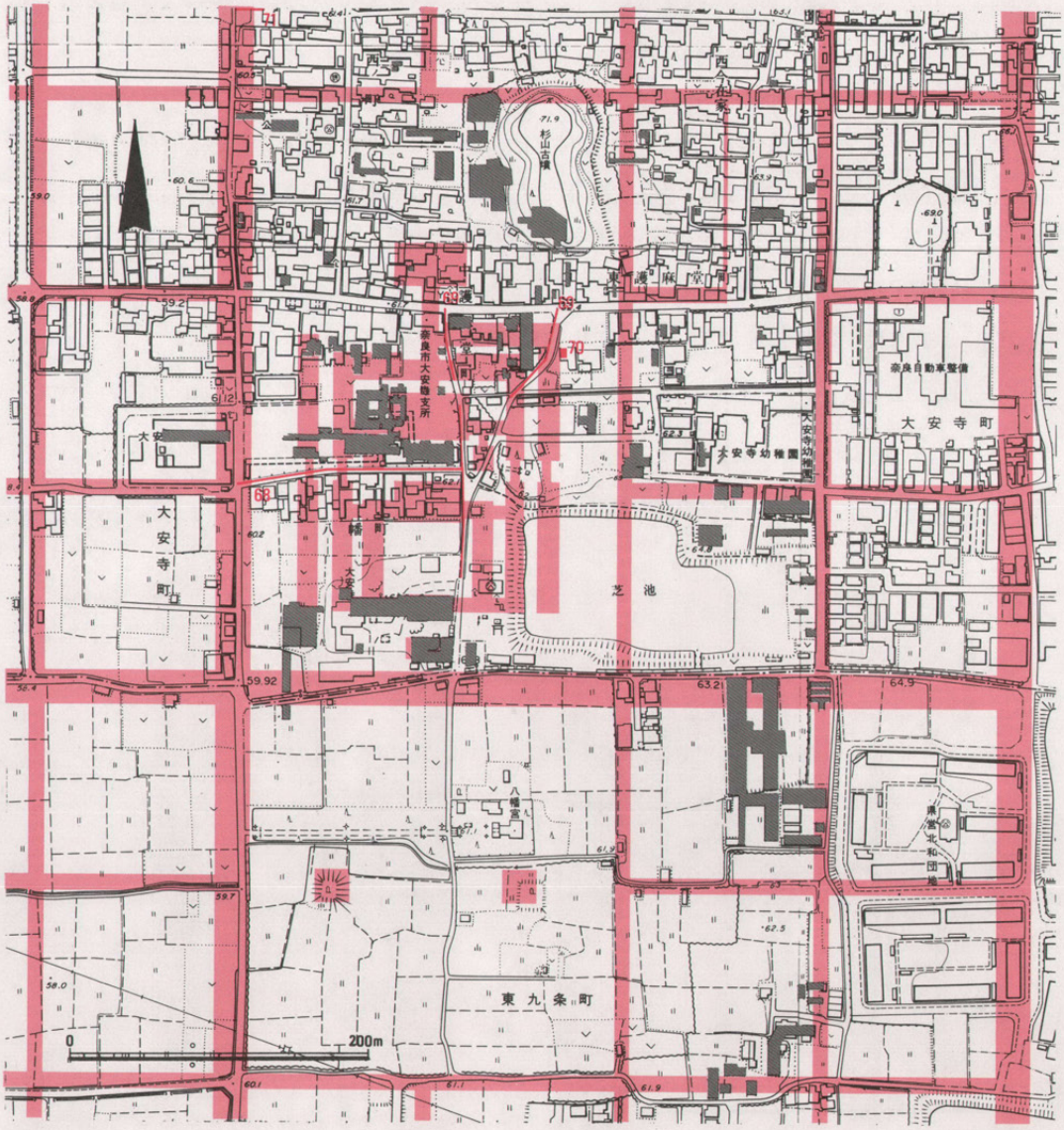
Ⅳ　まとめ

これまでに六坪で検出した建物は、重複関係や建物方位から少なくとも３時期の変遷があると考えられていた。しかし今回の調査地では、建物の重複関係からＳＢ260→ＳＢ267→ＳＢ261、ＳＢ262という変遷があり、しかもＳＢ261・262は同時並存の可能性は考えられないので少なくとも４時期以上あることが判明した。また第１次調査区で検出した調査区外東へ続く掘立柱塀ＳＡ102・104、掘立柱建物ＳＢ106は本調査地では検出できなかった。このことからＳＡ102・104は両調査区間の未調査区内で完結するか、南へ曲折するものと考えられる。ＳＢ106も未調査区で完結するか、あるいは第１次調査で確認している間仕切りと考えられていた柱は、妻柱である可能性も考えられる。　（原田憲二郎）

Ⅱ　寺院跡の調査

1　史跡大安寺旧境内の調査

史跡大安寺旧境内では、今年度第68次～第71次の４件の調査を実施した。いずれも現状変更許可申請に関わる調査である。うち第68・69次調査は、公共下水道管布設に関わるもので、ともに伽藍中心部での調査である。小範囲の発掘であったが、伽藍に関しての重要な成果を得た。また第70•71次調査は、個人住宅建設に関わる調査として実施したが、伽藍に関する遺構は確認できなかった。なお、第69次調査の成果は来年度に報告する。



史跡大安寺旧境内発掘調査位置図（１／5,000）

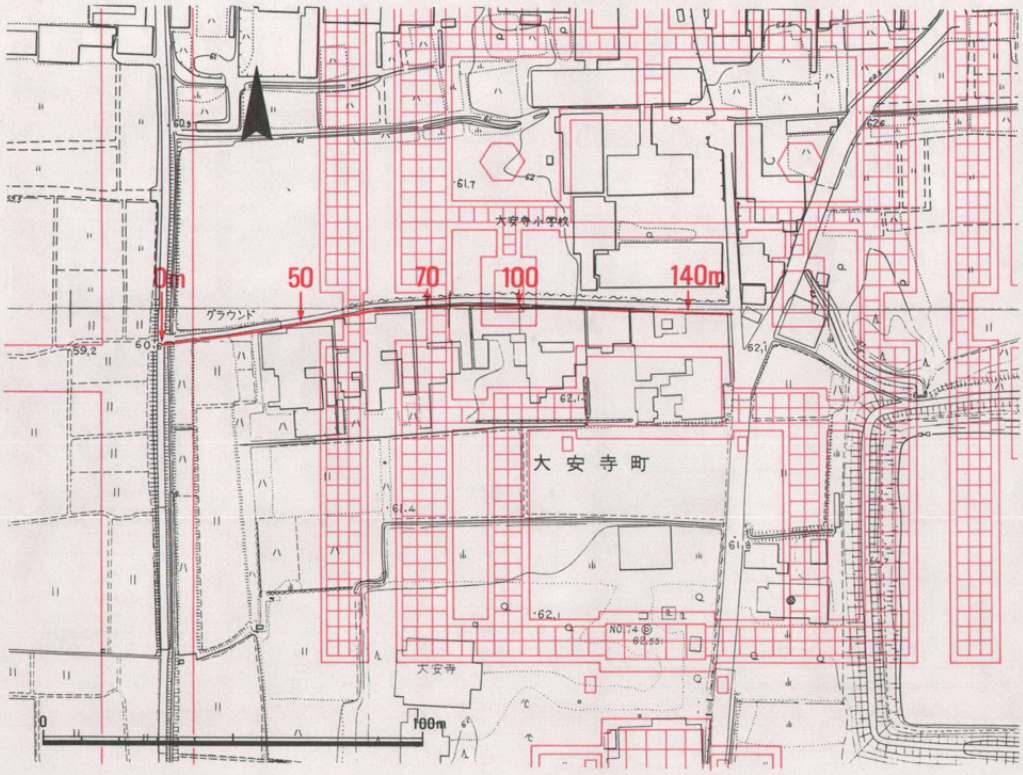
(1)　金堂・西面太房・西面中房の調査　第68次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市大安寺二丁目における奈良市長大川靖則申請の公共下水道管布設に伴う現状変更等許可申請に関わる調査である。当該申請工事は、大安寺旧境内金堂推定地北辺の市道に公共下水道管を埋設しようとするものであり、西面太房及び西面中房を横断し、金堂の北側を通ることになる。このため、文化庁長官の指示に基づき事前の発掘調査と、工事の進行に並行して厳重な立会調査を行った。工事の性格から調査区を布設の掘削範囲（幅約1.5m×総延長145m）に設定し、平成７年６月１日から６月19日にかけて調査を行った。

大安寺旧境内では、昭和29年の南大門、中門の調査以来多くの調査が行われてきた。特に調査地に北接する大安寺小学校運動場内では、昭和52年度に奈良国立文化財研究所による発掘調査[1)]がおこなわれ、運動場盛土直下で西面中房の基壇及び礎石の据付痕跡が検出されている。さらに調査区内の一部の掘り下げ調査により、大安寺創建以前の地表面および創建時の盛土整地土層も確認している。

注１）奈良市教育委員会『平城京左京六条三坊十四坪発掘調査概報』1978

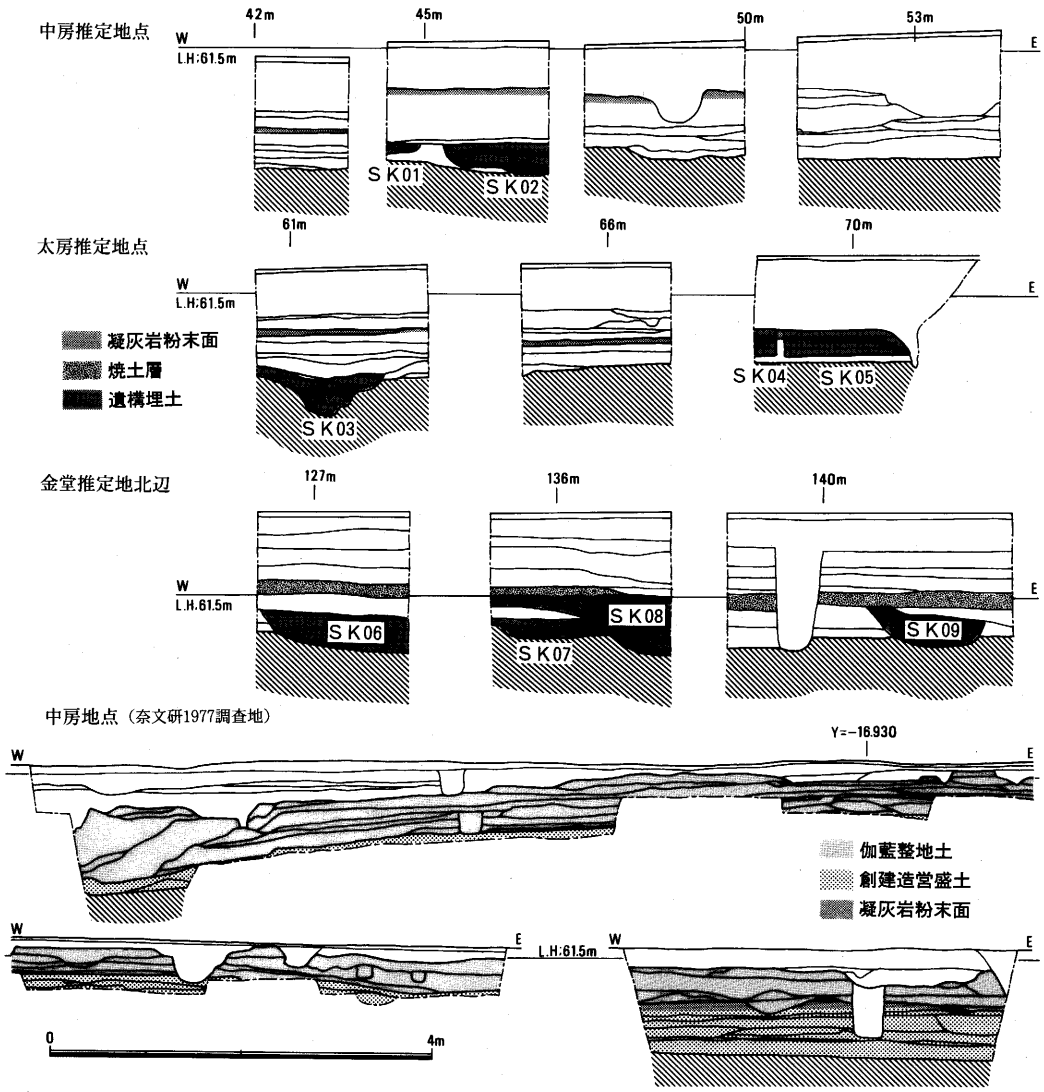


発掘調査位置と伽藍復元図（１／2,000）

Ⅱ　検出遺構

当該市道の路面は、東から西に向かって徐々に下がっており、東端と西端の標高には約1.5mの高低差がある。発掘区内の基本的な層序は、市道路上であることから、表土から約0.5mまでは路面舗装や水道管工事などによる撹乱土である。この撹乱土以下はどの地点においても比較的水平な土層堆積が続き、舗装面から約1.2mで地山にいたる。各堆積土は粗く、版築の痕跡はみられなかった。各層からは多くの遺物が出土した。後述のように、これらの堆積土層のうちには遺構面となるものが何面かあるが、平面的な観察では明らかにし得なかった。また、発掘区東端での地山面の標高は約61.3m、西端での標高は約59.5mであり、2m近い比高差がある。

今回の発掘区内では、中房・太房のそれぞれの推定位置においても伽藍の遺構は検出で



大安寺旧境内第68次　発掘区土層図（1／80）

きなかった。以下に各伽藍推定地点での所見を概述する。

中房推定地点　現地表下約1.2m（標高約59.5m）で灰色粘土の地山になる。基本的にこの地山上面に何層かの水平な堆積土層があり、地山面から約0.5m～0.7mの堆積土層の上面（標高約61.1m）に凝灰岩粉末を散布し、明確な平坦面を造っている。この盛土はある時期の遺構面かと考えられるが、地山とこの凝灰岩粉末面の間にある堆積土層を掘込む土坑埋土から10世紀前半代の土器類が出土していることから、この凝灰岩粉末面が創建当初の造成に関わるものとは考えられない。

太房推定地点　現地表面から約1.1m（標高約59.7m）で灰色粘質土を主とする地山となる。中房推定地点と同様にこの地山上面には何層かの水平な堆積土層があり、地山面から約0.4m～0.5mの堆積土層の上面（標高約61.0m）に、凝灰岩粉末を散布した明確な平坦面がある。この面の上層にはさらに盛土を行っている。ここでは、この凝灰岩粉末面の上層から掘込まれた土坑をも検出しているが、遺物が出土せず、その時期は不明である。

金堂北辺地点　現地表面から約1.2m～1.5m（標高61.0m）で灰色粘土の地山になる。中房・太房位置の堆積状態とは異なり、各堆積層が厚く、それぞれの層から多くの遺物が出土した。また、焼土層を2面確認した。そのうちの下層焼土層は地山直上に部分的に堆積し、焼土層内から奈良時代の瓦片が出土した。この焼土層に掘込まれた土坑を検出しており、埋土からは9世紀後半代の土器類が出土した。この土坑上面には、さらに10世紀前半代の土器類を含む堆積土ないしは土坑があり、これを覆って上層焼土層が堆積する。この上層焼土層からは、非常に多くの瓦塼類が出土しており、おそらく延喜11年（911）の講堂・三面僧房の焼失時のものと考えられる。

また、大安寺小学校運動場の中房の調査（奈文研1977）でも現地表下1.4mで灰色粘土の地山となることが確認されており、この地山上面を1m以上も盛土整地し、創建時の中房が造営されたことが明かにされている。検出された地山面の標高は、約60.5mであり、中房の基壇検出遺構面の標高は約61.5mである。また、今回確認した中房・太房位置での土層堆積と同様に、凝灰岩粉末を散布した平坦面がほぼ同じ標高位置（約61.0m）にあることを確認しており、その面にさらに盛土を行っていることも、今回太房推定地点で確認した層序と一致する。ただ、この調査時にはいずれの堆積土からも奈良時代の遺物しか出土しなかったことから、創建時の造営盛土と位置づけられているが、この点は、今回の調査結果とは異なっており、今後の調査課題となった。

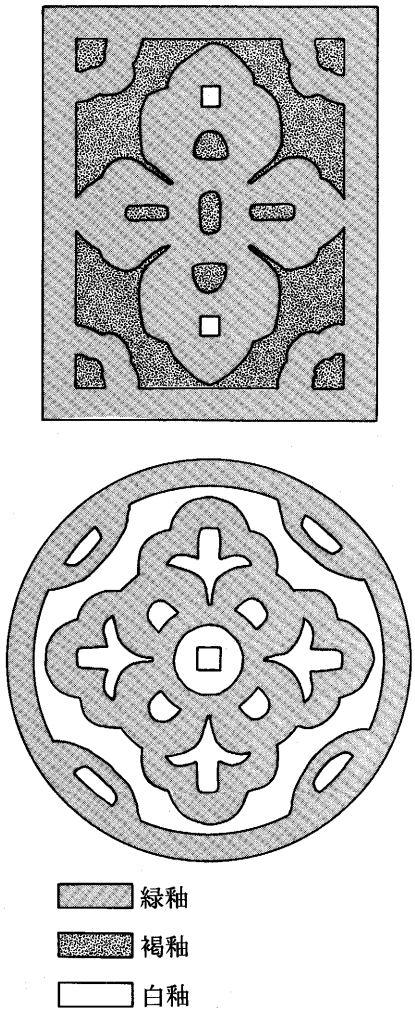
Ⅲ　出土遺物

各堆積層、焼土層、土坑から古墳時代から平安時代にかけての遺物が出土した。特筆すべきものに、金堂北辺地点で出土した唐三彩陶枕片と非常に多くの瓦塼類がある。ここでは瓦類について以下に記す。　（立石堅志）

瓦　類　瓦類は遺物整理箱で36箱分が出土した。出土瓦類の大半は丸瓦、平瓦であるが、他に軒丸瓦、軒平瓦、塼、熨斗瓦、二彩棰先瓦がある。ここでは軒瓦と二彩棰先瓦について述べる。

軒丸瓦は19点、軒平瓦は15点出土した。軒丸瓦の内訳は6138型式Ｃ種１点、6138型式Ｅ種２点、6231型式Ａ種１点、6304型式Ｄ種13点、6308型式Ｉ種１点、7251型式Ａ種１点である。軒平瓦の内訳は6661型式Ｂ種２点、6664型式Ａ種３点、6682型式Ｂ種１点、6690型式Ａ種１点、6712型式Ａ種４点、6712型式Ｂ種３点、型式不明１点である。

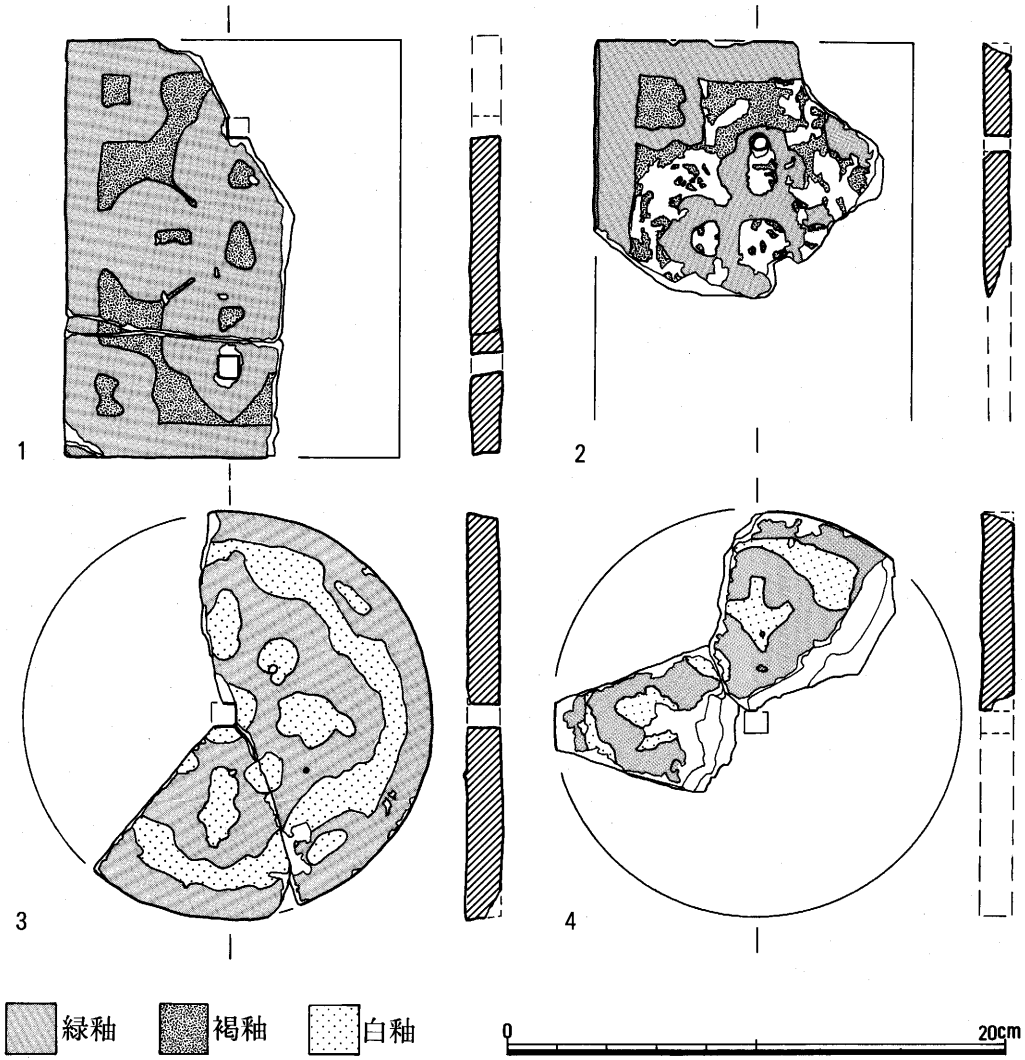
二彩棰先瓦は全部で18点10個体分出土した。今回出土した二彩棰先瓦は、形態から円形の地棰用のものと長方形の飛檐棰用のものにわけられる。1966年の講堂跡の調査でも円形棰先瓦片が出土しており、文様構成や形態などを復元している[1]が、今回の調査ではさらに良好な資料が得られ、方形棰先瓦も詳細に復元することが可能である。



二彩棰先瓦復元図（１／３）

円形棰先瓦（３・４）はＳＫ07から３点２個体、ＳＫ08から１点の計４点３個体出土した。また今年度１月には金堂推定地北東隅で下水工事に関わる立会調査を行っており、その際にも２点１個体出土した。これも併せて載せておく（４）。蓮弁と周縁を緑釉で表現し、それ以外の部分を白釉で埋める。文様は中房を円形とし、中心の釘孔から対角線上四方に蓮弁をおき、その間に三葉文をあらわす。周縁には、釘孔の対角線上にそれぞれ内行する蓮弁をあらわす。釘孔は一辺0.9㎝の正方形で中心に１つ、文様面から施釉前にあけられている。復元径16.2㎝、平均厚1.3㎝である。

長方形棰先瓦は幅の長短、厚さ、文様、釘孔の形態の違いなどからａ・ｂの２種類に分類できる。ａ・ｂ類ともに釉は、蓮弁と周縁を緑釉で表現し、それ以外の部分を褐釉で埋める。ａ類（１）の長方形棰先瓦はＳＫ07から13点６個体出土した。文様は中房を長円形とし、四方に蓮弁をあらわす。長辺側の蓮弁は周縁と接続する。周縁四隅にもそれぞれ内行する三葉文をあらわす。釘穴は一辺0.8㎝の正方形で、上下蓮弁の先端付近にそれぞれ１つ、文様面から施釉前にあけられている。復元高16.6㎝、復元幅13.3㎝、平均厚1.3㎝で



二彩棰先瓦（1／3）

ある。b類（2）の長方形棰先瓦はＳＫ09から１点出土した。焼損のため釉の剥離や融解がみられる。文様は中房を円形とし、四方に蓮弁をあらわす。長辺側の蓮弁と周縁とは接続しない。周縁四隅にもそれぞれ内行する三葉文をあらわす。釘穴は径0.6cmの円形で、上部蓮弁の先端付近に１つ、裏面から施釉前にあけられている。おそらく下部蓮弁の先端付近にも、もう１つ開けられていたものと思われる。裏面には端面から約１cm内側にはいったところに、幅約0.3cmの沈線が彫られ、沈線が直角にまじわるところで角に向かっていく。この裏面の沈線の意味については不明である。残存高10cm、復元幅12.6cm、平均厚1.0cmである。なお円形、長方形の棰先瓦ともに、文様面に重ね焼きの際に用いた目痕を残すものがある。

（原田憲二郎、山前智敬）

注１）八賀普「大安寺発掘調査概要」『奈良国立文化財研究所年報1967』奈文研　1967

(2) 東面中房の調査　第70次

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市大安寺一丁目10番27号において実施した、大西健勝氏提出の農家住宅改築のための現状変更許可申請に関わる発掘調査である。調査地は、大安寺伽藍の復元では、東面中房が想定される場所である。調査は、建物予定地に31.5㎡の発掘区を設定して実施した。調査期間は、平成８年２月13日から２月26日までである。

Ⅱ　検出遺構

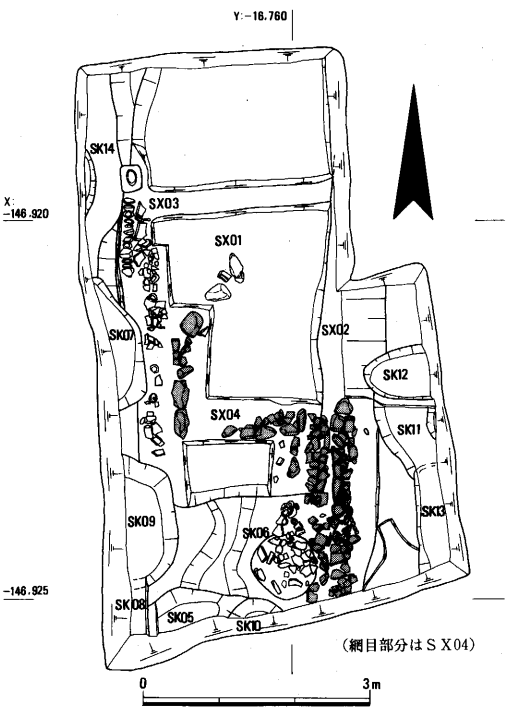
発掘区内の層序は、厚さ0.6ｍの盛土の下に厚さ0.4ｍの耕土層があり、明緑灰色シルト層となる。遺構検出面は明緑灰色シルト層上面で、標高は概ね62.1ｍである。

検出遺構には、溝状の掘り込み２、石・瓦列１、石組遺構１、土坑９がある。調査面積が小さく、大半の遺構は一部分を検出したにすぎない。各遺構の重複関係は模式図に示すとおりである。

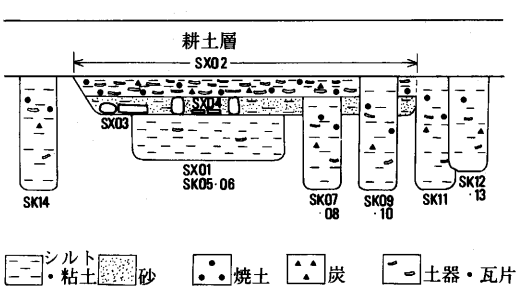
ＳＸ01は、後述のＳＸ02底面で検出した幅2.3ｍ、深さ0.3ｍの溝状の掘り込みで発掘区外北に続く。埋土には奈良時代の土器片、奈良～鎌倉時代の瓦片を含む。

ＳＸ02は、幅3.8ｍ、遺構検出面からの深さ0.3ｍの溝状の掘り込みで、発掘区外南北に続く。埋土は２層あり、上層埋土には平安時代の土器片、奈良～平安時代の瓦片や焼土・炭を含むが、下層埋土には遺物を含まない。重複関係からＳＸ01より新しいことがわかる。ＳＸ02の西肩沿いの底面上には南北方向の石・瓦列ＳＸ03がある。位置関係からＳＸ02に付属する遺構とみられる。

ＳＸ04は、溝ＳＤ02下層埋土上面で検出した石組遺構。西・南の２方に面を揃えたＬ字形の石列の南東隅に石と瓦を組



大安寺旧境内第70次調査　遺構平面図（１／100）



遺構断面模式図

んだ南北方向の溝が接続する。石列と溝の接続部分以外は遺存状態が悪く、本来の形態は不明である。掘形は確認できなかった。

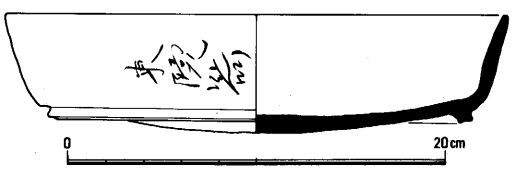
土坑には、埋土に焼土・炭を含むもの（ＳＫ07～13）と含まないもの（ＳＫ05・06）がある。溝ＳＤ02下層埋土との重複関係から前者の方が新しいものとみられる。これらの土坑の埋土から奈良時代の瓦片が出土した。

これらの遺構は、出土遺物や重複関係からいずれも鎌倉時代以降のものとみられ、少なくとも４時期以上の変遷が考えられる。奈良時代の東面中房に関わる遺構は検出されなかったが、度重なる後世の土地改変に伴いすでに削平された可能性がある。　（安井宣也）

Ⅲ　出土遺物

遺物整理箱で56箱分の瓦類・土器類が出土した。大半が瓦類で、土器類は１箱分のみである。以下、それぞれの概要を記す。。

土器類　土器類は、ＳＸ01・02、耕土層から出土した。大半が奈良・平安時代の土師器・須恵器で、鎌倉～江戸時代の土師器や陶磁器などが若干ある。ＳＸ01からは、奈良時代後半の土師器杯Ａ・甕Ａ、須恵器杯Ｂ・杯蓋・皿Ｂ・甕、平安時代初頭の土師器杯Ａ・皿Ａ・甕、黒色土器Ａ類杯、須恵器杯Ｂ・壷Ｍが出土した。奈良時代の須恵器皿Ｂの口縁部外面及び底部外面には、「東院器」と読める文字が墨書きされている。大安寺旧境内の調査で「東院」と記された墨書土器が出土したのは、第64次調査に引き続きこれで２例目である。　（三好美穂）



墨書土器（１／４）

瓦　類　大半が奈良時代の丸瓦・平瓦で、他に軒瓦と道具瓦がある。軒瓦のうち、奈良時代の軒瓦の内訳は、下表のとおりである。平安時代以降の軒瓦は、ＳＸ02から出土した軒丸瓦7251型式Ａ種と、ＳＸ01から出土した鎌倉時代の文字文軒平瓦が各１点ずつある。道具瓦には、棰先瓦、鬼瓦、熨斗瓦、塼がある。棰先瓦は飛檐棰用の方形のもので、表面には褐と緑の二彩釉で蓮弁が描かれている。鬼瓦は南都七大寺Ｖ式Ａ種に分類できる。その他、丸瓦の凸面に「□安寺」とヘラ描きされたものが１点ある。　（宮崎正裕）

型式・種 / 出土場所	軒丸瓦				軒丸瓦	軒平瓦						軒平瓦
	6137Ａ	6138Ｃ	6235Ｉ	6304Ｄ	合計	6664Ａ	6690Ａ	6712Ａ	6712Ｂ	6716Ｃ	6717Ａ	合計
ＳＸ01（埋土中）			1	2	3	1	1	5				7
ＳＸ02（埋土上層中）	4	11			15			6	1	7	1	15
ＳＸ03（瓦敷中）	1				1							
ＳＸ04（南北溝）	1				1							
ＳＫ07（埋土中）										1		1
ＳＫ09（埋土中）						1						1
旧耕土層（遺物包含層）								5			4	9
合計	6	11	1	2	20	2	1	16	1	8	5	33

奈良時代出土軒瓦点数表

2　菅原寺旧境内の調査

菅原寺旧境内では、今年度は１件の調査を行なった。個人住宅建設に伴う調査で、菅原寺金堂の北西に位置するところである。菅原寺については、昭和44年に重要文化財に指定されている現在の本堂の修理に関わって周辺調査が行なわれており、現本堂がほぼ奈良時代の金堂位置にあることが明らかにされている。今回の第３次調査では、これまでの第１次・第２次調査と同じく直接伽藍に関わる遺構は確認できなかった。

菅原寺旧境内発掘調査位置図（１／3,000）

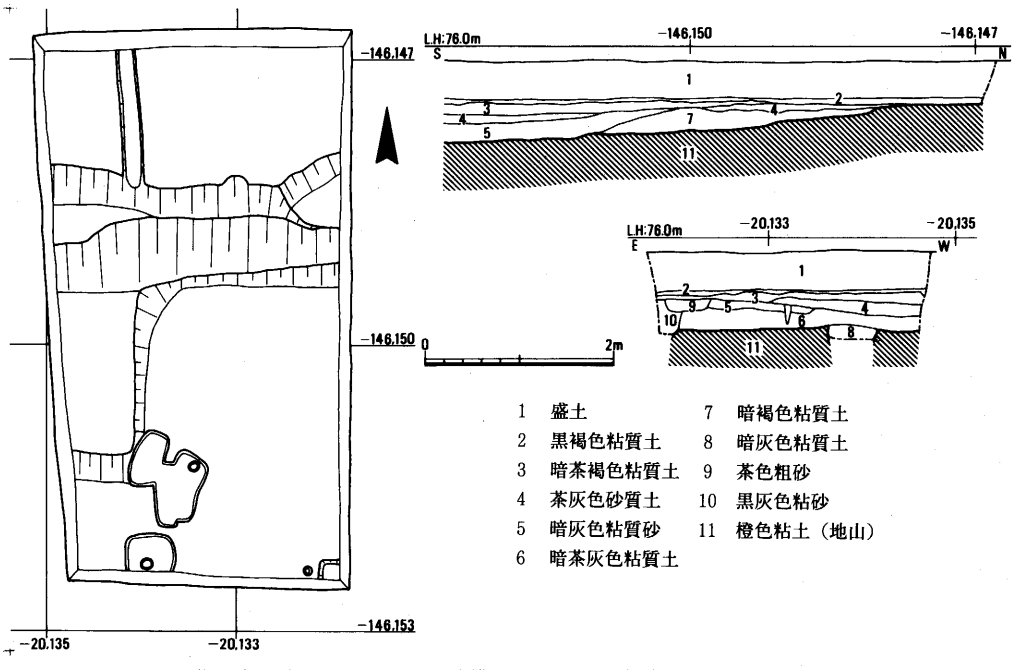
第３次調査

本調査は、奈良市菅原西町520-1における吉松正男氏届出の個人住宅増築工事に伴う事前発掘調査である。当該地は、菅原寺金堂の北西にあり、条坊復元では菅原寺の寺域が占める５坪分の北西の坪の南端、平城京右京三条三坊十六坪にあり、十五坪との坪境小路に面する位置にあたる。このため、菅原寺に関連する遺構及び坪境小路を検出することを目的に調査を開始した。発掘区は、坪境小路想定位置に東西３ｍ、南北６ｍ（面積18㎡）で設定した。調査期間は、平成７年10月11日から10月13日にかけてである。

発掘区内の基本的な層序は、地表面下、黒褐色粘質土、暗茶褐色粘質土と続き、発掘区北端では表土下約0.5ｍ、標高75.4ｍで橙褐色の地山となる。この地山面は南へ向かって緩やかに下り、発掘区南端では暗茶褐色粘質土下、茶灰色砂質土、暗灰色粘質砂、暗茶灰色粘質土、暗褐色粘質土と続き、表土下約0.9ｍ、標高75.0ｍで地山となる。茶灰色粘質土からは近世磁器片、暗褐色粘質土からは奈良時代の土器、瓦片が出土した。

地山上面で奈良時代の柱穴３、暗茶灰色粘質土上面で近世土坑１を検出した。発掘区南部での地山の傾斜は、奈良時代以降の削平によるものと考えられるが、発掘区が狭小であり、その規模・性格は明かでない。当初目的とした伽藍に直接関連した遺構や坪境小路の痕跡については確認できなかった。

（立石堅志）

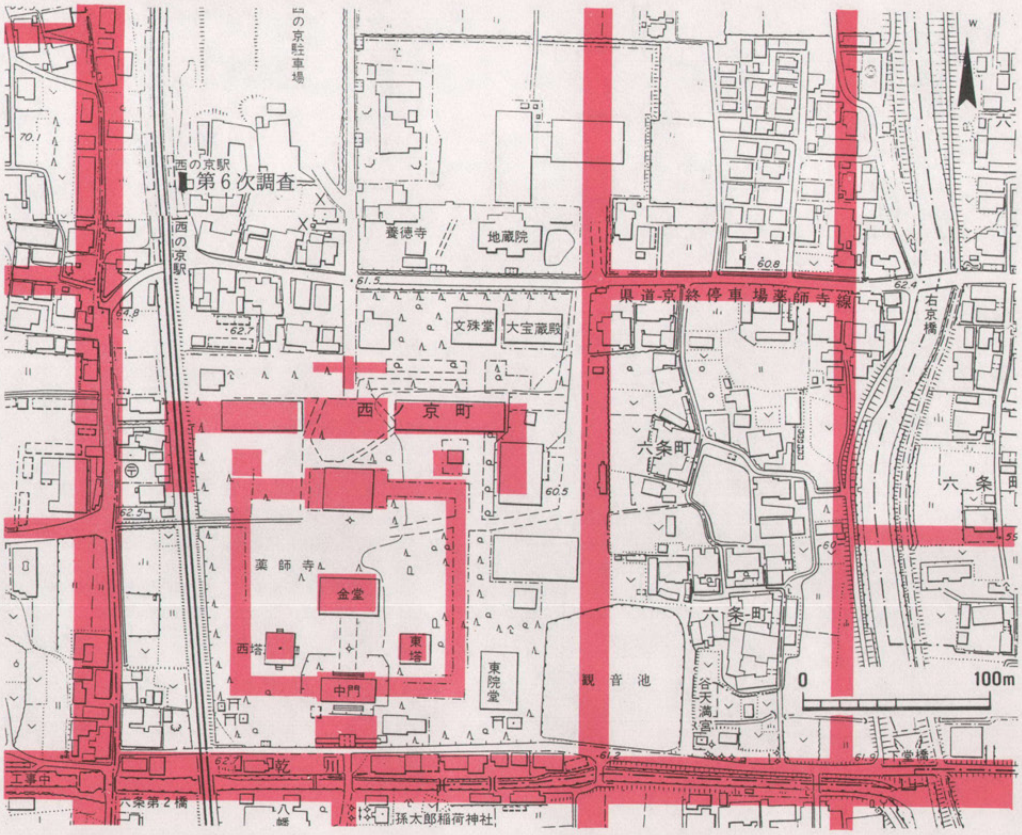


菅原寺旧境内第３次調査　遺構平面図、西・南壁土層図（１／80）

3　薬師寺旧境内の調査　第６次調査

Ⅰ　はじめに

平成６年度に薬師寺旧境内において実施した２箇所（第6・7次調査）の発掘調査のうち、今回は第６次調査の概要が未報告であったため、以下報告する。第６次調査は西ノ京町字金岡408 番地において実施した、近鉄西の京駅駅舎地下化に伴う事前の発掘調査である。近鉄橿原線は薬師寺西面大垣推定地の東側を並行して南北に通る鉄道で、駅は旧境内の西辺中央付近に位置している。この橿原線は大正10年（1921）に西大寺、大和郡山駅間が開通し、全線が完成したのは大正12年３月である。今回の工事は現駅舎を解体し、その北側に地下の駅舎と通路を建設するものである。通路部分については発掘調査が困難であったため平成７年２月５日から２月25日にかけて工事立会い調査をした。発掘調査期間は平成７年２月27日から３月９日まで、調査面積は60㎡である。

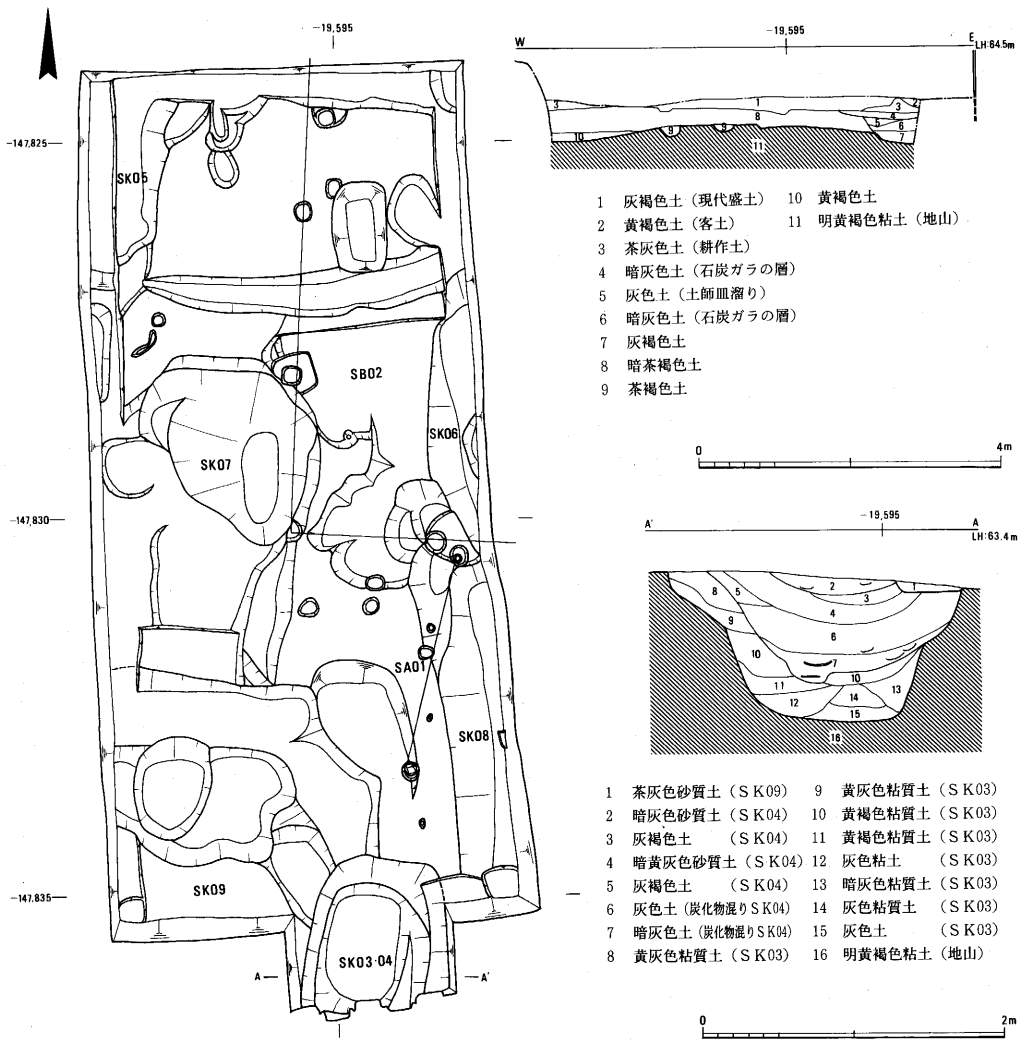


薬師寺旧境内発掘調査位置図（１／4,000）

Ⅱ　検出遺構

駅周辺の地形は西の京丘陵から東へ延びる支丘陵裾部あたる。駅はこの先端を切土して造られており駅の西側は崖面になっている。立会調査の際にも表土を取り除くと地山が露呈した。発掘区内の層序は地表から0.8mまでは駅造成工事の盛土で、その下は暗灰褐色土が堆積し、地表下0.8mで、明黄褐色粘土（地山）に至る。地山は北西から南東に緩やかに下降している。遺構面は地山上面（標高63.0m～63.5m）である。検出した遺構には平安時代末の建物１棟、柱列２条、土坑１と江戸時代の土坑５がある。

ＳＡ01　南北２間の掘立柱列。柱穴は径20㎝、深さ20㎝と浅く、柱間は1.3～1.5mと不揃い。南端の柱穴から、凸面に「貞□」と陰刻された叩板の痕跡がある平瓦が出土した。



薬師寺旧境内第６次調査　遺構平面図・北壁土層図（１／100）、ＳＫ03・04土層図（１／50）

ＳＢ02　東西２間以上、南北３間以上の掘立柱建物。柱間は2.1～2.0ｍと不揃い。柱穴は径0.2ｍ、深さ0.2ｍと浅いが、掘形中央に径0.1ｍの柱痕跡が残る。

ＳＫ03・04　ほぼ同位置で検出した土坑。いずれも平面形が隅丸長方形掘形の土坑で、ＳＫ03は長辺２ｍ以上、短辺1.8ｍ、深さ１ｍあり、出土遺物はない。ＳＫ04は長辺２ｍ、短辺1.6ｍ、深さ0.7ｍあり、埋土から平安時代末の土器が多量に出土した。

ＳＫ05～09　平面形が不整形な土坑である。発掘区のほぼ全体に見られ、地山の明黄褐色粘土層を掘り込んでいる。いずれの土坑からも17世紀頃の土器類が出土した。この時期の粘土採掘坑であろう。　（篠原豊一）

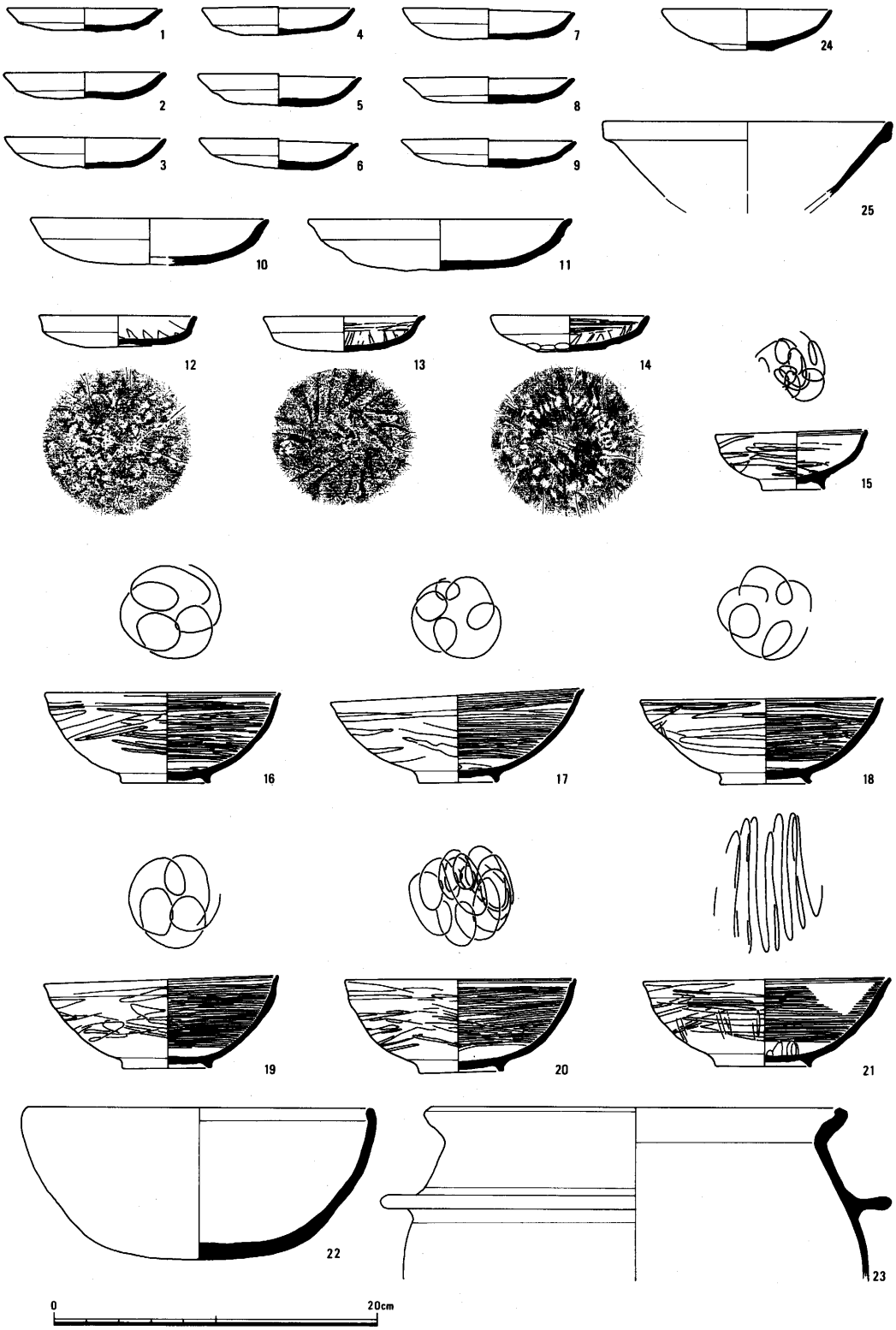
Ⅲ　出土遺物

出土した遺物には奈良時代から近代までの土器・瓦類があるが、その大半はＳＫ04から出土したものである。瓦類とＳＫ04出土土器について述べる。

瓦　類　遺物整理箱で15箱分ある。軒丸瓦５点、軒平瓦３点、鬼瓦１点、塼４点のほかは、丸瓦、平瓦がある。奈良時代の軒丸瓦には平城宮6276型式Ｅ種（包含層出土１点）、軒平瓦には平城宮6641型式Ｇ種（ＳＫ09出土１点）、6641型式Ｉ種（ＳＫ09出土１点）、平安時代中期の軒丸瓦、薬師寺41型式[1]（ＳＫ06出土１点）がある。　（宮崎正裕）

ＳＫ04出土土器　出土した土器類には、土師器皿（１～11）・釜（23）・鉢（22）、瓦器椀（16～21）・小椀（15）・皿（12～14）、中国製磁器椀（25）・皿（24）がある。瓦器椀は、口径14.5～15㎝。器高約5.5㎝、内面見込みには螺旋状もしくは平行方向の暗文を施し、内面下半までをへら磨きする。外面のへら磨きはやや粗くなる。16・19のように粘土板の接合痕を残すものもある。瓦器小椀は、口径9.2㎝、器高3.6㎝。内面見込みに螺旋状の暗文を施す。瓦器皿はいずれも口径10㎝前後、器高２㎝程度であるが、外面に残る調整の痕跡により大きく３種に分けることができる。まず、①底部外面を比較的平滑に仕上げるもの(12)、②底部外面を手掌全面により回転しながら押さえる痕跡を明瞭に残すもの（13）、さらに③粘土板を接合する際に底部中央を残して指押さえすることにより、底部が凸状となるもの（14）。これらの差異が、何に起因するものかについては詳らかではないが、成形段階での手法の異なりと考えてよかろう。土師器皿には大小の２種がある。大皿（10・11）は、口径15㎝前後、器高2.5㎝程度。小皿は口径9.5～10㎝前後のもの（１～６）と、口径10.5～11㎝前後のもの（７～９）がある。前者は口縁部がやや内湾するのに対して、後者はやや外反する傾向を示す。ともに胎土は乳白色を呈す。土師器鉢（22）は、口径22㎝、器高9.4㎝。内湾する体部とやや平底となる底部からなり、口縁部はかるく内傾する。器壁は約0.6㎝と厚いが、胎土・色調ともにこの時期の土師器釜に極めて類似する。いずれもその特徴から12世紀中頃の時期が考えられる。　（立石堅志）

注１）奈良国立文化財研究所　『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第45冊　1987

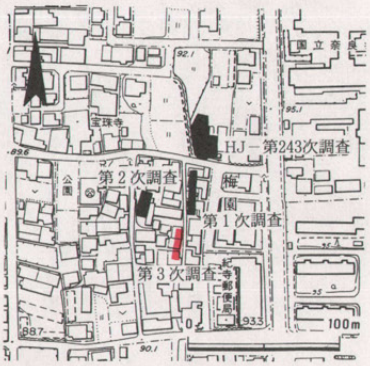


土坑ＳＫ04　出土土器（１／４）

Ⅲ　その他の調査

1　東紀寺遺跡の調査　第３次

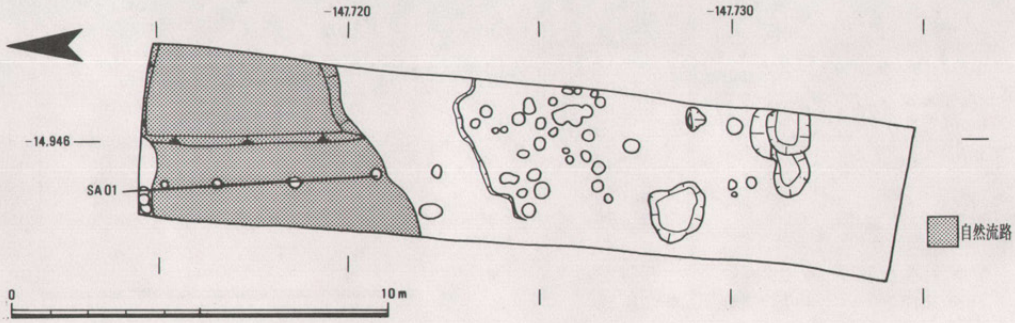
本調査は奈良市紀寺町562－2番地他で実施した梅園地区住環境整備事業に伴う事前の発掘調査である。東紀寺遺跡は春日山西麓の扇状地の縁辺にあり、古墳時代中期の古墳群を含む遺跡であるが、今のところ範囲は明確ではない。また、調査地は中世の興福寺の子院である大乗院領紀寺郷に推定されているが、これも詳細は不明である。これまでの東紀寺遺跡の調査では、古墳時代の他に鎌倉・室町・江戸時代の遺構を検出するなどの成果を上げている。今回の調査面積は90㎡、調査期間は平成７年７月３日から７月18日までである。発掘区内の層序は、厚さ0.2ｍの盛土以下、茶灰色砂質土、黄褐色粘土、茶褐色土、茶灰色砂礫と続き、地表下0.7ｍで茶褐色砂礫の地山に至る。遺構は全て地山上面で検出した。地山上面の標高は90.7ｍである。



東紀寺遺跡第３次調査　発掘区位置図（1／5,000）

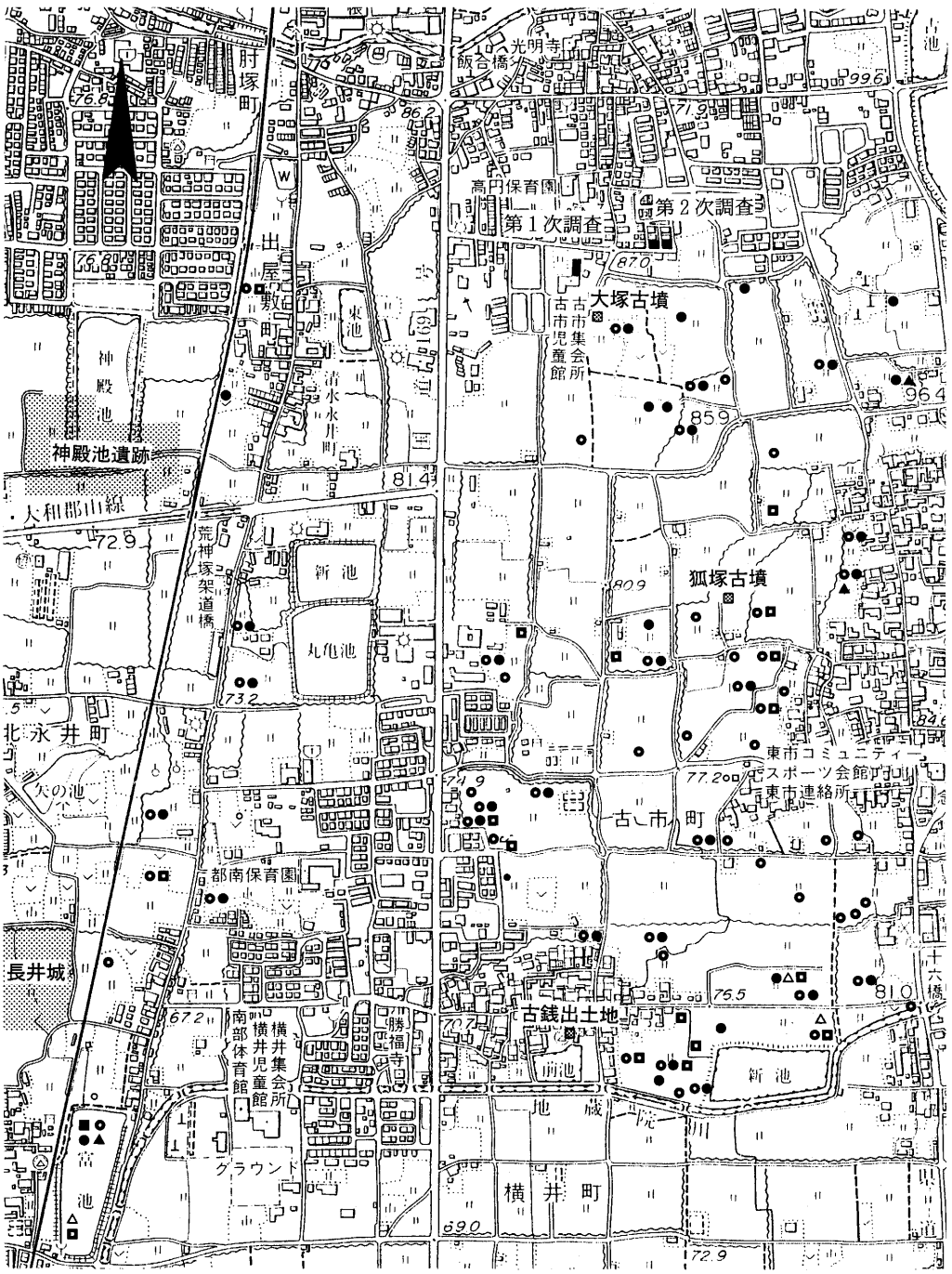
検出した遺構には時期不明の南北方向の掘立柱塀１条、土坑３がある。掘立柱塀ＳＡ01は３間分を検出した。北は発掘区外へ続く。柱間は2.1ｍ等間である。その他の柱穴は、検出面からの深さ５㎝以下のものが多く、また、発掘区が狭小なためか建物としてはまとまらない。発掘区北端で東西方向の自然流路を１条検出した。遺物は、自然流路から古墳時代中期の埴輪片が１点、茶褐色土から12世紀後半から13世紀初めの土師器皿１点と土師器細片が出土したのみである。今回の調査では、遺構・遺物ともに非常に少数であったことや、過去の調査地に比べ標高が低く、遺跡の立地に適さないことなどからみて、調査地周辺は東紀寺遺跡の縁辺にあたり、特に古墳時代の遺跡については発掘区北端で検出した自然流路が遺跡の南限である可能性が考えられる。今後のより広範囲な周辺地域での発掘調査成果を待って検討していきたい。

（田林香織）



東紀寺遺跡第３次調査　遺構平面図（１／200）

2　古市遺跡の調査　第２次



古市遺跡発掘区位置と周辺地域の遺物散布状況（１／10,000）

Ⅰ　はじめに

本調査は、奈良市古市町1191番地他において実施した第10号（古市）市営住宅建設に伴う事前の発掘調査である。調査地は、高円山の西側に岩井川によって形成された扇状地上に立地している。当該地一帯は、古墳時代から奈良時代の遺物散布地として周知されており、古市方形墳、車塚古墳、古市狐塚古墳、大塚古墳など古墳時代前期から後期にかけての古墳が存在することから、古墳時代の集落の存在も予測されている。これまで、昭和57年度に奈良市教育委員会が発掘調査（古市遺跡第１次調査）を実施しているが、遺構は検出しておらず、遺跡の実態については明らかになっていなかった。今回の調査は、遺物散布範囲の北辺に東・西２箇所の発掘区（調査面積210㎡）を設定して実施した。調査期間は、平成７年７月７日から８月11日までである。調査の結果、新たに下記の遺構を検出したことから、古市遺跡として報告する。

Ⅱ　検出遺構

発掘区内の基本的な層序は、約0.1ｍの盛土の下に、淡灰色土（耕土）、赤灰色土、淡赤灰色土、赤褐色土、黄灰色土、暗褐色土と続き、地表下約0.8ｍで黄灰色粘砂の地山に至る。遺構はすべて地山上面で検出した。地山上面の標高は、東発掘区北東隅で85.4ｍ、西発掘区南西隅で84.7ｍである。検出した遺構には、古墳時代の竪穴住居跡・掘立柱建物・掘立柱列・井戸・土坑・素掘りの溝などがある。発掘区北端では、暗褐色土上面から掘り込まれている２柱穴を確認した。柱掘形は、いずれも一辺0.9ｍ、深さ0.8ｍで、２柱穴間の寸法は、1.5ｍである。建物か塀の柱穴と考えられるが、今回の調査では明らかにすることはできなかった。

以下、主要な遺構について各調査区ごとに概要を記す。

東発掘区　竪穴住居跡ＳＢ02、掘立柱建物ＳＢ07～09、井戸ＳＥ11、溝状遺構ＳＸ17～19がある。これらの遺構は、大半が古墳時代中～後期頃のものと考えられる。

ＳＢ02　発掘区南西隅で検出した、東西3.6ｍ以上、南北4.5ｍ以上の平面方形の竪穴住居跡である。検出面からの深さは0.2ｍである。建物の西半が発掘区外へ続くため、全体の規模は不明。出土遺物がないため詳細な時期は確定できない。

ＳＢ07　ＳＢ02と重複して検出した桁行２間以上、梁行２間の掘立柱建物。妻柱の北東1.3ｍ、棟方向にあう位置で柱穴を検出しており、棟持柱になる可能性も考えられる。柱掘形からは５世紀末～６世紀の須恵器が出土。重複関係からＳＢ02よりも新しい。

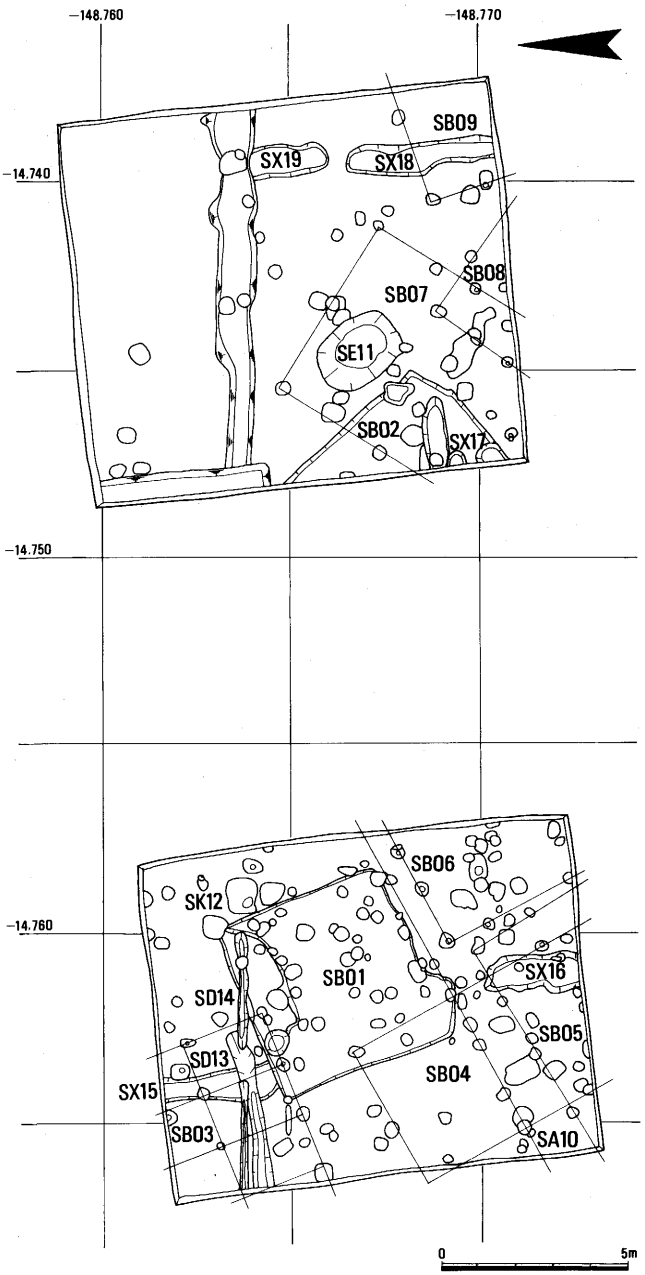
ＳＢ08　ＳＢ07の南側で検出した掘立柱建物で、建物の一部分を検出したのみで、全体の構造は不明である。建物の振れは、ＳＢ07と一致する。

ＳＢ09　発掘区南東隅で検出した東西２間以上、南北２間以上の掘立柱建物。建物の振れは、ＳＢ08・09とは異なり、後述するＳＢ01・03とほぼ一致する。

ＳＥ11　ＳＢ02の東側で検出した長辺約2.3ｍ、短辺1.7ｍの平面長方形掘形の素掘りの井戸。検出面からの深さは約0.7ｍある。埋土は淡灰色砂質土で、５世紀後半～６世紀初頭の土師器・須恵器が少量出土した。

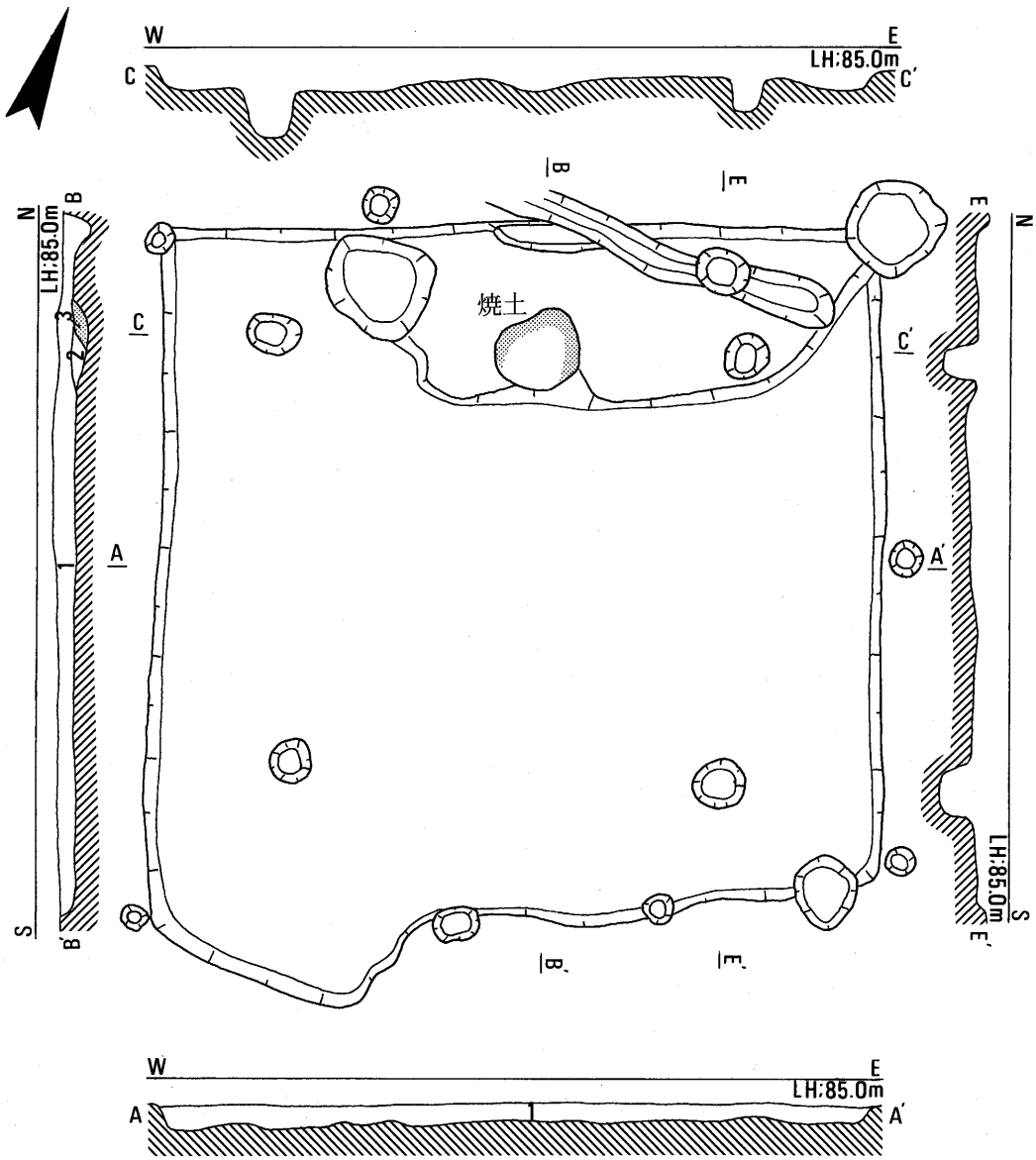
ＳＸ17～19　ＳＸ17はＳＢ02と重複して検出した東西1.8ｍ以上、南北0.6ｍの溝状遺構。検出面からの深さは約0.2ｍある。土坑内には茶褐色土が堆積し、６世紀後半の土師器・須恵器が出土した。重複関係からＳＢ02よりも新しいことが判る。ＳＸ18・19は、ともに灰褐色土が堆積し、一連の遺構である可能性が高い。

西発掘区　竪穴住居跡ＳＢ01、掘立柱建物ＳＢ03～06、掘立柱柱列ＳＡ10、土坑ＳＫ12、素掘りの溝ＳＤ13・14、溝状遺構ＳＸ15・16がある。大半が古墳時代中～後期のものと考えられる。



古市遺跡第２次調査　遺構平面図（１／200）

ＳＢ01　東西4.9ｍ、南北4.7ｍの平面方形の竪穴住居で、検出面から床面までの深さは約0.2ｍである。地山面を床面としている。四隅に柱を配したいわゆる四本柱構造で、一辺の柱間は、1.5ｍと1.7ｍである。壁面に沿ってめぐる周溝は、北壁に1.1ｍ分が残存する。溝幅は0.08ｍ、検出面からの深さは0.1ｍである。床面の中央やや北寄りに、径約0.6ｍ、深さ約0.1ｍの平面円形掘形の焼土坑がある。土坑内は、東・西・北面の三方の壁面が赤



1　暗褐色土

2　暗灰色土　3 赤褐色土（焼土）

0　2m

竪穴住居ＳＢ01　平・断面図（1／50）

く焼けており、炭混じりの茶褐色土が堆積していた。カマド或は炉であると思われる。住居内には暗褐色土が堆積し、5 世紀後半～6 世紀末の土師器・須恵器と共に、弥生土器が1点出土した。

ＳＢ03～06　ＳＢ03は、ＳＢ01とＳＸ15と重複して検出した東西3間以上、南北2間以上の総柱建物である。柱間寸法は、東西は1.1ｍ等間であるが、南北は1.5ｍとやや広い。

建物は、ＳＢ01と同じ方向に振れる。重複関係から、ＳＢ01・ＳＸ15よりも新しいことが判る。ＳＢ04は、ＳＢ01とＳＡ10と重複して検出した桁行３間以上、梁間２間の掘立柱建物である。建物は、ＳＢ03と比べて若干振れている。柱掘形からは、古墳時代の土師器・須恵器の細片が出土した。重複関係から、ＳＢ01・ＳＡ10よりも新しい。ＳＢ05は、発掘区南西部で検出した東西３間以上、南北２間以上の掘立柱建物である。建物の振れは、ＳＢ04とほぼ一致する。ＳＢ06は、ＳＢ05の東隣で検出した東西３間以上、南北４間以上の掘立柱建物である。建物の振れは、ＳＢ04・05とほぼ一致する。柱掘形から、古墳時代の土師器片が出土した。

ＳＡ10　ＳＢ01・04と重複して検出した３間以上の掘立柱列。主軸の振れは、ＳＢ04～06とほぼ一致する。重複関係から、ＳＢ01よりは新しく、ＳＢ04よりも古いことが判る。

ＳＫ12　ＳＢ01の東側で検出した東西0.9m、南北約0.8mの平面不整形の土坑で、検出面からの深さは約0.2mである。土坑内には褐灰色土が堆積し、５世紀後半の須恵器が少量出土した。

ＳＤ13・14　ＳＤ13・14は発掘区北端で検出した東西方向の素掘りの溝である。ＳＤ13からは、５世紀末から６世紀代の土師器が出土した。両溝は、重複しており、ＳＤ14は、ＳＤ13よりも新しい。

ＳＸ15・16　ＳＸ15は、ＳＢ01、ＳＤ13と重複して検出した溝状遺構。出土遺物がないため詳細な時期は不明だが、重複関係から、ＳＸ15→ＳＢ01→ＳＤ13→ＳＤ14の変遷が判る。ＳＸ16は、発掘区の南端で検出した溝状遺構である。出土遺物がなく、時期は不明。

この他に、小柱穴を幾つか検出しているが、建物としてはまとまらない。（秋山成人）

Ⅲ　出土遺物

弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、土製品、石製品が遺物整理箱で４箱分出土した。以下、遺構ごとに概要を説明する。

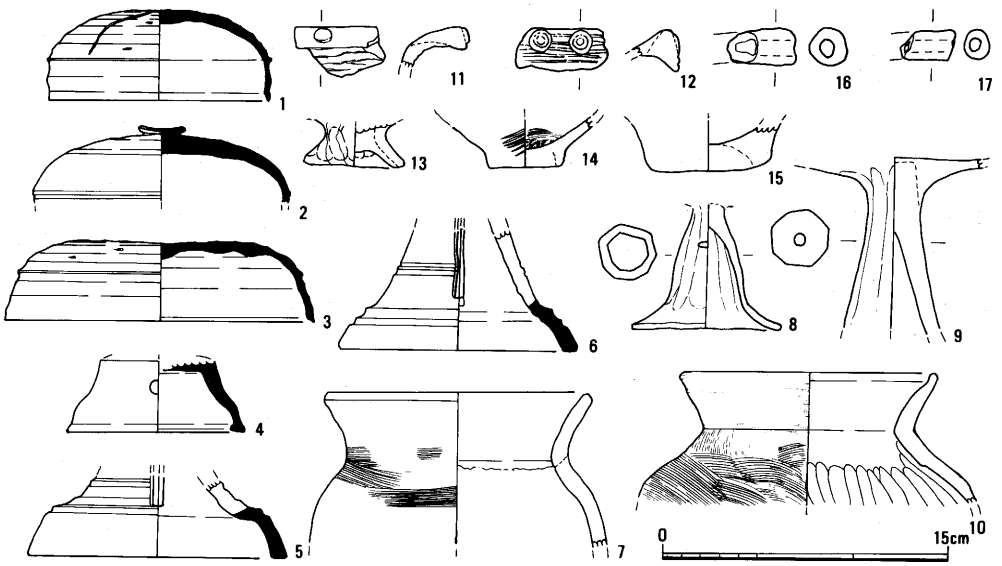
ＳＢ01からは、弥生時代中期の甕（14）、古墳時代中期から後期の土師器甕（10）、後期前半の須恵器高杯（４）、が出土した。14は外面をタタキ、内面をハケ調整している。10は肩部内面に斜め方向のナデ調整がなされている。

ＳＫ12からは、古墳時代中期後半の須恵器杯蓋（１）が出土した。

ＳＫ17からは、古墳時代後期前半の須恵器杯蓋（３）、後期後半の須恵器台付長頸壷（６）が出土した。６は外面全体に自然釉が付着する。

小柱穴からは弥生時代後期の壷（12）・台付鉢（13）、古墳時代中期の土師器甕（７）、後期の土師器高杯（９）、管状土錘（17）が出土した。12は口縁部に円形浮文が施されている。13は底部内外面に指頭圧痕が残る。９は脚部外面８面の面取りがなされている。

この他、ＳＥ11からは管状土錘（16）、遺物包含層からは弥生時代後期の壷（11）、甕あ



出土土器（1／4）

るいは壷（15)、古墳時代中期後半の須恵器杯蓋（2)、後期の須恵器台付長頸壷（5)、土師器高杯（8)、砥石が出土した。（大窪淳司）

Ⅳ　まとめ

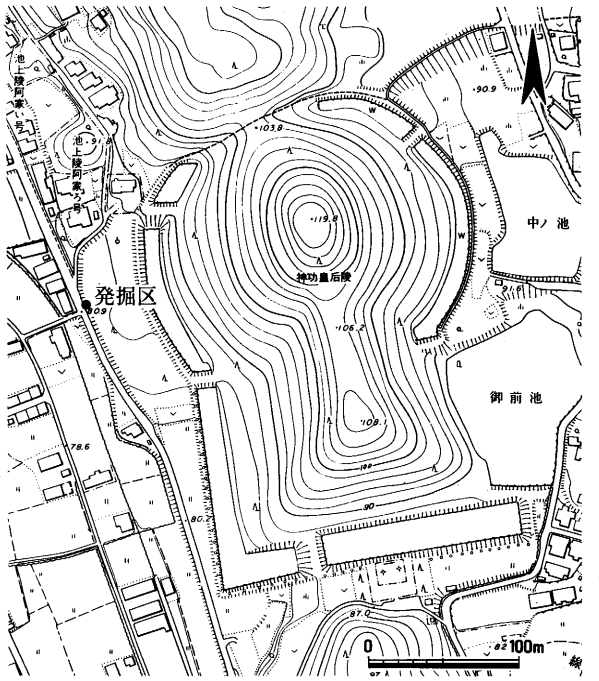
今回の調査により、これまで遺物の散布のみが知られていた本調査地に、住居跡を始めとする古墳時代の遺構が残っていることが確認できた。検出状況からみて、周辺に古墳時代の集落跡が広がっていることが推測され、また、発掘区内には弥生時代の遺構はないものの弥生時代の遺跡が存在している可能性もある。したがって、今後は、範囲確認等、遺跡の実態を解明する作業を進める必要があると考えられる。

（付）　周辺地域の踏査

今回の調査で古墳時代の遺構を検出したことにより、これまで遺物散布地とされていた地域に遺跡が存在することが確実になった。さらに、現在遺物散布地として周知されている地域外にも遺物が散布していることも予測された。そこで、周辺の状況を把握することを目的として踏査を実施した。踏査範囲は、冒頭の位置図に示したとおり、北は岩井川南岸、東は県道高畑山町線、南は地蔵院川北岸の横井東町、西はＪＲ桜井線沿いの出屋敷町から横井町までの約175ヘクタールである。踏査の結果、従来知られている遺物散布地を含めて踏査地全域で、弥生時代、古墳時代、奈良時代、中・近世の遺物約300点を採取し、散布地の範囲が拡大することが判明した。散布の状況は位置図に記しているが、古墳時代の集落以外の遺跡の存在も予測でき、今後、この地域での綿密な調査により遺跡の実態の解明に努める必要があると考えられる。（秋山成人）

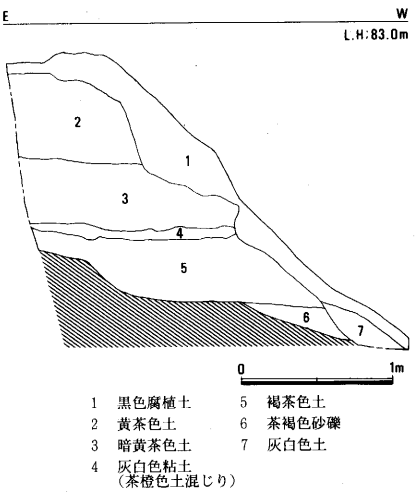
3　神功陵古墳陪塚隣接地の調査

本調査は、奈良市山陵町地内で実施した奈良市長大川靖則届出の市道中部51号線改良工事に伴う事前調査である。調査地は神功陵古墳の西側に位置するが、神功陵古墳の西側には３基の陪塚が知られており、い号・ろ号の他に名称の付せられていない方墳が周溝の北西の土堤状の高まり上にある。この高まりは以前の道路の拡張により切り下げられており、崖面に土層が露出した状態になっている。今回の道路の改良により、この方墳の西端部が掘削される可能性が生じたため、方墳の西側に隣接する位置で東西2.5m、南北1.0m（面積2.5㎡）の発掘区を設定して調査を実施し、併せて崖面の精査による土層観察を行なった。



発掘区位置図（１／5,000）

調査期間は平成８年３月21日から３月25日までである。



発掘区南壁土層図（１／50）

発掘区内の土層は上から黒色腐植土、黄茶色土、暗黄茶色土、白灰色粘土、茶褐色砂礫と続き、発掘区東端では堤上面から下に1.2mで褐黄色礫土の地山にいたる。地山は東から西に下っており、地山の標高は81.5～80.9mである。白灰色粘土はある時期この部分で滞水していた可能性も考えられる。暗黄茶色土から土師器片が１点出土したが、細片のため時期を特定することはできない。併せて他の地点で行なった土層観察の結果も上述と同様の堆積土であり、差違を認めることはできなかった。これらのことから、発掘区内の堆積土は方墳の墳丘盛土ではなく、古墳の崩落土や古墳築造以後の盛り土であると考えられる。（池田裕英）

Ⅳ　小規模確認調査・試掘調査・工事立会

1　小規模確認調査・試掘調査

平成７年度は、今まで記述してきた発掘調査以外に、奈良県教育委員会の指導のもと19件の小規模な確認調査と試掘調査を実施した。その結果、良好な遺構が発見された場合には、本調査の実施を届出者と協議した。

なお、調査記録と出土遺物については、奈良市埋蔵文化財調査センターで保管している。

番号	調査日	遺跡名	調査地	届出者	工事内容	調査結果
95-1	95・4・6	平城京右京五条三坊二坪	五条一丁目514、515の一部、五条二丁目527の一部	㈱タガミ	分譲宅地造成	柱列、土坑を検出。建物基礎は遺構面までおよばない。
95-2	95・4・13	平城京西一坊大路・禅院寺推定地	四条大路五丁目419-1	水原正雄	店舗	基礎工事先行、土坑を検出。基礎は遺構面までおよばない。
95-3	95・5・2	平城京左京六条二坊一坪	八条町373、374、379-1、381-2	大谷悦子	宅地造成・店舗	奈良時代の土坑を検出。基礎は遺構面までおよばない。
95-4	95・5・24	平城京左京二条三坊十四坪	法華寺町83-9・-15・-16	エッソ石油㈱	給油所改築	南を流れる佐保川支流の氾濫層を確認。遺構はなかった。
95-5	95・6・26	平城京左京四条六坊七坪	小川町17-1	丸山芳三	共同住宅５階	西を流れる率川の氾濫層を確認。
95-6	95・7・5	平城京左京二条三坊十坪	法華寺町30-7・-3・-6・-8、38-2、39-2、64-4	橋爪宗太夫	共同住宅３階	奈良時代遺構面を検出。基礎は遺構面までおよばない。
95-7	95・7・26	平城京左京四条六坊十一坪	東城戸町19-1	東新ハウジング㈱	共同住宅５階	柱穴、土坑、溝を検出。
95-8	95・8・7	平城京右京三条四坊七・十二坪	宝来町北ノ垣内909、921-1、922-1、923-1	エッソ石油㈱	給油所改築	基礎工事は遺構面までおよばない。丘陵の谷部か。
95-9	95・9・14	平城京左京三条五坊十一坪	油阪町1-1-56	奈良交通㈱	駐車場２階	基礎工事は遺構面までおよばない。
95-10	95・10・5	平城京左京四条一坊十四坪	南新町60-1	寺山豊	共同住宅	奈良時代の柱穴、土坑を検出。
95-11	95・10・16	平城京左京五条三坊八坪	恋の窪一丁目603-1	今井楢敏	共同住宅	奈良時代の遺構面を検出。協議の上発掘調査を実施。（本文100頁掲載）
95-12	95・10・19	平城京東一坊坊間路	柏木町58-1、630-1	辻村静枝	宅地造成・共同住宅２階	土坑を検出。基礎工事は遺構面までおよばない。
95-13	95・10・25	平城京左京五条三坊二坪	恋の窪一丁目286-2、287-3～8	㈱オークホーム	宅地造成	奈良時代の遺構面を検出。基礎工事は遺構面までおよばない。
95-14	95・10・30	平城京左京二条二坊十四坪	法華寺町291-4・-5、295-1の各一部	美吉野ハウジング㈱	分譲住宅８戸	基礎工事は遺構面までおよばない。
95-15	95・11・28～11・30	平城京右京五条三坊九坪	平松二丁目247-4、248-1の一部、251、252-1・-2・-3	㈱栗実住宅	宅地造成	丘陵谷部。奈良時代の柱穴、井戸を検出。基礎工事は遺構面までおよばない。
95-16	95・12・11	平城京左京五条三坊二坪	恋の窪一丁目285-1	㈲ダイヤハウス	宅地造成	西側を流れる佐保川の氾濫層を確認。
95-17	96・3・13	平城京右京九条三坊七坪	西九条町二丁目3-11	辻ノ内久徳	車庫・倉庫付事務所	奈良時代の遺構面を検出。基礎工事は遺構面までおよばない。
95-18	96・3・14	平城京左京四条六坊四坪	大森町273～277、297の一部	富士地所㈱	共同住宅	地山確認。池構築の際に遺構削平か。
95-19	96・3・27	平城京西四坊大路	五条畑一丁目609-2番地の一部他	松本弘・松本健	宅地造成	丘陵尾根部。遺構遺物とも無し。

小規模確認調査・試掘調査一覧

2　工事立会一覧

提出された埋蔵文化財発掘届出書及び現状変更等許可申請書に基づいて、文化庁、奈良県教育委員会から奈良市教育委員会が土木工事の際に立会うようにと指示されたもののうち平成７年に立会いした一覧表である。奈良市教育委員会では182件の立会調査を行った。

No.	調査日	遺跡名	調査地	届出者	届出番号	工事内容	備考
1	04•01	L•1、3、8	法華寺町1282	遠藤　章	H6•3274	個人住宅新築	地山面確認、８ｃ土器出土
2	04•04	東二坊坊間路	四条大路1丁目462-8	岡本陽子	H6•3286	個人住宅新築	造成土内におさまる
3	04•06	L•2、3、7	法華寺町318-1	川崎　正	H6•3244	個人住宅新築	耕土内におさまる
4	04•10	L•3、6、5•6	林小路町	木澤　悟	H6•3283	個人住宅新築	造成土内におさまる
5	04•10	R•3、1、3	三条大路四丁目1-1	積水化学工業㈱	H6•3259	製造設備設置	地山面確認、遺構遺物なし
6	04•13	L•5、3、5	恋の窪二丁目230-78	原田尚徳	H6•3314	個人住宅改築	造成土内におさまる
7	04•14	東三坊大路	大安寺七丁目174-1	田村峰一	H6•3300	個人住宅改築	造成土内におさまる
8	04•26	古市城跡	古市町1845-7	植村育代	H6•3287	個人住宅新築	地山面確認、遺構遺物なし
9	04•26	西四坊大路	七条西町1108-11	友利誠男	H6•3305	個人住宅新築	地山面確認、遺構遺物なし
10	04•27	L•6、3、13	大安寺二丁目23-1	大西一夫	H6•3372	共同住宅新築	耕土内におさまる
11	04•28	L•7、1、9	柏木町383	森高茂樹	H6•3331	個人住宅増築	造成土内におさまる
12	05•10	L•2、5、15	北市町30	山本貴史	H6•3304	個人住宅改築	造成土内におさまる
13	05•10	L•4、2、10	四条大路一丁目	池上　勇	H6•3317	個人住宅改築	造成土内におさまる
14	05•16	L•1、3、7	法華寺町1179-1	塚本奈良次郎	H6•3323	青空駐車場	造成土内におさまる
15	05•17	L•3、2、5	尼ケ辻町584-23	服部雅俊	H6•3313	個人住宅増築	造成土内におさまる
16	05•18	L•6、4、16	大安寺五丁目955-4他	生田文広・生田明美	H6•3324	共同住宅新築	造成土内におさまる
17	05•18	六条山遺跡	六条西三丁目1539-4	ｼﾝﾀﾆ興産・共立ﾊｳｽ	H6•3328	擁壁工事	造成土内におさまる
18	05•19	L•2、3、15	法華寺町堂ノ前57-5	寺田敬造	H6•3263	個人住宅新築	造成土内におさまる
19	05•26	興福寺旧境内	小西町9	川村清美	H6•3245	テナントビル新築	近世の盛り土内におさまる
20	05•29	L•2、3、7	法華寺町325番３他	前野政則	H6•3322	共同住宅新築	造成土内におさまる
21	05•29	R•3、1、5	三条大路四丁目1-1	積水化学工業㈱	H6•3318	工場改築	地山面まで達しない
22	05•30	L•3、1、6	三条大路三丁目477-6	森本邦英	H6•3269	個人住宅新築	地山面確認、土坑検出
23	06•01	R•4、2、10	尼ケ辻中町406	東中次夫	H6•3270	農業用倉庫新築	地山面確認、遺構遺物なし
24	06•02	L•1、6、13	法蓮町北畑1337-1	西川　昇	H6•3071	個人住宅新築	造成土内におさまる
25	06•02	L•3、4、3	大宮町三丁目211-1	敷島住宅㈱	H7•3050	モデルルーム建設	造成土内におさまる
26	06•02	L•5、4、5•6	大安寺七丁目749-1他	乾　義明	H7•3021	集会所新築	造成土内におさまる
27	06•12	一条南大路	西大寺芝町二丁目2015	阿部浩之	H7•3047	個人住宅新築	造成土内におさまる
28	06•12	北辺二坊・西一坊大路	山陵町字古所58番地	乾井　哲・乾井　實	H6•3262	個人住宅新築	地山面確認、遺構遺物なし
29	06•12	L•4、3、16	三条栄町204-1	㈱万春堂	H7•3019	店舗改築	造成土内におさまる
30	06•13	L•8、1、13	杏町字南垣内104他	谷口　一	H7•3028	個人住宅建替	造成土内におさまる
31	06•14	R•4、2、11	尼ケ辻南町103-11	柳　広	H6•3285	個人住宅新築	地山面まで達しない
32	06•16	元興寺旧境内	南市町18番1、19番1	木村雅則・木村茂子	H7•3038	個人住宅新築	基礎掘削なし
33	06•16	L•3、1、11	三条大路二丁目521-1	仲西信子	H7•3022	農業用倉庫新築	旧耕土内におさまる
34	06•19	L•2、6、6	西新在家町4-5	吉川元造	H7•3053	個人住宅改築	地山面確認、遺構遺物なし
35	06•20	R•3、3、3	菅原東町486	原田　武	H6•3319	個人住宅新築	造成土内におさまる
36	06•21	古市城跡	古市町2112-21他	奈良市長	H7•3032	宅地造成	基礎掘削なし
37	06•22	R•3、4、8	菅原町607-2	木村シゲノ	H7•3037	共同住宅新築	造成土内におさまる
38	06•23	西三坊大路	西大寺野神町2丁目1791-2	吉田哲次	H7•3015	個人住宅改築	造成土内におさまる
39	06•23	R•5、3、15	平松二丁目281-129	山本哲男	H7•3065	個人住宅新築	造成土内におさまる
40	06•23	R•5、3、15	平松二丁目281-128	阪神住宅	H7•3010	個人住宅新築	造成土内におさまる
41	06•23	L•5、3、10	恋の窪二丁目210-30、-59	㈲ダイヤハウス	H7•3069	個人住宅新築	造成土内におさまる
42	06•23	R•5、3、15	平松二丁目281-132	乾　恒善	H7•3035	個人住宅新築	造成土内におさまる
43	06•23	R•5、3、15	平松二丁目281-130	阪神住宅	H7•3036	個人住宅新築	造成土内におさまる
44	06•29	L•3、3、15	大宮町6丁目9-4、9-16	増井強治	H7•3030	店舗新築	造成土内におさまる
45	07•03	東二坊坊間路	四条大路一丁目459-13	河内好博	H7•3008	個人住宅新築	造成土内におさまる
46	07•03	L•5、7、10	草小路町925番地	玉川和子	H7•3029	専用住宅新築	地山面確認、遺構遺物なし
47	07•06	L•5、6、7	西木辻町字瓦町361番1	国分孝秀	H7•3025	個人住宅改築	造成土内におさまる
48	07•10	L•1、4、13	法蓮町字ヤイ702-1	植村　浩	H7•3041	個人住宅新築	地山面確認、遺構遺物なし
49	07•11	R•3、3、13•14坪境小路	宝来二丁目826-1	上田　剛	H6•3325	共同住宅新築	造成土内におさまる
50	07•11	L•1、3、2•7坪境小路	法華寺町1175番地	塚本奈良次郎	H6•3332	共同住宅新築	造成土内におさまる
51	07•14	R•4、2、16	尼ケ辻中町171-1	藤村充志	H7•3001	個人住宅改築	奈良時代土坑検出
52	07•14	R•4、2、8	尼ケ辻中町347番1	松本武彦	H6•3289	個人住宅改築	地山面確認、遺構遺物なし
53	07•17	L•4、3、15	三条栄町201-1、202-3他	大和ハウス工業㈱	H7•3082	モデルルーム新築	造成土内におさまる
54	07•17	L•2、3、10	法華寺町30-7、30-3他	橋爪宗太夫	H7•3061	共同住宅新築	造成土内におさまる
55	07•20	L•5、6、8	北向町2-1,2-2	喜多　誠	H6•3248	個人住宅新築	土坑検出、出土遺物なし
56	07•24	西一坊大路	二条町一丁目32-8	椎木敏治	H7•3012	個人住宅改築	遺構面まで達しない
57	07•27	古市城跡	鹿野園町700-3、700-4他	永尾正一	H5•3271	資材置場	地山面確認、遺構遺物なし
58	07•28	L•2、5、16	法蓮町字池ノ内986番109	三浦久儀	H6•3336	個人住宅改築	造成土内におさまる
59	07•31	L•4、6、10	椿井町3	㈱柴田衣料店	H7•3056	店舗付住宅改築	遺構面まで達しない

工事立会一覧　（Ｌは左京、Ｒは右京を示す）

No.	調査日	遺跡名	調査地	届出者	届出番号	工事内容	備考
60	08・01	称徳陵兆域	西大寺竜王町1丁目1606-12	森林開発公団大阪支所	H7・3027	専用住宅新築	地山面確認、遺構遺物なし
61	08・02	西三坊大路	西大寺赤田町1丁目658番1	喜元靖之	H7・3063	個人住宅新築	造成土内おさまる
62	08・03	L・7、2、6	八条三丁目729-1	竹田福三	H6・3128	個人住宅新築	遺構面まで達しない
63	08・04	R・8、3、1	七条一丁目518-7	廣岡伸晁	H7・3081	個人住宅新築	遺構面まで達しない
64	08・04	六条山遺跡	六条西三丁目1539-4	ｼﾝﾀｰﾆ興産・共立ﾊｳｽ	H6・3328	宅地造成	基礎掘削なし
65	08・09	L・4、4、1	三条添川町65番2、65番14	西松秀和	H7・3014	個人住宅改築	遺構面まで達しない
66	08・09	L・6、2、1	八条町373番、374番他	大谷悦子	H6・3264	店舗新築	弥生・奈良　溝、柱穴検出
67	08・22	東四坊大路	東九条町220番3	佃　一夫	H7・3012	個人住宅改築	造成土内におさまる
68	08・23	L・5、3、15	平松町二丁目281-137	久保　茂	H7・3087	個人住宅新築	旧造成による削平
69	08・23	L・5、3、15	平松町二丁目281-138	村尾美彦	H7・3089	個人住宅新築	旧造成による削平
70	08・24	L・6、4、13	大安寺一丁目1234-4他	㈱ヒラサワ住宅	H6・3179	建売住宅新築	造成土内におさまる
71	08・25	L・5、5、15	西木辻町28番地	奈良市長	H7・3121	プール擁壁工事	遺構面まで達しない
72	08・28	西四坊大路	六条西3丁目1481番地50	杉本　強	H7・3026	個人住宅改築	地山面確認、遺構遺物なし
73	09・04	L・6、3、16	大安寺三丁目112-1他	大西祐治	H7・3033	宅地造成	造成土内におさまる
74	09・04	R・8、4、1	七条西町一丁目587-18他	峠　元和・北野利裕	H7・3003	宅地造成	地山面確認、遺構遺物なし
75	09・07	古市城跡	春日苑1丁目1846-37	正塚晴康	H7・3135	個人住宅建設	地山面確認、遺構遺物なし
76	09・08	L・5、5、14	西木辻町字八軒町口103番8	東出　裕	H7・3064	個人住宅建築	造成土内におさまる
77	09・13	L・5、3、13	大安寺7丁目146-1他	大西コウ	H7・3066	共同住宅新築	奈良時代土坑検出
78	09・13	L・5、3、9	恋の窪一丁目213-1	小西秋敏	H7・3062	個人住宅新築	造成土内におさまる
79	09・14	L・3、5、1	芝辻町一丁目119番4	永友克二	H7・3072	個人住宅新築	表土内におさまる
80	09・14	古市城跡	古市町2112-38	山本洋一	H7・3088	個人住宅改築	地山面確認、遺構遺物なし
81	09・14	古市城跡	鹿野園町西ノ口14番1	鹿野　忠・爪阪俊之	H6・3299	個人住宅新築	造成土内におさまる
82	09・18	L・5、4、14	大安寺六丁目775番1	仲野重信・仲野元信	H7・3004	共同住宅新築	表土内におさまる
83	09・20	L・3、5、7	芝辻町1丁目88番3他	三浦　剛	H7・3070	個人住宅新築	遺構面まで達しない
84	09・25	L・一条北辺2、2	山陵町78-1	山本　勇	H7・3118	青空駐車場	耕土内におさまる
85	09・25	西四坊大路	五条一丁目地内	奈良市長	H7・3074	道路改良工事	地山面確認、遺構遺物なし
86	09・27	L・4、4、7	三条添川町230-9他	㈲ロイヤルハウジング	H7・3124	個人住宅建設	造成土内におさまる
87	10・02	六条山遺跡	六条西3丁目1518	阪神住宅	H6・3267	分譲住宅造成	地山面確認、遺構遺物なし
88	10・06	L・4、3、6	三条桧町174番3	吉川喜博	H6・3307	共同住宅新築	自然流路を検出、遺物なし
89	10・09	R・4、2、5	尼ケ辻南町49-1番地	瀧澤義雄	H7・3129	個人住宅新築	造成土内におさまる
90	10・11	L・3、6、5	林小路町32	福村博行	H7・3084	共同住宅改築	遺構面まで達しない
91	10・16	L・4、3、13	四条大路一丁目1000番68	仁科昭男	H7・3083	個人住宅改築	造成土内におさまる
92	10・17	L・2、7、9	東包永町44番地	小池章仁	H7・3106	個人住宅建設	造成土内におさまる
93	10・19	L・6、3、15	大安寺町3丁目91-1他	大西隆仲	H7・3134	個人住宅建設	地山面確認、遺構遺物なし
94	10・23	L・5、3、9	恋の窪一丁目613-4	谷村秀雄	H7・3098	共同住宅新築	地山面確認、遺構遺物なし
95	10・23	称徳陵兆域	西大寺新池町1617-1	萃表泰一郎・萃表万季	H7・3149	個人住宅新築	地山面確認、遺構遺物なし
96	10・27	L・4、5、15	三条町字細川町573-1、-3	松田光弘	H7・3113	共同住宅建設	地山面確認、遺構遺物なし
97	10・30	菅原寺旧境内	菅原町472他	藤田彰史	H7・3120	個人住宅改築	地山面確認、遺構遺物なし
98	11・02	L・4、4、1	三条添川町71-1他	産双ホーム㈱	H7・3173	分譲住宅新築	遺構面まで達しない
99	11・06	R・4、4、7	平松一丁目782-1	池田敬市	H7・3131	診療所建設	谷地形を確認
100	11・07	L・4、2、13	四条大路1丁目1000の101	岸本千代隆	H7・3163	個人住宅改築	造成土内におさまる
101	11・10	元興寺旧境内	不審ケ辻子町12	森岡玉樹	H7・3094	個人住宅建設	12世紀の土坑を検出
102	11・15	L・6、3、16	大安寺三丁目97-1	大西敬喆、大西嘉榮	H7・3180	青空駐車場	造成土内におさまる
103	11・16	薬師寺旧境内	西の京町390番地	山本年彦	H7・3119	個人住宅建設	自然流路を確認、遺物なし
104	11・17	南紀寺遺跡	南紀寺町2丁目149-1他	奈良市長	H7・3175	公園整備	土師器片が出土
105	11・17	五条大路	大安寺町4丁目900-1他	楠木ヤエ子	H7・3151	共同住宅新築	地山面確認、遺構遺物なし
106	11・20	R・7、4、13	七条西町1丁目627-311	山本　修	H7・3123	個人住宅新築	地山面確認、遺構遺物なし
107	11・21	L・1、6、北郊	法蓮町1225-11他	佃　茂則	H7・3132	個人住宅改築	遺物包含層を確認
108	11・27	L・2、4、13	芝辻町3丁目95-8	飯田亀太郎	H7・3127	共同住宅新築	遺構面まで達しない
109	12・01	L・3、3、15	大宮町6丁目2-18	田村俊夫・田村雅肩 田村永子・田村信宏	H7・3190	駐車場建設	掘削せず
110	12・06	L・5、5、14	西木辻町字ビハ塚100-1・8	㈱産業経済新聞社	H7・3115	店舗付住宅新築	遺構面まで達しない
111	12・06	L・1、6、14	法蓮町字北畑1359-6他	吉田四代治	H7・3117	個人住宅改築	攪乱土内でおさまる
112	12・06	東紀寺遺跡	東紀寺町2丁目721番地241	弘中信義	H7・3159	個人住宅建設	地山面確認、遺構遺物なし
113	12・07	L・6、4、16	大安寺五丁目964-2他	今井　明	H7・3156	個人住宅新築	造成土内におさまる
114	12・08	新薬師寺旧境内	高畑町373-3	奥田敏夫	H7・3153	個人住宅新築	造成土内におさまる
115	12・12	西四坊大路	七条1丁目507-2番地	矢野友資	H7・3177	個人住宅建設	遺物包含層を確認
116	12・15	R・5、3、9	平松二丁目253-1他	㈱オークホーム	H7・3158	駐車場用地造成	地山面確認、陶磁器片出土
117	12・18	R・7、2、3・4	七条町179番1	吉田　修	H7・3176	倉庫・事務所建設	自然流路検出、遺物なし
118	12・19	L・2、3、15	法華寺町55番、57番1	寺田敬造	H7・3045	共同住宅新築	造成土内におさまる
119	12・22	L・5、4、4・5	大安寺町七丁目869番3	岩見　大	H7・3169	個人住宅建設	造成土内におさまる
120	01・08	L・2、6、4	北市町87	鈴木信太郎	H7・3168	個人住宅新築	造成土内におさまる
121	01・10	L・4、2、2	四条大路一丁目805-1	宮前佐太郎	H7・3174	店舗建設	造成土内におさまる
122	01・11	古市城跡	鹿野園町10-2、11-3	神田勝三・神田智代	H7・3152	個人住宅新築	地山面確認、遺構遺物なし
123	01・17	L・2、4、4	芝辻町3丁目2-14	河田久治	H7・3150	店舗付共同住宅	造成土内におさまる
124	01・19	東一坊大路	法華寺町1351番地	奈良県警察本部	H7・3183	電線管埋設	攪乱坑内におさまる
125	01・19	L・4、2、5	尼ケ辻町乙 457-1	㈱尾田組	H7・3210	資材置場	造成土内におさまる
126	01・23	R・2、3、12	菅原町234-5他	三和住宅㈱	H7・3205	宅地造成	地山面確認、遺構遺物なし
127	01・29	L・4、3、14	三条桧町380-3他	北側桂造	H7・3221	青空駐車場の造成	遺構面まで達しない
128	01・30	R・1、北辺3、2	西大寺新町一丁目177-4	中西秀典	H7・3202	個人住宅新築	奈良時代遺物包含層を確認
129	01・31	L・2、3、6	法華寺町201-1	川村和子	H7・3034	共同住宅建設	旧流路を検出、遺物なし
130	02・01	西一坊大路	三条大路5丁目187番1他	田中祐治	H7・3226	個人住宅建設	造成土内におさまる
131	02・01	薬師寺旧境内	五条町字今在家554番地	松本久司	H7・3187	個人住宅建設	造成土内におさまる
132	02・06	R・5、2、11	五条町400番地	中村政治郎	H7・3196	個人住宅建替	造成土内におさまる
133	02・07	東六坊大路	鳴川町17	石谷敏雄	H7・3266	個人住宅建設	造成土内におさまる
134	02・07	R・7、3、2	七条1丁目367-2	有馬康明	H7・3188	個人住宅新築	造成土内におさまる

工事立会一覧

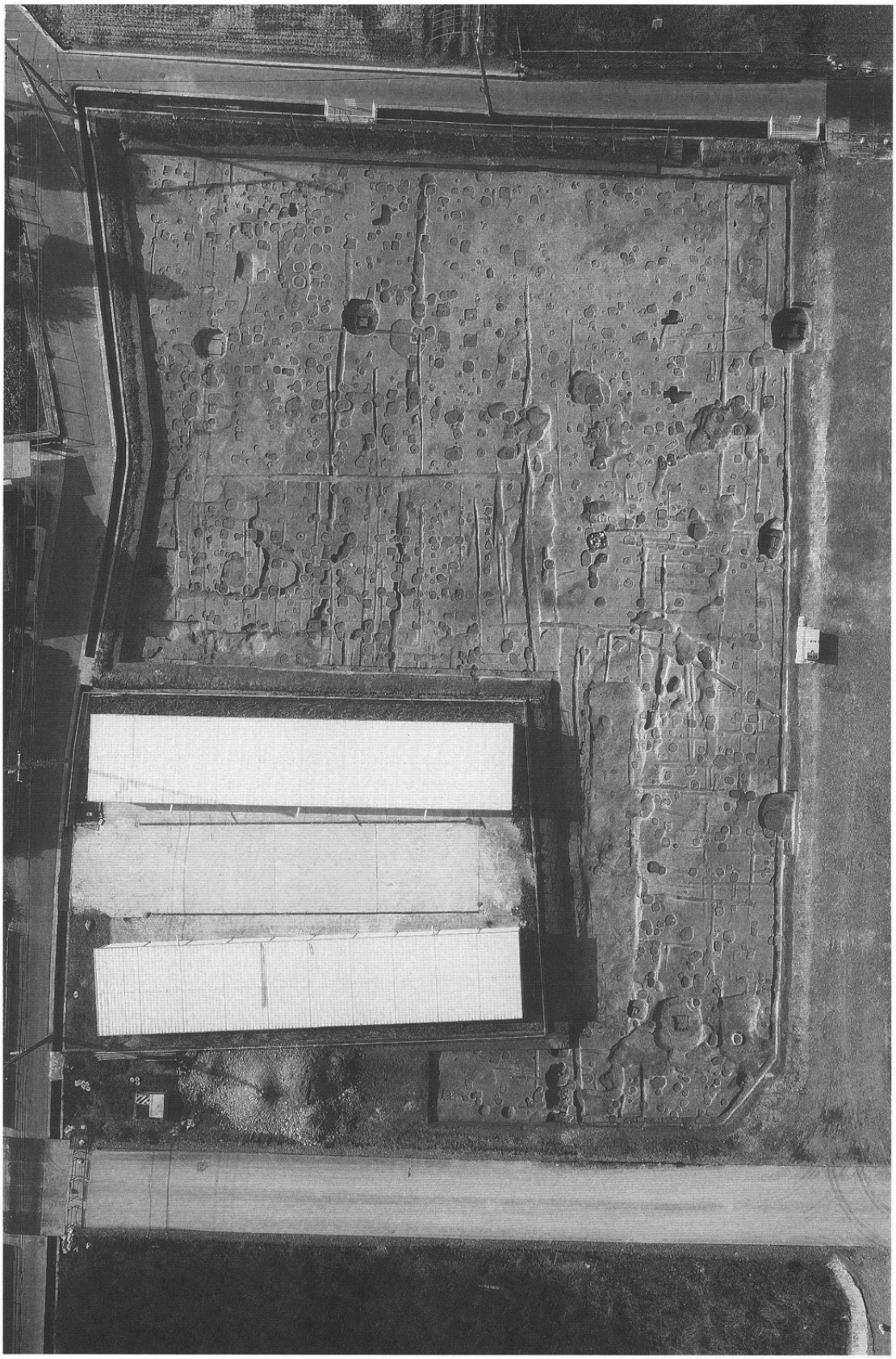
No.	調査日	遺跡名	調査地	届出者	届出番号	工事内容	備考
135	02・08	L・2、4、12	芝辻町3丁目102-5	白井潔	H7・3181	個人住宅建設	地山面確認、遺構遺物なし
136	02・08	L・4、4、2	三条添川町223-4	北小路雅昭	H7・3198	個人住宅新築	造成土内におさまる
137	02・09	外京5、7、16 元興寺寺域	十輪院畑町13-5	古田弘	H7・3212	個人住宅建設	造成土内におさまる
138	02・13	二条大路	横領町358-18	貴志恒夫・貴志庸子	H7・3077	個人住宅改築	造成土内におさまる
139	02・13	元興寺旧境内	元興寺町2-1、2-2	宮内信義	H7・3167	個人住宅建設	造成土内におさまる
140	02・13	興福寺旧境内南花園	高畑字菩提1131-1	(財)奈良の鹿愛護会	H7・3141	鹿塚の撤去	造成土内におさまる
141	02・14 02・15	薬師寺旧境内	西ノ京町字金岡408番地	近畿日本鉄道㈱	H6・3030	駅構内整備	造成土内におさまる
142	02・16	L・8、3、16	東九条町925-1	池田友治	H7・3211	青空駐車場	造成土内におさまる
143	02・16	大安寺旧境内	大安寺4丁目1035-1	野田忠一	H5・3275	納屋建替	造成土内におさまる
144	02・19	R・4、1、3	四条大路5丁目103番地	井岡　保・井岡久男・井岡　武	H7・3220	青空駐車場	地山面確認、遺構なし 須恵器片出土
145	02・20	L・4、4、1	三条町111-1	飯田善之	H7・3209	事務所ビル新築	地山面確認、土坑1
146	02・21	外京3、6、5	下三条町39-1	奈良市長	H7・3194	公園整備工事	地山面確認、遺構遺物なし
147	02・22	L・9、1、15	西九条町3丁目13番地	大和ハウス工業㈱	H7・3067	店舗新築	地山面確認、遺構遺物なし
148	02・23	新薬師寺旧境内	高畑町390番5	窪　良三	H7・3197	個人住宅新築	造成土内におさまる
149	02・23	西大寺旧境内	西大寺新田町494-1	西村隆夫	H7・3223	個人住宅建築	造成土内におさまる
150	02・23	R・3、4、7	菅原町570	平岡　治	H8・3249	店舗建築	造成土内におさまる
151	02・26	L・9、1、7	西九条町5丁目2-5	共栄社化学㈱	H8・3235	危険物倉庫建設	造成土内におさまる
152	02・27	薬師寺旧境内	西の京町340	奈良市長	H7・3128	石積擁壁	地山面確認、遺構遺物なし
153	02・27	大安寺旧境内	大安寺5丁目939-4	大西　勉	H7・3185	個人住宅建替	造成土内におさまる
154	02・27	元興寺旧境内	高畑町1116-3の一部	石崎直司	H7・3189	個人住宅新築	造成土内におさまる
155	03・01	西大寺旧境内	西大寺新池町1601番1	柿木裕子・柴千賀子	H7・3147	個人住宅建築	造成土内におさまる
156	03・04	古市城跡	古市町2059-12	南畑伊佐夫・南畑和子	H8・3258	個人住宅新築	造成土内におさまる
157	03・04	大安寺旧境内	大安寺町976-1	岩井宏實	H8・3264	個人住宅建築	造成土内におさまる
158	03・04	R・5、3、4	五条2丁目632-6	宮本裕之	H7・3227	個人住宅建設	造成土内におさまる
159	03・05	R・3、1、7	二条大路南4丁目	奈良市長	H7・3199	舗装新設工事	造成土内におさまる
160	03・06	L・5、2、6	四条大路南町482-1	藤猪省三	H8・3237	個人住宅建設	造成土内におさまる
161	03・14	L・2、3、12	芝辻町4丁目9-2	山本　清	H7・3103	共同住宅建設	造成土内におさまる
162	03・14	二条大路	尼が辻北町2270	近畿工業㈱	H8・3269	仮設事務所建築	造成土内におさまる
163	03・14	ウワナベ古墳隣接地	法華寺町1184番地	奈良市長	H8・3272	河川修繕工事	外濠底を確認
164	03・18	R・2、6、9	法蓮町字池ノ内1010-3	中野憲一	H8・3297	個人住宅改築	地山面確認、遺構遺物なし
165	03・18	R・3、2、5	尼が辻北町335番2	中村吉雄	H8・3279	個人住宅改築	旧秋篠川道、遺構遺物なし
166	03・19	R・8、4、1	七条西町一丁目577-6他	㈱大阪エクセルホーム	H7・3138	分譲宅地造成	造成土内におさまる
167	03・21	R・4、4、2・3坪境小路	三条大宮町地内	奈良市長	H7・3300	道路拡幅工事	坪境小路北側溝？
168	03・21	L・3、2、5	三条大路1丁目584-32	鶴田和男	H8・3298	個人住宅建設	造成土内におさまる
169	03・26	L・4、1、1	四条大路3丁目957-1	下西達也	H8・3262	個人住宅建設	造成土内におさまる
170	03・26	L・6、2、10	大安寺西2丁目281	奈良市教育長		薬品庫新築	造成土内におさまる
171	03・26	L・9、2、9	西九条町字辰市266番	大西正晴・大西太兵衛	H8・3246	個人住宅建設	近世以降の遺物包含層確認
172	03・28	L・3、5、9	芝辻町プラス町14-8	丹羽賢一郎	H7・3222	舟橋郵便局新築	地山面確認、遺構遺物なし

工事立会一覧

No.	調査日	指定名称	調査地	申請者	申請番号	変更内容	備考
1	04・24	名勝奈良公園	春日野町158番地の1	奈良市長	H6・1077	公共下水道築造	地山面確認、遺構遺物なし
2	06・28	史跡大安寺旧境内	大安寺一丁目6-15	楠下幹男	H7・1007	宅内下水道管埋設	造成土内におさまる
3	08・04	史跡元興寺極楽坊境内	中新屋町31、30-1番地	(宗)元興寺	H6・1058	西室改修	造成土内におさまる
4	10・12 10・20	史跡大安寺旧境内	大安寺二丁目16-10	高橋利和	H7・1027	宅内下水道管埋設	造成土内におさまる
5	11・01	史跡大安寺旧境内	大安寺二丁目130-3-14	大西隆夫	H7・1038	宅内下水道管埋設	遺物包含層確認
6	11・06	史跡大安寺旧境内	大安寺二丁目1317	吉崎弘美	H7・1044	宅内下水道管埋設	造成土内におさまる
7	11・16	史跡大安寺旧境内	大安寺二丁目16-5	北尾陽一郎	H7・1046	宅内下水道管埋設	遺物包含層確認
8	11・17	史跡大安寺旧境内	大安寺二丁目1310-5	日下　博	H7・1043	宅内下水道管埋設	遺物包含層確認
9	12・12	史跡大安寺旧境内	大安寺二丁目16-6	奥村　進	H7・1053	宅内下水道管埋設	造成土内におさまる
10	01・10	史跡大安寺旧境内	大安寺二丁目1303-1	市川　将	H7・1063	宅内下水道管埋設	遺物包含層確認

名勝・史跡内工事立会一覧

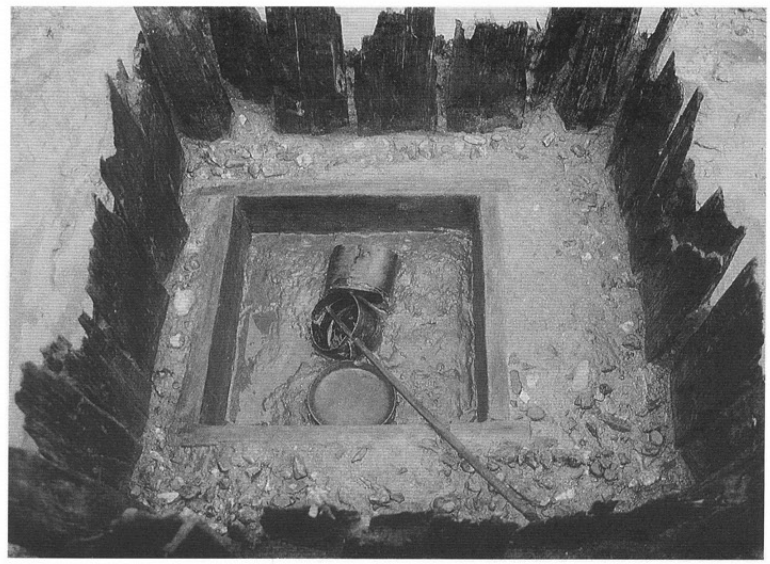
図　　版



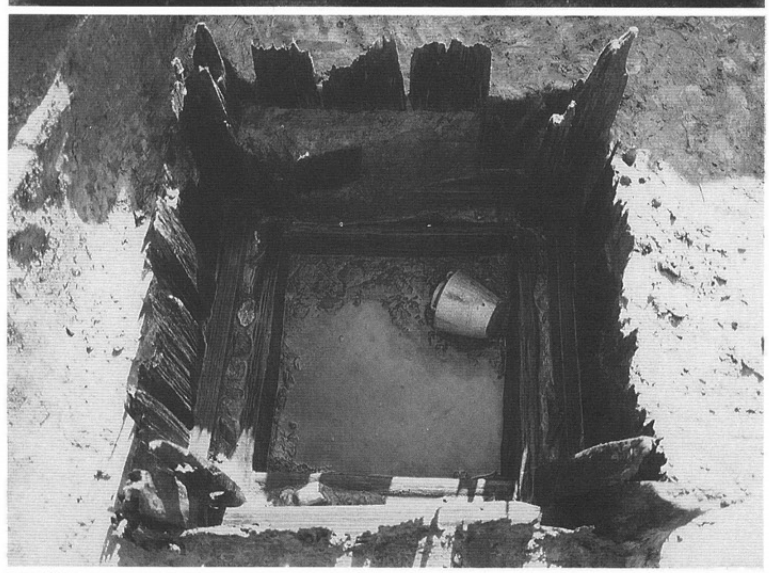
1　発掘区全景（右が北）

2　発掘区とその周辺（上が北）

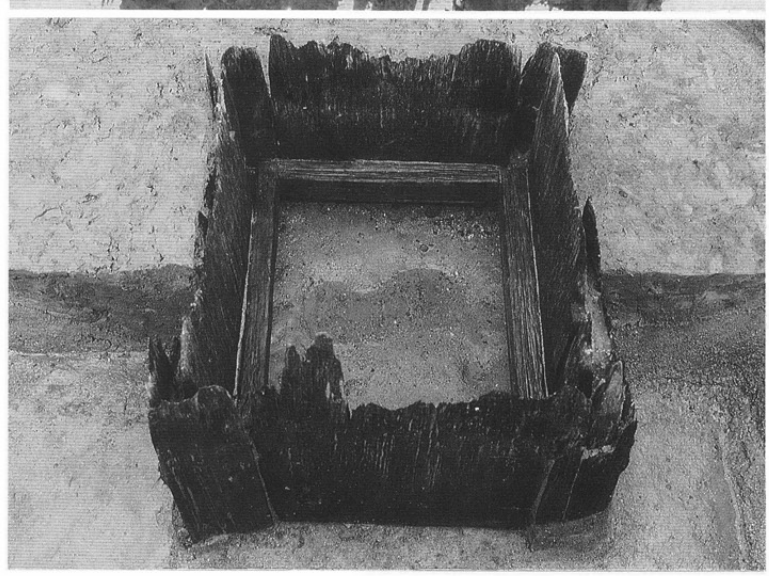
3　発掘区全景（北東から）



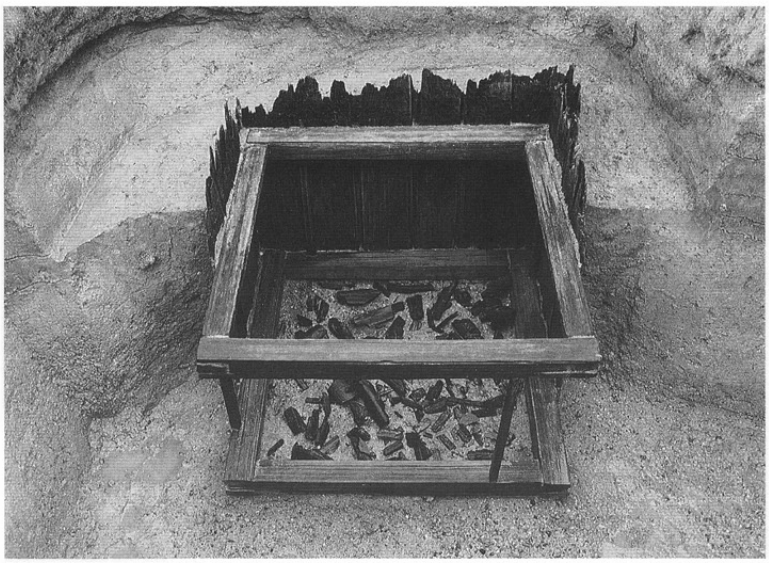
4　井戸ＳＥ510（南から）



5　井戸ＳＥ511（北から）

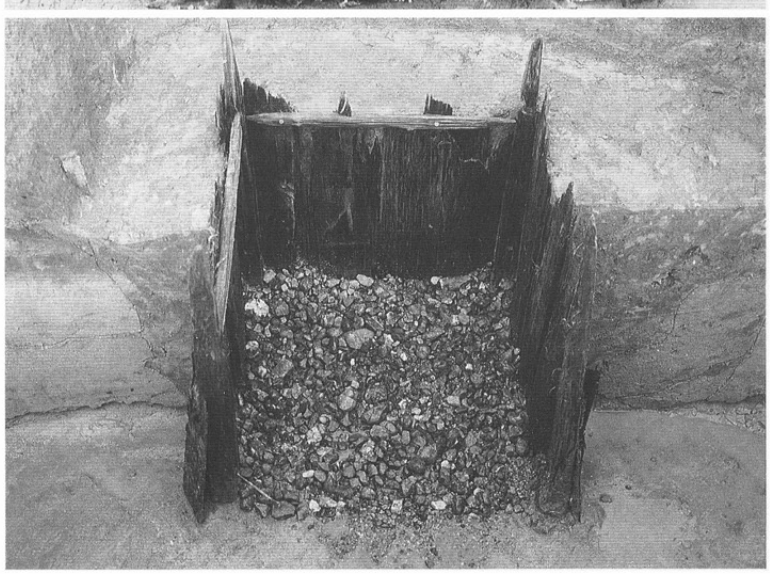


6　井戸ＳＥ513（南から）



7　井戸ＳＥ514（南から）

8　井戸ＳＥ515（北から）



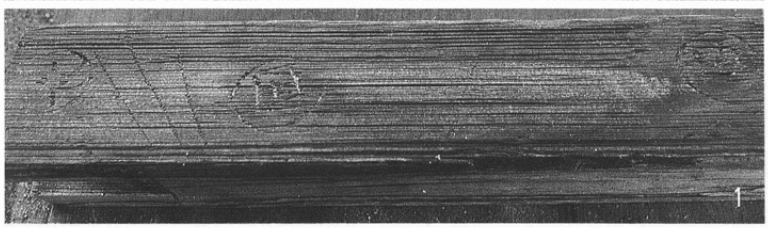
9　井戸ＳＥ516（南から）

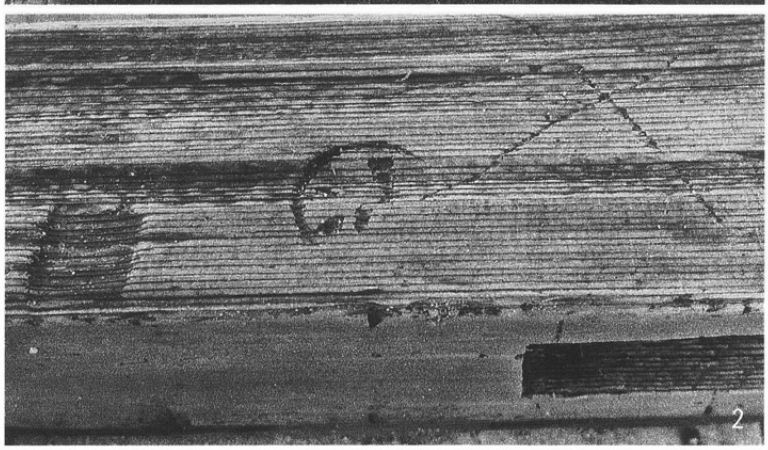
10　井戸ＳＥ517（南から）

11　井戸ＳＥ518（東から）

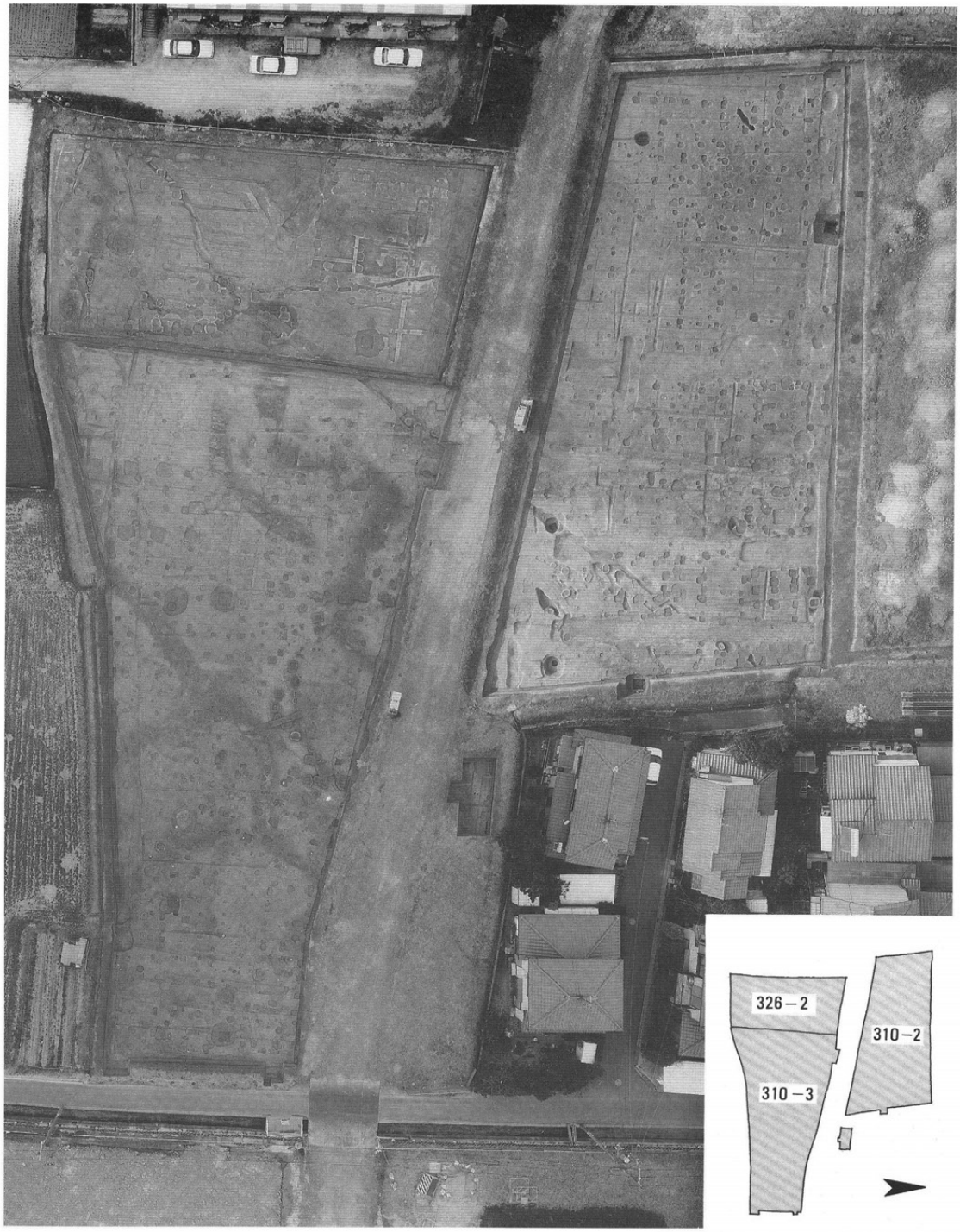
12　ＳＸ804（東から）

13　ＳＸ805（北から）



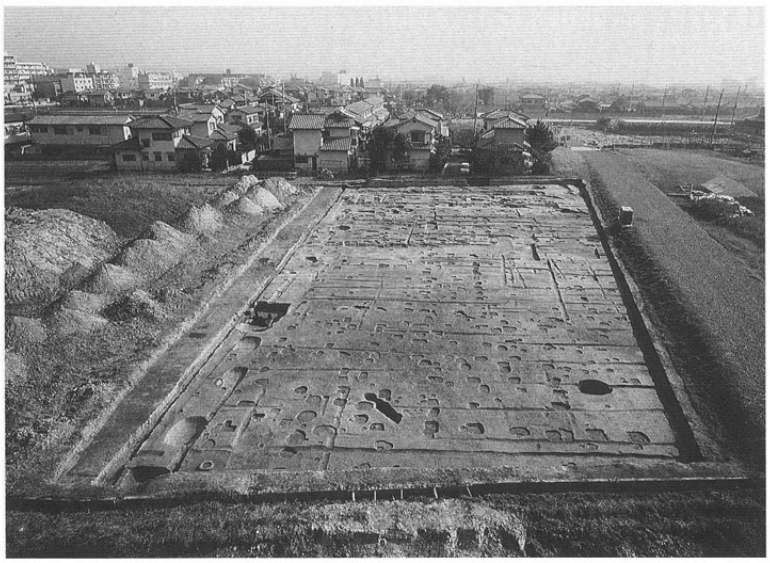


14　井戸枠材の打刻印
ＳＥ515－１～３
ＳＥ514－４

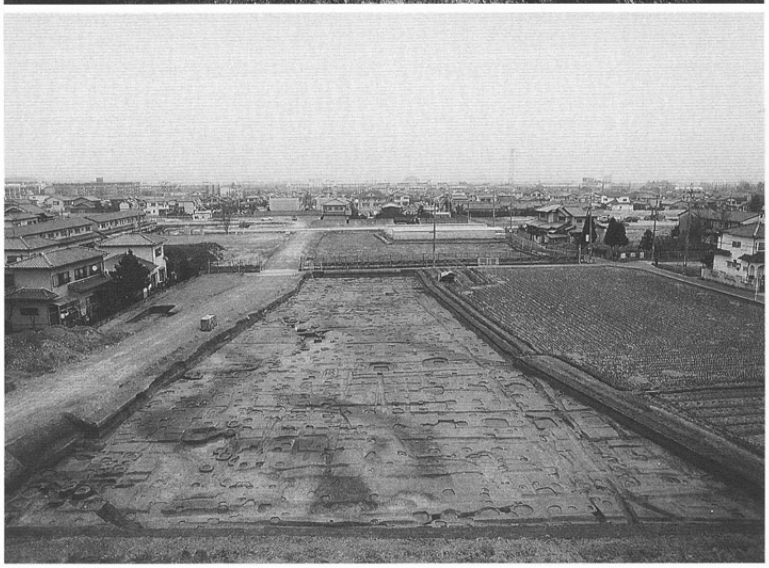


1　発掘区全景（右が北）

図版8　平城京右京二条三坊六坪　第310次（第2・3発掘区）、第326次（第2発掘区）　(2)



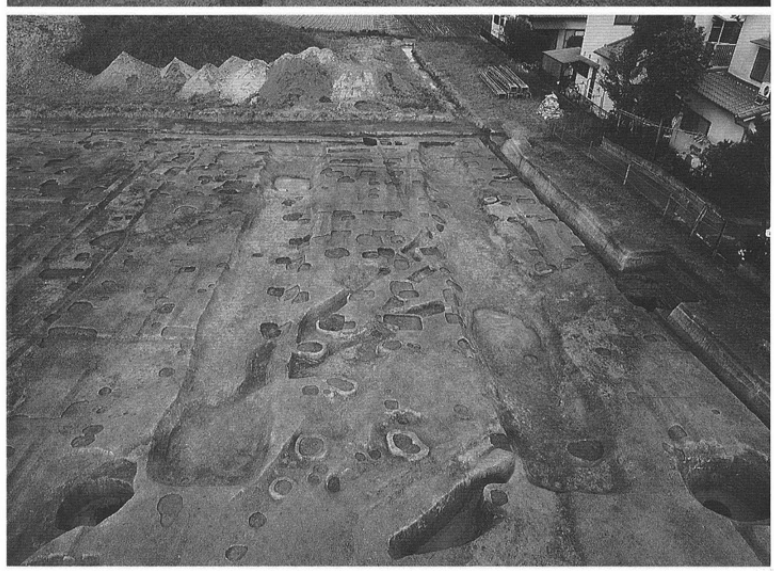
2　第310次-第2発掘区全景（西から）



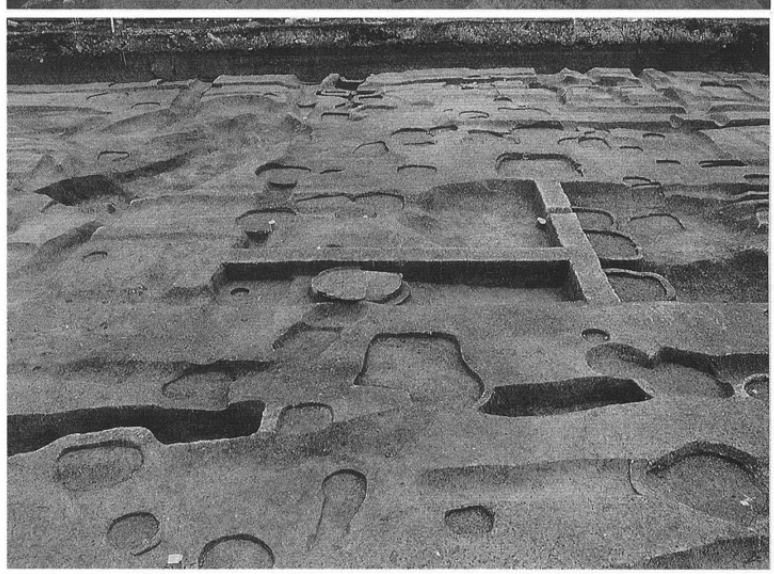
3　第310次-第3発掘区全景（西から）

4　第326次-第2発掘区全景（北から）

5　古墳ＳＴ06・周溝ＳＤ07（南から）



6　坪内道路ＳＦ901・東側溝ＳＤ109・西側溝ＳＤ110（南から）



7　建物ＳＢ322（東から）

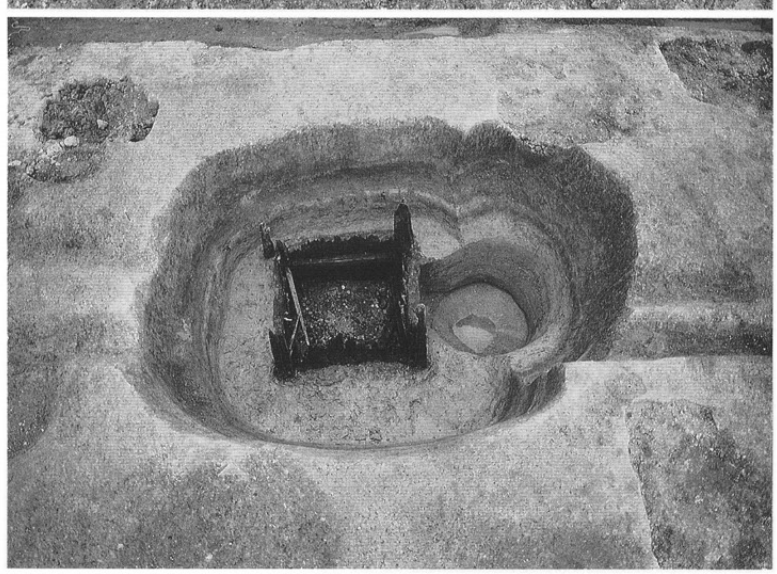
8　井戸ＳＥ513（西から）

9　井戸ＳＥ514（西から）

10　井戸ＳＥ515（北から）

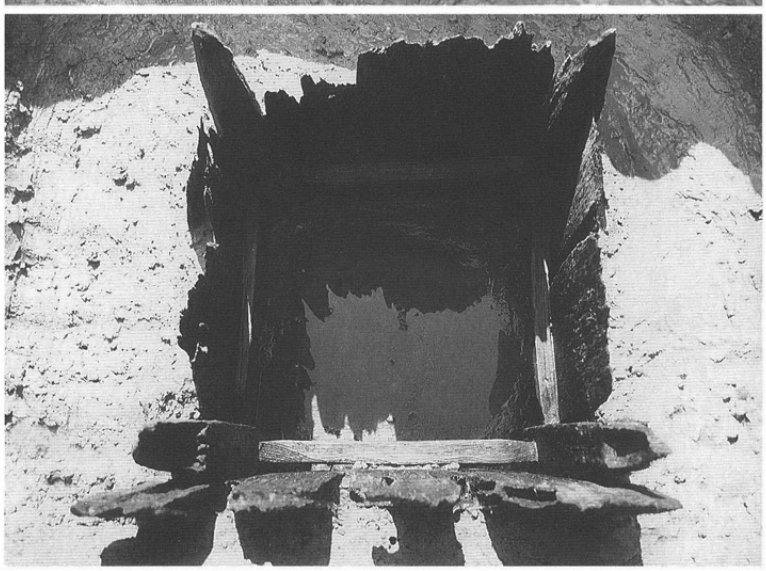
11　井戸ＳＥ516（南から）

12　井戸ＳＥ517（北から）

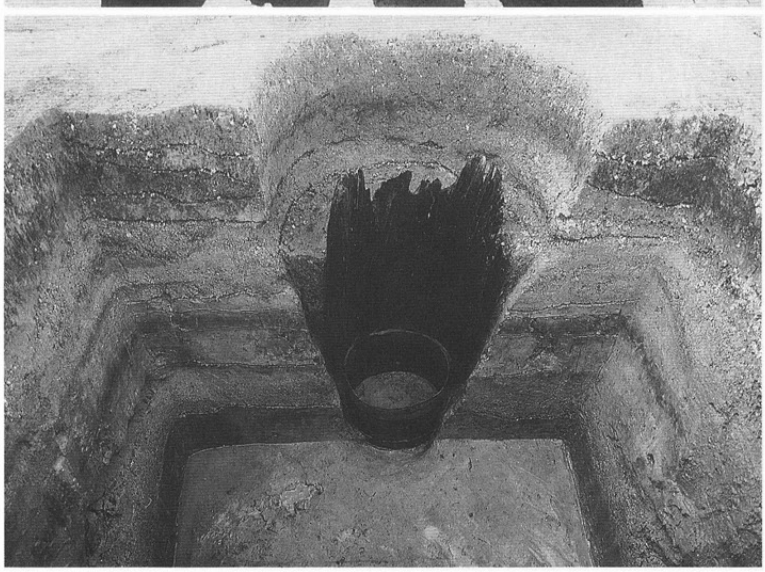


13　井戸ＳＥ519・土坑ＳＫ602（西から）

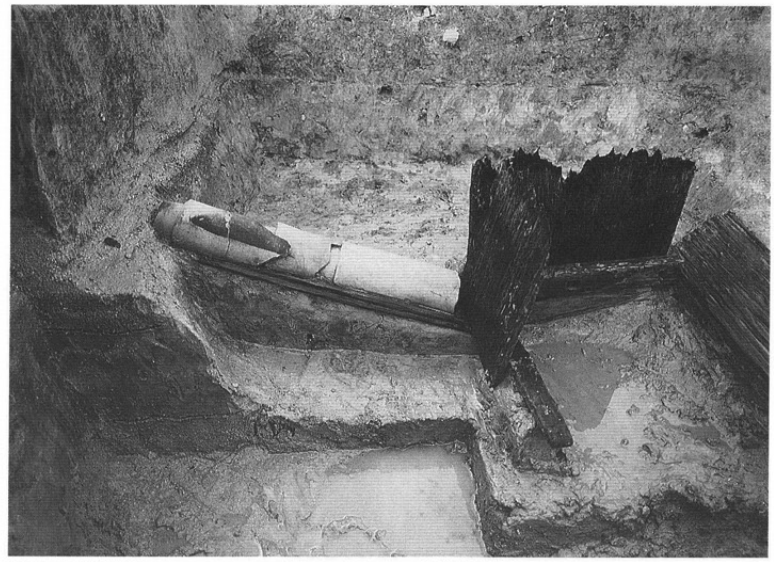
14　井戸ＳＥ520（西から）



15　井戸ＳＥ521（北から）



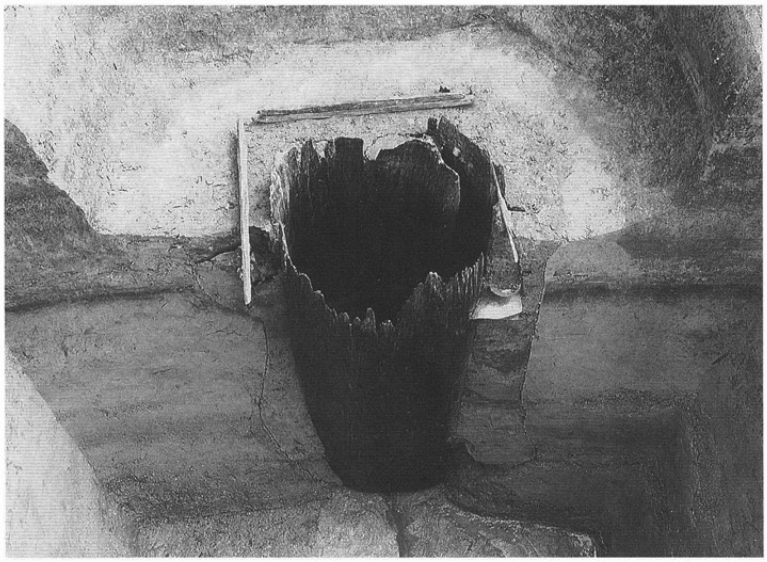
16　井戸ＳＥ522（南から）



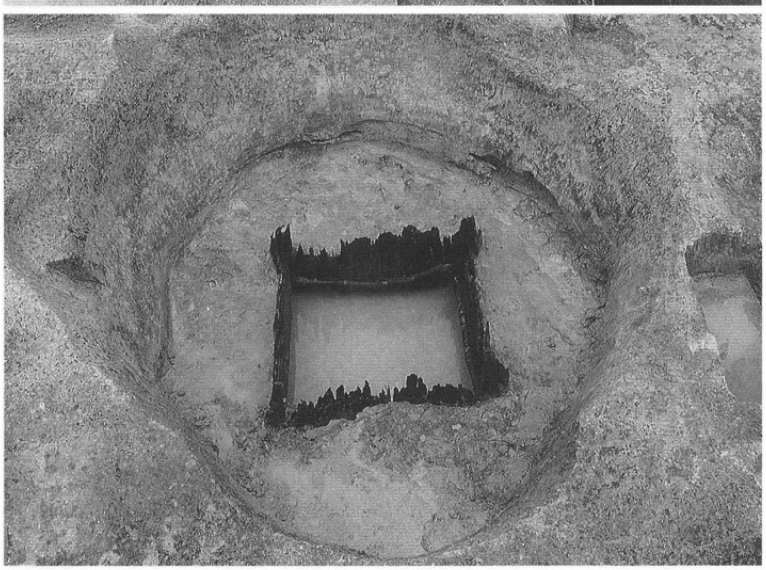
17　井戸ＳＥ523（南から）

18　井戸ＳＥ524（西から）

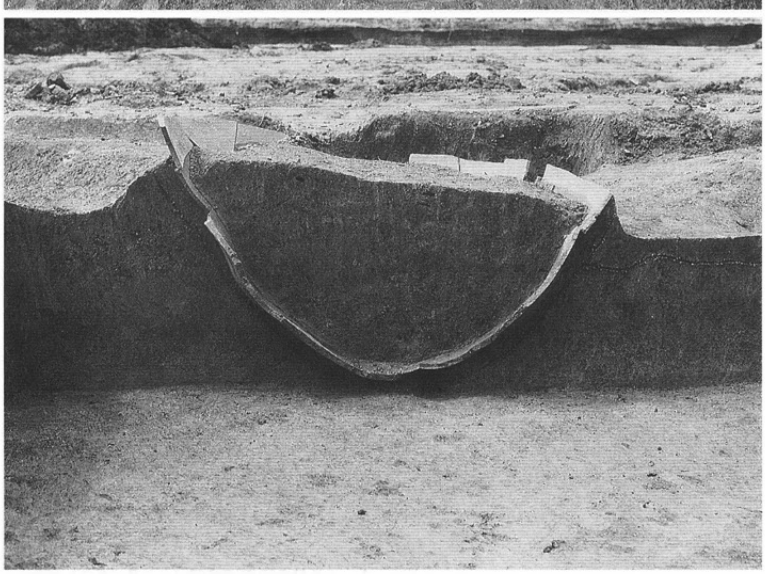
19　井戸ＳＥ525（北から）



20　井戸ＳＥ529（南から）



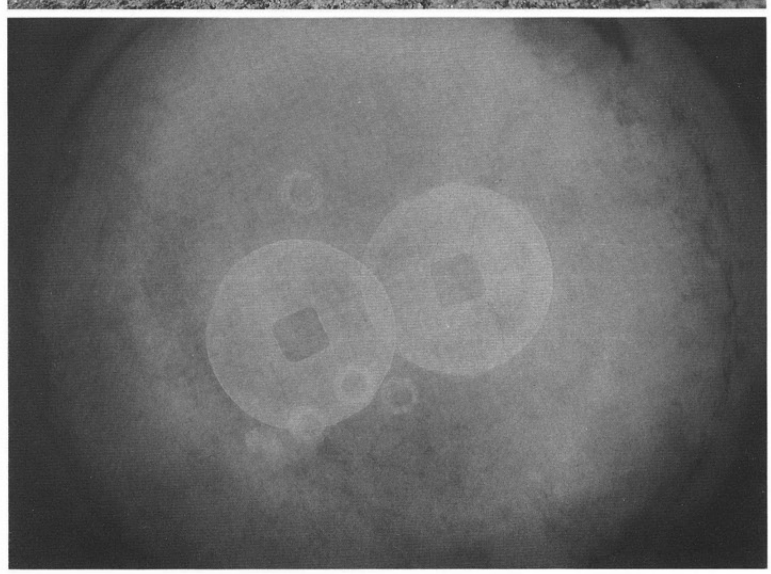
21　井戸ＳＥ530（南から）



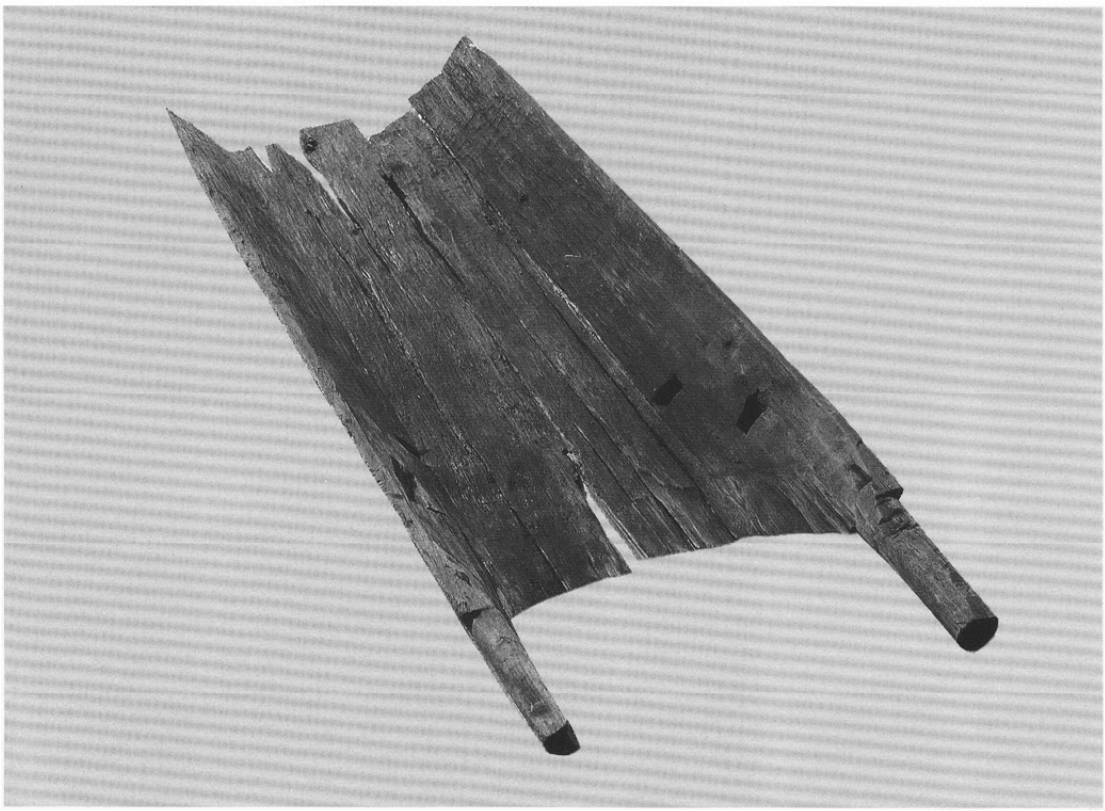
22　建物ＳＢ322内据付埋甕ＳＸ805（北から）

23　土器埋納土坑ＳＸ802
（西から）

24　土器埋納土坑ＳＸ803
（南東から）



25　土器埋納土坑ＳＸ804
Ｘ線写真（実大）



26　井戸枠転用の把手付槽

27　井戸枠転用の把手付槽（部分）

1　発掘区全景（左が北）

2　発掘区（西半）全景（南から）

3　発掘区（東半）全景（南から）